■巻末資料

目次

資料 1：地域ニーズ調査

調査(1) 自治体・保育／介護の課題意識等の実態調査 集計結果.....39

調査(1) ヒアリング調査 57

調査(2) 専門学校卒業生の地域定着等の実態調査 集計結果

調査(3) 保育士・介護福祉士の教育ニーズ調査 集計結果 61

調査(3) 保育施設デジタル機器導入事例調査 73

資料 2：保育・介護の DX 教育に係る既存教材等情報収集

保育・介護の DX に関わる既存教材情報 40 件.....119

保育・介護の DX に関わる既存カリキュラム（講座・セミナー等）情報 47 件 167

資料 3：開発教材プロトタイプ

「地域福祉 DX 実践 PBL」.....211

共通科目：「人口減少地域における保育・介護 DX リテラシー」.....237

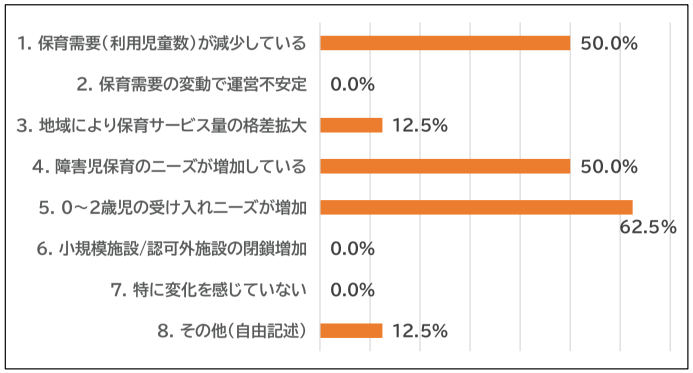
専門科目：「人口減少地域における介護 DX 先端機器活用」 269

資料１：地域ニーズ調査

調査(1) 自治体・保育／介護の課題意識等の実態調査 集計結果

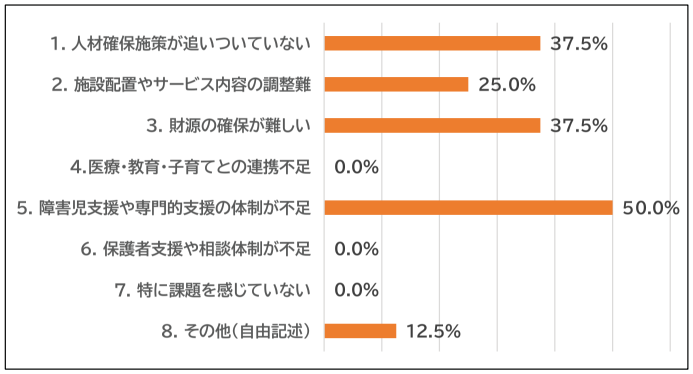
調査①（自治体・保育）

Q1.人口減少や高齢化により、地域の保育サービス提供体制にどのような変化が生じていますか。（複数回答可）



■その他入力
保育士不足。特に新卒の保育士がいない。

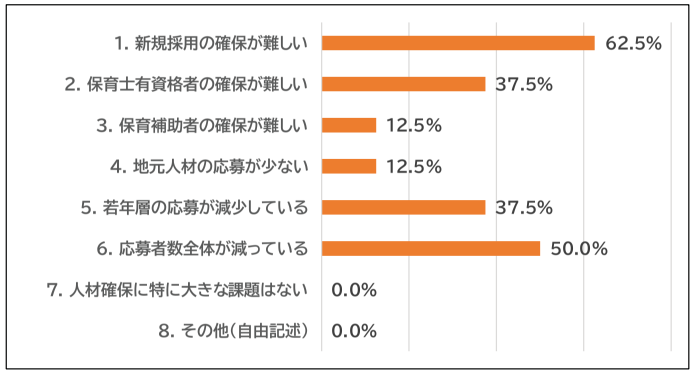
Q2.上記の変化に対して、自治体としてどのような点が課題と感じていますか。（複数回答可）



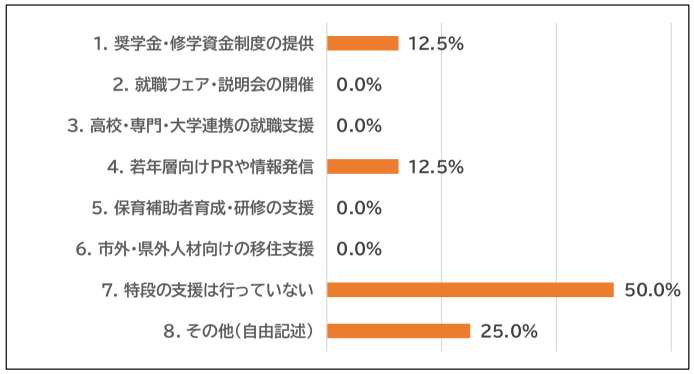
■その他入力
保育士の処遇改善（給与への上乗せ分）を私立保育所等に補助金を出しているが、若い人材に町内で働いてもらうためには、さらなる施策の充実が必要。

調査①（自治体・保育）

Q3.地域における保育人材の確保（採用・応募）状況について、自治体として把握されていることがありましたら教えてください。（複数回答可）



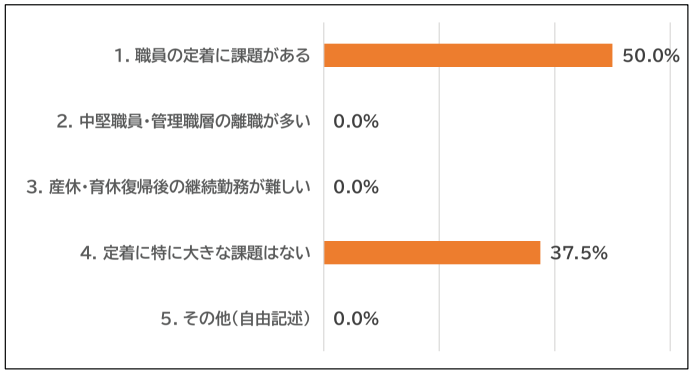
Q4.保育人材の確保（採用・応募）に関して、自治体として実施している施策がありましたら教えてください。（複数回答可）



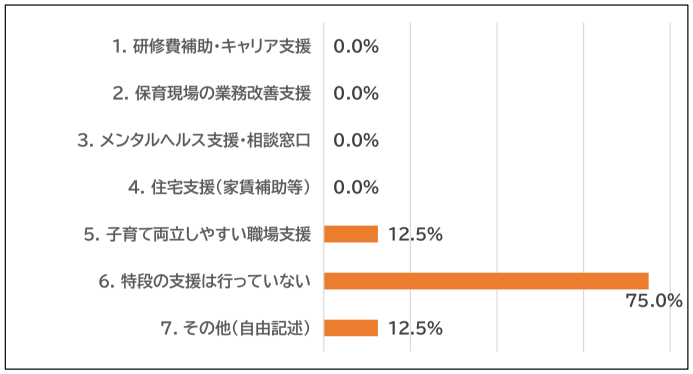
■その他入力
保育士の転入者支援として、町の保育所に勤務する保育士のかたが栄町に転入した場合、支援金を支給しています。

調査①（自治体・保育）

Q5.地域における保育人材の定着状況について、自治体として把握されていることがありましたら教えてください。（複数回答可）



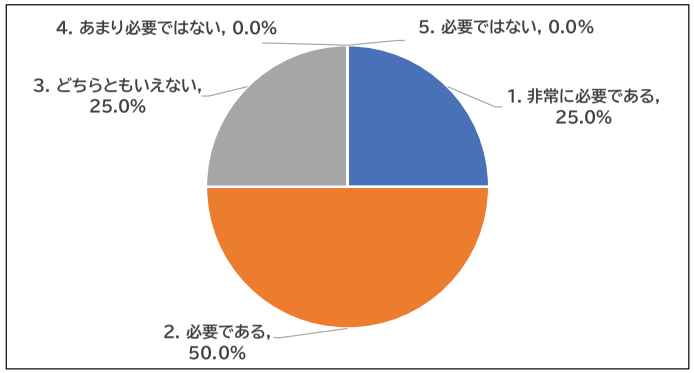
Q6.保育人材の定着に関して、自治体として実施している施策がありましたら教えてください。（複数回答可）



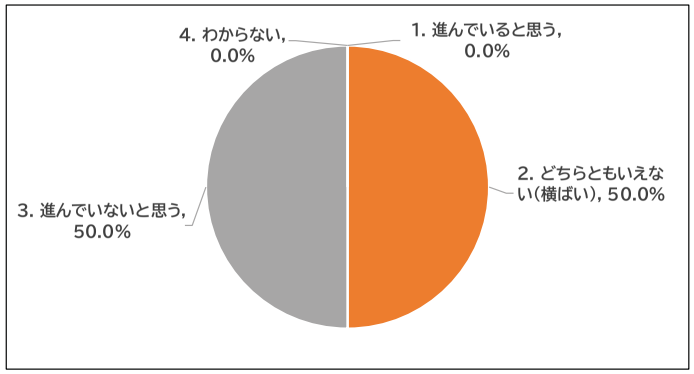
■その他入力
会計年度保育士への保育士手当支給

調査①（自治体・保育）

Q7.地域の保育サービス提供の課題解決において、デジタル化はどの程度必要だと感じていますか。

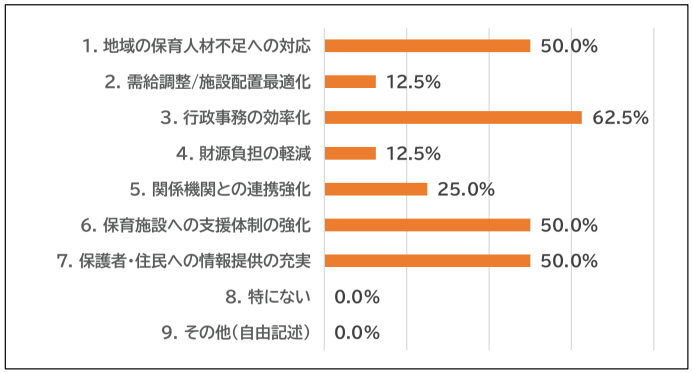


Q8.現在、地域の保育サービス提供の課題解決において、デジタル化は進んでいると感じますか。

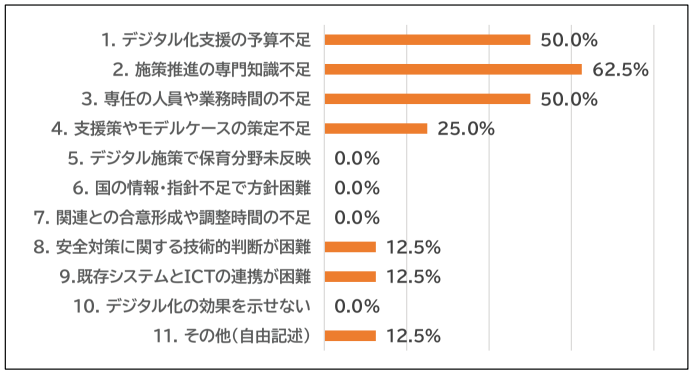


調査①（自治体・保育）

Q9.地域の保育サービス提供の課題解決においてデジタル化が有効と考える分野があれば教えてください。（複数回答可）

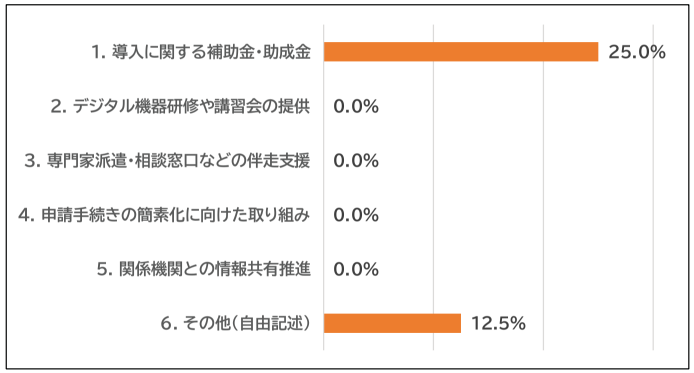


Q10.自治体として、地域の保育サービス提供の課題解決におけるデジタル化が進みにくい要因がありましたら教えてください。（複数回答可）

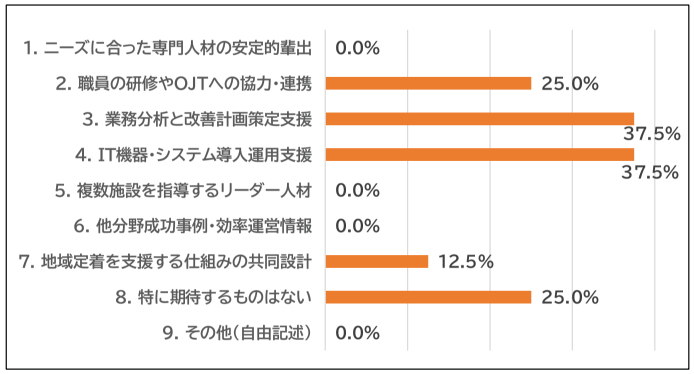


調査①（自治体・保育）

Q11.地域の保育サービス提供においてデジタル化を促進するために、現在自治体として実施している支援がありましたら教えてください。（複数回答可）

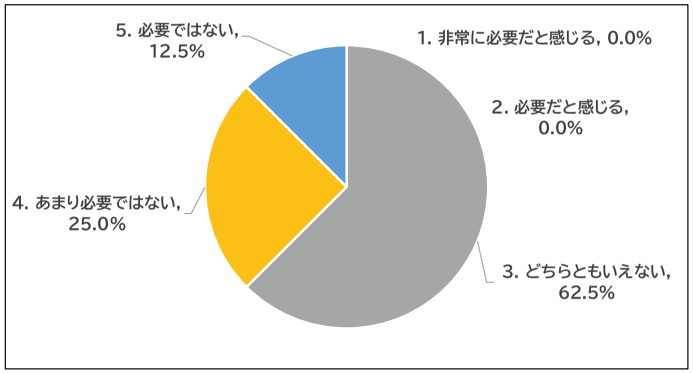


Q12.地域の保育サービス提供において、外部の専門機関や人材に期待する支援や役割を教えてください。（複数回答可）

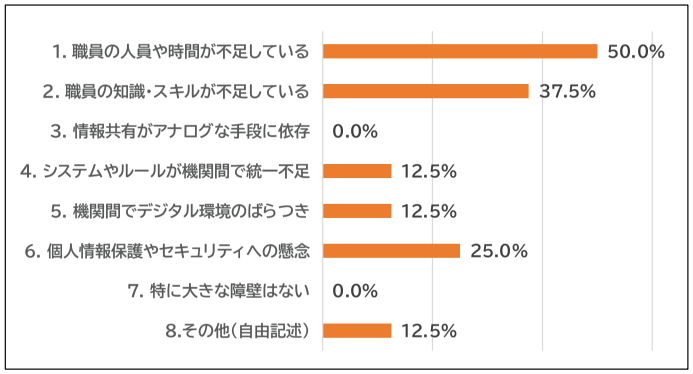


調査①（自治体・保育）

Q13.地域の保育サービス提供の維持・向上のため、介護サービスとの連携について、どの程度必要だと感じますか。



Q14.Q13.で伺った連携について、円滑に進める上での具体的な障壁や懸念点は何ですか。（複数回答可）

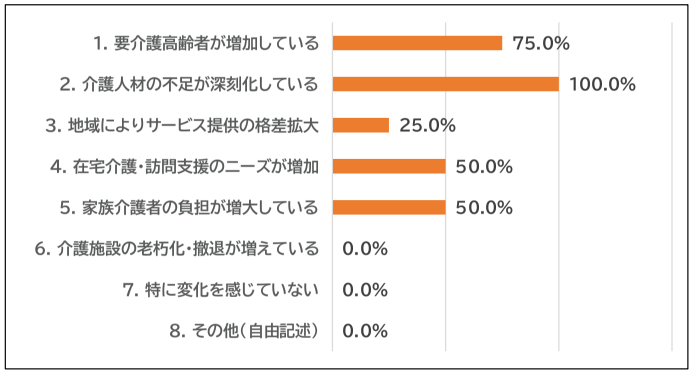


調査①（自治体・保育）

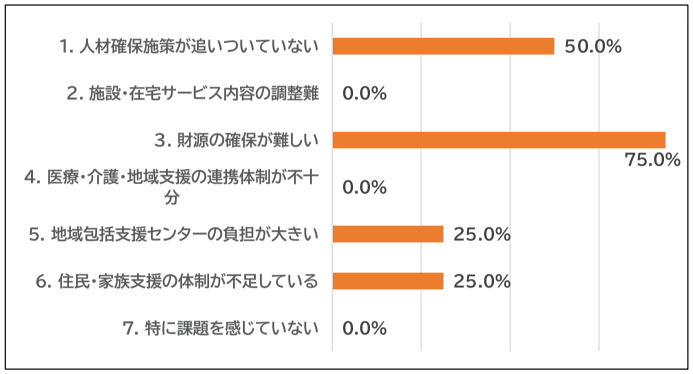
Q15.地域の保育サービス提供体制について、ご意見やご要望がございましたらご自由にご記入ください。

調査①（自治体・介護）

Q1.人口減少や高齢化により、地域の介護サービス提供体制にどのような変化が生じていますか。（複数回答可）

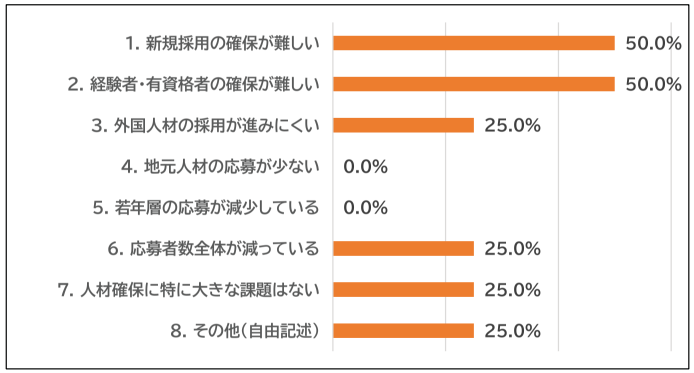


Q2.上記の変化に対して、自治体としてどのような点が課題と感じていますか。（複数回答可）

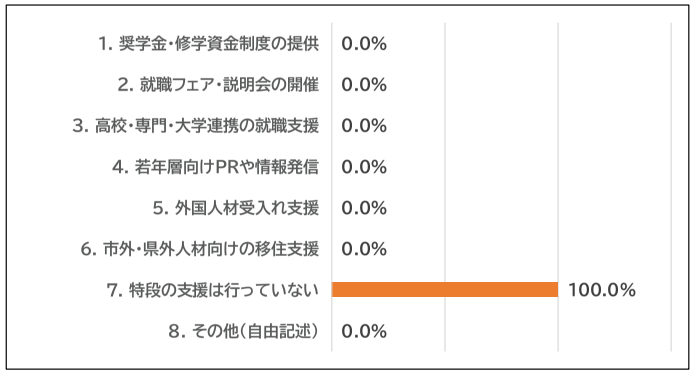


調査①（自治体・介護）

Q3.地域における介護人材の確保（採用・応募）状況について、自治体として把握されていることがありましたら教えてください。（複数回答可）

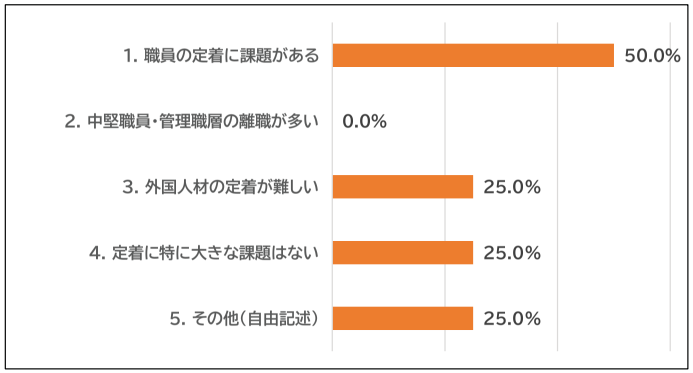


Q4.介護人材の確保（採用・応募）に関して、自治体として実施している施策がありましたら教えてください。（複数回答可）

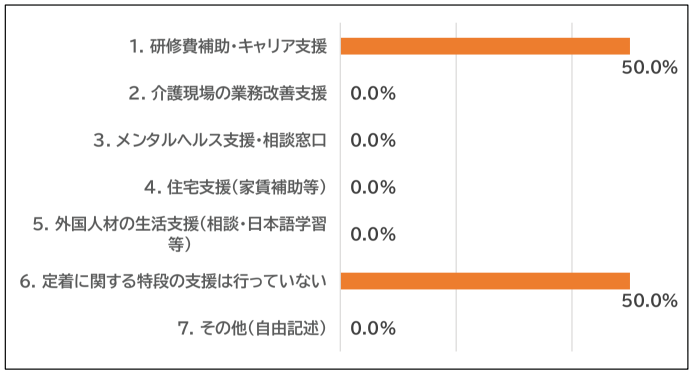


調査①（自治体・介護）

Q5.地域における介護人材の定着状況について、自治体として把握されていることがありましたら教えてください。（複数回答可）

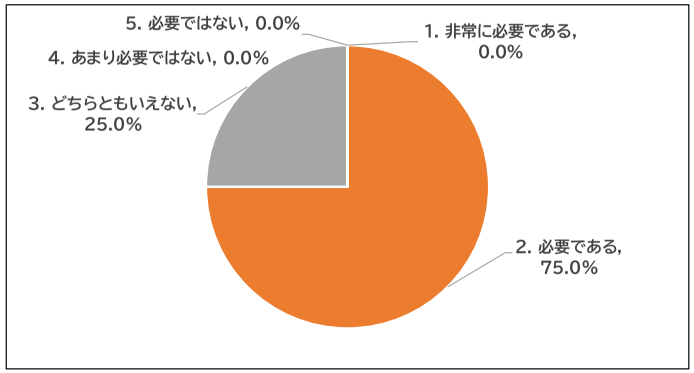


Q6.介護人材の定着に関して、自治体として実施している施策がありましたら教えてください。（複数回答可）

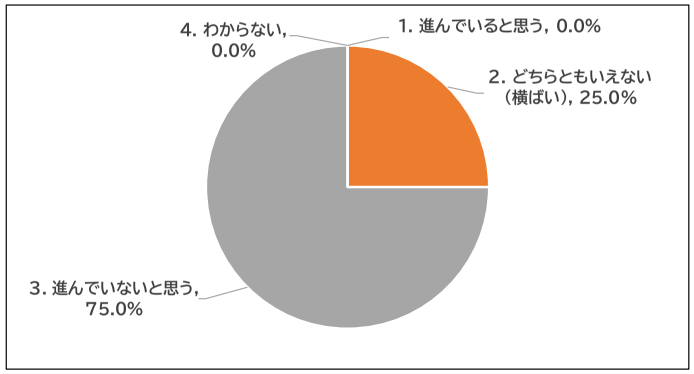


調査①（自治体・介護）

Q7.地域の介護サービス提供の課題解決において、デジタル化はどの程度必要だと感じていますか。

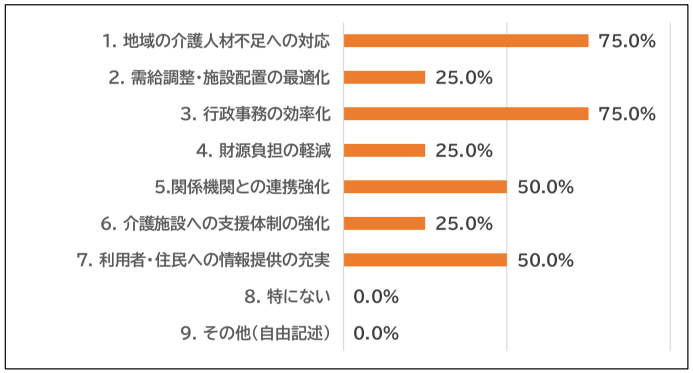


Q8.現在、地域の介護サービス提供の課題解決において、デジタル化は進んでいると感じますか。

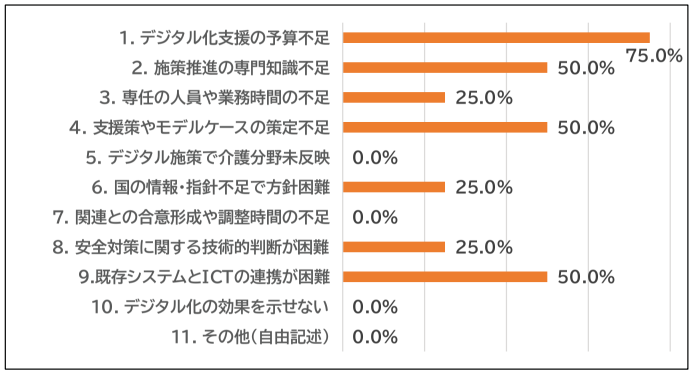


調査①（自治体・介護）

Q9.地域の介護サービス提供の課題解決においてデジタル化が有効と考える分野がありましたら教えてください。（複数回答可）

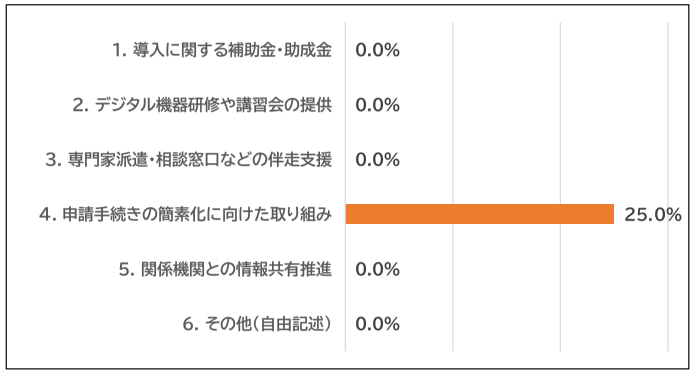


Q10.自治体として、地域の介護サービス提供におけるデジタル化が進みにくい要因がありましたら教えてください。（複数回答可）

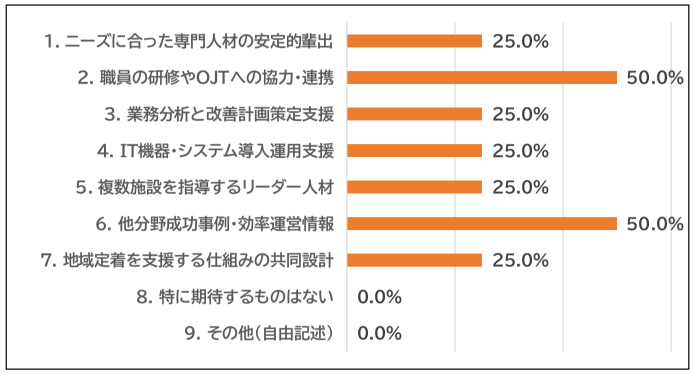


調査①（自治体・介護）

Q11.地域の介護サービス提供においてデジタル化を促進するために、現在自治体として実施している支援がありましたら教えてください。（複数回答可）

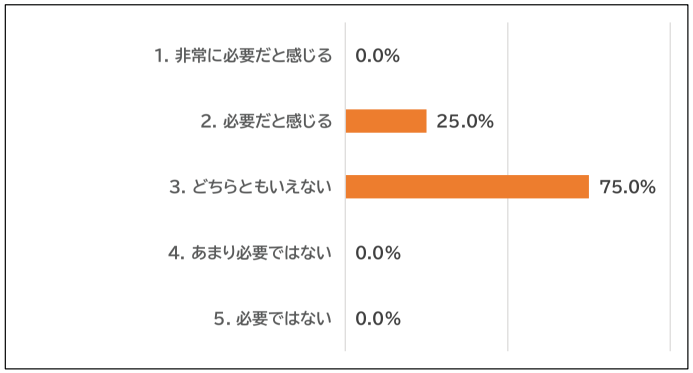


Q12.地域の介護サービス提供において、外部の専門機関や人材に期待する支援や役割を教えてください。（複数回答可）

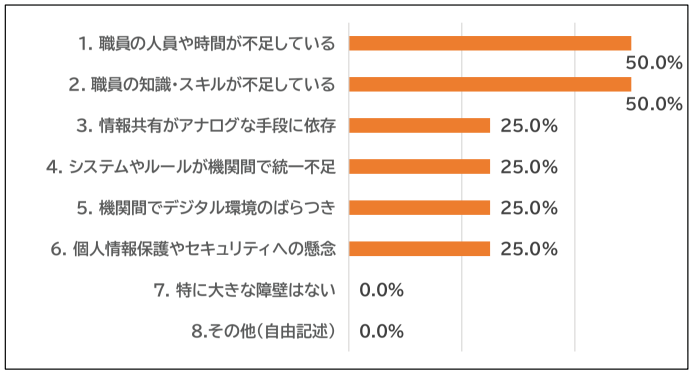


調査①（自治体・介護）

Q13.地域の介護サービス提供の維持・向上のため、保育サービスとの連携について、どの程度必要だと感じますか。



Q14.Q13.で伺った連携について、円滑に進める上での具体的な障壁や懸念点がありましたら教えてください。（複数回答可）

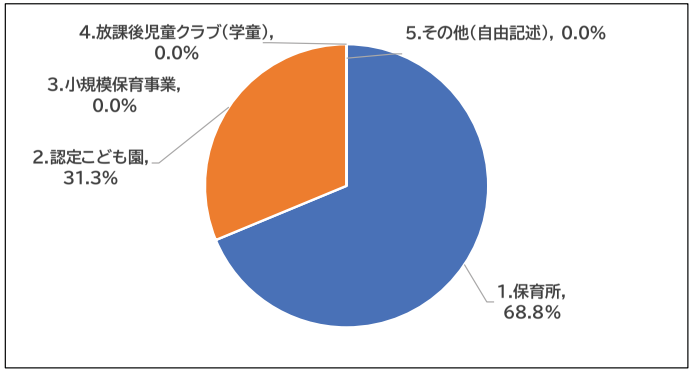


調査①（自治体・介護）

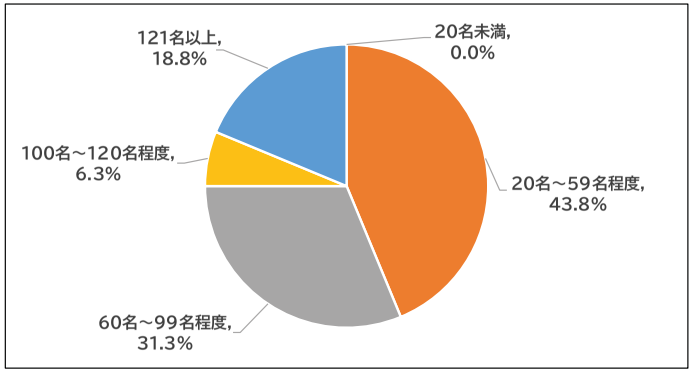
Q15.地域の介護サービス提供体制について、ご意見やご要望がございましたらご自由にご記入ください。

調査①（保育施設）

Q1. 貴施設の種別を教えてください。

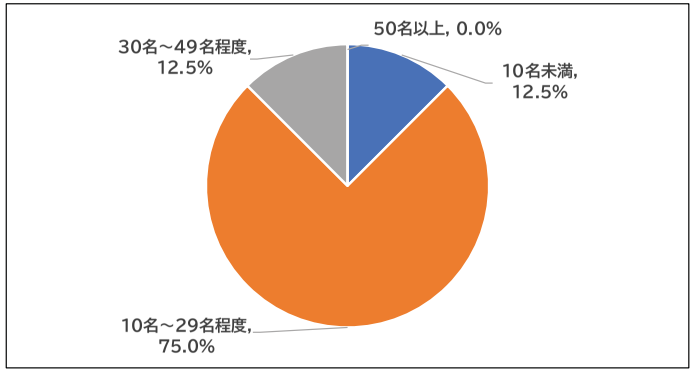


Q2. 現在の利用児童数を教えてください。（おおよそで構いません）
以下のいずれか近いものをお選びください。

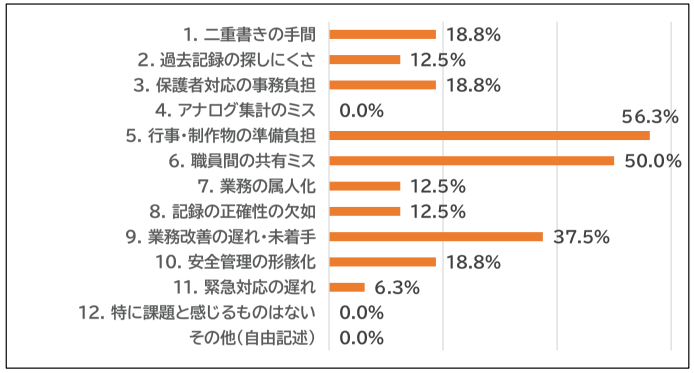


調査①（保育施設）

Q3. 現在の職員数（常勤換算）を教えてください。（おおよそで構いません）

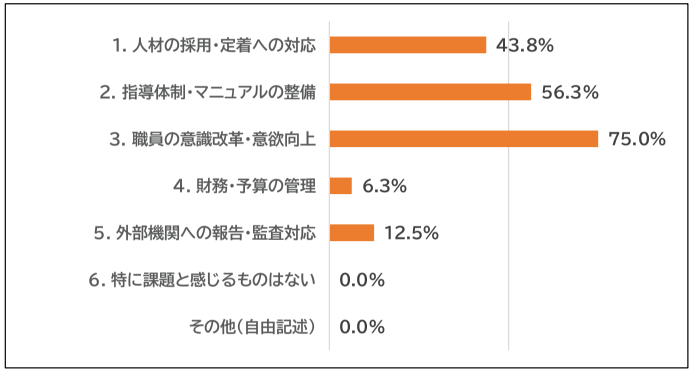


Q4. 貴施設の業務において、「課題（改善の余地がある）」と感じていることがありましたら教えてください。（最大 3 つまで選択可）

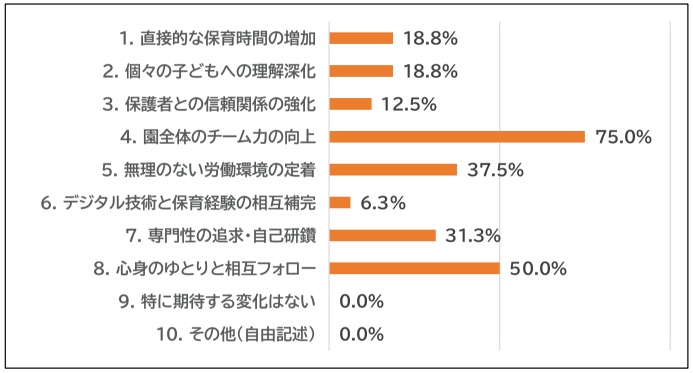


調査①（保育施設）

Q5.施設の「運営・経営」を円滑に進める上で、特に負担や困難を感じていることがありましたら教えてください。（最大 2 つまで選択可）

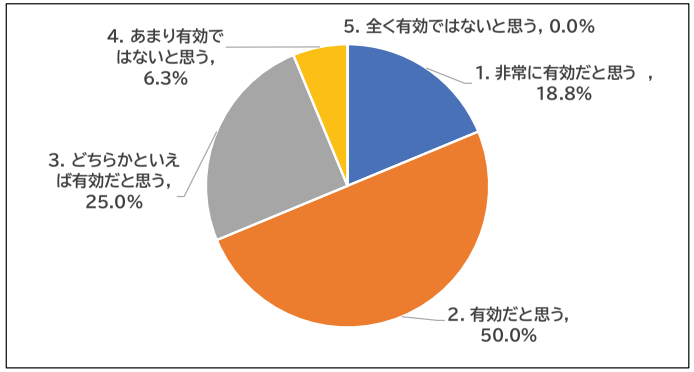


Q6. 前述の業務・運営上の課題が解消されることで、貴施設においてどのような変化が起こることを期待しますか。（最大 3 つまで選択可）

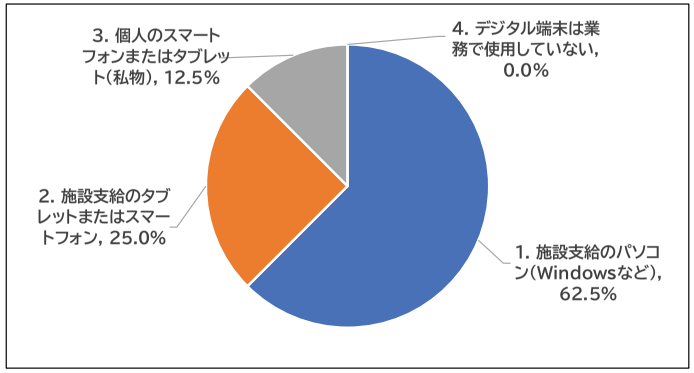


調査①（保育施設）

Q7. 前述の業務・運営上の課題を解決するために、デジタル機器やシステムの活用は有効だと思いますか。

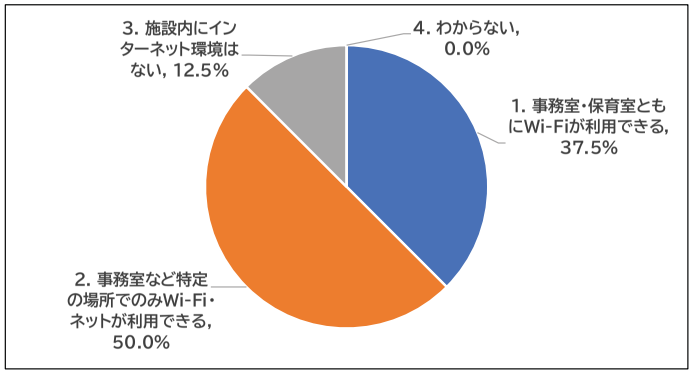


Q8. 貴施設において使用しているデジタル端末について教えてください。

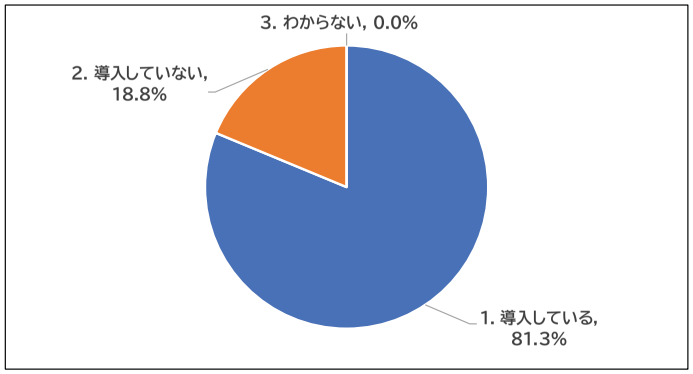


調査①（保育施設）

調査①Q9. 貴施設のインターネット（Wi-Fi）環境について教えてください。

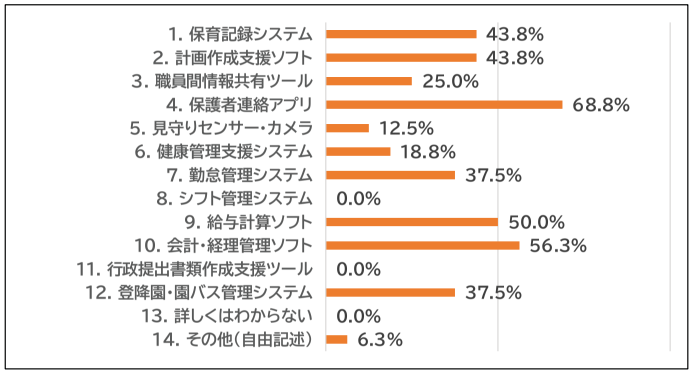


Q10. 貴施設でデジタル機器やシステムは導入されていますか。



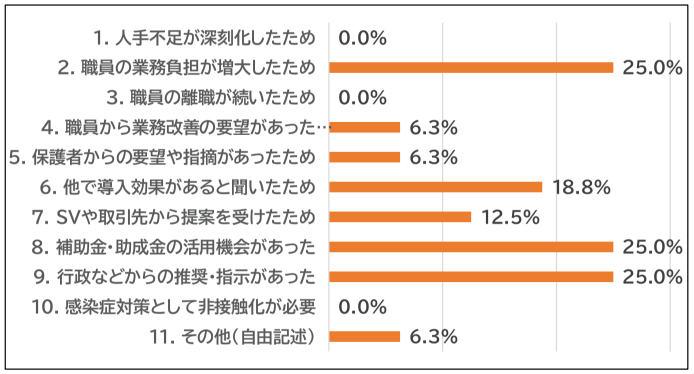
調査①（保育施設）

Q11.（Q10.で「導入している」と回答した方）現在の職場で導入されているデジタル機器やシステムを教えてください。（複数回答可）



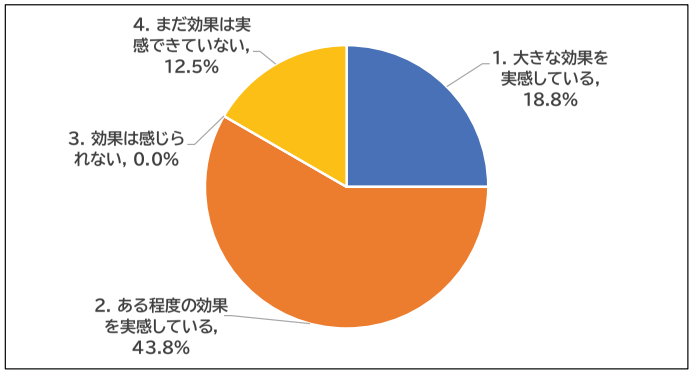
■その他入力
栄養管理システム

Q12. 貴施設がデジタル機器やシステムの導入を検討・決定したきっかけについて教えてください。（複数回答可）

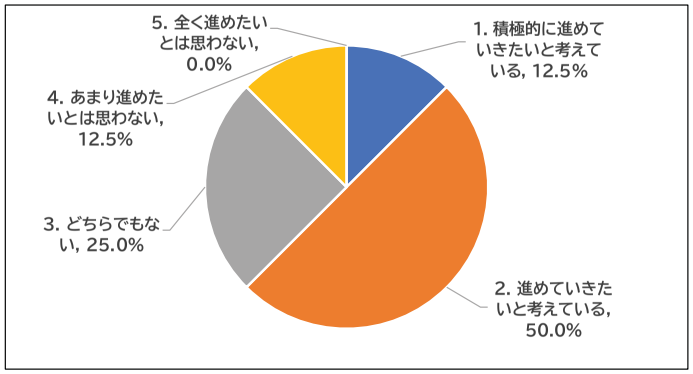


調査①（保育施設）

Q13. デジタル機器やシステムを導入した結果、効果を実感していますか。

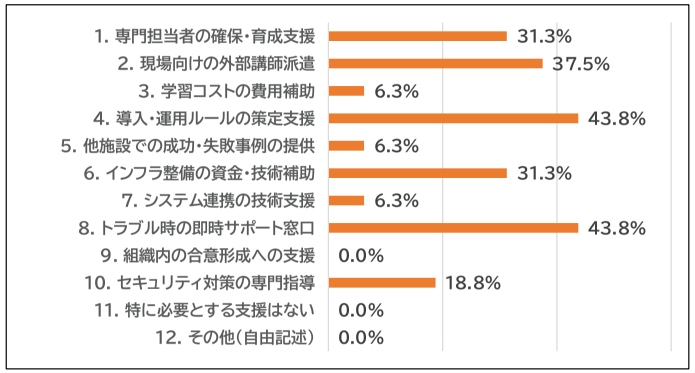


Q14. 今後、貴施設では保育の質向上と持続可能な運営にデジタル技術の活用をどの程度進めたいと考えていますか。



調査①（保育施設）

Q15. 貴施設において、デジタル活用を円滑に進める上で、必要だと感じる支援やサポートがありましたら教えてください。（最大 3 つまで選択可）



Q16. 保育の質向上と持続可能な運営にデジタル技術を活用することについて、ご意見やご要望、その他お気づきの点がございましたらご自由にご記入ください。

導入の実績・メリット

- 当園では、デジタル技術の導入を積極的に進めてきており、コドモン導入での運営管理支援にとどまらず、保育活動にipadを用いて保育活動の充実を計っています。
- 保育書類の整理や保護者へのおたより配信など、業務負担の軽減につながっていると思う。

今後の展望・期待（外部連携など）

- 園内でのデジタル活用にとどまらず、行政との書類のやりとりや養成校との連絡から実習録等のやりとり、また様々な研修活動をデジタル活用できるとより効率化できるのではないか、と考えています。

課題：人材育成・スキル格差

- デジタル化を活用していくには時間がかかる
- 人材の育成など、導入後の運用が大切と感じる。
- システム導入により、その技術を全員が習得するまでの時間がなかなかとれない
- 活用できれば情報の整理もでき、業務負担も減るが、職員の IT スキルに差があり、かえって負担になる職員もいることなど不安も大きい。また導入に支援はあるが、維持費や更新費の支援はないことも不安である。

調査①（保育施設）

課題：推進体制（リーダー確保）

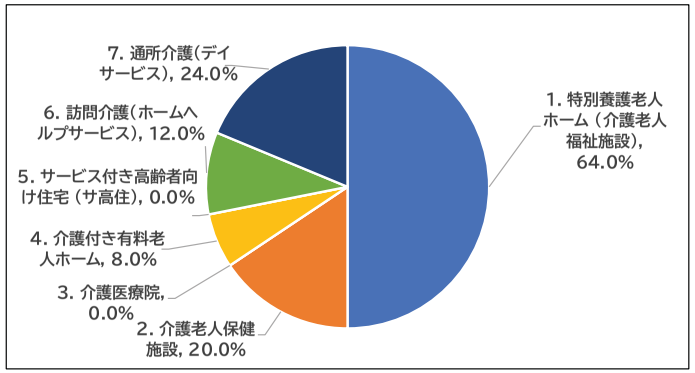
- 活用をしていくにはリーダーとしての人材の確保が必要となる。

現場の意識・姿勢

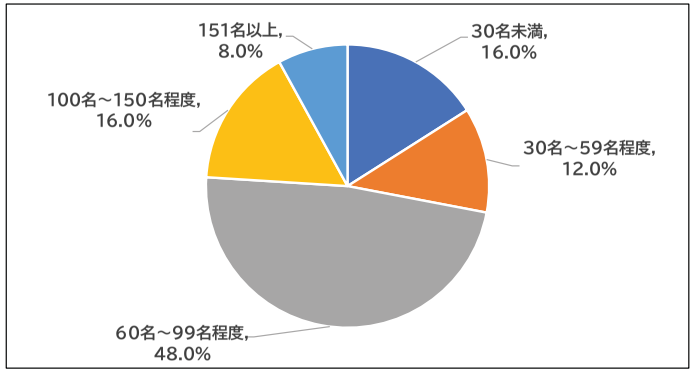
- ICT 化になり、昨年 12 月にバージョンアップしたことで戸惑う職員もいるが、これからは更に必要な業務であると認識している為、前向きに使っていきながら身につけていきたいと考えて

調査①（介護施設）

Q1. 貴施設の種別を教えてください。（複数回答可）

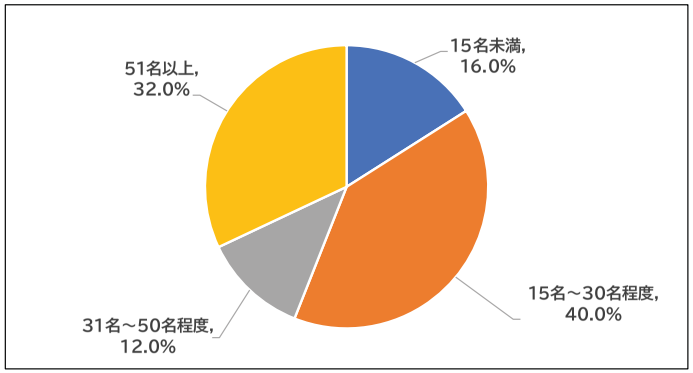


Q2. 現在の利用者数を教えてください。（おおよそで構いません）
以下のいずれか近いものをお選びください。

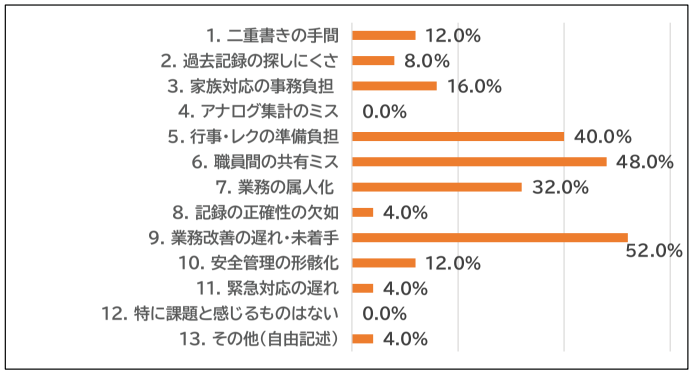


調査①（介護施設）

Q3. 現在の職員数（常勤換算）を教えてください。（おおよそで構いません）
以下のいずれか近いものをお選びください。



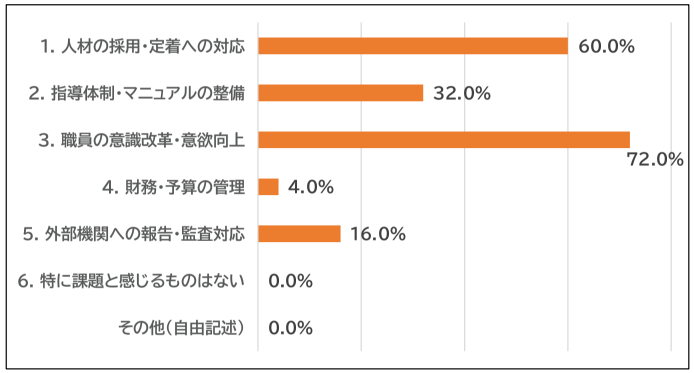
Q4. 貴施設の業務において、「課題（改善の余地がある）」と感じていることがありましたら教えてください。（最大 3 つまで選択可）



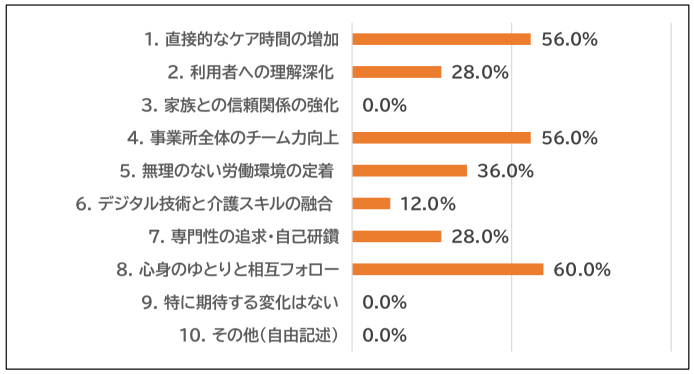
■その他入力
ICT 機器の導入、Wi-Fi 環境の整備（デイサービス、ショートステイは次年度予定）等を行い課題解決に向け取り組み中である。

調査①（介護施設）

Q5.施設の「運営・経営」を円滑に進める上で、特に負担や困難を感じていることがありましたら教えてください。（最大 2 つまで選択可）

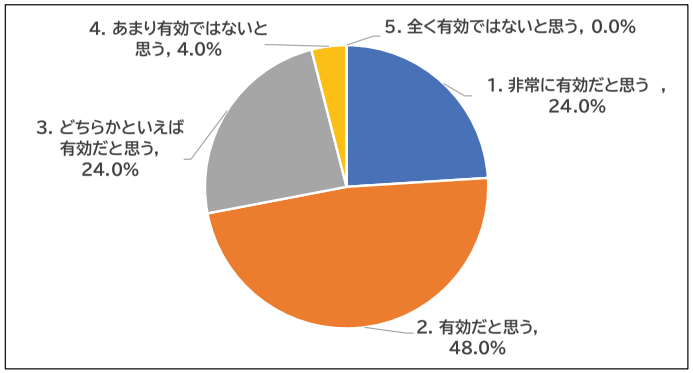


Q6. 前述の業務・運営上の課題が解消されることで、貴施設においてどのような変化が起こることを期待しますか。（最大 3 つまで選択可）

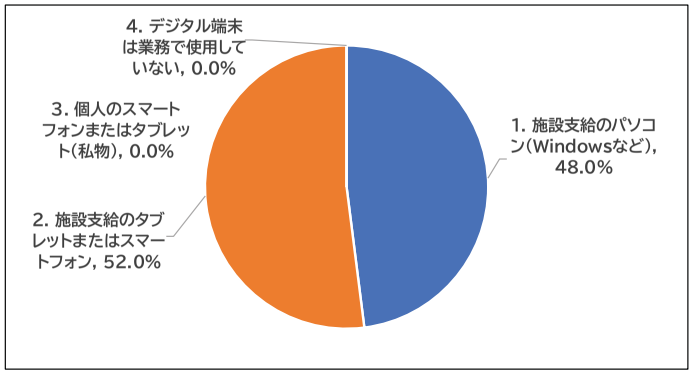


調査①(介護施設)

Q7. 前述の業務・運営上の課題を解決するために、デジタル機器やシステムの活用は有効だと思いますか。

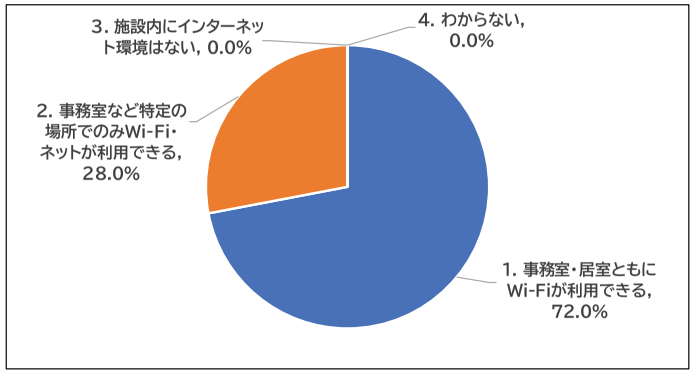


Q8. 貴施設において使用しているデジタル端末について教えてください。

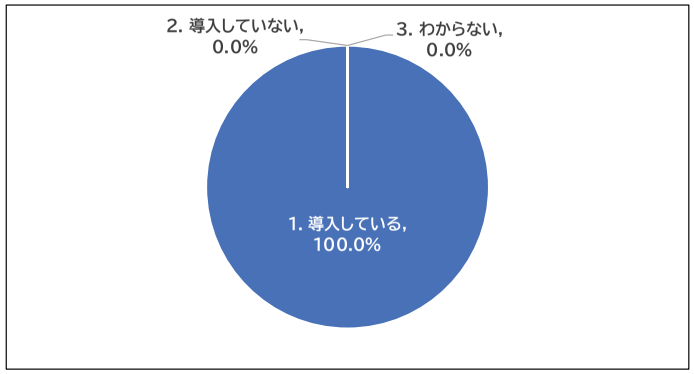


調査①(介護施設)

Q9. 貴施設のインターネット(Wi-Fi)環境について教えてください。

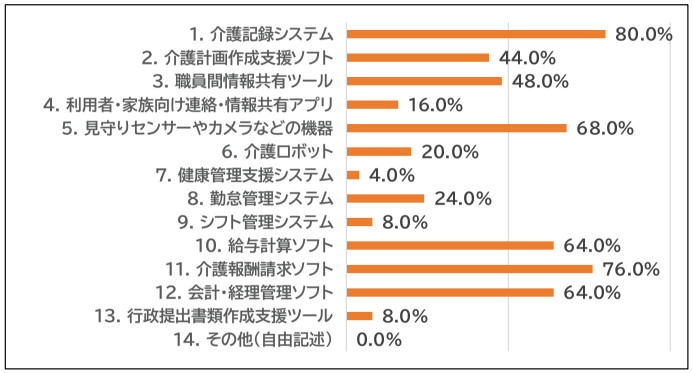


Q10. 貴施設でデジタル機器やシステムは導入されていますか。

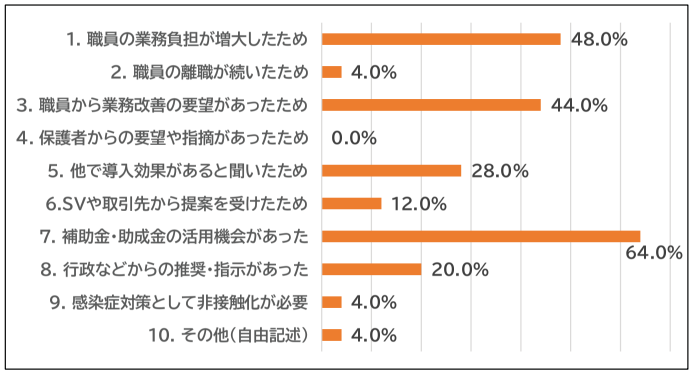


調査①（介護施設）

Q11.（Q10.で「導入している」と回答した方）現在の職場で導入されているデジタル機器やシステムを教えてください。（複数回答可）

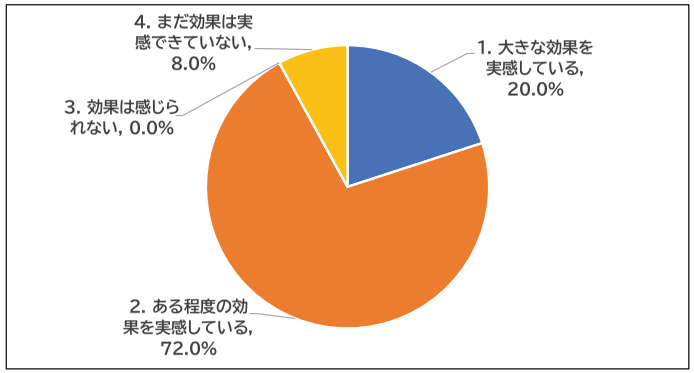


Q12. 貴施設がデジタル機器やシステムの導入を検討・決定したきっかけについて教えてください。（複数回答可）

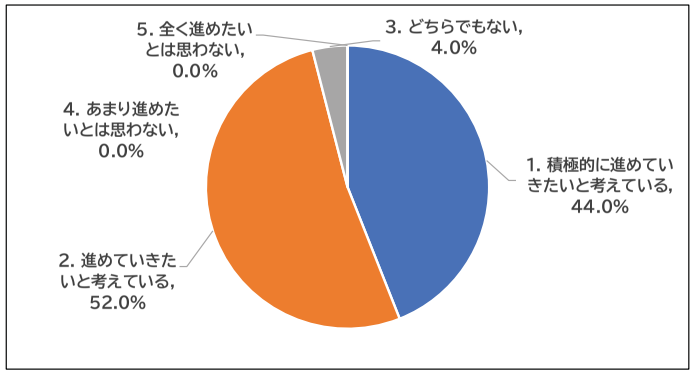


調査①（介護施設）

Q13. デジタル機器やシステムを導入した結果、効果を実感していますか。

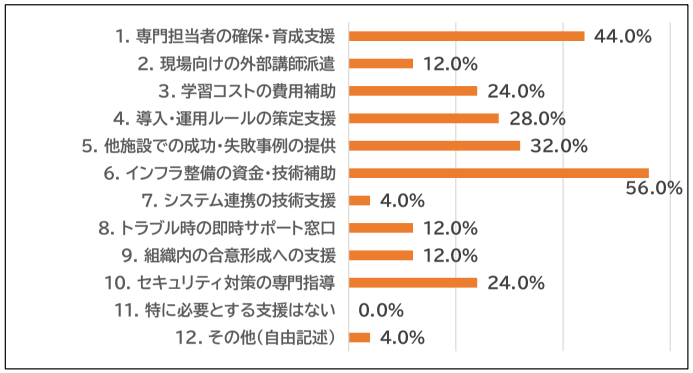


Q14. 今後、貴施設では介護の質向上と持続可能な運営にデジタル技術の活用をどの程度進めたいと考えていますか。



調査①（介護施設）

Q15. 貴施設において、デジタル活用を円滑に進める上で、必要だと感じる支援やサポートがありましたら教えてください。（最大 3 つまで選択可）



■その他入力
SEによるシステム管理サポート

Q16. 介護の質向上と持続可能な運営にデジタル技術を活用することについて、ご意見やご要望、その他お気づきの点がございましたらご自由にご記入ください。

導入の課題と要望（現場適合性・高齢者対応・公的支援）

- ・デジタル化に関して現場と管理者との意見の食い違いがよく見られるため、どこまで介入するかが大切でありコスト面の問題も出てくる。 必要以上のデジタル介入は反って手間が増え、人材不足のために雇っている高齢者雇用の方がついてこれない可能性もある。そのうち慣れるではなく慣れてもらう為の知識と技術が必要となる。また、AI技術等を入れる場合にはそれに詳しい人材も確保しなくてはいけない。一色単にデジタル技術を活用すればよくなるわけではなく、向き不向きがある。 国や県による知識技術をもった人材の派遣と金銭的な援助が必要。

現場の課題と今後の姿勢（IT リテラシー向上）

- ・介護業界は全体的にITリテラシーが低いので、デジタル技術の進歩に職員がついていけない現状を改善していきたいと考えています。

資料１：地域ニーズ調査

調査(1) ヒアリング調査

調査① 自治体(保育)へのヒアリング調査

施設名	千葉県内人口減少自治体 健康保険課
日 時	2026年2月13日(金) 16:00

地域の保育サービスの現状認識	・保育需要が減っているのは、今始まったことではなく、もう10年、20年前からの状況。 ・一方で、0～2歳児は増えている。町が0～2歳児の保育無償化を打ち出しているので、その影響はあると思う。
保育人材の確保と定着の課題	「一番の課題は人材です。」 新規採用は簡単ではない。 「採用できても、2～3年で辞めてしまうことが多いです。女性職員は家庭の事情で退職するケースが多く、長く勤めてもらうのが難しい。」 業務量の増加が直接の原因かと尋ねると、 「0～2歳児が増えたことと、退職が増えたことは、直接の関係はないと思います。」 とのことだった。 「やはりライフステージとの両立が大きいです。」 そのため、 「子育てと両立しやすい環境づくりには力を入れています。」 と話された。
DXによる課題解決で期待される変化	・デジタル化で作業が効率化されることで時間的な余裕がうまれれば、職員間の連携が強まったり、ケアの質があがるような施設全体の雰囲気や協力体制ができていくのではと期待する。 ・よりケアに対する専門性や自身のスキルやキャリアアップなど、職員が成長する機会が増えることが望ましい。 ・気持ち的にも余裕が持てれば、職員同士が自然と助け合うようになったり、雰囲気の良い働きやすい環境にもなるのでは。
DXの有効性に対する認識	・デジタル機器やシステムの活用は有効である。
デジタル環境の整備状況	・施設支給のパソコン、タブレットを業務に使用している。 ・現在、Wi-Fi環境は事務室など特定の場所に限定されている。 ・一方で、千葉県の補助事業を活用し、施設の大規模改修にあわせてICT・デジタル環境の整備を進める予定である。 ・今後は全フロアでWi-Fiが利用可能となる見込みであり、これを基盤としてデジタル化を段階的に推進していく予定。 ＜現在の導入機器・システム＞ ・見守りセンサー・カメラ ・介護報酬請求ソフト ・会計・経理管理ソフト
導入の背景	・職員の業務負担が増えてきたことが導入の最大の理由。まずは現場の負担を軽減することを優先した。
今後のDX推進意向	・ケアの質の向上と持続可能な施設運営の実現に向けてデジタル技術の活用を積極的に進めていく意向。 ・特に、県の補助による施設改修を契機としてインフラ整備が進む見込みであり今後DX推進が期待される。
必要とされる支援	・デジタル担当者の確保、またそうした専門人材の育成の支援。 ・wifiの整備や端末導入に関するコスト面、技術面のサポートが必要。 ・様々な器機を導入するのに、システムの互換性や連携など、より効率的な方法を教えてほしい、もしくはわかる人にサポートいただきたい。 ・デジタル機器の操作に不安を感じる職員も少なくない。そのため導入時だけでなく運用段階においても助言や支援を行える専門人材を求めている。 ・突発的なシステムトラブルや機器不具合が発生した際に、迅速に対応できる支援体制、もしくは人員配置。

調査① 保育施設へのヒアリング調査

施設名	千葉県山武市内認定こども園
日 時	2026 年 2 月 13 日(金) 13:00
施設規模	利用児童数 約 80 名、職員数 約 20 名

業務上の課題認識	・行事や制作物の準備に時間がかかり、事務作業の負担が大きい。保育以外の業務に取られる時間も少なくない。 ・職員間では伝達漏れや共有ミスが起こることがあり、情報共有の難しさを感じている。 ・業務改善の必要性は感じているものの、日常業務に追われ、改善について検討する時間を確保すること自体が難しい。
運営面での主要な課題	・教育実習生の受け入れは行っているものの、最終的な就職先として選ばれにくい状況があり、継続的な人材確保につなげることが難しい。 ・職員の意識をそろえて、組織として協力できる体制づくりにも難しさを感じる。
DX による課題解決で期待される変化	・若い職員のデジタル技術とベテラン職員のこれまで培ってき保育経験が補い合うことで、保育の質の向上につながることを期待している。 ・職員同士が支え合い、心理的にも安心して働ける職場環境になっていくことを目指している。それが保育の質につながると思う。 ・効率化だけでなく、職場全体の質の向上につながる変化を求めている。
DX の有効性に対する認識	・デジタル機器やシステムの活用については、どちらかといえば有効と考えている。 ・公立のこども園であるため、デジタル化については市の方針や提案に沿って進める形となっている。園独自で積極的に導入を検討するというよりも、行政の施策に合わせて対応している。
デジタル環境の整備状況	・事務室に PC、タブレットを装備している。 ・Wi-Fi は事務室など限られた場所でのみ利用可能。 ・勤怠管理システムを導入しており、労務管理など運営に関わる領域からデジタル化を進めている。
導入の背景	・職員の業務負担が増えてきたことが導入の最大の理由。まずは現場の負担を軽減することを優先した。
今後の DX 推進意向	・今後のデジタル活用については積極的とはいいがたい。 ・慎重な姿勢も見られる一方で、現場からはより活用が進むことを期待する声もある。同時に、操作への不安もあり、試行錯誤しながら日常業務の中で活用している段階にある。
必要とされる支援	・外部講師による具体的な活用方法の指導など、実務に直結する支援があると助かる。 ・導入後もどのように運用したらいいのかを教えてもらいたい。 ・資金面の支援も重要。インフラ整備や技術面での補助もあると助かる。 ・機器の導入だけでなく、現場で継続して使える環境づくりをトータルで支援してくれると助かる。

調査① 介護施設へのヒアリング調査

施設名	千葉県香取市内介護老人保健施設
日 時	2026 年 2 月 13 日(金) 15:30
施設規模	利用者数 約 70 名、職員数 約 30 名

業務上の課題認識	・日常の業務に追われており、業務改善の必要性は感じているが、それを検討する時間を確保できていない状態。
運営面での主要な課題	・若手職員の育成に関して、指導の体制や教育の仕組みづくりが必要だと感じているができていない。 ・職員の意識を変えたり、働く意欲を高めたり、新たなことに取り組もう、という協力体制を作るのに苦労している。
DX による課題解決で期待される変化	・デジタル化で作業が効率化されることで時間的な余裕がうまれれば、職員間の連携が強まったり、ケアの質があがるような施設全体の雰囲気や協力体制ができていくのではと期待する。 ・よりケアに対する専門性や自身のスキルやキャリアアップなど、職員が成長する機会が増えることが望ましい。 ・気持ち的にも余裕が持てれば、職員同士が自然と助け合うようになったり、雰囲気の良い働きやすい環境にもなるのでは。
DX の有効性に対する認識	・デジタル機器やシステムの活用は有効である。
デジタル環境の整備状況	・施設支給のパソコン、タブレットを業務に使用している。 ・現在、Wi-Fi 環境は事務室など特定の場所に限定されている。 ・一方で、千葉県の補助事業を活用し、施設の大規模改修にあわせて ICT・デジタル環境の整備を進める予定である。 ・今後は全フロアで Wi-Fi が利用可能となる見込みであり、これを基盤としてデジタル化を段階的に推進していく予定。 ＜現在の導入機器・システム＞ ・見守りセンサー・カメラ ・介護報酬請求ソフト ・会計・経理管理ソフト
導入の背景	・職員の業務負担が増えてきたことが導入の最大の理由。まずは現場の負担を軽減することを優先した。

今後の DX 推進意向	・ケアの質の向上と持続可能な施設運営の実現に向けてデジタル技術の活用を積極的に進めていく意向。 ・特に、県の補助による施設改修を契機としてインフラ整備が進む見込みであり今後 DX 推進が期待される。
必要とされる支援	・デジタル担当者の確保、またそうした専門人材の育成の支援。 ・wifi の整備や端末導入に関するコスト面、技術面のサポートが必要。 ・様々な器機を導入するのに、システムの互換性や連携など、より効率的な方法を教えてほしい、もしくはわかる人にサポートいただきたい。 ・デジタル機器の操作に不安を感じる職員も少なくない。そのため導入時だけでなく運用段階においても助言や支援を行える専門人材を求めている。 ・突発的なシステムトラブルや機器不具合が発生した際に、迅速に対応できる支援体制、もしくは人員配置。

資料１：地域ニーズ調査

調査(2) 専門学校卒業生の地域定着等の実態調査 集計結果

調査(3) 保育士・介護福祉士の教育ニーズ調査 集計結果

調査②③(保育士)

年齢

平均値	51.99
最小値	27.00
最大値	75.00

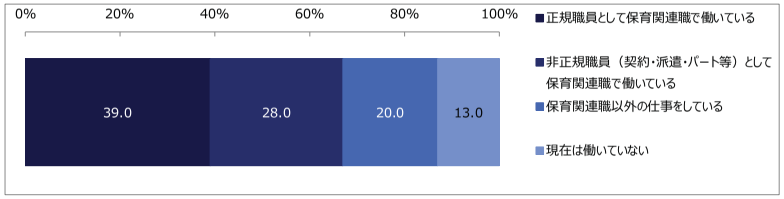
性別

男性	53.0
女性	47.0

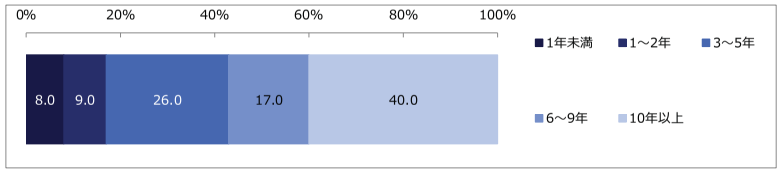
Q1.養成校(大学・短大・専門学校等)を卒業してから何年目ですか。(半角数字でご記入ください)

	n	平均値	最小値	最大値
__年目	100	22.17	0.00	50.00

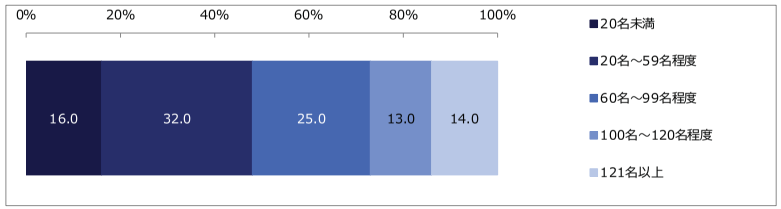
Q2.現在の就業状況を教えてください。



Q3.勤務年数を教えてください。(現在離職中の方は、直近の介護職場での勤務年数をお選びください。)

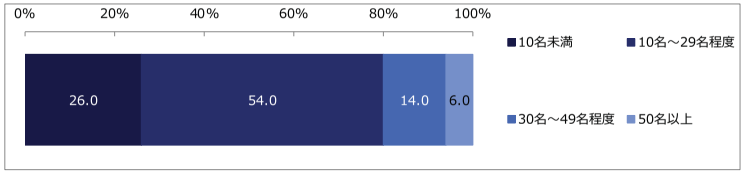


Q4.勤務先の施設の利用者数を教えてください。以下のいずれか近いものをお選びください。



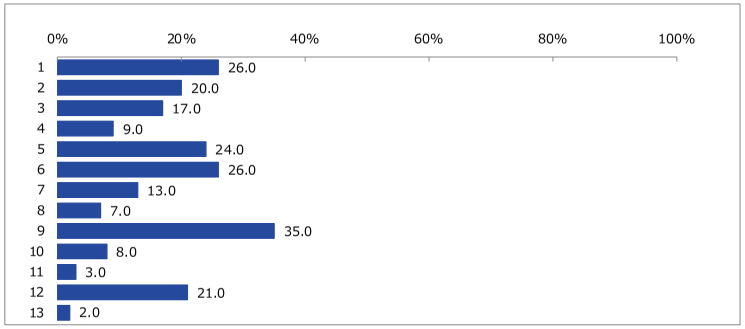
調査②③(保育士)

Q5.勤務先の施設の職員数(常勤換算)を教えてください。以下のいずれか近いものをお選びください。



Q6.日々の介護業務において、「課題(改善の余地がある)」と感じていることがありましたら教えてください。(3 つまで)

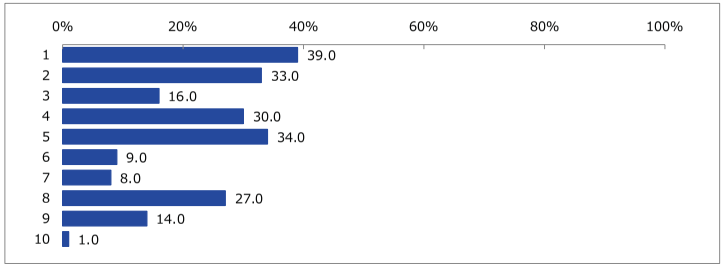
1 転記や二重入力の手間(日誌・記録帳など)
2 過去の記録や必要な情報の探しにくさ
3 利用者の家族対応の事務負担
4 手計算やアナログ管理による集計ミス
5 行事の企画や備品管理などの事務負担
6 職員間の伝達漏れや情報共有のミス
7 業務の属人化(担当者以外が状況を把握しにくい)
8 手書きや記憶に頼ることによる情報の不確かさ
9 日々の業務に追われ、改善に取り組む余裕がない
10 安全管理の形骸化(ヒヤリハットの共有不足・事故防止策の不徹底)
11 緊急対応の情報確認(既往歴や緊急連絡先の即時確認)の遅れ
12 特に課題と感じるものはない
13 その他:



調査②③(保育士)

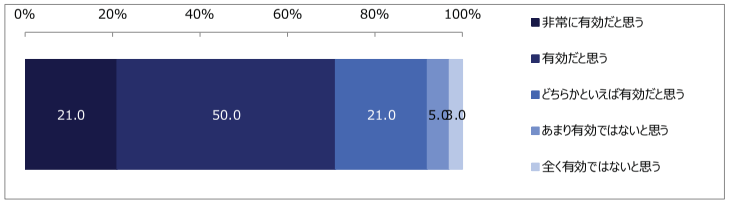
Q7.前述の業務上の課題が解消されることで、現場においてどのような変化が起こることを期待しますか。(3 つまで)

1 利用者と向き合う時間の増加
2 個々の利用者への理解深化と多角的な把握
3 円滑な情報共有による利用者家族との信頼強化
4 職員間の連携強化と施設全体のチーム力向上
5 無理のない労働環境への改善
6 IT スキルと介護経験の融合(世代間の連携)
7 研修・自己研鑽による介護の質の向上
8 心身のゆとりと相互フォローの風土醸成
9 特に期待する変化はない
10 その他:



Q8.前述の業務上の課題を解決するために、デジタル機器やシステムの活用は有効だと思いますか。

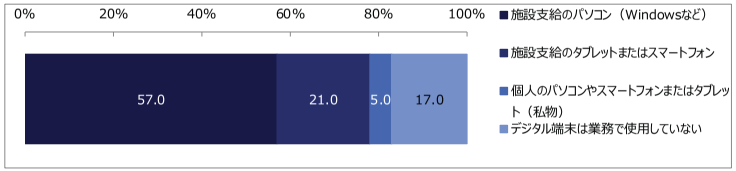
1 非常に有効だと思う
2 有効だと思う
3 どちらかといえば有効だと思う
4 あまり有効ではないと思う
5 全く有効ではないと思う



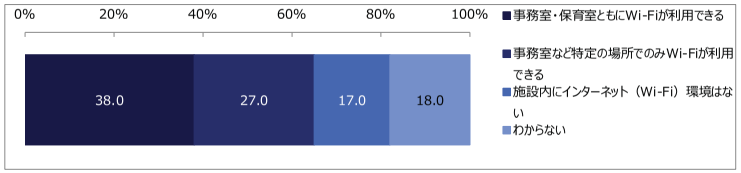
調査②③(保育士)

Q9.職場において主に使用しているデジタル端末について教えてください。

1 施設支給のパソコン(Windows など)
2 施設支給のタブレットまたはスマートフォン
3 個人のパソコンやスマートフォンまたはタブレット(私物)
4 デジタル端末は業務で使用していない

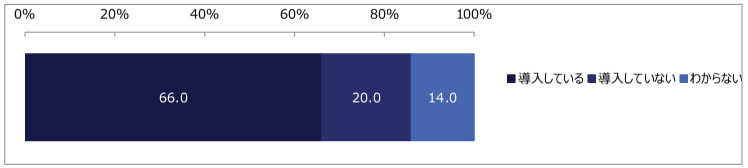


Q10.職場のインターネット(Wi-Fi)環境について教えてください。



Q11.職場でデジタル機器やシステムは導入されていますか。

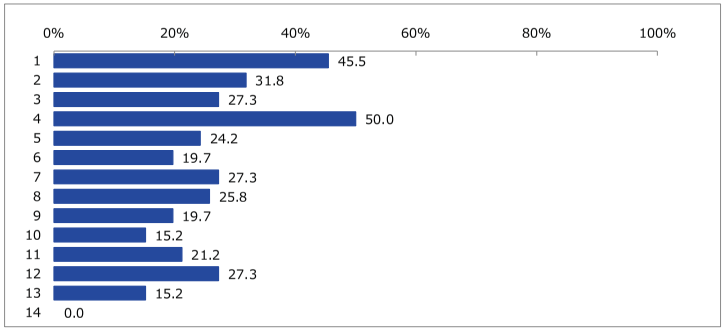
1 導入している
2 導入していない
3 わからない



調査②③（保育士）

Q12.現在の職場で導入されているデジタル機器やシステムを教えてください。（いくつでも）

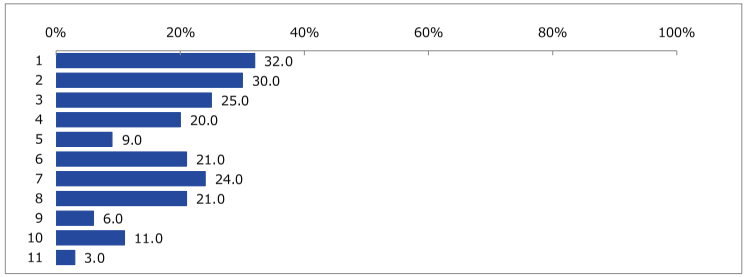
1 介護記録システム
2 介護計画作成支援ソフト
3 職員間情報共有ツール
4 利用者・家族向け連絡・情報共有アプリ
5 見守りセンサーやカメラなどの機器
6 介護ロボット（移乗支援、移動支援、排泄支援等）
7 健康管理支援システム
8 勤怠管理システム
9 シフト管理システム
10 給与計算ソフト
11 介護報酬請求ソフト
12 会計・経理管理ソフト
13 行政提出書類作成支援ツール
14 詳しくはわからない
15 その他：



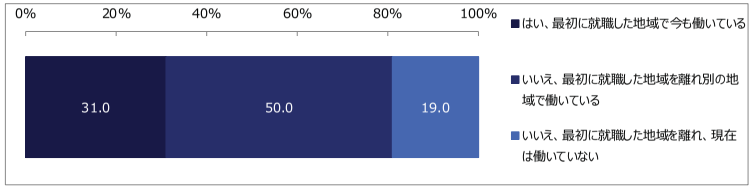
調査②③（保育士）

Q13.職場でデジタル機器やシステムの活用を円滑に進めるうえで、必要と感じる支援やサポートがありましたら教えてください。（3 つまで）

1 現場をリードする担当者の配置・育成
2 日々の業務に即した実践的な操作研修
3 学習のための時間確保や費用の補助
4 現場の動きに合わせた運用ルールの策定
5 他施設での成功・失敗事例の情報共有
6 通信環境（Wi-Fi）や端末の整備
7 システム連携による入力の自動化・効率化
8 トラブル時の迅速なサポート体制の確保
9 導入目的の共有と現場の合意形成
10 セキュリティルールの周知と徹底



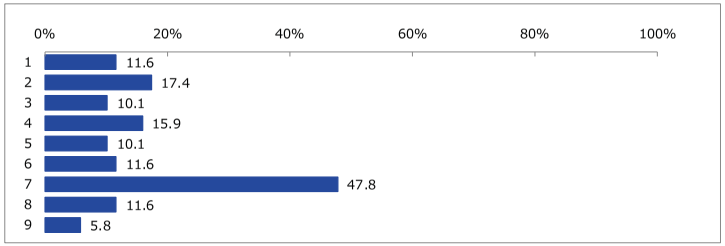
Q15.現在、最初に就職した市区町村と同じ地域で働いていますか



調査②③(保育士)

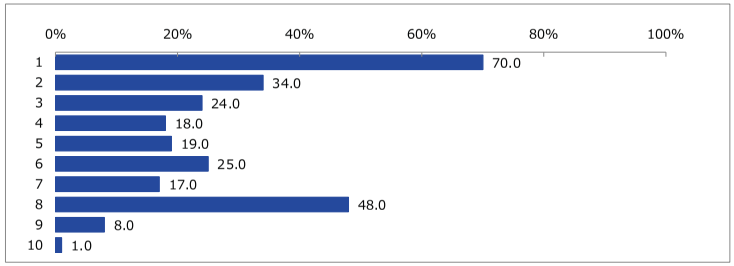
Q16.最初に就職した地域を離れた理由を教えてください。(いくつでも)

1 希望する職種や求人が少なかったため
2 給与や待遇が他の地域に比べて低かったため
3 生活インフラ(医療・交通等)が不便だったため
4 地域の人間関係や独自の慣習に馴染めなかったため
5 地域の将来性(人口減少・活気のなさ)に不安を感じたため
6 スキルアップやキャリアアップを求めて転出したため
7 結婚・転居・実家への帰省などのライフイベント
8 育児や介護など、家族のサポートが必要になったため
9 その他:



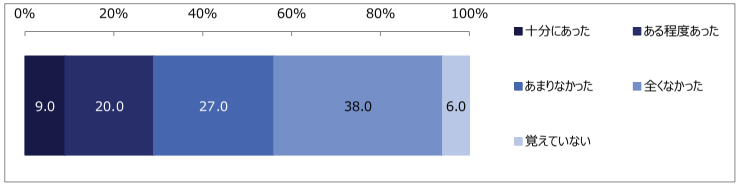
Q17.地域で長く働き続けるために、重要だと思う支援がありましたら教えてください。(いくつでも)

1 給与・待遇の改善
2 生活支援(家賃補助・交通費補助など)
3 デジタル化・業務効率化の推進
4 キャリア相談や研修の機会
5 メンタルヘルスケアやカウンセリング支援
6 地域で働くための支援制度(例:UI ターン支援、住宅支援など)
7 復職支援プログラム(ブランクのある方向け)
8 短時間勤務や柔軟な働き方の選択肢
9 特にない
10 その他:



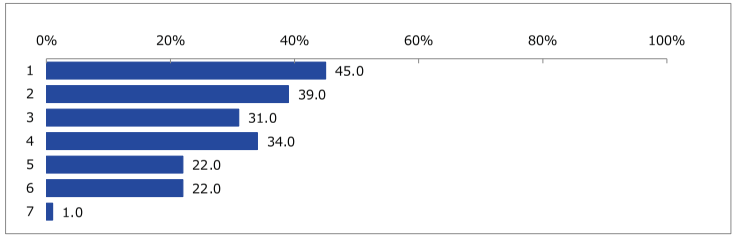
調査②③(保育士)

Q18.養成課程(在学中)で、デジタル機器の操作や活用について学ぶ機会はどの程度ありましたか。



Q19.養成課程(在学中)にもっと学んでおくべきだと思う項目について教えてください。(いくつでも)

1 実践的な介護スキル(例:利用者・家族対応、記録の書き方、現場運営など)
2 デジタル機器の基本操作(例:Excel、Word の使い方など)
3 多職種連携(例:医療・教育・行政との連携方法)
4 コミュニケーションスキル(例:職員間の連携、利用者・家族との関係構築など)
5 キャリア形成(例:昇進・転職・働き方の選択肢など)
6 特にない
7 その他:



Q20. 介護現場における業務のデジタル化について、期待することやご意見などがあればご自由にご記入ください。

業務効率化・保育の質向上への期待

- 事務作業を減らし、子どもと関わる時間を増やしたいという前向きな意見です。
- 時間の短縮
- とにかく事務量が多いのでデジタル化することで時短になることを期待する
- 書類は手書きの為、書類に要する時間がかなりかかり非効率である
- 業務がデジタル化になる事でほかの事務をする時間が増えたり心に余裕が持てる様になりより良い保育が出来る。
- 仕事の効率化

調査②③（保育士）

- 業務の簡潔化
- 効率化、仕事量を少なくしたい
- 事務的内容であれ、どんどんデジタル化していくと、子どもと保護者メインの関わりを深めていける
- 保育業務軽減
- 迅速なシステム化
- 保育事故事件を 0 に出来そう。人間が必要なくなるかも。
- AI の進歩

システム・機器・環境への具体的要望

- 導入にあたっての条件や、「こうあってほしい」という機能面への意見です。
- 子どもの入退出など、簡単に操作できるアプリ
- 使いやすくあること。また、多くの端末で同時に使える事
- 事務所以外でもデジタル機器が使えるといいと思う
- 職員の人数に見合ったデジタル機器の数の導入
- AI を取り入れて欲しい
- やはり出来るだけ現代のシステムに近づけるように努力を重ねていますよね

導入・運用に対する不安・課題（スキル・体制）

- 苦手意識や、現場の時間不足、世代間や役職間の意識のズレに関する意見です。
- 自分がデジタル機器の対応が苦手なので、導入して使いこなせるか心配
- 上の立場の人間が自分たちの知らないことに、関して取り入れようとする気がない
- 現場職だとデジタルを扱う時間がない
- 世代間ギャップがある

リスク管理・アナログとのバランス

- 災害時の対応や、アナログの良さも残すべきという冷静な意見です。
- デジタル化とアナログの良い面を双方取り入れられる柔軟性が必要
- 停電した時の対応。デジタルが使えなくなる状況も踏まえ偏らせるべきではないと思う。
- 効果的に活用することは大事だと思うが、頼り過ぎてしまうと有事の際に困ると感じている。

デジタル化への慎重論・反対・優先順位

- デジタル化そのものへの疑問や、それよりも優先すべき課題（待遇面など）があるという意見です。
- デジタル化、おかしい！そんなことの前に目の前にいる子供たちをどうやって立派な大人にするのか、その大切な時期に関わりを持っていることをもっと自覚しなければいけない。デジタル化！おかしすぎる！
- 手で書くことのほうが大事だと思う。面倒だが、思いがある為。ミスが起こりにくい。
- デジタル化というよりも第一に、待遇面。命を預かっているのにそれが反映されない待遇。しかし、子供の命に関わることがあれば一番責められるのが現場の職員。モチベーションが下がり、やまた言った職員をたくさんみてきました。

調査②③(介護福祉士)

年齢

平均値	51.99
最小値	27.00
最大値	75.00

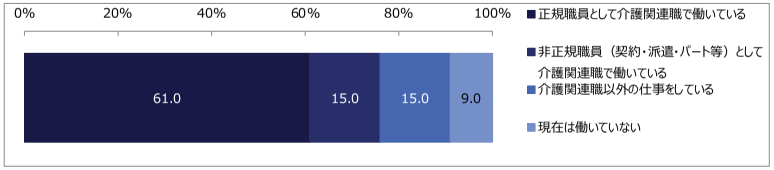
性別

男性	53.0
女性	47.0

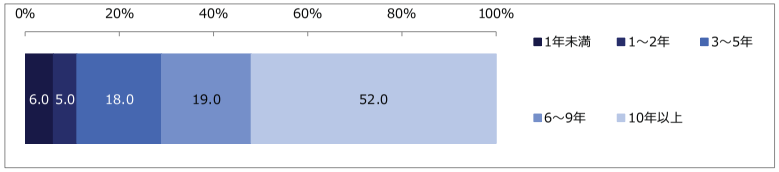
Q1.養成校(大学・短大・専門学校等)を卒業してから何年目ですか。(半角数字でご記入ください)

	n	平均値	最小値	最大値
__年目	100	20.50	0.00	61.00

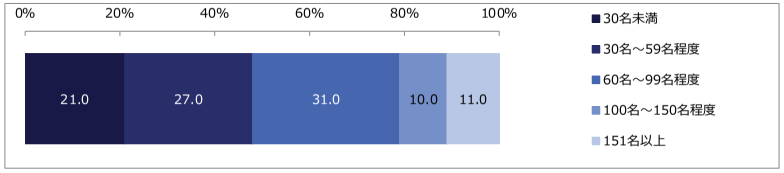
Q2.現在の就業状況を教えてください。



Q3.勤務年数を教えてください。(現在離職中の方は、直近の介護職場での勤務年数をお選びください。)

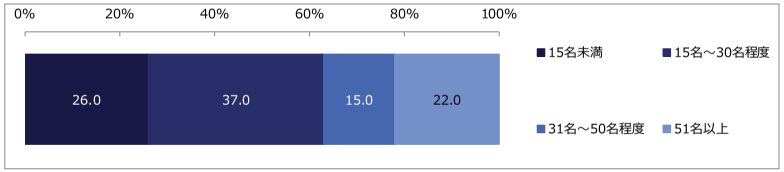


Q4.勤務先の施設の利用者数を教えてください。以下のいずれか近いものをお選びください。



調査②③(介護福祉士)

Q5.勤務先の施設の職員数(常勤換算)を教えてください。以下のいずれか近いものをお選びください。

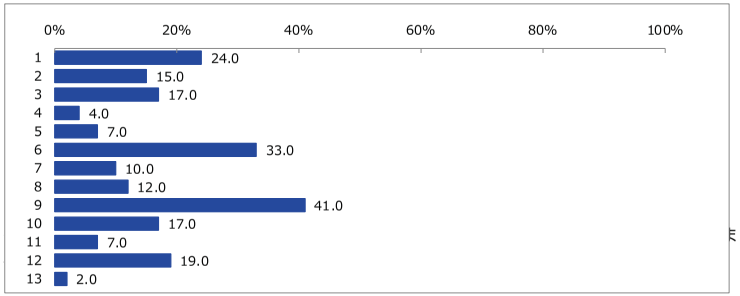


Q5-1.うち有資格者

	n	平均値	最小値	最大値
うち有資格者__人	25	34.24	5.00	300.00

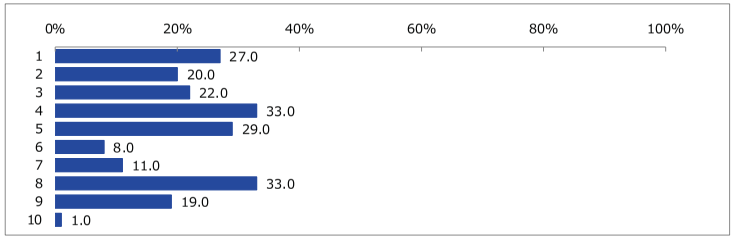
Q6.日々の介護業務において、「課題(改善の余地がある)」と感じていることがありましたら教えてください。(3 つまで)

1 転記や二重入力の手間(日誌・記録帳など)
2 過去の記録や必要な情報の探しにくさ
3 利用者の家族対応の事務負担
4 手計算やアナログ管理による集計ミス
5 行事の企画や備品管理などの事務負担
6 職員間の伝達漏れや情報共有のミス
7 業務の属人化(担当者以外が状況を把握しにくい)
8 手書きや記憶に頼ることによる情報の不確かさ
9 日々の業務に追われ、改善に取り組む余裕がない
10 安全管理の形骸化(ヒヤリハットの共有不足・事故防止策の不徹底)
11 緊急対応の情報確認(既往歴や緊急連絡先の即時確認)の遅れ
12 特に課題と感じるものはない
13 その他:



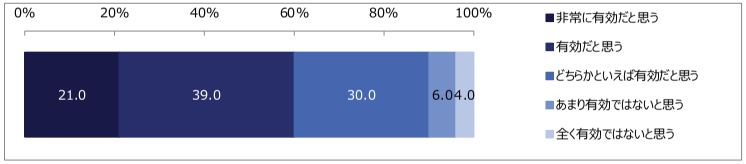
調査②③(介護福祉士)

1　利用者と向き合う時間の増加
2　個々の利用者への理解深化と多角的な把握
3　円滑な情報共有による利用者家族との信頼強化
4　職員間の連携強化と施設全体のチーム力向上
5　無理のない労働環境への改善
6　IT スキルと介護経験の融合(世代間の連携)
7　研修・自己研鑽による介護の質の向上
8　心身のゆとりと相互フォローの風土醸成
9　特に期待する変化はない
10　その他:



Q8.前述の業務上の課題を解決するために、デジタル機器やシステムの活用は有効だと思いますか。

1　非常に有効だと思う
2　有効だと思う
3　どちらかといえば有効だと思う
4　あまり有効ではないと思う
5　全く有効ではないと思う

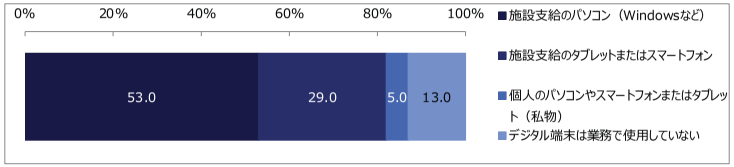


Q9.職場において主に使用しているデジタル端末について教えてください。

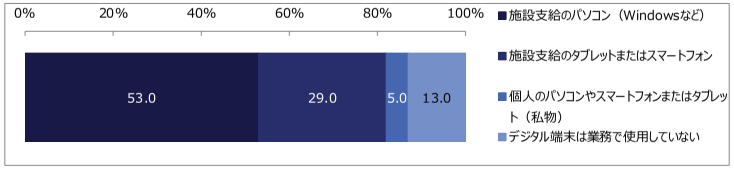
1　施設支給のパソコン(Windows など)
2　施設支給のタブレットまたはスマートフォン
3　個人のパソコンやスマートフォンまたはタブレット(私物)

調査②③(介護福祉士)

4　デジタル端末は業務で使用していない

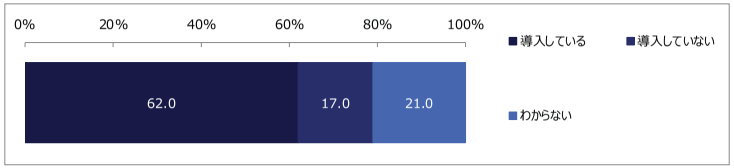


Q10.職場のインターネット(Wi-Fi)環境について教えてください。



Q11.職場でデジタル機器やシステムは導入されていますか。

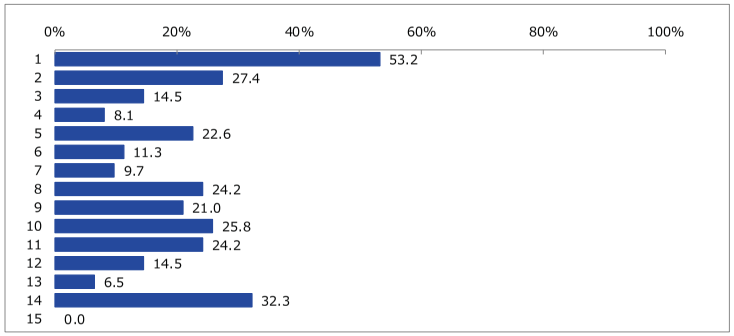
1　導入している
2　導入していない
3　わからない



Q12.現在の職場で導入されているデジタル機器やシステムを教えてください。(いくつでも)

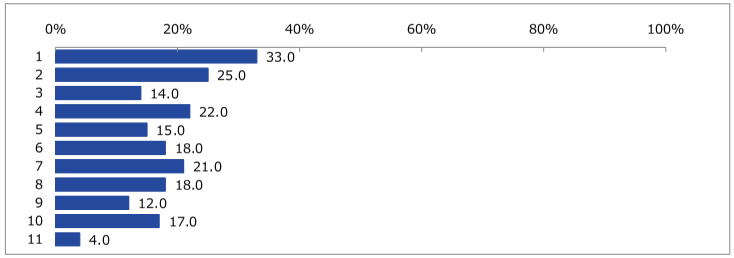
1　介護記録システム
2　介護計画作成支援ソフト

3　職員間情報共有ツール
4　利用者・家族向け連絡・情報共有アプリ
5　見守りセンサーやカメラなどの機器
6　介護ロボット（移乗支援、移動支援、排泄支援等）
7　健康管理支援システム
8　勤怠管理システム
9　シフト管理システム
10　給与計算ソフト
11　介護報酬請求ソフト
12　会計・経理管理ソフト
13　行政提出書類作成支援ツール
14　詳しくはわからない
15　その他：

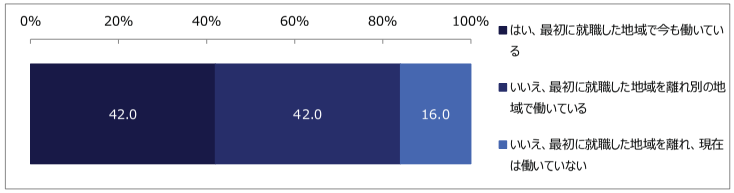


Q13.職場でデジタル機器やシステムの活用を円滑に進めるうえで、必要と感じる支援やサポートがありましたら教えてください。（3 つまで）

1　現場をリードする担当者の配置・育成
2　日々の業務に即した実践的な操作研修
3　学習のための時間確保や費用の補助
4　現場の動きに合わせた運用ルールの策定
5　他施設での成功・失敗事例の情報共有
6　通信環境（Wi-Fi）や端末の整備
7　システム連携による入力の自動化・効率化
8　トラブル時の迅速なサポート体制の確保
9　導入目的の共有と現場の合意形成
10　セキュリティルールの周知と徹底



Q15.現在、最初に就職した市区町村と同じ地域で働いていますか

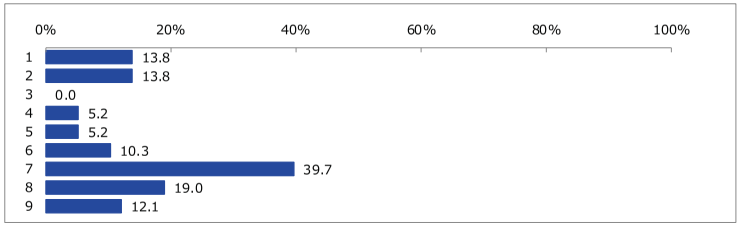


Q16.最初に就職した地域を離れた理由を教えてください。（いくつでも）

1　希望する職種や求人が少なかったため
2　給与や待遇が他の地域に比べて低かったため

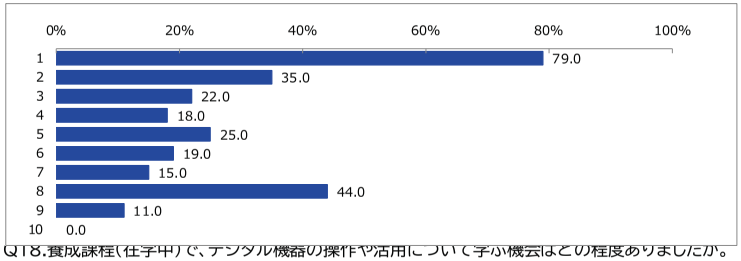
調査②③(介護福祉士)

3　生活インフラ(医療・交通等)が不便だったため
4　地域の人間関係や独自の慣習に馴染めなかったため
5　地域の将来性(人口減少・活気のなさ)に不安を感じたため
6　スキルアップやキャリアアップを求めて転出したため
7　結婚・転居・実家への帰省などのライフイベント
8　育児や介護など、家族のサポートが必要になったため
9　その他:

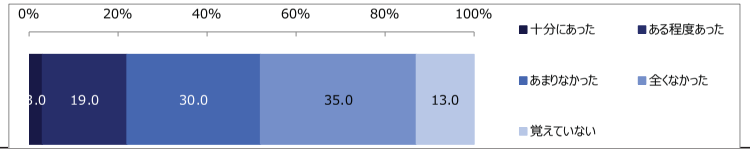


Q17.地域で長く働き続けるために、重要だと思う支援がありましたら教えてください。(いくつでも)

1　給与・待遇の改善
2　生活支援(家賃補助・交通費補助など)
3　デジタル化・業務効率化の推進
4　キャリア相談や研修の機会
5　メンタルヘルスケアやカウンセリング支援
6　地域で働くための支援制度(例:UI ターン支援、住宅支援など)
7　復職支援プログラム(ブランクのある方向け)
8　短時間勤務や柔軟な働き方の選択肢
9　特にない
10　その他:



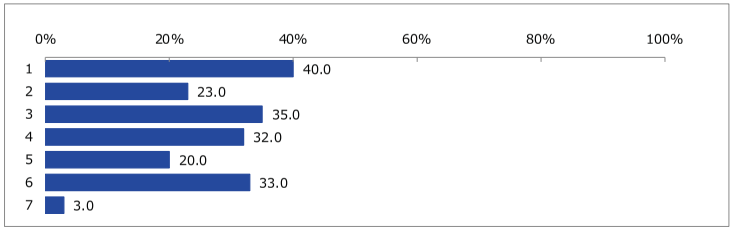
Q18.養成課程(在学中)で、デジタル機器の操作や活用について学ぶ機会はどの程度ありましたか。



調査②③(介護福祉士)

Q19.養成課程(在学中)にもっと学んでおくべきだと思う項目について教えてください。(いくつでも)

1　実践的な介護スキル(例:利用者・家族対応、記録の書き方、現場運営など)
2　デジタル機器の基本操作(例:Excel、Word の使い方など)
3　多職種連携(例:医療・教育・行政との連携方法)
4　コミュニケーションスキル(例:職員間の連携、利用者・家族との関係構築など)
5　キャリア形成(例:昇進・転職・働き方の選択肢など)
6　特にない
7　その他:



Q20. 介護現場における業務のデジタル化について、期待することやご意見などがあればご自由にご記入ください。

業務効率化・負担軽減への期待

- 「記録」「事務」の時間を減らし、利用者と関わる時間や余裕を持ちたいという意見です。
- 記録等の整備をしたい
- 気楽に割く時間を軽減出来る
- 訪問介護の記録が少なくなれば良い
- らくになるおおもうなー
- 事務時間の軽減
- ”働きやすい環境を作って欲しい”
- 業務の効率化
- デジタル化にて情報共有
- ”記録の効率化”
- 介護記録等のスタッフ間の情報共有

調査②③（介護福祉士）

- 余裕が介護がしたい
- AI を活用した業務改善
- 患者との関わりを取れる時間を作れる
- DX 化をどんどん推進して欲しい

導入環境・ツールへの具体的要望

- 「共通化」「端末の数」「使いやすさ」など、導入にあたっての具体的な条件やアイデアです。
- 簡単な Excel などパソコンの基本スキルを学んだ方が介護現場での業務をスムーズに行えると現在働いていて感じます。
- 利用者の情報共有、業務を円滑にするためにも、共通のデジタルツールが必須である。誰もが使いやすいというところが、一番大事。
- 一つのPC を数人使っているので、自分の使いたいときに使えない。個々にタブレットでも持つべき。
- その自治体でも、どの施設でも同じアプリとソフトの利用を促進し、情報共有が簡単にできる体制の整備
- 簡単に使えれば良い
- AI の導入例

人材・コスト・意識（導入の壁）

- 「人手不足が先決」「年配スタッフへの教育」「予算不足」など、デジタル化を進める上での障壁に関する意見です。
- デジタル化より人手確保が先決と言う古い観念の改革。
- 年配のスタッフには、デジタル化のハードルが高く、分かり易い教えられる仕組みが必要。
- ある程度、人員に余裕がないと業務のデジタル化には向かえない
- デジタル化があまり進んでいない
- 忙しくて検討する余裕と財政がない

期待薄・その他

- 現状ではメリットを感じられない、または判断がつかないという意見です。
- あまり期待できない
- 身体的と年齢的に働けないので、今のところ期待することはない。
- 思い浮かばない

資料１：地域ニーズ調査

調査(3) 保育施設デジタル機器導入事例調査

保育施設デジタル機器導入事例調査

■見守り・健康・安全管理（15 事例）
事例情報 1　IoT ウェアラブル……2
事例情報 2　べびさぽ……4
事例情報 3　送迎バスクラウド by NAVITIME……6
事例情報 4　hana-an……8
事例情報 5　みえますねっと……10
事例情報 6　ビーコン……12
事例情報 7　送迎バス置き去り防止システム……14
事例情報 8　りりーふなっぷ　びーこんうぉっち……16
事例情報 9　ココール……18
事例情報 10　cocolin……20
事例情報 11　MISIRU……22
事例情報 12　すやすやうぉっち……24
事例情報 13　見守りロボット……26
事例情報 14　アジラ……28
事例情報 15　CANCHI……30
■保育実践・教材（14 事例）
事例情報 16　ジョリーグッド……32
事例情報 17　MINO……34
事例情報 18　BenQ Board……36
事例情報 19　えぽん……38
事例情報 20　こどもアプリ　ワオっち！……40
事例情報 21　知育・教育アプリシリーズ「あそんでまなぶ！」……42
事例情報 22　ELMO……44
事例情報 23　ChiCaRo（チカロ）……46
事例情報 24　ONE ROOF Lab……48
事例情報 25　タップトーク……50
事例情報 26　らくがき AR……52
事例情報 27　こくり……54
事例情報 28　分身ロボット OriHime……56
事例情報 29　KitS……58
■職員業務支援・記録管理（6 事例）
事例情報 30　すくすく保育園給食……60
事例情報 31　きっずランチ 2……62
事例情報 32　献ダテマン……64
事例情報 33　VEVO……66
事例情報 34　AI ロボット……68
事例情報 35　子どもの安全対策 VR 教材……70
■保護者連絡・情報共有（4 事例）
事例情報 36　保育園ロボット……72
事例情報 37　さくら連絡網……74
事例情報 38　キッズノート……76
事例情報 39　コノベル……78
■総合型（4 事例）
事例情報 40　園支援システム＋バスキャッチ……80
事例情報 41　CODMON……82
事例情報 42　ウェルキッズ（WEL-KIDS）……84
事例情報 43　ルクミー……86

事例情報 1　IoT ウェアラブル

機器名称	IoT ウェアラブル
開発企業名	株式会社キムラタン
参照 URL	https://www.kimuratan.co.jp/cr_company/
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**体調見守り**：心拍・体温・加速度データからストレスや体調変化を検知し、異常時にアラートを通知。 ・**午睡の見守り**：うつ伏せ寝・体動停止・呼吸異常を検知しアラート発報。 ・**体温モニタリング**：衣服内温度の変化をリアルタイムで監視し、発熱・低体温の兆候を検知。 ・**記録保存・クラウド管理**：午睡チェックや体温記録を自動保存・印刷可能。長期的に履歴を蓄積。 ・**他システム連携**：保育 ICT「CoDMON」との API 連携により、園児情報と統合表示が可能。
特徴	**［園児にやさしいウェアラブル構造］** ・肌着型のフラットシーマ加工を採用し、子どもの肌に直接触れる部分の縫い目や硬さを極力減らしているため、長時間の着用でも違和感が少なく、園児のストレスや不快感を最小限に抑える。センサー装着が簡単で、保育士が着脱やサイズ調整に時間を取られないのも現場で評価されている。 **［終日型バイタルモニタリングによる安全性向上］** ・登園から降園まで心拍・体温・加速度データを連続取得し、個々の園児の状態をリアルタイムかつ客観的に把握できる。これにより、肉眼では見逃しやすいストレス・体調変化や午睡時のリスク（うつ伏せ寝・体動停止・呼吸異常など）を早期に察知し、重大事故の防止につながる。   **［安心通知システムによる迅速対応］** ・体調異変や午睡時のトラブルを自動で検知し、管理端末や保育士のスマホ・タブレットに即座にアラート通知。警報音や色表示など視覚・聴覚で気づきやすい仕組みを備え、迅速な初動対応を可能にする。保育士が園児全員を常時目視する負担が軽減され、心理的余裕を持って保育にあたれる。 **［記録の自動化・クラウド管理で業務効率化］**

	・午睡チェック表や体温記録を手書きで作成する手間をなくし、専用アプリやクラウドに自動保存・印刷が可能。園児ごとのバイタル履歴を長期間蓄積でき、監査対応や保護者への情報提供にも活用できる。データ可視化により傾向把握・体調管理が科学的に行えるようになり、園全体の安全管理レベルが向上する。   **［他システムとの API 連携による情報一元化］** ・保育 ICT プラットフォーム「CoDMON」との API 連携により、バイタルデータや午睡記録を他の園児管理情報と統合表示。複数システムの入力・転記が不要になり、データの一貫性・正確性が高まる。園運営の DX をさらに進める基盤としても有効。 **［保育現場の働きやすさ・信頼性向上］** ・アラート対応・記録自動化によって職員の時間的・精神的負担が大幅に軽減され、子どもと向き合う時間を確保できる。事故や体調急変時の初動対応の質が向上し、保護者からの信頼感が増す。監査や第三者評価にも活用できるデータを整備できるため、施設全体のガバナンス強化にもつながる。
期待される効果	・**安全性の飛躍的向上**：体調変化や午睡リスクをリアルタイムで検知し、重大事故を未然に防止。 ・**業務負担の軽減**：午睡チェックや体温記録の自動化により、手作業を削減。保育士が子どもに集中できる時間を確保。 ・**初動対応の迅速化**：異常時の即時アラートで、事故・体調急変時の対応力が強化。 ・**データ活用による信頼性向上**：蓄積データを活用した科学的な体調管理、監査対応や保護者説明の円滑化により、施設全体の信頼性が高まる。
価格	非公開（Web 掲載なし、要問い合わせ）
導入事例	**ユニバースナーサリー蒲田園（東京都大田区）** ・従来は午睡チェックや体温確認を職員が手作業で行っていたが、cocolin 導入後は肌着型センサーで園児の心拍・体温・体動が常時把握できるようになり、異変時にはアラートで即座に対応できるようになった。夏場の暑さ対策や体調変化の早期発見にも役立ち、職員は安心して保育に集中できるようになっている。

事例情報２　べびさぽ

機器名称	べびさぽ
開発企業名	トライポッドワークス株式会社
参照 URL	https://www.tripodworks.co.jp/products/babycaresupport/
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**午睡モニタリング**：乳児の様子を PC やタブレットでリアルタイム映像確認 ・**異常通知**：うつぶせ寝や異常をランプ光と音アラートで保育士に通知 ・**履歴確認・予測機能**：過去映像の確認、うつぶせ寝予測、保育士の見守り行動を自動タグ付け ・**自動レポート作成**：写真付き詳細レポートを自動生成 ・**映像・静止画保存**：保存して振り返りや説明に活用可能 ・**遠隔閲覧機能**：本部や他園からの遠隔モニタリングに対応
特徴	**［センサー不要で簡単導入］** ・子ども一人ひとりに装着するセンサーが不要なため、身体への負担や機器装着の手間がなく、導入・運用が簡単。 **［光と音で優しく通知］** ・うつぶせ寝などの異常を、子どもの眠りを妨げにくいやわらかなランプ光と小鳥のさえずり音で保育士に知らせる仕組み。 **［AI によるうつぶせ寝予測機能］** ・映像解析で体勢変化を検知し、危険な状態になる前に予測警告を出せる点が特徴的。  **［自動レポート＆タグ付け］** ・撮影映像から体位・確認時間・対応職員などを自動で整理・記録し、エビデンスとして残せる。 **［共同見守りを支援］** ・ランプを見える位置に設置することで、複数の職員が同時に状況を把握でき、誰か一人に負担が集中しない体制づくりを助ける。 **［振り返り・研修活用］**

	・保存された映像・タグ・レポートを使って、後から指導・改善・新人教育に活用可能。 **［園外からのモニタリング］** ・本部や他園からも PC やスマホで映像を閲覧でき、複数園の統括管理や視察にも利用可能。
期待される効果	・**業務負担の軽減**：午睡チェックや呼吸確認の手動作業を削減。 ・**異常の早期発見**：目視では気づきにくいリスクをリアルタイムに把握可能。 ・**保育士の精神的負担軽減**：常時監視の緊張感が緩和され、余裕を持って保育にあたれる。 ・**エビデンス活用**：映像・レポートを保存して、振り返り・保護者説明・監査対応に活用可能。 ・**見守り体制の強化**：複数職員・園外関係者の参加により、安全性と保護者の安心感が向上。
価格	月額利用料：15,000 円／月～（税込 16,500 円～） 一括購入プラン：別途見積もり（問い合わせ対応） タブレットセットプランも用意
導入事例	**①ビックママランド新寺園（宮城県仙台市若林区）** 導入目的：0 歳児の午睡中の呼吸確認負担を減らし、業務効率化と精神的余裕を確保するため。 導入後の効果： 赤ちゃんのお昼寝中に連絡ノートや日誌を書くなど多くの業務があるなか、5 分ごとの呼吸確認が大変だったが、べびさぽ導入により精神的にも大きな余裕ができた。 目視＋カメラのダブルチェックで、赤ちゃんが 5 分間動かなかったり、うつぶせ寝になったりすると光と音で注意してくれるため、安心して他の業務もこなせるようになった。 0 歳児の担任でない先生もみんなで映像を見て、現在の状態や様子を把握でき、より多くの目で見守ることができるので大きな安心感につながっている。 操作が簡単なことも高評価ポイント。

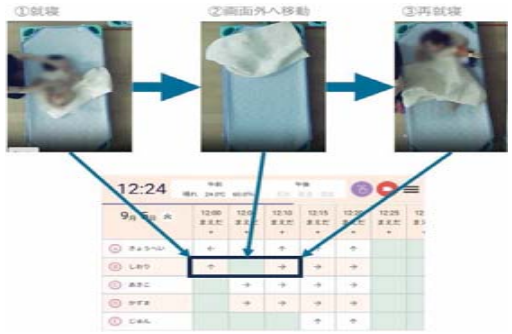
事例情報 3　送迎バスクラウド by NAVITIME

機器名称	送迎バスクラウド by NAVITIME
開発企業名	NAVITIME
参照 URL	https://transport.navitime.co.jp/bus/shuttle-bus-cloud
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**リアルタイム位置情報配信**：GPS で送迎バスの現在地を取得・配信 ・**接近情報通知**：到着予想時刻や接近状況を自動通知 ・**運行管理**：ルート・停車バス停・車両情報を登録・管理（管理者画面） ・**進行方向・渋滞表示**：バスの進行方向や渋滞情報を地図上に表示 ・**ドライバー負担軽減**：運行開始・終了の操作を簡略化、通知による操作促し ・**利用者向け Web 表示**：アプリ不要、Web のみでバスの現在地やルートを確認可能
特徴	**［専用機器不要・スマホ・PC だけで利用開始］** ・複雑なハードウェア導入やシステム連携をせず、既存のスマートフォンとパソコンで即時運用できる。 **［直感的な操作・地図ベースで登録可能］** ・管理者画面では、バス停の登録やルート指定を地図上で直感的に行える設計。住所入力よりも視覚的に配置できる点が使いやすさの訴求点。 **［運転手の負荷を極力抑える設計］** ・運行開始・終了の時間に応じて通知でアプリ起動を促したり、運行終了時刻で自動的に計測を停止する機能を備え、人為的ミスや操作忘れを防止。  **［進行方向表示・遅延・渋滞情報の可視化］** ・ルートの線表示がない場合も、バスアイコン上で進行方向を示すなど、地図上で「バスがどの方向に来ているか」が分かりやすく設計されている。道路の渋滞情報も併表示して、到着時間の見当をつけやすくする代替手段も提供。 **［ユーザー負担を軽くする UX 設計］** ・利用者は、アプリのインストール不要、アカウント登録不要で Web 経由でバス位置を確認可能。煩雑さを排して即時性・使いやすさを優先。 **［デザイン・色彩の配慮］**

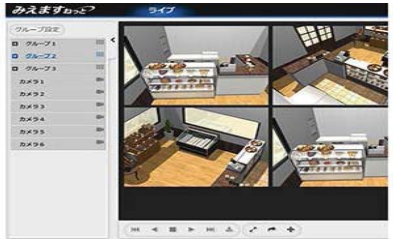
	・バス位置アイコンやバス停アイコンの色を、実際のバス車体色や路線カラーに合わせて設定できる柔軟性。これにより視認性・認知性を高め、利用者の混乱を防ぐ工夫がされている。  **［1 パッケージで“見る・配信・管理”を包括］** ・送迎バスの位置取得（GPS）から管理者画面でのルート登録、利用者への情報配信までをワンパッケージで提供。
期待される効果	・**保護者の不安軽減**：「バスがいつ来るか」を可視化し、待ち時間の不安を解消 ・**信頼性向上**：遅延や通過ミスを説明可能で、園と保護者の信頼関係を強化 ・**運行管理の効率化**：管理者・ドライバーが運行状況を把握しやすく、緊急対応力も向上 ・**業務負担軽減**：ドライバーの報告業務や電話対応の手間を削減 ・**地域交通の効率化**：透明性の高い運行情報共有により、送迎運営の効率化と地域交通の信頼性強化につながる
価格	初期費用：33,000 円（税込） 月額費用：16,500 円（税込、車両 5 台まで） 追加車両：6 台目以降は 1 台あたり 3,300 円（税込） 加算
導入事例	**①学校法人浅沼学園 ひなぎく幼稚園** 導入目的：送迎バスの運行状況を保護者に可視化し、安心感を提供したいという要望 通信・連絡業務・問合せ対応などを効率化したい 導入後の効果・成果：保護者から「バスがどこにいるか見えるから安心」という声が上がっている 運行遅延や渋滞時に到着見込みを伝えやすくなり、保護者対応の負担が軽減 運行管理者・運転手間の情報共有がスムーズになり、対応の迅速性が向上 バスの遅れや走行中位置などの問い合わせが減少した 送迎バス関連の苦情・クレームが減り、保護者満足度が向上

事例情報 4　hana-an

機器名称	hana-an
開発企業名	リケナリシス株式会社
参照 URL	https://www.hana-an.net/
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**AI 午睡見守り**：天井設置型の超小型カメラ＋AI で複数園児の寝姿勢を検知・記録 ・**自動起動・遡り記録**：“開始”ボタンで AI が見守りを開始し、寝始め時間に遡って記録反映 ・**園児名の後付け紐づけ**：後から名前入力しても、寝始め時間にさかのぼって反映可能 ・**同時検知人数**：自動で最大 12 名、手動追加で最大 15 名まで管理可能 ・**姿勢識別機能**：仰向け・うつ伏せ・横向き・動作ありなどを AI が分類 ・**睡眠時間測定**：入眠／起床／総睡眠時間などを自動で測定・記録 ・**自動停止機能**：全員が起床したら見守りを自動停止し、誤操作を防止 ・**自動再識別技術**：映像外に出ても戻れば同じ園児として認識 ・**役割別アプリ構成**：管理者用／午睡担当用アプリを分け、習得負荷を軽減 ・**クラウド型継続更新**：AI モデル・機能をクラウド経由で常に最新化、買い替え不要
特徴	**［センサー不要・非接触型設計］** ・赤ちゃんにボタンやセンサーを取り付けなくても見守り可能で、着替え・取り付けミス・身体的負担リスクを排除 **［高精度 AI 姿勢推論技術］** ・理化学研究所との共同研究で開発された「姿勢推論 AI」によって、ただの動き検知ではなく、関節・体の向きまで推論して寝姿勢を判断できる点が差別化要因 **［記録業務の大幅削減］** ・従来の手書き・転記作業を最大 97% 削減可能（自社推計）としており、事務負担を大きく軽くする設計 **［紐づけ操作の柔軟性］** ・寝始め時にすぐ名前紐づけが不要で、後から名前を付けても記録時刻に遡って反映できる設計 **［アプリ操作負荷の軽減］** ・操作は「開始ボタンを押す」「紐づけ」などに限定され、IT に不慣れな保育士でも扱いやすいよう設計されている点 **［安全性・衛生性対応］** ・コードは上部に集約、電池不要・交換不要構造など、誤飲・断線リスクが低くなる設計 **［自動停止・無駄検知防止］**

	・寝ている子がいない（全員起床）状態になると自動で見守り停止、誤操作不要  **［クラウド継続更新型］** ・AI モデル・機能アップデートをクラウドで提供、買い替え不要な継続性を持たせている
期待される効果	・**事務作業負荷の軽減**：記録・転記・紙帳票作成の手間を大幅に削減 ・**見守り精度向上**：ミスや記録漏れを防ぎ、午睡中のリスクを早期検知 ・**子どもと向き合う時間の確保**：保育士の観察業務を軽減し、子ども対応に集中可能 ・**安心・安全な午睡環境**：うつ伏せ寝や異常姿勢を早期に発見し事故を予防 ・**導入効果の持続性**：クラウド更新により、買い替え不要で常に最新機能を活用可能 ・**運用負担の分散**：役割分担により、属人化を避けた安定運用が可能
価格	初期費用と月額利用料による従来型プランあり 月額オンリープラン（初期費用 0 円）追加 既存プラン例：初期費用：500,000 円（税別）、月額：10,000 円（税別） 補助金・助成金対応：ICT 補助金や安全対策補助金制度への対応支援あり
導入事例	施設名の記載なし 導入動機・背景：午睡見守りでの紙記録・目視確認負荷の軽減を図りたい 異常姿勢・うつぶせ寝など安全リスクを未然に検知したい 記録の正確性・信頼性を高め、保護者への説明材料としたい ICT 導入により職員の時間を確保し、保育の質を高めたい 導入後の効果・感想：「夜泣きなどで昼寝が浅くなる子も多く、目視だけでは見落としそうな動きも AI がキャッチしてくれると安心感が違う」 「赤ちゃんを見守りながら他の業務を進められるようになり、精神的な余裕が持てた」

事例情報５　みえますねっと

機器名称	みえますねっと
開発企業名	i-PRO 株式会社
参照 URL	https://miemasu.i-pro.com/
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**遠隔モニタリング**：DDNS 経由でインターネットからカメラ映像を閲覧可能 ・**クラウド録画**：常時録画やセンサー検知による録画に対応 ・**センサー通知**：動作検知時にメールで異常を通知 ・**通信状態通知**：カメラとサーバー間の通信異常をメール通知（例：20 分以上途絶） ・**ポータルサイト管理**：複数拠点・複数カメラの映像閲覧、録画再生、設定変更を一元管理 ・**モバイル端末対応**：専用アプリ「みえますねっとビューアー」で外出先からライブ映像や通知確認が可能 ・**ユーザー管理機能**：ユーザー登録、契約情報変更、機器登録、プラン変更、オプション管理
特徴	**［園児の安全を可視化するクラウドカメラ］** ・i-PRO のネットワークカメラとクラウド録画を組み合わせ、園内の各保育室・ホール・園庭などを遠隔から確認できる。録画用のレコーダーを置かずに済むため、狭い園でも設置しやすい。  **［センサー通知で異常を即時把握］** ・不審者侵入や園児の立ち入り禁止エリア進入、夜間の異常など、動作検知に応じてメール通知されるため、職員が常時モニターを見ていなくても対応が可能。 **［複数拠点・複数部屋を一元管理］** ・管理画面から全カメラ映像を一覧でき、乳児室・幼児室・玄関・送迎バス車庫などの映像を一元管理。園長や本部が複数園を管理する場合にも対応しやすい構造。 **［スマホ・タブレットで即時確認］**

	・外出先の園長や本部スタッフがスマホ・タブレットから園内の様子をリアルタイムで確認でき、緊急時の意思決定や職員指示が迅速に行える。 **［既存カメラ資産の活用・段階導入が可能］** ・i-PRO や Panasonic ブランドの多数のカメラに対応しているため、既存の防犯カメラを流用した段階的導入がしやすい。 **［クラウド録画で記録を残せる］** ・録画データをクラウドに保存し、PC やスマホから簡単に再生・切り出しができるため、事故・ヒヤリハット・指導場面の振り返りや研修に活用できる。
期待される効果	・**保育士の安心感向上**：園内や園庭の様子を複数の目で見守れるため、職員が目の届きにくいエリアにいても安心できる。 ・**保護者への説明責任に活用**：トラブルやヒヤリハットが起きた場合、映像記録を根拠として説明でき、保護者との信頼関係を強化。 ・**送迎バス・駐車場の安全管理**：玄関や送迎バス車庫などを監視し、園児の乗降・不審者対策・車両事故防止にも活用できる。 ・**園内研修・職員教育に活用**：録画データを用いて職員間で保育の振り返り・改善・新人指導に使え、保育の質向上につながる。 ・**本部・複数園統括管理の効率化**：複数園運営法人が一つのポータルから映像・録画を確認できるため、本部の安全管理・監査・サポートが効率化。 ・**設備コスト・管理コスト削減**：レコーダーなどの設置・メンテナンスが不要でクラウド完結型のため、設備投資や保守費用が抑えられる。
価格	基本サービス：月額 980 円（税抜）～ 録画機能オプション：月額 500 円～
導入事例	**①野の花保育園様（さいたま市緑区）** 導入のポイント：保育室ごとにカメラを設置し、園全体の現場状況を正確に把握したかった。 スタッフ研修用に、日常の保育映像を録画し振り返りに使いたいという意図があった。 園長が現場にいないことがあるため、スマートフォンから園の様子をいつでも確認できるようにしたかった。 導入後の効果・成果：保育士研修に録画映像を活用：園児が帰った後、スタッフ全員で録画を見ながら「良かった点」「改善すべき点」を振り返っている。映像をもとにした指導で、公平な評価・納得感が得られている。 トラブル・ケンカ時の原因把握：目視ではわからなかった事象（どちらが先に手を出したか、状況の流れ）が録画から確認可能になり、事後対応・対策がしやすくなった。 行動パターンの把握：子どもの日常行動パターンがわかるようになり、「おもちゃの取り合いが起こりやすい子」など傾向把握ができ、トラブル発生前予防に役立て始めている。

事例情報 6　ビーコン

機器名称	ビーコン
開発企業名	株式会社 ACCESS
参照 URL	https://linkit.access-company.com/hoiku/
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**園児位置の可視化**：園児に装着したビーコン（Bluetooth 発信器）の電波を受信し、園内マップ上に現在位置を表示 ・**異常時アラート通知**：ビーコン信号が届かない（見失う・抜け出す）状態を検知し、アラートで通知 ・**行動記録・履歴管理**：園児の滞在場所や移動履歴をデータ化し、記録・分析が可能 ・**小型・防水仕様**：キーホルダー型・名札型の小型軽量設計で、防水仕様により日常利用が可能 ・**リアルタイム監視＋異常通知**：通常時は位置把握、異常時は即時通知で組み合わせ運用ができる
特徴	**［リアルタイムマップで園児を「見える化」］** ・ビーコン信号を地図表示し、保育者が園児の現在位置を即座に把握できる視覚化機能がある。 **［見失いや抜け出しを即時通知］** ・ビーコンの電波が切れたり届かなくなると、異常アラートを送ることで、園児が施設内から抜け出したり見失われるリスクを低減できる。  

	［行動パターン解析による環境改善支援］ ・滞在場所・移動履歴のデータを分析して、子どもの動線や遊び場利用傾向を把握し、安全対策・配置改善に活用できる。 **［微小・軽量設計で負担最小化］** ・ビーコン本体は名札と同程度のサイズ・重さで、防水仕様もあり、誤飲・装着ストレスを抑える設計。 **［導入の手軽さ］** ・ビーコンを園児に装着するだけで運用可能で、複雑な設置作業や配線工事を必要としない点が園導入時のハードルを下げる。
期待される効果	・**園児安全管理の強化**：見失い・抜け出しリスクを軽減し、迅速な対応体制を確立 ・**職員の負担軽減**：目視や巡回に依存していた安全確認の手間を削減 ・**環境改善への知見提供**：子どもの動線データから園内の安全設計や配置改善に役立つ ・**事故・トラブル対応力向上**：位置記録を根拠資料として保護者説明や再発防止策に活用可能 ・**保護者への安心提供**：ICT を用いた安全管理体制が、園の信頼性・安心感を高める要素となる
価格	初期費用 70,000 円（税抜、税込 77,000 円） 別途ビーコンやゲートウェイなどのハードウェア購入・キッティング費用が必要 月額利用料は 60,000 円（税抜、税込 66,000 円）～ 標準プランでは 50 名程度まで対応可能 契約は半年単位が基本で、50 名を超える場合や特殊構成の場合は別途見積もり対応
導入事例	事例掲載なし

事例情報７　送迎バス置き去り防止システム

機器名称	送迎バス置き去り防止システム
開発企業名	株式会社 ProjectOne
参照 URL	https://project-one.co.jp/business/shuttle_bus/
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**降車確認サポート**：バス車内に設置したセンサーと確認用ボタンにより、運転手・添乗員が降車確認を実施 ・**警報装置**：確認作業が行われない場合、警報が鳴り置き去りを防止 ・**位置情報共有**：園管理端末や保護者アプリで、バスの走行位置・停車状況をリアルタイム表示 ・**到着通知・通過情報送信**：バス停通過や到着を自動で通知し、保護者や園職員に共有
特徴	**［多重安全チェックによる置き去り防止］** ・センサー・確認ボタン・警報システムの三段階で園児の置き去りを防ぐ仕組みを搭載。運転手や添乗員のヒューマンエラーを ICT で補完し、見落としを限りなく減らす。特に複数園児が乗降する時間帯や帰りの薄暗い時間帯など、リスクの高い状況で効果を発揮する。 **［リアルタイム位置情報共有と到着通知］** ・園・保護者がバスの位置や停車状況をスマートフォンや管理端末でリアルタイムに確認できる。保護者は送迎計画を立てやすくなり、待ち時間や問い合わせ対応が減少。園側も運行状況を即座に把握でき、引き継ぎ・緊急時対応が迅速化する。   **［既存車両への後付け対応］** ・新車購入を必要とせず、既存の園バスに後付けできる設計。初期費用や導入工期の負担が軽く、複数台・複数園への一斉導入が容易。園の規模・台数に合わせた柔軟なプランが選べる。

	［保護者・地域への安心感と信頼獲得］ ・「センサーで見守っている」という可視化された安全対策により、保護者や地域社会に対して園の安全意識をアピールできる。安心感・信頼感が高まり、園のブランド力・入園希望者増にもつながる。 **［保育 ICT との連携によるデータ一元化］** ・登降園管理システムや園児台帳と連携し、バス乗降記録や保護者通知を自動化。安全管理だけでなく園務全体の効率化・データ整合性向上にも寄与する。 **［職員負担軽減と安全文化の定着］** ・運転手・添乗員の作業が明文化され、確認手順が標準化されることで職員の心理的負担が軽減。安全装置の導入が「園全体の安全文化」を醸成し、職員間の意識統一や研修のしやすさにもつながる。
期待される効果	・**置き去り事故・ヒヤリハットの防止：**安心感向上 ・**バス運行情報の可視化：**問い合わせ・電話対応の削減 ・**送迎計画や園内引き継ぎの迅速化：**職員が子どもに向き合う時間を確保
価格	初期費用・月額費用とも要問い合わせ（車両数・オプションにより異なる）
導入事例	**ろりぽっぷ幼稚園（宮城県仙台市）** ・ヒューマンエラーの軽減：バス降車時の見落としが、センサーによる検知機能によって補完されるため、置き去り事故の防止能力が飛躍的に向上。夜間や帰りの暗い時間帯、複数子どもの乗降が重なる時間帯など見落としリスクの高い状況で特に有効。 ・保護者の安心感・信頼獲得：親御さんが「センサーで見守りがある」ことを知ることで、送迎に関する不安が軽減。園が安全を追求していることのアピールにもつながる。 ・園の防災・安全文化向上：安全装置を導入することで園の安全・見守り体制のレベルが上がる。運転手・添乗員を含む職員にとっても、安全確認の手順が明文化されるなど管理体制の強化につながる。 ・事務コスト・問い合わせの削減：到着確認・降車状況の問い合わせなど、保護者からの電話等の頻度が減る。バス運行に関する不安点の共有の手間が省け、対応ミスも減少する。 ・導入のしやすさ：既存のバス車両に後付け可能な装置であるため、車両買い替えなど大きな設備投資を伴わずに導入できる。複数台導入していることから、スケールメリットも期待できる。

事例情報８　りりーふなっぷ　びーこんうぉっち

機器名称	りりーふなっぷ　びーこんうぉっち
開発企業名	株式会社　ワイイーシーソリューションズ
参照 URL	https://www.yec.ne.jp/product/beaconwatch
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**乗降自動記録**：通園バスの乗車・降車をビーコンまたは QR コードで自動記録 ・**人数確認機能**：乗車人数・降車人数をアプリで確認、降車忘れや乗せ忘れを防止 ・**保護者通知機能**：子どもの乗車・降車をリアルタイムで保護者アプリに通知 ・**ビーコン電波発信**：園児が装着するビーコンが Bluetooth 信号を発信 ・**ソーラーパネル搭載ビーコン**：電池交換不要仕様で維持コストを削減 ・**防水仕様・小型設計**：500 円玉サイズで屋外利用に対応 ・**簡易セットアップ**：工事不要、アプリ起動のみで運用開始可能 ・**連携機能**：園支援システムや「バスキャッチ」と連携し名簿データを自動反映 ・**QR コード代替モード**：ビーコン未所持や忘れた場合に QR コードで代替可能
特徴	**［自動・目視の二重チェック支援型設計］** ・乗降記録をアプリに自動で反映でき、目視確認だけでは見落としがちな降車忘れ・乗車漏れを補助する体制を実現できる。 **［ビーコン＋QR 併用運用が可能］** ・通常はビーコンを用いるが、ビーコンを忘れた・導入できない場合には QR コードでの記録に切り替え可能。柔軟性の高い運用が可能。   **［ソーラーパネル搭載・電池不要構造］** ・ビーコンにソーラーパネルを備えることで電池交換を不要とし、維持運用の手間を減少させる仕様。 **［障害の少ない簡便導入設計］**

	・配線や工事を伴わず、機器設置だけで始められるため、園の初期導入ハードルを下げられる。 **［通知機能による安心提供］** ・乗車／降車を保護者にも通知する機能で、保護者にリアルタイムな安心を提供できる。 **［既存システムとの連携力］** ・バスキャッチなどの既存園支援システムとデータ連携でき、名簿更新や乗降データの転記作業を省力化できる。
期待される効果	・**置き去り・乗車漏れ防止**：通園バスでの降車忘れや乗車漏れといったリスクを軽減し、子どもの安全性を高める。 ・**保護者への安心感向上**：通知機能により保護者が安心でき、園全体の信頼性を強化できる。 ・**安全対策の強化**：目視確認と自動記録を組み合わせることで、多重チェックによる安全性を確保する。 ・**業務効率化**：記録作業の自動化により職員の事務負担を軽減し、子どもと向き合う時間を確保できる。 ・**導入ハードルの低さ**：コストを抑えつつ段階的に安全対策を始めやすい仕組み。 ・**既存システムとの連携**：バスキャッチなどの園支援システムとデータ連携することで、運営効率を最適化できる。
価格	初期設定費用・工事費は不要 利用者数に応じて月額利用料が異なる
導入事例	**①横浜中央学園 ゆたか幼稚園（神奈川県横浜市）** 導入の背景・目的：通園バスの安全対策を強化したいという園の方針のもと、従来設置していたバス安全ブザーだけでは不十分と感じ、置き去り防止と乗降確認ができる高機能ツールを模索。 保護者にも安心感を与えたいとの意向があり、乗降通知機能があるシステムが導入検討の条件となっていた。 園全体で ICT 化を推進しており、バス運行情報との連携など、既存システムとの統合性も重視された。 導入後の効果・成果： 職員の安全対策意識が向上。バス内での安全確認が日常化し、責任感・注意力が高まった。 保護者からは「安心して送り迎えできる」との好評を得ており、園への信頼性が高まったとの声。 「びーこんうぉっち」と「バスキャッチ」のデータ連携により、乗降記録や運行情報を一元管理できるようになり、複数システム利用の手間が軽減。

事例情報 9　ココール

機器名称	ココール
開発企業名	株式会社コアテックシステム
参照 URL	https://cepinc.jp/chumon/school_bus/cocall.html
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**降車時確認機能**：エンジン停止時にメロディが鳴り、車両後部のボタンを押さないと音が止まらない仕組み。未確認の場合は警報（ホーン）を発する。 ・**自動検知機能**：車内に子どもが残っているとマットやセンサーが感知し、ホーン・信号音で警告。エンジン停止後に作動。 ・**併用機能**：降車時確認＋自動検知の両方を搭載したモデル。 ・**警報・通知機能**：車内での異常検知時に音で警告。オプションで無線通知装置による外部通知も可能。 ・**履歴記録機能**：装置の点検・警報履歴を日時付きで内部記録。
特徴	**［国のガイドライン準拠・認定済み］** ・内閣府が定める「送迎用バスの置き去り防止装置」に認定されており、国土交通省のガイドラインに適合した形式（降車時確認式・自動検知式・併用式）をすべて網羅。補助金の対象となる機器であり、行政指導や監査においても信頼性が高い。 **［多様な車種に対応］** ・幼稚園や保育園の送迎バス（マイクロバス、ワゴン車、コースター、ハイエースなど）に幅広く設置可能。車両構造に合わせてマットやボタンの配置を調整できるため、既存車両への後付け導入が容易。   **［電圧対応（12V/24V 両対応）］** ・一般的な小型車両から中大型バスまで、電圧仕様に応じたモデルを選択できる。異なる園や事業者でも統一的に導入できる点が大きな強み。 **［二重チェック機能（併用式）］** ・降車時確認＋自動検知の両方を組み合わせたモデルは、人的ミスを補う形でダブルチェックが可能。例えば「職員が後部ボタンを押し忘れた場合」、自動検知で園児を感知して警報を出すためリスクが最小化される。 **［警報の多段階設計］**

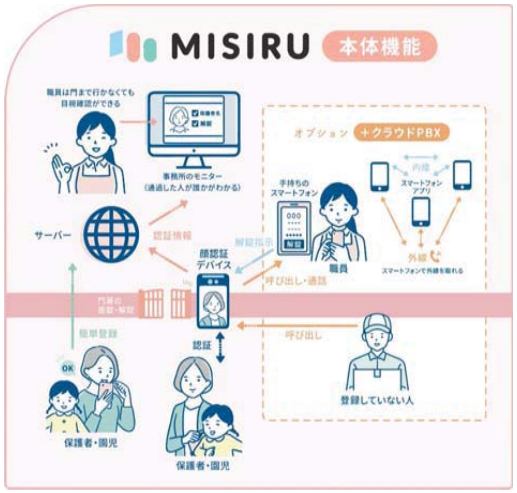
	・降車時確認式では、エンジン停止後すぐにメロディ音を鳴らし、運転手や職員に後部確認を促す。 ・一定時間（例：8 分）後も操作がない場合、ホーンを鳴らすなど強制的に注意を喚起する。 ・自動検知式では「マット感知」「SOS ボタン」などで即時に警報を発する。   **［履歴記録機能］** ・警報が作動した日時、点検実施状況を内部に記録。 ・点検履歴が「証跡」として残るため、管理者が確認でき、万一の事故時にも責任の所在を明確にできる。 ・定期的な安全点検や報告業務にも活用可能。
期待される効果	・**置き去り事故防止**：車内での子どもの置き去りを防止し、重大事故を未然に防ぐ。 ・**安全確認意識の向上**：運転手・職員に対し、安全確認の習慣づけを促す。 ・**安心感の提供**：施設や事業者が導入することで、保護者や地域社会に安心を提供。 ・**法令遵守の支援**：国のガイドラインや行政指導への対応を後押し。 ・**安全管理強化**：点検履歴による記録の証跡化で、事故時対応・監査時の信頼性を高める。
価格	併用式 12V：70,400 円 併用式 24V：81,400 円 降車時確認式 12V：60,500 円 降車時確認式 24V：71,500 円 自動検知式 12V：70,400 円 自動検知式 24V：81,400 円
導入事例	事例掲載なし

事例情報 10　cocolin

機器名称	cocolin
開発企業名	株式会社キムラタン
参照 URL	https://coco-lin.jp/user_voice_cat/case_studies/
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	**・体勢変化・異常検知**：午睡中の姿勢や体動をセンサー・IoT で検知 **・複数園児同時監視**：1 台で複数園児を同時にモニタリング可能 **・アラート通知**：異常時に保育士へ即時通知を送信 **・記録・履歴保存**：見守り状況を自動保存し、後から振り返り可能 **・管理画面**：リアルタイムで園児の状態を確認できる画面を提供
特徴	**［IoT を活用した“非接触型見守り”］** ・園児にセンサーを装着する必要がなく、寝具や衣服を選ばず導入できるため、衛生面や違和感が少なく、子どもの自然な行動を妨げない。  **［午睡時安全管理に特化］** ・乳幼児の突然死・窒息リスクを軽減するため、寝姿勢・体動・呼吸の変化などを継続的に監視し、異常を早期に検知してアラートを出す設計。 **［複数園児の同時監視］** ・一台で複数の園児を同時にモニター可能なため、保育士一人あたりの見守り負荷を大幅に軽減できる。 **［データ活用・記録性］** ・午睡中の状態が自動で記録・蓄積され、日報や保護者への報告、園内研修・安全対策の振り返り資料として活用できる。 **［保育士の業務効率化］** ・AI・IoT が補助的な“第二の目”として働き、保育士は遊びや観察・記録など他の重要業務に時間を割けるようになる。

	［保護者との信頼構築］ ・“見えない時間”を IoT が補助することで、保護者に園の安全管理体制を説明しやすくなり、安心感・信頼感を高めることができる。 **［豊富な導入実績・信頼性］** ・全国の保育園・こども園・小規模園など多様な施設で導入されており、実証・改善を重ねているため、安定した運用ノウハウがある。 **［将来拡張性］** ・午睡時見守りだけでなく、日中活動時の体調変化・園内行動解析など、追加機能や他システムとの連携にも対応できる設計が進められている。
期待される効果	**・保育士の負担軽減**：見守りを補助することで、子どもと関わる時間を確保 **・安全性向上**：異常体勢や行動を早期に検知し対応できる **・保護者への安心感**：見守り体制の強化が保護者への説明や信頼感につながる **・記録の効率化**：午睡時のデータが自動記録され、報告・振り返りに活用可能
価格	要問い合わせ
導入事例	**①ユニバースナーサリー蒲田園（東京都大田区）** 導入目的 / 導入前の課題：以前使用していた午睡センサーは、保育情報管理システム（コドモン）との連携がなく、タブレットが分離していたり、午睡時間を手入力するなど作業が多かった。 手入力の手間、ダブルワーク、操作の煩雑さを軽減したいというニーズがあった。 導入後の効果：午睡チェックの漏れがなくなり、職員全員が高い意識で見守り体制を維持できるようになった。 タブレット一つで操作・管理でき、使い方がわかりやすく、園全体で理解・運用できているとの評価。 保護者対応時にも、導入理由や安全対策を説明することで「安心できる」との声を多数得ており、導入の価値を感じている。

事例情報 11　MISIRU

機器名称	MISIRU
開発企業名	株式会社 創功エンジニアリング
参照 URL	https://fc-soko.com/
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**顔認証 AI システム**：認証済みの顔情報により門扉を自動解錠 ・**モニター連動**：顔認証リーダーと園内事務所モニターを連携し、登園者の顔・名前をリアルタイム表示 ・**クラウド型顔情報管理**：保護者がスマートフォンで登録、園側は承認のみで運用可能 ・**クラウド PBX 連携**：門扉解錠・来客対応などを端末から制御可能
特徴	**［門扉解錠の自動化］** ・保護者の顔を認証することで、認証された顔に対して電気錠を解錠する仕組み。登園時の手動対応を削減。 **［訪問者・保護者の確認強化］** ・顔認証リーダーとモニターを連動させ、事務所で誰が来たかをリアルタイムに確認可能。  **［なりすまし防止］** ・登録された顔情報しか解錠できないため、入園証偽造等による不正アクセスを防止できる。 **［簡易な登録プロセス］**

	・保護者がスマートフォンから自ら顔情報を登録でき、園側は承認操作のみという登録方式により導入負荷を軽減。 **［補助金活用可能性］** ・幼稚園・認定こども園を対象とした園務改善向け ICT 化支援補助金の対象事業との位置付け。導入コストの一部を補助金で賄える可能性がある。
期待される効果	・**受付・門扉対応業務の軽減**：保護者対応・鍵操作など手動での対応を削減 ・**セキュリティ向上**：なりすましや証明書偽造による不正入園リスクを削減 ・**保育士・職員の業務効率化**：受付対応時間を他業務に回せる ・**利用者（保護者等）の安心感向上**：顔認証等による安全管理体制を示せることで信頼性が高まる
価格	要問い合わせ
導入事例	**①西宮市 私立 H 幼稚園（兵庫県西宮市）** 導入前の課題：登園のピーク時に、解錠作業を百数十件こなす必要があり、モバイルインターホンを手放せない状態だった。 手動での門扉解錠対応に時間と職員の手が取られ、人が必要な業務に十分な時間を割けなかった。 導入後の効果：窓口業務が 80%減少し、職員が人の手が必要な業務に集中できるようになった。 モバイルインターホンに張り付く必要がなくなり、解錠業務から解放された。 人の手が必要な業務に集中して丁寧に行うことができるので本当に助かっている

事例情報 12　すやすやうぉっち

機器名称	すやすやうぉっち
開発企業名	株式会社シンクチューブ
参照 URL	https://www.thinktube.com/products/suyasuya-watch/
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**体動・呼吸モニタリング**：胸部の体動や呼吸を監視し、異常を検知するとアラート通知 ・**体勢検知**：うつぶせ寝・横向き寝を識別し、危険時には注意喚起を実施 ・**映像・画像記録**：午睡の様子を映像・画像として保存し、後から確認・振り返りが可能 ・**多人数同時モニタリング**：カメラ 1 台で最大 8 名の園児を同時に監視 ・**オフライン稼働**：小型 PC＋Web カメラ＋タブレットで構成され、本体に無線 LAN アクセスポイントを内蔵。インターネット接続が不要で安定稼働可能
特徴	**［完全非接触・センサー不要］** ・マットや衣服型センサーを装着しないため、衛生的で園児の自然な寝姿を妨げず、導入・片付けが容易。 **［多人数同時モニタリング］** ・1 台で最大 8 名の園児を同時監視できるため、小規模園～中規模園でコスト効率が高い。 **［高精度 AI 解析］** ・独自の AI が体動・呼吸・姿勢をリアルタイムに解析し、危険体勢を早期検知。従来のセンサーでは難しかった呼吸異常や微細な動きの変化も把握できるように設計。 **［オフライン動作可能］** ・本体に無線 LAN アクセスポイント機能を内蔵しており、インターネット接続が不要。通信環境が不安定な施設でも安心して使える。  **［セットアップ・片付けが簡単］**

	・設置準備は約 2 分、片付けは 30 秒程度で完了。行事や部屋移動など柔軟な運用が可能。 **［記録・振り返りに強い］** ・午睡の様子を画像・動画として記録し、後から確認・分析ができる。保護者への説明資料としても活用可能。 **［現場での実証・改良］** ・保育園や子ども施設での実証実験を経て開発されており、現場の声を取り入れた UI／機能構成になっている。 **［安心安全を“見える化”］** ・午睡チェックの状況や履歴をデータで可視化できるため、第三者への説明責任・監査対応などにも活用しやすい。 **［省スペース・多用途展開］** ・小型の機器構成で部屋を選ばず設置でき、園行事や一時保育・病児保育など多様なシーンに応用可能。
期待される効果	・**午睡チェック補助**：AI による監視補助で保育士の午睡確認業務を軽減 ・**異常体勢早期発見**：うつぶせ寝など危険な体勢を早期に把握し、迅速に対応可能 ・**安心感の提供**：高精度モニタリングにより見守りの質が向上し、保育士・保護者双方に安心感を提供 ・**記録活用**：午睡時のデータを保存し、振り返りや改善、保護者説明・監査対応に活用可能
価格	要問い合わせ
導入事例	事例記載なし

事例情報 13　見守りロボット

機器名称	見守りロボット
開発企業名	
参照 URL	https://www.hoikuplus.com/post/usefulnurtureinfo/2543
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**睡眠時モニタリング**：布団下などに取り付けられたセンサーで園児の心拍・呼吸をモニタし、うつ伏せ寝を検知して保育士に通知 ・**体温測定／サーモグラフィ利用**：内蔵サーモグラフィにより園児の体温をモニタリングする機能を持つロボット例あり（ロボット「VIVO」） ・**識別機能（キーホルダー識別）**：園児または保護者が所持するキーホルダーで個別識別を行う方式を用いた事例（VIVO） ・**自動撮影・顔認識・表情認識**：写真撮影機能、自動顔検知・表情認識機能をもつロボット「MEEBO」例あり ・**写真データ整理・仕分け**：撮影された写真を自動分類・整理し、保育士の手作業を削減する機能（AI を使った分類） ・**その他補助業務機能**：記事では、保育園業務の中で、見守りロボットとは別に、「園内写真業務の全自動化」など AI 系システムとの連携例が紹介されている。
特徴	**［事故予防へのフォーカス］** ・特に乳児の睡眠中うつ伏せ状態による窒息事故が保育現場でのリスク要因となっており、見守りロボットはそこに着目して、睡眠中の異常（心拍低下・うつ伏せ検知等）を通知することで安全性を高めようとしている。 **［保育士の負荷軽減］** ・目視で確認するしかなかった睡眠チェックなどをセンサー・ロボットが補助することで、保育士の業務負荷（夜間チェック・巡回など）を軽減する役割を担うことが期待されている。  **［保育業務のデジタル化・自動化との親和性］** ・見守りロボットが持つセンサー・撮影機能を活用しつつ、写真整理やデータ処理を AI システムと連携させる事例が紹介されており、“見守り＋業務支援”という複合的用途を志向している点。 **［親しみやすいデザイン性］**

	・ロボット「VIVO」は高さ約 70cm、くまのような親しみやすいデザインを採用した例として紹介されている。子どもにとって違和感を抑える意匠設計が考慮されている。 **［識別精度・個別対応性］** ・識別機能（キーホルダーなど）を使って個々の園児を区別できる点が挙げられており、一律対応ではなく個別対応を可能にする方向性。 **［補助的位置付け］** ・記事中では、これら見守りロボットはあくまで「保育士の補助的役割」であり、ロボット自身がすべてを処理するものではない、という前提が示されている。
期待される効果	・**睡眠中の事故予防**：うつ伏せ寝や低呼吸などの異常を早期に検知し、保育士が迅速に介入できる体制を支援。 ・**保育士の業務負荷軽減**：巡回・定期チェックなどの負担を軽減し、観察や子どもとの関わりに集中できるようにする。 ・**見守り精度の向上**：心拍や呼吸動態など、人の目視では難しい細かな変化をセンシングし、異常検知の精度を高める。 ・**保護者への安心感と信頼性向上**：ロボットによる見守り体制を示すことで、保護者に安全性への配慮を可視化し、信頼を強化。 ・**データ活用による改善支援**：収集したセンサーデータを蓄積・分析し、園児の睡眠傾向やリスク予測モデルの構築につなげる。
価格	非公開（Web 掲載なし、要問い合わせ）
導入事例	事例記載なし

事例情報 14　アジラ

機器名称	アジラ
開発企業名	株式会社ハイフライヤーズ
参照 URL	https://digital-shift.jp/flash_news/FN240611_3
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	・**行動認識 AI 検知**：カメラ映像に映る人物の行動を AI で自動検知 ・**姿勢推定技術**：骨格推定を用いて行動変化を高精度に把握 ・**危険行動検知**：転倒、ケンカ、ふらつき、違和感行動などを特定 ・**リアルタイム処理**：オンプレミスで即時解析し、遅延を最小化 ・**通知・アラート機能**：異常を検知すると警告を送信
特徴	**［高度な行動認識技術］** ・人物の骨格推定（姿勢推定 AI）を活用し、通常の映像解析では検知が難しい「ふらつき」「転倒」「殴る・押す」などの具体的な行動を判別できる。従来の“動体検知”に比べ精度が高く、行動の意味づけが可能。 **［リアルタイム処理性能］** ・映像をクラウドに送信して分析する方式と異なり、オンプレミス（施設内端末）で処理する仕組みを採用。これにより遅延を数百ミリ秒に抑え、転倒などの緊急事態に即応できる。クラウド通信環境に依存しにくい点も安心材料。  **［既設カメラの活用可能性］** ・新規カメラを大量導入しなくても、既存の監視カメラと組み合わせて運用できる場合があり、導入コストを抑えられる。AI 解析ユニットを追加するだけで高度な検知が可能。 **［保育園特化の設計思想］** ・防犯・警備分野で実績のある技術を応用し、保育現場で想定される「子どものふらつきやケンカ、転倒、危険な行動」を重点的に学習させている。乳幼児の行動特性を考慮したアルゴリズムに調整済み。 **［検知内容のアラート化・通知機能］** ・異常を検知すると即座にアラートを発報。園内の端末や管理者用アプリに通知されるため、保育士は「常に映像を見張る」必要がなくなり、子どもと向き合う時間を確保できる。

	［ヒューマンエラー補完］ ・保育士の疲労や人数不足などによる見逃しを AI が補助。人的監視と AI 併用により、安全管理の二重チェック体制を実現。 **［多様な応用可能性］** ・保育園のみならず、介護施設・学校・商業施設などでも活用できる。暴力行為や転倒事故の検知は高齢者施設や公共空間でも有効であり、幅広い展開が期待される。
期待される効果	・**事故予防と安全性向上**：転倒やケガ、ケンカなどの危険行動を AI が即時検知し、事故を未然に防止。 ・**保育士の負担軽減**：常時映像を注視する必要がなくなり、子どもとの関わりに集中できる環境を実現。 ・**保護者・関係者への安心提供**：高度な AI 見守り体制を示すことで、安全性に対する信頼感を高める。 ・**ヒューマンエラーの補完**：疲労や人員不足による見逃しを AI がカバーし、二重チェック体制を形成。 ・**施設全体のリスク低減**：安全管理を強化することで、事故・トラブル発生時のリスクや責任を最小限に抑える。
価格	非公開（Web 掲載なし、要問い合わせ）
導入事例	・千葉県内の認可保育園 11 園を運営するハイフライヤーズが、保育現場での実証テストを実施中（2024 年 6 月より） ・実証実験概要：キートスチャイルドケア桜木（4〜5 歳児室にカメラ 1 台設置） ・役割分担：キヤノンシステムアンドサポートがアジラ提供、ハイフライヤーズが実地運用と説明対応を担当 ・今後の拡張可能性：他の保育施設への横展開、異なる環境（学校、福祉施設など）での応用可能性

事例情報 15　CANCHI

機器名称	CANCHI
開発企業名	Zenken 株式会社
参照 URL	https://www.ai-camera-canchi.net/ai-cam-case-study/nursery-school.html
保育業務カテゴリ	見守り・健康・安全管理
機能	**・昼寝時体勢識別**：仰向け・横向き・うつぶせなどを AI で自動識別 **・うつぶせ警告**：一定時間続くとうつぶせ状態をアラート通知 **・複数児童同時見守り**：1 台で複数園児を同時にモニタリング可能 **・映像管理・共有**：録画・選別・共有機能で保護者へ情報提供 **・AI カメラによる非接触見守り**：センサー装着不要、衛生的に運用
特徴	**［非接触・非装着で見守り可能］** ・マットや衣服にセンサーを装着する従来型と異なり、カメラのみで園児を認識する。装着の手間や衛生管理、子どもの違和感を最小限にできる。 **［昼寝時のリスク管理に特化］** ・乳幼児の突然死や窒息などのリスクを軽減するため、体勢（仰向け・横向き・うつぶせ等）を AI が常時認識し、うつぶせ状態が一定時間続くと即時通知する。 **［複数児童同時モニタリング］** ・1 台で 10 人前後など複数の園児を同時に監視できる仕様で、大人数を抱える園でも効率的な見守りが可能。 **［リアルタイム警告・迅速対応］** ・異常姿勢が検知された際に即座にアラートを出し、保育士がすぐに対応できるため、リスク回避までの時間を短縮する。 

	［映像選別・共有による保護者安心感］ ・自動で撮影・選別した映像を保護者に提供する仕組みがあり、園での子どもの様子を視覚的に伝えることで、保護者の安心感を高める。 **［業務効率化支援］** ・AI カメラが見守りを補助することで、保育士は他業務（記録、保護者対応、遊びの観察など）に時間を割けるようになり、働き方改革にも寄与する。 **［導入しやすい設計］** ・設置場所を選びにくいコンパクト設計、既存の保育室にも後付けしやすい構造。日常的な操作もシンプルで、IT に不慣れな職員でも使いやすい。 **［今後の拡張性］** ・睡眠時だけでなく、活動時の行動解析や健康状態モニタリングなど、追加機能の拡張が見込めるプラットフォームとして開発が進められている。
期待される効果	**・子どもの主体性向上**：遊び感覚でプログラミングに取り組むことで、試行錯誤を通じた主体的学びを促進 **・論理的思考力の醸成**：順序・条件・並列処理などを扱う経験を通じて、プログラミング的思考を自然に習得 **・業務負担の軽減**：登降園管理や午睡チェックなどの記録業務を自動化し、保育士の負担を削減
価格	要問い合わせ
導入事例	**①保育園（名称非公開）** 導入目的・背景：昼寝時間帯に園児が うつぶせ寝 に陥るリスクがあり、保育士が常に目を配ることが難しい時間帯での見守り体制強化が求められていた。 従来の方法で使われていたセンサー付きマットや衣服型センサーには、装着・管理の手間や故障リスクがあった。 保護者に園での子どもの様子（睡眠の様子など）を安心して見せたいというニーズもあった。 導入後の効果：保育士の見守り負荷が軽減し、他の業務や子どもの観察・支援に時間を割けるようになった。 昼寝時の安全性が向上し、うつぶせ寝などリスクある体勢を早期に検知できるようになった。 保護者に対して、園での様子を映像で伝えることができ、安心感が得られるようになった。

事例情報 16　ジョリーグッド

機器名称	ジョリーグッド
開発企業名	Hoikutech
参照 URL	https://hoikutech.com/nursery-room-simulator/
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**仮想保育室構築**：CG による保育室の再現 ・**介入シミュレーション**：保育士が「いつ介入するか」を体験的に学習 ・**VR 再現**：現場の状況や子どもの行動を VR 体験で再現 ・**教材機能**：研修・教育・採用の教材として活用可能 ・**園見学モード**：遠隔から保育体験・園見学を実施
特徴	**［実在園を 360° 再現］** ・映像と CG でリアルな保育現場を体感可能 **［判断力・観察力の訓練］** ・子どもの行動や状況が段階的に変化し、それに対して保育士がいつ・どのように介入するかを VR 内で体験しながら練習できる。介入タイミングの違いを記録・分析して自己評価も可能。 **［研修・教育・採用で活用可能］** ・新任・学生向けの保育士教育、現職者のスキルアップ研修、保育士採用時の適性評価など、幅広い場面に使える汎用性がある。 **［共同研究に基づく信頼性］** ・大学・研究機関と連携し、現場の実証データを反映して開発されているため、学術的裏付けと実践的有用性を兼ね備える。  **［没入感の高い VR 環境］** ・単なる映像教材ではなく、音・動き・空間の中に入り込む没入感を提供し、危険行動の予測やリスク感覚をリアルに養える。 **［時間・場所の制約を超える］**

	・園見学や実習が難しい学生や求職者でも、好きな場所・時間に現場感覚を身につけられる。
期待される効果	・**意思決定スキルの向上**：介入判断力を高め、保育現場での実践力を養う ・**実践的学びの提供**：新人研修や採用で即戦力となる教育を実現 ・**教育効率の向上**：人手不足下でも効果的に研修を進められる ・**教育機会の拡大**：遠隔地からでも現場体験を提供し、学びの機会を広げる
価格	要問い合わせ
導入事例	事例記載なし

事例情報 17　MINO

機器名称	MINO
開発企業名	ナイスモバイル株式会社
参照 URL	https://nicemobile.jp/news/blog-childcare-01/
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**電子表示機能**：PC・タブレット画面、映像（動画・写真・スライド）を投影 ・**タッチ操作**：指・ペンによる書き込み、消去、拡大縮小 ・**注釈機能**：表示中画面に直接線や文字を書き込める ・**ミラーリング・ワイヤレス投影**：端末画面をワイヤレス反映 ・**書画カメラ／実物投影機連携**：教材・工作物を拡大提示 ・**保存・スクリーンショット**：書き込んだ内容を画像保存 ・**教育補助機能**：タイマー・抽選・クイズなど
特徴	**［視覚的訴求力が高い］** ・大画面で映像・写真を映せるため、園児たちの注目を集めやすい。後方の子どもからも見えやすく、教材提示の効果が上がる。 **［双方向性・参加型保育の促進］** ・園児自身が画面に触れて操作したり、書き込みに参加できることで、“見せる”だけでなく“やってみる”保育が可能。意見を書き出したり、話し合いの記録をその場で可視化できる。 **［紙・模造紙作業の削減］** ・掲示物、説明資料などを電子黒板で表示・編集できるため、紙媒体での制作・印刷・貼り出し作業を減らせる。   **［会議・研修・説明会など多用途活用］** ・職員会議、保護者説明会、行事案内などで資料を表示・書き込み可能。参加者とのインタラクティブなやり取りがしやすい。 ・直感的操作性・簡易導入性説明書を読み込まずとも触って使える UI が評価されており、ICT に不慣れな教職員でも導入しやすいという声。 **［視認性・明るさに強い設計］**

	・明るい部屋や自然光が入る環境でも見やすい表示、プロジェクターと比して光量・コントラスト耐性が高いものが選ばれている。 ・園児安全・衛生面対応：抗菌仕様や端末の耐久性、ケーブル露出の少なさなど、子どもが触れる環境での安全配慮がされているモデルも。
期待される効果	・**保育内容の理解度向上**：大画面や動画・実物提示などを使うことで、子どもたちの理解や興味付けがしやすくなる。 ・**集中力・参加意欲の向上**：子どもが画面を見上げて参加する形になり、受動的にならず、能動的な学びを支援。 ・**保育者の負担軽減**：紙教材の作成・印刷・貼り出しといった手間を減らせるほか、変更や修正が簡便に行えるため運用コストも下げられる。 ・**可視化・記録活用**：話し合いや発言過程、投票・意見整理をその場で記録し、後で振り返り資料として活用できる。 ・**保護者との共有強化**：説明会などで園児の活動や教材を電子黒板で見せられるため、保護者理解・信頼性が高まる。
価格	オープン価格（＝定価非公開・見積り対応）
導入事例	**①認定こども園 藤河幼稚園** 導入の背景：小学校での ICT 教育環境整備（GIGA スクール構想など）を視野に入れ、園段階から ICT 化を進めたいという方針。 連携しているミクロ生物館の出前授業で、講師から「電子黒板で資料を投影できる機器が欲しい」という要望を受けたことがきっかけ。 これまでプロジェクターで顕微鏡映像などを見せていたが、映像が鮮明でなかったり、暗くなったりというトラブルがあり、より質の高い提示手段を求めていた。 導入後の効果：顕微鏡とカメラを HDMI 接続し、ミーティングボード上に高画質な映像を表示可能に。細部まで鮮明に子どもたちに見せられるようになった。 投影映像の上にアノテーション（文字・線など書き込み）が可能となり、「この部分をこう見てね」と視覚的誘導がしやすくなった。 顕微鏡映像を大画面で表示し、子どもたちがその動きを観察できるようになり、興味・理解を引き出す効果が期待されている。 ワイヤレスドングルを用いて、映像から資料表示への切り替えをスムーズに実施可能。授業展開が柔軟になった。 保護者向け利用や卒園行事、スライドショー・ライブ中継など、さらに用途を拡げて活用を見据えている。

事例情報 18　BenQ Board

機器名称	BenQ Board
開発企業名	ベンキュー ジャパン株式会社
参照 URL	https://www.benq.com/ja-jp/education/preschool-education.html?srsltid=AfmBOooWWRZY5_aI3ePvYt9pBS-7O4qvaubKz2IJj8cYFtk8cakXKac5
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**ディスプレイ表示**：教材・画像・動画・スライド等を大画面で提示 ・**タッチ操作・書き込み**：ホワイトボード機能で自由に書き込み ・**ワイヤレスミラーリング**：他端末の画面を無線で投影可能 ・**保存・再表示機能**：書き込んだ内容を保存し、後から呼び出し再利用可能 ・**EZWrite ホワイトボードアプリ**搭載 ・**教室環境センサー**：空気質モニタリング、マイナスイオン発生機能（搭載モデル） ・**抗菌仕様・安全設計**：強化ガラススクリーン、ペン・リモコンの抗菌加工 ・**目の保護設計**：ブルーライト軽減（Eyesafe2.0 認証）、ちらつき抑制 ・**防塵性能**：IP5X 相当で埃の多い環境でも安定稼働
特徴	**［目にやさしい設計（Comfort & Eye Care）］** ・電子黒板としては初めて Eyesafe2.0 認証を取得した、ブルーライト軽減・ちらつき抑制など視覚負荷を低減する設計を採用。長時間使用でも目にやさしい。 **［衛生・安全性への配慮］** ・スクリーンや操作部（ペン・リモコン等）を抗菌仕様とし、教育現場での衛生性を確保。さらに強化ガラス採用で耐久性も重視。 **［教室環境モニタリング対応］** ・空気品質センサーやマイナスイオン発生器を搭載モデルがあり、教室環境を感知・改善する機能を持つ。 **［防塵性能］** ・IP5X 相当の防塵機能を備え、ほこり多めな教室環境でも安定利用可能。 

	［直感的操作性・統合機能］ ・他端末とのミラーリング、書き込み・保存・再表示といった機能を一体化。紙・映像・音声を一台で扱えるため、複数機器を併用する必要が薄い。 **［幼児教育対応設計］** ・幼稚園・保育園用に想定された設計要素（安心設計、目への配慮、操作簡便性）を備えており、幼児との対話・探究活動で活用しやすい。  **［業務効率化ツールとして利用可］** ・保育・運営資料・研修等を電子で行うことで、紙印刷・資料準備の手間を削減できる。研修や職員会議の場でも活用可能。
期待される効果	・**集中力・理解度向上**：大画面表示で園児が集中しやすく、どの席からも見やすい ・**能動的学びの促進**：子どもが書き込みや操作に参加でき、対話的な学びを支援 ・**教材準備時間の削減**：画像・動画・音声・書き込みを統合し、効率的な教材提示が可能 ・**多用途利用による投資効果**：保育・研修・会議・保護者説明会など幅広く活用できる ・**ペーパーレス化の推進**：紙資料の印刷削減によるコスト削減と環境負荷軽減 ・**小学校接続期の ICT 基盤整備**：幼保から小学校への移行期における ICT 活用のギャップを縮める効果
価格	問い合わせ
導入事例	**①社会福祉法人 天寿園会 アウル宮前保育園（東京都杉並区）** 導入目的：教材を電子黒板で提示し、子どもたちの一体感を高めたい 探究活動・観察学習を視覚教材と結びつけて展開したい 導入後の効果：大画面表示により、後方の子どもでも教材が見やすくなり、子どもたちが「顔を上げて」BenQ Board を注視するようになった チャイルド学習で、タイマー機能や抽選機能を使って授業にメリハリをつけ、子どもの集中を促進。画面上に書き込み・線引きが簡単にでき、子どもたち自身が板書に参加する機会が増え、主体的な学びの場が拡大。

事例情報 19　えぽん

機器名称	えぽん
開発企業名	マッシュ＆ルーム
参照 URL	https://mashandroom.org/epon-meguri/
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**巡業型イベント提供**：保育園・幼稚園・図書館などを訪問し、デジタル絵本体験を実施 ・**デジタル絵本操作**：子ども自身がページをめくったり音や動きを体感できる ・**読み聞かせ・展示機能**：紙絵本と組み合わせた読み聞かせや体験型イベントを実現 ・**ハイブリッド表現**：紙の絵本にデジタルの音・アニメーションを融合 ・**多様な開催形態**：地域や施設に応じて柔軟に開催可能
特徴	**［子ども主体の“体験する絵本”］** ・視覚・聴覚・触覚を刺激し、能動的に参加できる **［巡業型で ICT 機材不要］** ・園が機器を購入せずとも体験が可能 **［紙＋デジタル融合］** ・温かみと表現力を両立、キッズデザイン賞にも登録  **［参加型・対話］** ・発話・感想・動きを取り込み、探究心や表現力を育む **［多様な施設・地域対応］** ・規模や条件を問わず開催可能 **［安全・安心設計］** ・年齢や発達に合わせた操作性・表現、安全性を考慮 **［文化・教育的価値の両立］** ・単なる“遊び”ではなく、物語体験を通じて言語・想像力・感受性を育むことを目的にしており、教育プログラム・文化体験の一環として導入可能。

	
期待される効果	・**読書意欲の向上**：子どもが自ら参加することで本への関心を高める ・**学びの強化**：音や動きを伴う表現で、視覚・聴覚からの理解を促す ・**格差の解消**：ICT 機器を持たない施設でもデジタル体験が可能 ・**地域連携強化**：イベントを通じて保護者や地域とのつながりを深められる
価格	非公開（web 掲載なし、要問合せ）
導入事例	★保育園での導入事例紹介なし、小学校や養護学校等の紹介あり 活用シーン：訪問指導による個別学習（養護学校） えぽんを使って、訪問指導時の教材として個別の学習支援を実施。子どもが自分のペースで音読をしたり、画面の動きを見たりすることで、アウトプット・参加型の学びを促している。 活用シーン：クリスマス会（養護学校） クリスマス会など学校イベントにおいて、えぽんを使った展示や読み聞かせを実施。子どもたちや保護者・来場者に向けた楽しみのあるプログラムとして組み込まれている。 活用シーン：授業・教室活用（支援学校） 日常授業の中で、えぽんを教材の一部として使い、読み聞かせ・視覚提示・子どもの発話を引き出す手段として活用。特別支援学校の先生方による応用も行われているとの記載あり。

事例情報 20　こどもアプリ　ワオっち！

機器名称	こどもアプリ　ワオっち！
開発企業名	ワオ・コーポレーション
参照 URL	https://waochi.wao.ne.jp/business/category3/002/
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**知育ゲームコンテンツ群：**数・ひらがな・図形・パズル・迷路など幼児期に必要なテーマを網羅したゲームを提供。 ・**直感操作設計**：文字や説明を抑え、直感的に操作できる UI で子どもが自力で使いやすい。 ・**生活習慣支援アプリ「できたよ！ワオっち！」**：歯磨き・片付けなど日常行動を「やること」として登録し、達成でストーリーが進行。 ・**月替りイベント・謎解き・コレクション機能**：継続意欲を引き出すための仕組みを導入。 ・**マルチプラットフォーム対応**：スマホ・タブレットで利用可能。 ・**無料提供**：28 種類の知育ゲームを基本無料で遊べる。
特徴	**［遊び感覚で学べる構成］** ・ゲーム要素・謎解き要素・コレクション要素などを取り入れ、子どもが「遊ぶ」感覚で自然に知識や思考力を育てる設計。 **［低操作ハードル］** ・説明文や文字の操作案内を抑え、視覚的・直感的な操作で使えるようにし、年少児でもストレス少なく使える UI 設計。 **［生活習慣との結びつき支援］** ・知育だけでなく、日常ルーティン（歯磨き・片付けなど）をサポートするアプリラインを展開しており、「できたよ！ワオっち！」など実生活行動も対象に含む。  **［無償提供・アクセス性重視］** ・主要な知育ゲーム部分を基本無料で提供することにより、導入障壁を下げ、幅広い家庭／園で使いやすくしている。 **［強力な普及力・既存実績］** ・シリーズ累計ダウンロード数 1,600 万突破という実績。配信プラットフォームでの評価も高く、信頼性・知名度を持っている。

	
期待される効果	・**遊び感覚で学べる構成**：ゲーム・謎解き・コレクション要素を組み合わせ、楽しみながら知識や思考力を育成。 ・**低操作ハードル**：視覚的・直感的な操作で、年少児でもストレスなく使える UI 設計。 ・**生活習慣定着支援**：歯磨きや片付けなど、生活ルーティンをサポートするアプリも展開。 ・**無償提供でアクセス性向上**：基本無料の設計により導入ハードルを下げ、幅広い利用を可能に。 ・**普及力と実績**：シリーズ累計 1,600 万ダウンロードを突破、知名度と信頼性が高い。
価格	主要知育アプリ部分は 無料提供 ただし、「できたよ！ワオっち！」などの特定機能／サポート機能付きアプリは、詳細な価格仕様が明示なし
導入事例	**①明日葉保育園 様（東京都内・認可保育園）** 導入目的：幼稚園・保育園等への知育コンテンツ提供の一環として「ワオっち！」を導入。園児が日常的に触れられるデジタル知育教材として位置づけ、遊び感覚で文字・数・図形などを学べる環境を整備した。 導入効果：園児が楽しみながら知育コンテンツに親しむことができ、家庭学習と園での学びがつながる形になっている。無料で多様な知育ゲームを提供できるため、コスト負担なく ICT 活用を開始できた点も評価されている。 **②第一葛城学園／桜井学園 様（奈良県内の幼稚園・認定こども園）** 導入目的：iPad を使った「設定保育」の一環として、「ワオっち！」内のプログラミングコンテンツを導入。幼児期から簡単なプログラミング的思考を養うことを狙った実践。 導入効果：園児がタブレット上で動きを作ったり順序を考えたりする活動を通して、考える力・試行錯誤する力を自然に育んでいる。ICT 教材を設定保育に取り入れることで、教員も遊びの延長線上でプログラミングを教えやすくなったとの声がある。

事例情報 21　知育・教育アプリシリーズ「あそんでまなぶ！」

機器名称	知育・教育アプリシリーズ「あそんでまなぶ！」
開発企業名	株式会社ユニティ
参照 URL	https://www.uni-ty.com/for_school/
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**多分野の知育コンテンツ**：計算・文字認識・言語・音感・図形・色認識・立体認識・記憶・分析など、9 分野 50 以上のコンテンツを収録。 ・**直感操作設計**：タップ・なぞる・スワイプなどの簡単操作で利用でき、説明文を最小限に抑えた UI。 ・**発達段階対応**：3 歳〜9 歳向けに設計され、年齢や習熟度に応じて段階的に難易度が変化。 ・**先生用アカウント**：学習履歴・成績を確認できる管理画面を搭載し、個別指導や保護者フィードバックに活用可能。 ・**マルチプラットフォーム対応**：iPad／Android タブレットに加え、Web ブラウザ版でも利用でき、PC や GIGA スクール端末にも対応。 ・**電子黒板連携**：「新学社×あそんでまなぶ！」コンテンツとして、BenQ Board などに投影し集団学習にも活用可能。
特徴	**［9 分野 50 以上の多彩な知育コンテンツ］** ・計算・文字・図形・色・記憶・音感・空間認識・分析など、幼児期に必要な認知・思考の基礎分野を幅広く網羅。ひとつのアプリ内で多分野の学びができるため、教材を個別に揃える手間が不要。  **［発達段階に応じたレベル設計］** ・3 歳から 9 歳までの子どもの発達に合わせて問題が段階的に難しくなる

	よう設計されており、個別の習熟度にあわせたステップアップが可能。 **［視覚的・直感的な操作 UI］** ・タップ・なぞる・スワイプといった簡単な操作だけで進められ、説明文を最小限に抑えているため、文字がまだ読めない年齢の子どもでも自分で操作して取り組める。 **［短時間・反復利用に向く構造］** ・1 回あたり数分〜10 分程度で完結する設計なので、日常保育の隙間時間や“朝の活動・午後の自由遊び”などに組み込みやすい。 **［成績管理・先生用画面を搭載］** ・子どもごとの利用履歴や正答率などを先生用画面で確認でき、苦手分野の把握・個別指導・保護者へのフィードバックに活用できる。 **［複数端末・複数環境に対応］** ・iPad／Android タブレットだけでなく、Web ブラウザ版も用意されているため、GIGA スクール端末や PC など環境を問わず利用可能。 **［電子黒板連携・授業拡張性］** ・新学社との連携コンテンツなど、BenQ Board などの電子黒板に表示して“全員で一緒に遊ぶ・学ぶ”使い方も想定されており、個別学習から集団活動まで幅広く対応できる。 **［継続利用を促すゲーミフィケーション］** ・ステージクリア型・コレクション要素・月替わりイベントなどを備え、子どもの“やりたい”気持ちを維持しやすく設計されている。 **［低コスト・導入ハードルが低い］** ・基本無料のコンテンツを軸に提供しているため、小規模園や試験導入でも始めやすく、段階的に ICT 活用を拡大できる。
期待される効果	・**基礎思考力・認識力の養成**：遊びながら計算・文字・図形などの基礎力を自然に育成。 ・**日常保育に組み込みやすい**：短時間で利用でき、教材準備の手間を抑制。 ・**個別進度の把握・支援**：先生用画面で学習進度を確認し、苦手分野の補助が可能に。 ・**ICT 体験促進**：幼保段階から ICT を活用するきっかけとなり、子どものデジタルリテラシー育成につながる。 ・**授業展開の幅拡大**：電子黒板や授業支援機器と連携して集団学習やイベント学習に展開できる。
価格	タブレットアプリ版：子アカウント 1 人あたり 月額 250 円（税込） 〜人 WEB ブラウザ版：年額プランで、子アカウント 1ID 当たり 3,000 円（税込）× 利用人数／年額 タブレット本体＋プリインストール提供構成（あそんでまなぶ！タブレット）では、初期費用として 14,400 円（税別）〜／台、月額利用料 1,350 円（税別）〜／台
導入事例	施設名は記載あるが、具体的な内容の紹介なし

事例情報 22　ELMO

機器名称	ELMO
開発企業名	株式会社エルモ社
参照 URL	https://www.elmo.co.jp/education/preschool/?utm_source=chatgpt.com
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	［電子黒板「ELMO Board」］ ・**ホワイトボード機能標準装備**：PC やタブレットを起動せずとも、起動直後からボード機能が使える設計。タッチ操作・指操作で書き込みが可能。 ・**教材提示・USB 対応**：フロントアクセスで USB メモリを接続し、Office ファイル等をすぐ提示できる。 ・**書画カメラとの連動**：ELMO の書画カメラと USB ケーブル 1 本で連動でき、実物教材・ノート等を簡単に表示・操作可能。 ・**ミラーリング・双方向機能**：児童・生徒の端末画面を黒板に表示（ミラーリング）する機能、また黒板画面を生徒の画面へ送る機能も備えられているモデルあり。最大 9 画面までの無線投影に対応するモデルも。 ・**授業支援ソフト（xSync Classroom／クラウド版）**：教材配布・ワークシート回収・児童の回答収集・比較表示など指導支援機能を備える。サーバレス設計でデータ送受信を円滑にする仕様。 ・**付加機能**：災害時対応用の TV チューナーや校内放送機能と連携したソリューション（教室への一斉配信等）も提供。 ・**他教材との統合**：プログラミング教材「Scottie Go」など、アナログ／デジタル融合型教材との連携も展開。 ［書画カメラ（実物投影機）］ ・**映写性能**：色再現・拡大縮小・オートフォーカス・スイングアーム機構搭載で教科書や模型物を鮮明に提示可能。 ・**一時停止機能**：動きのある被写体を一時停止させて見せる機能を搭載。観察教材をじっくり見せたい場面で効果的。
特徴	**［誰でも使える操作性重視設計］** ・物理ボタン・日本語表記・消えないボタン設計など、ICT 慣れしていない教員でも扱いやすい配慮が徹底。 **［PC 不要でスタートできる利便性］** ・黒板自体にホワイトボード・ブラウザ機能を備え、端末なしでも授業を始められるモデルあり。 **［教材提示＋板書の一体化］** ・教科書・ノートを映しながら、直接書き込みや注釈を加えられるため、板書と教材提示の切り替えをスムーズにできる。 **［学びの双方向性促進］** ・端末との相互ミラーリング・双方向機能を備えることにより、児童側も操作・参加可能な授業展開が可能。 **［ネットワーク環境適応性］**

	・Wi-Fi 機能やホットスポット機能も備え、ネットワーク整備状況が不十分な環境でも活用しやすい設計。  **［授業支援ソフトとの統合性］** ・教材配布・回収・比較機能などの授業支援機能を内包するソフトとの連携により、ICT 授業の流れを阻害しない運用を目指している。
期待される効果	・**視覚教材＋板書の統合授業**：小学校移行期や年中・年長クラスでも、紙教材・絵本・模型などを映しながら、先生が直接指示・注釈を加えて示す授業スタイルが可能。 ・**教材提示・授業準備時間の短縮**：紙教材をスキャン・提示・切り替え操作を簡易化できるため、準備時間を削減できる。 ・**児童の発言参加・操作参加促進**：児童側端末との連携が可能なモデルでは、子ども自身が画面に触れて発表や操作を行える機会を設けられる。 ・**ハイブリッド／遠隔授業対応**：Web 会議連携機能を活かし、保育園と家庭をつなぐ参観授業・オンライン共有授業の可能性も拓ける。 ・**授業振り返り・共有**：書き込み内容や教材を保存・再提示できるため、授業後の振り返りや他教員との共有に活用できる。
価格	要問い合わせ
導入事例	①学校法人玉虫学園 認定こども園 滝尾幼稚園（熊本県上益城郡） 導入の目的：リモート交流会など、ICT を使った園外との連携をしたいという想いがきっかけ。 導入後の効果：授業準備時間の削減：手元教材・写真をすぐに提示でき、そこに書き込みができるため、教材準備が簡略化され、伝えたい内容を迅速に提示できるようになった。 リモート活用・交流の幅拡大：遠隔授業・交流を行う際にも、距離を越えた連携が可能になった。 多目的利用への展開：授業だけでなく、入園説明会・職員会議・役員会においても、Excel・PowerPoint を直接映しながら書き込み説明が可能。会議議事録作成や説明資料準備の手間が軽減。

事例情報 23　ChiCaRo（チカロ）

機器名称	ChiCaRo（チカロ）
開発企業名	株式会社ＣｈｉＣａＲｏ
参照 URL	https://www.chicaro.co.jp/product-robot
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	**［遠隔操作機能］** ・タブレットやスマートフォンからロボットを操作し、子どもと一緒に遊ぶ・見守ることが可能 **［遊び支援機能］** ・追いかけっこ・かくれんぼ・おままごとなど、体を使った遊びを実施できる **［インタラクション機能］** ・映像・音声通信に加え、ロボットの移動や動作を組み合わせた双方向的なやり取りを実現 **［リモート連携機能］** ・保育士や小児科など専門家と遠隔でつながり、見守りや相談支援に活用可能（今後拡充予定） **［発達支援設計］** ・促育あそびの要素を取り入れ、子どもの情緒・認知・身体発達を促進
特徴	**［遠隔共同子育ての実現］** ・核家族化や地域交流の希薄化により孤立しがちな育児家庭を支えることを目的に開発。祖父母や親族が遠隔地からロボットを介して子どもと関わり、見守り・遊び・声かけなどを行うことで、「そばにいる感覚」を提供する。  **［身体を使った遊びを遠隔で実現］** ・単なる映像・音声通話にとどまらず、ロボット本体を動かして追いかけっこ・かくれんぼ・おままごとなどを一緒に行えるため、子どもの感覚や運動・認知を刺激しやすい。

	 **［安全性とデザイン性］** ・丸みを帯びた倒れにくい筐体設計で、子どもが誤ってぶつかっても怪我しにくく、倒れにくい。衝撃に耐える構造や、コードが露出しない安全配慮など、家庭や保育施設でも安心して使える。 **［発達支援志向（促育あそび）］** ・単なる「遊び」ではなく、子どもの発達を促す要素（認知・身体・情緒）を組み込んだ遊びを想定しており、家庭内でも“遊びながら発達を支援する”環境を整えやすい。 **［専門家との連携展開］** ・将来的には保育士や小児科など専門家と連携する仕組みの開発も進めており、遠隔シッティングや発達相談など多様な支援ネットワーク構築に活用できる可能性がある。
期待される効果	・**家庭支援**：核家族化や地域交流の希薄化により孤立しがちな家庭を遠隔見守りでサポート ・**発達促進**：子どもの情緒・認知・身体発達を促す遊びを提供し、健やかな成長を支援 ・**家族交流促進**：祖父母など遠方の家族との関わりを深め、家族全体の安心感を向上 ・**支援ネットワーク構築**：保育士や小児科など専門家とのリモート連携により、見守り・相談体制を整備
価格	要問い合わせ・見積もり対応
導入事例	保育施設での導入事例なし ①静岡県賀茂郡東伊豆町 保健福祉センター 導入の目的：地域の子育て世帯支援の強化 小さな子どもの発達支援を地域レベルで提供する取り組み。遠隔子育て支援ロボットを通じて、家庭・地域・行政の連携を促す施策として期待 導入による効果：子育て世帯への支援強化：遠隔ロボットにより、家庭支援や見守りの補完的手段を提供 発達支援機能の活用：ロボットを通じて、発達に配慮した遊びや関わりが可能。保健福祉センターを軸としたサービス提供拠点化

事例情報 24　ONE ROOF Lab

機器名称	ONE ROOF Lab
開発企業名	社会福祉法人東京児童協会
参照 URL	https://one-roof-alliance.com/lab/item/onerooflab/
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**知育体験設計**：オフラインとオンラインを融合させた遊び・学び体験を提供 ・**デジタル融合**：AR・VR 等のデジタル技術を活用した新しい遊び環境を構築 ・**体験共有**：子ども・保育スタッフ・家族間で体験を共有できる仕組みを提供 ・**空間設計**：施設全体を“デジタルテーマパーク”化し、遊びと学びを融合
特徴	**［知育 × デジタル技術融合］** ・砂遊びや紙相撲などのアナログ遊びに、AR・VR 技術を組み合わせ、拡張性ある体験を設計 **［施設空間との一体設計］** ・園や遊び場そのものを“遊びの場”に変えるアトラクション型の空間デザイン **［共創性・つながり重視］** ・子ども・職員・家族が一体となり、喜びを共有する参加型体験を重視  **［未来志向・拡張性］** ・アナログとデジタル両面を扱うため、新しい技術導入やコンテンツ拡張にも柔軟に対応可能 **［ブランディング性］** ・体験紹介やデザイン性を重視し、施設の魅力を高めるブランディング機能も担う **［体験の共有・共創性重視］** ・子ども・保育スタッフ・家族・仲間が “喜び・楽しさを共有” できる体験を重視する表現があり、参加者間のつながり・対話を前提とする設計。

	 **［拡張性と未来志向］** ・アナログ・デジタル両面を扱う設計ゆえ、将来的な技術更新やコンテンツ拡張性を見据えたプラットフォーム思考を感じさせる。 **［ブランディング性・体験訴求］** ・ビジュアルにこだわったデザイン表現や、情報発信・体験紹介重視のサイト構成から、見せ方・体験誘導に対する意識が高い。
期待される効果	・子どもの興味・関心を引き出す幅広い知育体験機会の提供 ・保育現場・スタッフに対する新しい遊びや学びの導入促進 ・保育園・遊び場の魅力向上、家族との関係性強化 ・デジタル技術導入のテストベッドやプロトタイプ開発拠点としての役割
価格	要問い合わせ
導入事例	事例記載なし

事例情報 25　タップトーク

機器名称	タップトーク
開発企業名	株式会社ソリッドレイ研究所
参照 URL	https://taptalk.jp/
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	**・インタラクティブ映像表示**：床や壁に投影された映像が、人の足・手・身体の動きに反応して変化 **・物理演算シミュレーション**：波紋やボールの挙動などリアルな演出を実現 **・3DCG モデル活用**：立体感・奥行きのある空間表現が可能 **・設置形式対応**：常設設置型とレンタル型の両方に対応 **・カスタマイズ可能**：用途や設置環境に応じた映像コンテンツを制作・提供
特徴	**［身体と映像の双方向インタラクション］** ・投影された映像に対して足や手などで触れるように動作すると、映像がリアルタイムで反応・変化する双方向性を備えた表示ツール。 **［非接触での体験提供］** ・床や壁に映像投影する方式のため、触れる機器を持たずに体験でき、衛生面・清掃面での利点がある。 **［空間演出力の高さ］** ・3DCG や物理演算技術を活用し、リアルな動きや奥行きを生み出すことで、没入感・視覚的インパクトを強められる。  

	［用途の幅広さ］ ・幼児教育、展示館、体験型施設、商業施設、プロモーション空間など、多様な場面で応用可能。 **［設置形式の柔軟性］** ・常設設置だけでなくイベントや一時展開向けのレンタルにも対応し、用途や予算に合わせた運用ができる。 **［開発から設置・保守まで自社対応］** ・映像制作・設置・メンテナンスを一貫して自社で行う体制を持っている点が強み。
期待される効果	**・子どもの主体的体験の促進**：投影映像に触れて変化を起こす遊びを通じて、感覚刺激と五感を使った能動的な学びを育む **・探究心と学びの強化**：映像と身体のインタラクションにより、子どもが自ら発見・理解する体験を積み重ねられる **・施設の魅力度向上**：没入感ある体験を提供することで、来場者に記憶に残る価値を与え、イベントや施設のブランド力を高める **・付加価値と差別化の実現**：教育・展示・遊び空間に新しい体験要素を加えることで、従来にはない独自性と競争力を確立できる
価格	要問い合わせ
導入事例	**①三心わくわく認定こども園　（福井県福井市）** 導入目的：園児にもデジタルシステムを体験させたい、遊びと学びを融合した教育体験を提供したいという思いから導入検討がなされた。 普段使っている遊戯室の床を、映像で動きに反応するインタラクティブ空間に変えることで、子どもたちにとって“遊びながら学ぶ体験”を創出したいというニーズがあった。 導入後の効果：普段の床がインタラクティブ映像空間に早変わりすることで、子どもたちが映像と身体を使って遊び、触れて学ぶ体験が得られている。 保育園・幼児教育分野でも、アミューズメント施設や展示施設だけでなく、教育現場での体験型学びとして活用できる可能性を実証。 新しい教育手法として、子どもたちの興味・好奇心を刺激しやすい環境を作ることに成功している。

事例情報 26　らくがき AR

機器名称	らくがき AR
開発企業名	
参照 URL	https://passtell.jp/pressrelease/20210708/27291/
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**AR 化機能**：紙やホワイトボードなど、自由に描いた落書きをスキャンしてキャラクター化 ・**動作表現**：スキャンした絵がスマホ・タブレット上で動き回る（歩く・走る等） ・**インタラクション**：ご飯をあげる・つつくなどのアクションを通じてキャラクターと関わる ・**オフライン対応**：ネット接続がなくても利用可能（一部制限あり） ・**マルチプラットフォーム**：iOS／Android に対応（機種により制限あり） ・**デザイン性・受賞歴**：iF DESIGN AWARD、文化庁メディア芸術祭など受賞実績あり
特徴	**［創造性を拡張する体験］** ・ただ見るだけでなく、自分の書いたものが“動く”という没入感・驚きが提供される **［入力の自由度が高い］** ・特定のマーカーやフォーマットに縛られず、白紙／ノートなど自由に描いたものを使えるという柔軟性 **［手軽さと簡便性］** ・スマホ・タブレットでスキャン→即座に AR 化という流れが重視されており、複雑な設定を必要としない  **［デザイン・表現性の強み］** ・美術性・ビジュアルの見せ方にもこだわり、受賞歴も多数（例：iF DESIGN AWARD、文化庁メディア芸術祭受賞など） **［子ども親和性］**

	・操作が簡単で直感的。子どもが自ら描き、見て、動かして楽しめる設計 **［普及・キャンペーン施策あり］** ・幼稚園・保育園向けに「らくがき AR プレゼントキャンペーン」を実施。多くの園に広げようという意図が見える
期待される効果	・**創造性・想像力の刺激**：描いたキャラクターが動く体験で発想力を高める ・**教材的活用**：落書きをきっかけに物語づくりや表現活動へ発展 ・**ICT 活用の先進性アピール**：最新アプリ導入により園のイメージ向上 ・**能動的参加の促進**：描く・動かす・関わることで主体的活動を誘発 ・**継続利用・拡張性**：新しい絵やコンテンツ追加により長期活用可能
価格	非公開（Web 掲載なし、要問い合わせ）
導入事例	・幼稚園・保育園向け「らくがき AR プレゼントキャンペーン」：全国の幼稚園・保育園に無料で配布する取り組みを実施 ・2020 年 8 月 1 日、iOS 版を先行リリース。公開 5 日で 46 万ダウンロードを達成 ・国内外アプリランキングで上位獲得、各種メディア掲載・展示実績あり

事例情報 27　こくり

機器名称	こくり
開発企業名	日販テクシード株式会社
参照 URL	https://techceed-inc.com/news/productservice/6116/
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**プログラミング制御**：ビジュアル・ブロック方式で動作・発話・表示を制御可能 ・**教材アプリ搭載**：クイズアプリ（約 40 種）、フラッシュカードアプリ（10 種）、キッズヨガ、声かけアプリなどを標準装備 ・**保育支援アプリ**：登降園管理（非接触方式、QR コード対応）、午睡チェック、トイレトレーニング管理 ・**表示・音声機能**：タブレットに画像・文字・動画を表示、音声認識・発話応答に対応 ・**操作性**：タッチ操作で直感的に操作可能、キーボード不要 ・**実証実験対応**：特別支援学級や小学校での実証実験を実施し、授業活用を検証
特徴	**［教材兼業務支援のハイブリッド性］** ・子ども向けの学び機能と保育業務支援アプリ機能の双方を備える設計。教育現場・保育現場双方での実用性を目指している点が差別化要素となっている。   **［すぐ使えるアプリ標準搭載］** ・市販・導入時に、追加準備なく使えるアプリが複数用意されており（クイズ、フラッシュカード、登降園など）、導入ハードルを下げている。 **［直感的な操作・プログラミング］** ・タブレット操作＋ブロックプログラミングという方式により、児童や教員が比較的容易に操作・活用できる。キーボード操作なしで使える点も特徴。 **［軽量・省スペース設計］** ・公表値では、重さ 1.1 kg という比較的コンパクトなロボット設計。 **［教育制度との親和性］**

	・2020 年度から必修化された小学校プログラミング教育に合わせて設計され、教科連携・学習指導案を見据えた構成。 **［改良・実証実験による進化］** ・特別支援教室や小学校での実証実験を通じて、児童反応や操作性、教材適用性を検証・改善してきており、現場適応性を高める取り組みが継続されている。
期待される効果	・**子どもの興味・主体性向上**：遊び感覚でプログラミングを扱うことで、子どもが試行錯誤しながら学びを進めやすくなる。 ・**プログラミング的思考・論理的思考の醸成**：順序・条件・並列などの考え方を自然に扱う経験を通じて、思考力の下地を育てることが可能。 ・**教員・保育士の業務軽減**：登降園管理・午睡チェック・トイレ管理等をサポートすることで、記録・見守り業務の一部を補助できる。 ・**学習指導との融合・総合学習の活用**：総合的な学習や探究学習にロボットを取り入れ、調べたことをロボットで発表させたり、地域テーマに応じたプログラムを作らせたりする学びが可能。 ・**特別支援教育への応用**：実証実験では、特別支援学級での利用も試されており、発達段階に応じたアプローチツールとしての活用可能性が検討されている。
価格	標準販売価格：75,000 円（税抜）／台 保守・サポート料：15,000 円（税抜／年） （注）導入形態や台数、機能追加によって別途見積もりやカスタマイズ対応
導入事例	**①社会福祉法人 栄光会 あきつやまゆり保育園** 導入目的・背景：保育士の業務負担軽減と、子ども一人ひとりに向き合う時間の確保 教材準備の簡素化と、子どもの主体的な学びの促進 導入後の効果：「ロボット『こくり』は、保育士の日々の業務を少しずつ軽減することができ、その積み上げた時間を 1 人ひとりの子どもたちに向けることができる。また、特段準備をしなくてもすぐに利用でき、クラスの友達同士が楽しみながら学べるため、子どもたちの資質を伸ばす。さらに、幼児クラスの朝の会では、子どもたちがロボットを使って主体的に進めることができるため、保育士は、ロボットと仕事の分担をすることで、多様な遊びを通じて、子どもたちに何が育っているかを見抜く目を育てる時間に充てることができる。

事例情報 28　分身ロボット OriHime

機器名称	分身ロボット OriHime
開発企業名	オリィ研究所
参照 URL	https://florence.or.jp/news/81362/?utm_source=chatgpt.com
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**遠隔操作機能**：PC／スマホブラウザや専用アプリから簡単に遠隔操作可能 ・**多関節制御機構**：首・腕など最大 6 関節を動かすことができ、ジェスチャーや動作を再現 ・**高性能カメラ**：最大 4K・水平視野角 115° の広角カメラで周囲を把握 ・**音声機能**：マイク・スピーカー搭載で自然な会話が可能 ・**ジェスチャープリセット**：あいさつ・うなずき・手を振るなど、定型動作を簡単に実行可能 ・**デザイン設計**：能面風デザインにより、操作者の顔を直接見せず“存在感”を演出 ・**複数モデル展開**：卓上型から上半身型（OriHime-D）まで、用途に応じたラインナップを提供
特徴	**［「そこにいる」感覚の追求］** ・操作者（パイロット）は、首や腕を動かしながら周囲と対話でき、視界もリアルタイム。まるで現地にいるような没入感を持てるよう設計されている点が大きな特徴。 **［高性能カメラ・音声・通信改善］** ・最新モデル「ver.2023」では、従来比でカメラ性能が 8 倍に向上し、音量もデジタルマイクアレイで約 2.5 倍出力を実現。通信速度も最大 10 倍に引き上げ、映像遅延を抑える改善がなされている。  **［多用途対応モデル設計］** ・用途・規模・場面に応じてモデルが選べる柔軟性。卓上型から上半身型（OriHime-D）まである。 **［シンプルかつ直感的な操作性］**

	・特別な技術を要さず、PC やスマホから誰でも使える操作体系を意識しているという説明。操作練習不要。  **［デザイン性・心理的配慮］** ・顔を表情豊かにしない「能面風」デザインにより、逆に受け手側の想像力を刺激し、操作者の“存在”を感じやすくする工夫がある。 **［社会課題対応力・ミッション性］** ・「人類の孤独を解消する」理念を掲げ、移動困難者・障がい者の社会参加を後押しするツールとして位置づけている。 **［実証実験・社会実装の積極性］** ・分身ロボットカフェ DAWN の運営、自治体・企業での実証導入実績多数。実験段階から社会実装までの取り組みに力を入れている。
期待される効果	・**外出困難者・障がい者の社会参加促進**：教室・会議・店舗など「その場」に物理的にいられない人でも、ロボットを通してその場に関与することが可能となる。 ・**雇用機会拡大・働く手段の多様化**： 遠隔で接客・受付業務を行うことで、地域・身体制約を超えた就労の可能性を広げる。NTT 等で実際に導入。 ・**コミュニケーション・つながりの維持**：長期入院・介護中などでも、遠隔で友人・クラスメート・職場の人と距離を感じず関われる環境を提供。 ・**人手不足・効率改善支援**：接客業・受付業務などにおいて、人手を補う手段として活用されうる。
価格	就労支援機器としての公表価格：本体価格 437,800 円（税込） 月額利用料（参考）： エントリープラン：7,700 円（税込） スタンダードプラン：9,900 円（税込） デラックスプラン：15,400 円（税込） ver.2023 モデル（販売モデル）：本体購入価格：398,000 円（税別） エントリープラン：7,000 円　　スタンダード：9,000 円 デラックス：14,000 円 本体一括＋永年利用料プラン：722,000 円（税別） レンタル型プランあり（特に従来型 OriHime、法人向けプラン等）
導入事例	事例記載なし

事例情報 29　KitS

機器名称	KitS
開発企業名	株式会社スマートエデュケーション
参照 URL	https://kdkits.jp/
保育業務カテゴリ	保育実践・教材
機能	・**多分野対応の ICT 教材**：音楽・アート・言語・運動など、幼児教育の複数領域に対応。 ・**タブレット／電子黒板連動**：写真・動画・音声を活用し、活動を拡張可能。 ・**活動データのクラウド保存**：作品や活動をクラウドに保存し、園内や保護者と共有。 ・**ポートフォリオ化機能**：活動記録を整理し、子どもの成長を可視化。
特徴	**［領域横断型カリキュラム］** ・季節やテーマに応じた多彩なプログラムを備え、子どもの総合的な発達を支援。 **［デジタル×体験型のハイブリッド学習］** ・ICT と実物の素材・道具を組み合わせ、五感を使った学びをデジタルで記録・拡張。   **［成長ポートフォリオ］** ・活動データをテーマ別・発達段階別に整理し、保護者面談や職員会議の振り返り資料に活用。 **［インクルーシブ教育対応］** ・発達障がいや身体障がいのある子どもに配慮した UI（文字サイズ・配色・音量調整など）を設定可能。 **［協働性の育成］** ・共同お絵描き・合奏など、複数の子どもが同時に参加できる機能で協調性や社会性を育む。 **［保護者連携強化］**

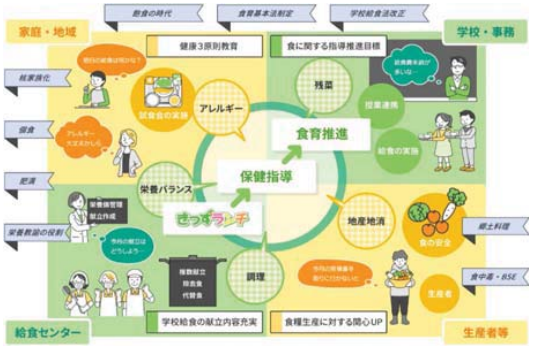
	・写真・動画・音声をそのまま保護者に共有でき、家庭での再現や学びのフィードバックに利用可能。  **［教材更新とコスト削減］** ・クラウド経由で教材・プログラムが常に最新化。紙教材の更新や印刷の負担を削減。 **［分析・フィードバック］** ・活動ログや作品データから子どもの発達傾向を可視化し、個別最適な指導計画に応用可能。
期待される効果	・**業務効率化**：教材準備・記録・共有が ICT で一元化され、保育士が子どもと向き合う時間を確保。 ・**保護者満足度向上**：活動記録を写真・動画で共有し、園への信頼感・安心感を高める。 ・**発達支援**：発達段階に応じた教材活用で、表現力・協働性・主体性が育まれる。特別支援児と健常児の混合活動も円滑化。 ・**学習意欲の向上**：電子黒板を活用したグループ活動や発表で子どもの主体性を促進。
価格	要問い合わせ（園の規模・ライセンス数による）
導入事例	KitS 導入園で公開保育・見学会を実施しており、実際の園で ICT 教材を活用した活動の様子を見学できる取り組みを行っている。これにより、他園が導入を検討する際に実際の効果や運用方法を確認できる仕組みになっている。

事例情報 30　すくすく保育園給食

機器名称	すくすく保育園給食
開発企業名	株式会社夢工房
参照 URL	https://www.yumekobo.jp/product/s_hoiku_e.html
保育業務カテゴリ	職員業務支援・記録管理
機能	・**給食提供・配送**：保育園向けに栄養バランスの取れた給食を提供・配送。 ・**アレルギー対応**：アレルギー対応食・特別食に対応し、献立表・原材料表をデジタルで提供。 ・**喫食管理**：喫食状況・残食率の管理ツールを備え、保護者への献立情報共有も可能。
特徴	**［献立作成から発注管理までの一貫サポート］** ・献立作成・アレルギー対応食の設計・栄養計算・発注見積もり・原価計算まで、食に関する一連の業務が 1 つのシステムで連動。これにより、各プロセス間のデータ転記・確認ミス・手間を大幅に削減可能。 **［アレルギー・除去食対応が標準装備］** ・アレルギーを持つ園児への除去食・代替食の登録機能を持ち、基本献立から展開できる仕組み。また、食品の原材料や成分が確認でき、栄養基準に応じた献立の設計が簡便。  

	［成長記録・個別管理機能］ ・園児一人ひとりの成長データ（体重・身長など）を記録し、やせ／肥満の判定、自動的な判定表示、成長履歴グラフの出力など機能があり、個別対応および健診連携に役立つ。 **［食数管理と実施食数反映］** ・予定食数と実際に提供した食数の両方を管理し、その差異を見える化できる。これにより無駄の削減、調理量の最適化が可能。 **［帳票出力・自治体報告対応］** ・献立表、栄養値レポート、原材料表、発注書、見積書など、さまざまな帳票を PDF／Excel 形式で出力可能。日本食品標準成分表 2020 年および日本人の食事摂取基準（2025 年版）に対応しており、栄養報告書作成／行政提出資料としても使いやすい。 **［操作性と現場対応性の高さ］** ・月間献立画面のドラッグ操作、料理・食材の重複チェック、献立コピー・移動など直感的なインターフェース。園独自の基準値設定や料理データを追加できる柔軟性も持っており、調理担当者・栄養士双方の使いやすさを考慮。 **［クラウド・ネットワーク対応］** ・複数園での運用が可能な複数園版、クラウド版／ネットワーク版対応。データ共有や更新がネット経由で可能で、ソフトのアップデートや献立データの更新もスムーズ。
期待される効果	・**誤食・誤飲・アレルギー事故防止**：アレルギー対応機能と原材料情報の可視化によりリスクを低減。 ・**安心感の向上**：栄養バランスや食材情報の「見える化」で保護者・職員双方が安心。 ・**業務効率化・食育支援**：献立作成・記録作業の効率化と、園児への食育活動の充実を実現。
価格	要問い合わせ（園の規模・提供形態による）
導入事例	**足近保育園（岐阜県羽島市）** ・「計算が簡単に出来、助かる。書類作成などの事務仕事が楽になった。アフターサービスがしっかりしていて、安心出来る。」（足近保育園など、夢工房公式サイト掲載の声） ・栄養計算・帳票作成が自動化され、誤食・誤配のリスクが減少。保護者への献立・食材情報の提供がスムーズになり、安心感が向上。 ・調理・保育双方が子どもに向き合う時間を確保できるようになり、食育活動の充実や献立改善が進んだ。 ・複数園・複数職員でのデータ共有が可能になり、監査・行政提出時の資料準備が容易になった。

事例情報 31　きっずランチ 2

機器名称	きっずランチ 2
開発企業名	トーテックアメニティ株式会社
参照 URL	https://www.totec.jp/service/case/case_kidsLunch/?utm_source=chatgpt.com
保育業務カテゴリ	職員業務支援・記録管理
機能	・**給食業務統合管理**：食材・料理情報、発注・実績、精算までを一元管理する Web 型システム ・**栄養価・アレルギー管理**：献立作成時に栄養価・アレルギー情報を確認し、PFC グラフやレーダーチャートでバランスを可視化 ・**発注自動化**：献立・食数から必要数量を自動算出し、見積・発注を効率化 ・**食育支援**：献立表（三色分け・六群分け）やアレルゲン表示資料を出力し、児童や保護者への情報提供を標準機能でサポート ・**柔軟な運用切替**：自校方式／センター方式、統一献立／施設別献立など、運用形態の変更に設定変更だけで対応可能 ・**地産地消・安全データ管理**：食材の生産地集計や地場産利用率を見える化し、保護者や行政への説明に活用可能 ・**収支・精算管理**：仕入れ請求から収支報告までをシステム内で完結し、財務システムとの連携も容易
特徴	**［給食業務を端から端までカバー］** ・食品・献立・見積・発注・実績まで一連の業務を“標準機能”で網羅。個別開発に頼らず導入しやすい構成。  **［栄養士支援の分析機能］** ・献立作成時に栄養価・単価の充足差を色で確認でき、PFC グラフやレーダーチャートで栄養バランスを可視化。材料仕分け表は小学校／中学校など区分比較に対応。 **［食育・配布資料の充実］**

	・献立表（三色分け／六群分け）を出力でき、アレルゲン含有食品の表示にも対応。児童・保護者への情報提供を標準機能で支援。 **［見積・発注の自動化］** ・献立・食数から見積数量や発注数量を自動計算。見積期間は日／月／学期／半期／年間まで柔軟に設定でき、落札食品のアレルギー管理や“クラス発注”にも対応。 **［運用変更への強さ］** ・自校方式／センター方式、献立の市内統一／センター別など、運用が変わっても“設定変更のみ”で柔軟に追従可能。 **［地産地消・安全を“見える化”］** ・食材の生産地集計や地場産利用率、残菜一覧、材料の検査情報（見積依頼書・供給物件明細書）など、食育や安心安全の説明に使えるデータを標準提供。 **［精算・収支管理まで一気通貫］** ・仕入れ業者向け材料費請求書、基本物資の請求確認、日・月・年次の収支管理まで内蔵。財務連携の前段もスムーズに。 **［セキュリティと支援体制］** ・提案～構築～運用まで“正社員の同一メンバー”で対応し、外部委託による情報漏えいリスクを低減。障害切り分け～オンサイト対応までの支援フローも明示。
期待される効果	・**業務効率化**：給食運営業務を統合管理することで、作業の効率化と精度向上を実現 ・**連携強化**：給食センター・学校・施設間で迅速にデータを共有し、スムーズな協働を促進 ・**柔軟対応**：制度変更や運用形態の変化にも対応できる安定した基盤を構築
価格	要問い合わせ
導入事例	**保育施設の導入事例なし** **愛知県 豊橋市 保健給食課 （自治体）** 導入前の課題：市町村合併により、旧市・旧町ごとに複数の給食管理方式・システムが混在していた。給食運営形態が複雑（学校給食、幼稚園給食、休業期対応等）で、システム統合・共通化が困難だった。 請求・精算、発注・在庫・実績管理、残菜計算など、運営業務負荷が高かった。 導入後の効果：旧複数システムの統合がスムーズに実現し、運営の横断性が向上。 給食業務管理の効率化により、各施設の事務作業負荷が軽減。設定変更だけで多様な給食運用形態に対応できたと評価。

事例情報 32　献ダテマン

機器名称	献ダテマン
開発企業名	株式会社カイテクノロジー
参照 URL	https://kk-tas.jp/
保育業務カテゴリ	職員業務支援・記録管理
機能	・**献立作成機能**：複数調理法に対応し、保育園や施設に合わせた献立を作成可能 ・**アレルギー管理機能**：アレルゲン情報を登録・管理し、誤提供を防止 ・**発注・在庫管理機能**：必要に応じて食材発注・在庫確認を効率化（業態別オプション） ・**帳票出力機能**：全帳票を Excel 形式で出力し、編集・カスタマイズが可能 ・**アクセス権限設定**：職員の業務範囲に応じて権限を付与でき、セキュリティを確保 ・**自動アップデート機能**：常に最新環境でシステムを利用可能
特徴	**［操作性・画面設計へのこだわり］** ・食品別／日付別などの切替画面を採用し、必要な業務単位で画面構成を最適化。 **［ストレスフリーな栄養管理システム・サーチ］** ・献立作成中に栄養価やコストをリアルタイムで確認できる機能を備えており、作業効率と精度を両立。 グラフ表示、表形式デザイン、視覚的な情報提示を活用して、直感的に理解しやすい画面を目指している。 **［クラウド／リモート対応］** ・Web（クラウド）版の提供により、インターネット環境さえあればどこでも利用可能。リモートワークや在宅勤務対応が効きやすい。 ・クラウド化により、バックアップやサーバー管理の手間を軽減。機器故障・端末買い替え・災害リスクへの備えになる。 

	［外部システム連携力］ ・BtoB プラットフォーム（インフォマート）との受発注連携に対応。商品マスタ取込や発注データ送信が可能。FAX など手入力の手間を減らせる。CSV や API での外部データ連携も可能な仕様を備えており、他システムとのデータ交換に柔軟性を持たせている。  **［業態・運用形態への柔軟対応］** ・保育園、学校、給食会社等、多様な給食提供形態に対応するラインナップをそろえている。 ・各業態に応じた専用機能を持たせており、保育園向けには三食食品群管理、園用帳票出力などを含む対応が見られる。 ・新調理法（クックチル、真空調理、クックフリーズ、CK/SK 運用など）にも対応可能な設計がなされている。 **［帳票・出力カスタマイズ性］** ・全帳票を Excel 出力可能。さらに、そのまま編集できる柔軟性を持つ。 ・栄養士視点によるサポート体制：開発・サポートスタッフに管理栄養士資格保持者を多数配置し、栄養士同士の目線で運用支援・相談対応可能。
期待される効果	・**業務効率化**：献立作成、発注処理、帳票出力の手作業を削減し、時間を有効活用 ・**ミス削減**：アレルギー対応や発注・帳票作業における人為的ミスを減らす ・**コスト管理**：食材発注量の最適化により、コスト削減と無駄の防止を実現 ・**データ活用**：蓄積データを分析し、改善施策の立案や効果検証を容易化 ・**連携強化**：他システムとの連携により整合性を高め、重複入力を削減
価格	Web 版ユーザー課金型：ユーザー数×月額 2,500 円 Web 版事業所課金型：事業所数×月額 2,400 円 給食会社向け：月額 10,000 円×ユーザー数（例） 最大 3 か月無料トライアルあり ※カスタマイズ対応・電子カルテ連携等は別途見積
導入事例	施設名・導入前後の比較データの詳細は非掲載 「食材や料理の新規登録が簡単」「価格に対して機能が充実」「自宅でも操作できリモート対応に便利」など。

事例情報 33　VEVO

機器名称	VEVO
開発企業名	インタロボット株式会社
参照 URL	https://www.i-robot.co.jp/course/%e4%bf%9d%e8%82%b2%e3%83%ad%e3%83%9c%e3%80%8cvevo%e3%80%8d/
保育業務カテゴリ	職員業務支援・記録管理
機能	**・欠席・遅刻・送迎バス不要の連絡受付**：保護者アプリから入力 → 職員画面へ即時反映 **・預かり保育・延長保育の予約受付、料金自動計算・集計** **・登降園管理**：園児・職員の打刻記録を含む **・園児名簿・保育計画・要録の作成・管理** **・お知らせ配信**：個別・一斉メール・掲示板・アンケート、連絡帳機能 **・送迎バス管理**：GPS 位置情報配信・到着通知メール・運行ルート作成 **・バス位置確認機能**：保護者によるリアルタイムでの確認 **・キャッシュレス管理**：保育料計算、請求・集金・口座振替など
特徴	**［保育支援業務の一元化］** ・「VEVO」は登降園管理、欠席・遅刻連絡、預かり保育・延長保育申請、連絡帳・お知らせ配信、保育計画・記録、請求管理、バス運行管理など、園運営に必要な多様な機能を一つのプラットフォームに集約。複数システムの併用や転記が不要になり、データの重複・ミスを防止できる。  **［リアルタイム反映と即時共有］** ・保護者がアプリから入力した欠席・遅刻・バス不要などの連絡がリアルタイムで職員画面に自動反映。朝の電話対応や手入力が不要になり、記録の正確性と即時性が高まる。 **［送迎バス安全機能］** ・GPS によるバス位置情報配信・到着予告メール・運行ルート作成を搭載。置き去りや乗り間違いのリスク低減にもつながり、保護者は送迎計画を立てやすくなる。 **［自動計算・帳票出力で事務負担を軽減］**

	・預かり保育料や延長保育料の集計・請求処理、行政向け帳票作成が自動化され、複雑な処理の負担が大幅に削減。 **［サポート体制と導入ハードルの低さ］** ・無料の導入サポートや設定支援、わかりやすい操作画面により、IT に不慣れな職員でも安心して利用開始できる。複数園・複数職員でも同一アカウントで情報共有が可能。 **［保護者との信頼関係構築］** ・24 時間いつでもアプリで連絡・確認でき、バス位置通知・預かり保育料自動計算など透明性の高い運営が可能。園の「見える化」により、家庭と園が一体となって子どもの成長を支える体制を整える。 **［将来性・拡張性］** ・写真・動画配信などオプション追加が可能で、園独自の運営スタイルに合わせてカスタマイズできる。将来的な AI による健康状態分析や食物アレルギー管理連携など新機能にも対応できる設計。
期待される効果	・保護者の安心感向上（欠席・遅刻・延長保育連絡、バス位置確認などが容易に）。 ・業務効率化による職員の時間確保（朝の電話応対・記録作業を削減）。 ・帳票・請求処理の自動化により、事務負担を軽減し、保育の質と働きやすさを両立。 ・充実したサポート体制で、IT 導入に不慣れな園でも安心して運用可能。 ・園運営の透明性が高まり、保護者との信頼関係が強化される。
価格	初期費用：無料 月額料金：10,000 円～／1 施設（人数に関係なく） オプション：GPS 機器や追加機能には別途費用あり
導入事例	事例記載なし

事例情報 34　AI ロボット

機器名称	AI ロボット
開発企業名	note
参照 URL	https://note.com/fugou/n/n90ad6558adb2
保育業務カテゴリ	職員業務支援・記録管理
機能	・**子どもとの対話・言語コミュニケーション**（英会話練習、発音指導、歌・ダンス・音楽・ゲーム） ・**発達支援用途**：発達障害児向けに社会性練習や対話トレーニング支援 ・**AI 教育支援**：学習者ごとの理解度を分析し、最適なフィードバックを提供 ・**事務支援**：連絡帳・日誌作成補助、文章校正、翻訳、音声認識による記録自動化 ・**入所選考・事務処理の自動化：**自治体での大規模入所児童割り振り業務を AI で短時間処理
特徴	**［心理的ハードルの低減］** ・子どもが「人と話すことに抵抗がある」と感じていても、ロボット相手であれば話しかけやすいケースがあり、それを学習意欲やコミュニケーションの入口にできる可能性が指摘されている（特に発音練習や英会話練習での利用） **［安定した反応・繰り返し対応力］** ・人間と違って疲労を知らないため、何度も同じ練習を繰り返し可能。特に発達支援用途で評価される。  **［人的リソースの補完］** ・AI やロボットが補助的な役割を担うことで、保育士・教師の負担を軽減し、「人間にしかできない教育」に集中する余裕を生む方向性が強調されている。 **［処理速度・判断支援力］** ・大量データ処理、複雑な組み合わせ計算（例：入所選考・振り分けなど）を瞬時に行えるという強さ。従来、人海戦術だった業務を自動化できる。 **［適応性・進化可能性］**

	・AI を使うことで、使われる環境・子どもたちの特性・教育目標に応じて学習・進化できる可能性を持つ点。ソフトウェア更新・モデル改善を通して機能を強められるという性質。 **［コスト・導入障壁の課題も認識］** ・導入コスト、継続的なメンテナンス・ソフトウェア更新、教育現場で使いこなすための運用ノウハウや人材育成が必要であるという課題も記事で指摘されている。 **［人間との共存・協働前提］** ・AI・ロボットが“代替”ではなく、保育者と“共存・協働”する位置づけを前提とすべきという考え方が強調されている。技術側だけでなく“使う側”側の意識・適切な役割分担が重要。
期待される効果	・**子どもと向き合う時間の確保**：事務・記録作業を削減し、保育士や教師が対話や観察に集中できる ・**入所選考・行政処理の効率化**：膨大なデータ処理を自動化し、公平性と迅速性を向上 ・**学び機会の拡大**：AI による個別最適化支援で、子ども一人ひとりに合わせた学習を実現 ・**発達支援の強化**：発達障害児など、支援を必要とする子どもに丁寧な対応を提供 ・**教育・保育の質向上**：余裕をもった運営が可能となり、教育の質やケアの充実につながる ・**教育格差の抑制**：人材不足地域や遠隔地でも補完手段となり、教育機会の不平等を緩和
価格	非公開（Web 掲載なし、要問い合わせ）
導入事例	事例記載なし

事例情報 35　子どもの安全対策 VR 教材

機器名称	子どもの安全対策 VR 教材
開発企業名	
参照 URL	https://www.tanomana.com/product/vr/index.html
保育業務カテゴリ	職員業務支援・記録管理
機能	・**子どもの視点体験**：0〜4 歳児の目線を VR で体感できる映像教材 ・**ナレーション解説**：映像と合わせて解説を付与し、理解を補助 ・**危険シチュエーション収録**：転落、挟む、物が落ちる、ひっくり返る、室内・屋外での衝突、大人の死角などを再現 ・**発達段階別シナリオ**：ハイハイ期、つかまり立ち期、屋外活動期など年齢に応じたリスクを反映 ・**スマホ＋ゴーグル視聴**：スマートフォンでの視聴が可能で、簡易 VR ゴーグルを活用 ・**教材提供方式**：通信講座や保育関連講座に組み込まれ、既存端末で利用可能
特徴	**［子どもの視点体験重視］** ・大人視点では見えづらい、子どもの高さ・見え方からの危険を VR で体感できる設計 **［ナレーション解説付きで理解を補助］** ・映像と解説の組み合わせで学習効果を高める意図あり  **［段階別リスクの整理］** ・ハイハイ期・つかまり立ち期・屋外など発達段階や環境別にシナリオを分けて、段階に応じた“気をつけるべきこと”を提示 **［疑似体験型アプローチ］** ・実体験に近い状況を仮想空間で再現し、仮想的に“危険を体感”できる方法を採用 **［教育講座への組み込み］** ・通信講座や保育関連講座の教材として組み込まれており、学習カリキュラムの一部として位置づけられている **［コスト抑制を意識した提供形態］**

	・教材契約者に VR 映像視聴権を付与する方式で、専用システムをすべて新設するのではなく既存端末で利用できる形式を前提にしている可能性が高い（スマホ＋ゴーグル併用型）
期待される効果	・**危険予知能力の向上**：子どもの行動特徴を理解し、事故リスクへの気づきを習慣化 ・**視点の強化**：死角や落下・衝突リスクを再認識し、保育者の安全視点を拡張 ・**行動変容の促進**：仮想体験を通じ、安全行動・改善行動を具体的に考える契機となる ・**学習効果の強化**：体験型教材により記憶定着率を高め、学習効果を向上 ・**教育資材の差別化**：VR を活用した先進的教材として園の魅力を高める ・**コスト効率性**：同じ映像を大規模施設でも共有でき、費用対効果が高い
価格	非公開（Web 掲載なし、要問い合わせ）
導入事例	・ヒューマンアカデミー（通信教育／保育講座）で導入され、保育士講座・ベビーシッター講座・チャイルドマインダー講座の受講者に提供されている ・その教材内の一部として、学習の合間や修了後に VR 映像を視聴する形で組み込まれている ・対象講座例：通信講座「たのまな ベビーシッター講座」などに含まれるとの記載あり

事例情報 36　保育園ロボット

機器名称	保育園ロボット
開発企業名	AIZIAIZINE（エーアイジン）
参照 URL	https://otafuku-lab.co/aizine/nursing-child-robot0906/
保育業務カテゴリ	保護者連絡・情報共有
機能	・**遊び・対話機能**：クイズ・ゲーム・音楽・ダンスなどを通じて子どもと交流 ・**写真撮影・動画記録機能**：集合写真や遊びの様子を記録 ・**顔認証・識別機能**：写真と連携して個人識別、保護者への情報提供に活用可能 ・**登降園記録・挨拶機能**：来園・退園時刻を自動記録し、あいさつを出力 ・**睡眠・健康見守り機能**：布団下センサーで呼吸・心拍・体勢を検知し、異常時に通知 ・**体温計測・睡眠モード検知**：健康モニタリングの強化 ・**情報伝達・連絡機能**：給食・昼寝時間・子どもの様子を保護者に通知、職員・保護者間でのメッセージ送信も可能 ・**業務支援機能**：延長料金の自動算出、シフト管理・業務配分支援
特徴	**［保育士の負担軽減］** ・ロボットが子どもと遊んだり見守ったりすることで、保育士が常にすべての子どもに目を配る必要がある場面を補助できるという役割。 **［安心感の提供（保護者・先生双方）］** ・子どもの様子を記録・伝える機能があることで、保護者が日中の様子を知れて安心できる。また、睡眠時の見守りや異変通知によって、事故リスクを低減できる可能性。  **［幼児への親しみやすさ設計］** ・ロボット自体が親しみやすい形状で、視覚的にも子どもが拒否感を持たないデザイン性を意識している例がある。 **［自動データ処理・業務効率化］** ・記録・計算・連絡などの業務支援機能を備えることで、手動で行っていた事務作業の自動化を図るという点が強みとして見られる。 **［補助的役割としての位置づけ］**

	・ロボットが保育士を完全に代替するのではなく、人間の保育士が本質的な“子どもとの関わり”に注力できるよう、補助ツールとして機能する設計思想が前提として語られている。
期待される効果	・**子どもと向き合う時間の確保**：事務・記録作業を削減し、保育士が対話や観察に集中可能 ・**業務効率化・人件費削減**：自動化によって残業削減や配置最適化を支援（導入事例では年間 350 万円の削減効果も報告） ・**安全性向上**：睡眠時や遊び中の異常検知による事故防止 ・**保護者との信頼強化**：写真・動画・データで子どもの様子を共有し、安心感を提供 ・**保育の質向上**：保育士の余裕確保により、教育・情緒支援・遊びなどの質が高まる
価格	非公開（Web 掲載なし、要問い合わせ）
導入事例	事例記載なし

事例情報 37　さくら連絡網

機器名称	さくら連絡網
開発企業名	株式会社マンタ
参照 URL	https://xn--y8jl1nm041aulav72g.jp/?yclid=YSS.EAIaIQobChMIss3-45HPjwMVVqKmAx2YJAJzEAAYAyAAEgICsfD_BwE&sa_p=YSA&sa_cc&sa_t=1757539760409&sa_ra=BF
保育業務カテゴリ	保護者連絡・情報共有
機能	**・欠席・遅刻・バス不要連絡**：アプリで受信・管理 **・保護者連絡機能**：一斉・個別のお知らせ配信、掲示板、連絡帳、アンケート管理 **・登降園管理**：職員打刻を含む登降園記録、園児情報管理、名簿作成 **・預かり・延長保育管理**：予約受付、料金計算・集計、行政帳票出力 **・バス運行情報（オプション）**：位置情報・到着通知 **・写真・動画共有**：園から保護者への日常の情報発信
特徴	**［教育・保育現場の多彩な業務を一元管理］** ・登降園管理・保護者連絡・預かり保育・延長保育・アンケート・緊急連絡・写真共有など、園運営に必要な業務をクラウド上で一元管理できるプラットフォーム。複数のシステムや紙台帳を併用する必要がなくなり、転記ミスや情報断絶のリスクを防ぐ。 →全国 2,300 校以上・利用者約 110 万人（2023 年時点）という導入実績が、その汎用性と信頼性を裏付けている。 **［リアルタイム反映と即時共有による「見える化」］** ・保護者がスマホアプリから入力した欠席・遅刻・預かり保育などの情報が、リアルタイムで職員画面に反映。朝の電話対応が減り、職員間で常に最新状況を共有できるため、引き継ぎ・緊急対応・保護者対応がスムーズになる。災害・緊急時も一斉配信で迅速な連絡が可能。  **［使いやすさとサポート体制］** ・保護者や職員が迷わない画面設計と、導入時の無償サポートが整備されており、IT に不慣れな職員でも安心して利用開始できる。複数園・複数職員で同一アカウントを共有できる仕組みがあり、マニュアルや

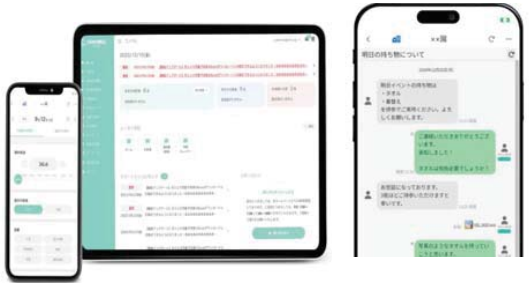
	新人研修の負担も軽減される。 **［保護者との信頼関係と透明性の向上］** ・アプリで 24 時間連絡・確認できる利便性、預かり保育料自動計算・請求処理などの透明性、写真・動画共有などにより、保護者が園の状況をリアルタイムで把握できる。「園の見える化」によって、家庭と園が一体となって子どもの成長を支える体制が強化される。 **［安全・安心な情報伝達基盤］** ・欠席・遅刻連絡、バス運行情報、災害時連絡、アンケートまで同じプラットフォームで完結。個人情報保護の観点からも専用サーバーで運用されており、安心して利用できる。自治体導入事例（浜松市など）では、災害・緊急時の情報伝達の確立が評価されている。 **［拡張性と継続的改善］** ・アンケート機能や未回答者への自動再通知など業務効率化機能が随時追加・改善されており、ユーザーの声を反映した UI/UX のリニューアル（2023 年に保護者画面刷新）も行われている。園や自治体ごとのニーズに合わせてカスタマイズでき、導入後も継続的に機能進化を享受できる。
期待される効果	**・保護者の利便性と安心感の向上**：欠席・遅刻・預かり保育などの連絡をスマホで完結でき、送迎計画や料金確認も容易になる。結果として保護者の安心感が増す。 **・職員の事務負担削減と教育活動への集中**：朝の電話対応や記録作業が減り、教育・保育活動に充てる時間が確保できる。さらに書類・帳票作成も効率化され、保育品質と職員の働きやすさが両立する。 **・園全体の情報共有と緊急対応力の強化**：園内での情報共有や引き継ぎがスムーズになり、緊急時の対応力が高まる。園全体の「見える化」が進むことで、家庭と園が一体となって子どもの成長を支える体制が整う。
価格	初期費用：無料 月額料金：1 施設あたり 10,000 円～（園児人数に関係なく） オプション（GPS 機器、追加機能）には別途費用あり
導入事例	学校・自治体導入実績：全国 2,300 校以上、利用者約 110 万人（2023 年時点、公式発表）に導入実績あり。 公式サイト掲載導入校：みずたに幼稚園、池袋いづみ幼稚園、彦成幼稚園、サニーサイドナーサリー、平和台保育園など全国の学校・園で活用実績あり。

事例情報 38　キッズノート

機器名称	キッズノート
開発企業名	有限会社ゼンポ
参照 URL	https://www.kidsnote.com/jp
保育業務カテゴリ	保護者連絡・情報共有
機能	**・連絡帳機能**：園と保護者が 1 対 1 でやり取りできる連絡帳 **・写真・動画・書類共有**：日常の様子や書類を保護者と共有 **・お知らせ配信**：園全体・クラス別に通知を一斉送信 **・アンケート機能**：お知らせ内に回答フォームを挿入可能 **・アルバム／思い出 BOX**：写真・動画を保護者専用で保存 **・カレンダー共有**：行事予定や園のスケジュールを表示・同期 **・給食情報配信**：その日の給食・食事情報を配信 **・投薬依頼書機能**：保護者がアプリから投薬申請 **・お迎え時間届機能**：保護者が迎え時間を園に通知 **・出席・欠席・遅刻連絡**：保護者から送信された情報を園で管理 **・体温記録機能**：園で測定した体温を保護者が確認可能 **・登降園 QR 打刻**：QR コードを使って登降園時間を自動記録
特徴	**［130 カ国語への翻訳機能］** ・園からの連絡・文書を多言語で保護者に自動翻訳でき、外国語話者にも対応可能  **［QR 登降園打刻機能が無料で提供］** ・園児の登降園を QR コードで記録できる機能も標準提供されている点 **［既読・未読確認機能］** ・お知らせや連絡帳等に対して保護者側の既読状態を確認でき、対応漏れを防止できる **［操作負荷の軽減］**

	・先生が写真投稿・連絡を書く時間を短縮できる構造。ある園では連絡帳作成時間が 10 時間 →2 時間に削減できたという声あり **［安全性・セキュリティ配慮］** ・園が承認した職員・保護者のみアクセス可能な環境で、情報漏洩リスクに配慮された運用設計 **［クラウド・モバイル対応］** ・スマホ・タブレット・PC からアクセス可能で、外出先からも確認や連絡ができる構成 **［写真・動画配信が無制限・追加料金なし］** ・投稿制限やオプション課金なしで、園の日々の様子を豊かに共有できる設計 **［人数無制限・定額制料金体系］** ・利用者数（園児数・保護者数）に関係なく一定料金で使える方式
期待される効果	**・事務効率化**：紙の連絡帳や配布物の手間を削減 **・情報伝達の正確性向上**：コミュニケーションの遅延や見落としを防止 **・保護者の安心感向上**：園での様子をリアルタイムで把握可能 **・外国語対応力の強化**：多言語機能によりインバウンド家庭にも対応 **・保育の可視化と信頼性向上**：写真・動画共有により園の透明性が増す **・電話対応負担の軽減**：保護者は忙しい時間帯でもアプリで連絡可能 **・通知漏れ防止**：既読管理でフォローしやすい体制を確保 **・登降園管理の効率化**：QR 打刻で手動記録ミスや転記作業を削減
価格	非公開（web 掲載なし、要問合せ）
導入事例	事例記載なし

事例情報 39　コノベル

機器名称	コノベル
開発企業名	VISH 株式会社（ヴィッシュ株式会社）
参照 URL	https://conobell.com/?utm_source=yahoo&utm_medium=cpc&utm_campaign=conobell&yclid=YSS.1001344331.EAIaIQobChMI-bu8xJnkjwMVKMNMAh3YuCiYEAAYASAAEgJeufD_BwE&sa_p=YSA&sa_cc=1001344331&sa_t=1758264204523&sa_ra=46
保育業務カテゴリ	保護者連絡・情報共有
機能	・**連絡アプリ機能**：職員・保護者間でのメッセージ配信、お便りのデジタル化に対応 ・**欠席・遅刻・早退連絡**：保護者からの通所予定変更をアプリ経由で受付 ・**児童基本情報管理**：児童の個人情報や支援記録を一元管理 ・**利用申請機能**：通所申請など施設利用に関する申請をデジタルで処理 ・**連絡帳機能**：日々のやりとりや支援内容を記録・共有可能 ・**実績記録票出力**：療育施設や放課後デイで必要な実績管理・記録票を自動生成 ・**クラウド型サービス**：インターネット経由で利用可能、施設側でのサーバ設置不要 ・**多端末対応**： - 管理 Web システム：Windows 10/11、Google Chrome 最新版対応 - タブレット管理画面：iPad（iOS 9.0 以降）対応 - 保護者向けスマホアプリ提供
特徴	**［児童発達支援・放課後等デイサービスに特化］** ・一般的な保育システムとは異なり、療育施設や放課後デイサービスに必要な業務（利用申請・実績記録・不定期な通所予定管理等）に対応。 **［業務効率化と事務負担軽減重視］** ・連絡手段のデジタル化や実績記録出力など、紙や手作業での運用を減らすことを目指して設計。 

	［クラウド型提供／導入ハードルの低さ］ ・施設側でサーバーを構築・維持する必要がなく、インターネット経由で利用可能。設置・メンテナンス負担を軽減。 **［操作性重視の UI 設計］** ・デジタル機器が苦手な保護者・職員でも使いやすいよう、直感的な画面設計を重視。 ・利用施設・職員・保護者すべてにゆとりをもたらすという理念のもと、「スマイルプラン」として無償で利用できるプランを提供していることが特徴の一つ。 **［実績と信頼性］** ・2024 年 8 月時点で、約 500 施設以上で導入実績あり（解約・閉園を除く） 第 18 回キッズデザイン賞受賞（子ども・デザイン面での評価）
期待される効果	・**業務効率化**：事務・連絡業務を削減し、職員が子どもや支援活動に専念できる ・**コミュニケーション強化**：保護者との即時性・透明性の高い連絡が可能 ・**実績管理の効率化**：療育記録・実績管理を最適化し、書類作成負担を軽減 ・**情報共有の円滑化**：クラウド化により記録ミスを削減 ・**導入容易性**：ICT 未導入施設でも導入しやすい環境を提供
価格	スマイルプラン（無償利用プラン）」が提供 他プラン・有償オプションは問い合わせ
導入事例	①**児童発達支援・放課後等デイサービス Link ファミリー** **（愛知県名古屋市）** 導入目的/ 導入前の課題：利用申請を紙で保護者から回収していたため、回収漏れや遅延が発生。スケジュール作成にも 3〜4 日かかっていた。 LINE ワークスを使って写真付き連絡帳を送っていたが、容量オーバーで写真が送れないなどの制限が問題になっていた。 実績記録票の作成、請求ソフトへの転記など二重作業が発生していた。 導入後の効果：利用申請やスケジュール作成など、紙ベースの業務がアプリ化され、大幅な時間短縮が実現。従来 3〜4 日かかっていた作業が「データ貼り付け」で完了。 写真付き連絡がチャットで可能になり、保護者とのコミュニケーションの質が向上。保護者からの「楽しそう」「様子がよく伝わる」という反響が得られている。 チャットで保護者から感謝の言葉が返ってくることが、現場スタッフのモチベーションにもつながる。 将来的には、実績記録票や個別支援計画をコノベルで本格運用することで、記録作成から請求までをスムーズにし、二重手間を削減する見込み。

事例情報 40　園支援システム＋バスキャッチ

機器名称	園支援システム＋バスキャッチ
開発企業名	VISH 株式会社（ヴィッシュ株式会社）
参照 URL	https://www.buscatch.com/kindergarten/
保育業務カテゴリ	複合型
機能	・**欠席・遅刻・バス不要連絡**：アプリから送信・自動反映 ・**預かり・延長保育管理**：予約受付、料金自動計算・集計、無償化対応、帳票作成 ・**登降園管理**：職員打刻を含む登降園情報を自動反映 ・**園児管理・記録支援**：名簿管理、保育計画、要録作成 ・**保護者連絡機能**：お知らせ配信、アンケート、掲示、連絡帳 ・**バスキャッチ機能**：GPS によるバス位置情報配信、到着予告メール、運行ルート作成 ・**請求・精算機能**：保育料計算、口座振替などキャッシュレス対応
特徴	**［多機能統合による一元管理］** ・登降園管理、児童台帳、預かり・延長保育管理、請求・口座振替、保護者連絡、お知らせ配信、アンケート、写真・動画共有、バス運行管理まで、園運営に必要な機能を 1 つのプラットフォームに集約。複数のシステムを併用する必要がなく、データの重複や転記ミスを防止し、園全体の情報共有を円滑化する。  **［リアルタイム性・即時反映］** ・欠席・遅刻・預かり保育・バス不要など保護者からの連絡がアプリ経由でリアルタイムに自動反映。朝の電話対応や手入力が不要になり、記録の正確性が向上。職員は同時に最新の状況を確認でき、引き継ぎ・緊急対応が迅速になる。 **［バス安全機能の強化］** ・GPS によるバス位置情報配信、到着予告メール、運行ルート作成を搭載。保護者は送迎計画が立てやすくなり、置き去り・乗り間違いのリスク低減にもつながる。職員側もバス運行状況を即時把握でき、引き継ぎ・緊急時対応がスムーズ。 ・自動計算・帳票出力による事務軽減：預かり保育料や延長保育料の集計・

	請求処理、行政向け帳票作成が自動化。複雑な処理の負担を大幅に削減し、保育士が教育・保育活動に専念できる環境を整える。 **［保護者との信頼関係構築］** ・保護者がアプリで 24 時間連絡・確認できる利便性と、バス位置通知・預かり保育料自動計算などの透明性により、園に対する信頼感・満足度が向上。園の「見える化」により、家庭と園が一体となって子どもの成長を支える体制が整う。 **［拡張性と将来性］** ・バスキャッチ機能や写真・動画配信などオプションを追加することで、園独自の運営スタイルに合わせてカスタマイズ可能。今後予定される新機能（例：AI による健康状態分析、食物アレルギー管理との連携など）にもスムーズに対応できる設計。
期待される効果	・**保護者の負担軽減と安心感の向上**：欠席・遅刻・送迎に関する連絡や手続きがスマホで簡便になり、バス位置通知によって送迎計画が立てやすくなることで、保護者の安心度が高まる。 ・**業務効率化と教育活動への集中**：朝の電話対応や記録作業が削減され、教育活動に時間を振り分けられるようになる。書類・帳票作成の負担も減り、さらに充実したサポート体制により安心して運用できる。結果として、保育の質向上と職員の働きやすさが両立する。
価格	初期費用：無料 月額料金：10,000 円〜1 施設（人数に関係なく） ※オプション（GPS 機器、追加機能）には別途費用あり
導入事例	**①学校法人志村学園 白山幼稚園（神奈川県川崎市）** 導入目的：欠席・遅刻・預かり保育などの連絡業務を ICT 化し、朝の電話対応を減らして保育士が子どもに向き合う時間を確保すること。また、送迎バス運行管理や預かり保育料の計算・請求処理を効率化し、情報の正確性と保護者へのサービス向上を目指した。 導入後の効果：保護者がスマートフォンアプリから欠席・バス不要・預かり保育の連絡を 24 時間送信できるようになり、電話対応が大幅に減少。預かり保育料の自動計算・請求処理により事務作業が軽減され、記録ミスも防止された。さらに、バスキャッチ機能で送迎バスの位置がリアルタイムに把握でき、到着予告メールが保護者に自動配信されるようになったことで、安心感と満足度が向上。職員もバス運行状況を即時に確認できるため、引き継ぎや緊急対応が迅速になり、子どもへの保育により多くの時間を充てられるようになった。

事例情報 41　CODMON

機器名称	CODMON
開発企業名	株式会社コドモン
参照 URL	https://www.codmon.com/
保育業務カテゴリ	複合型
機能	・**保護者連絡機能**：欠席・遅刻連絡、お知らせ一斉配信、アンケート ・**登降園／入退室・勤怠管理**：QR コード打刻、入退室記録 ・**請求管理・集金支援**：口座振替代行、キャッシュレス集金 ・**用品販売管理**：キャッシュレスでの用品購入対応 ・**帳票作成**：指導計画・日誌などの作成支援 ・**職員間連絡**：「せんせいトーク」による業務連絡ツール ・**保育ドキュメンテーション**：成長記録・保育記録 ・**写真・動画共有・販売**：園内活動の可視化 ・**シフト管理**：職員勤務シフト作成・調整 ・**発育・健康管理**：身体測定、健康記録、午睡チェック、午睡センサー連携 ・**給食管理**：献立やアレルギー管理 ・**バス運行管理**：送迎バスの運行支援 ・**セキュリティ管理**：「データあんしんパック」によるバックアップ ・**募集支援機能**：園児／職員募集に関する支援 ・**オンライン研修**：保育研修・基礎研修（自学自習型） ・**IoT／デバイス連携**：ベビーセンサーなど API 連携による拡張性
特徴	**［運用適応性とモジュール選択型構造］** ・すべての機能を無理に使うのではなく、園の運用スタイルや優先課題に応じて必要なモジュールを導入可能。無駄を省き、段階的に拡張できる設計。 **［迅速な機能改善・顧客フィードバック重視］** ・多くの施設で導入されているため、現場からのフィードバックを反映しやすい土壌があり、年間 300 件以上の機能改善実績を持つという報告もある。  

	［強固なセキュリティ・安心設計］ ・情報暗号化、特定施設以外からのアクセス制限等を実施。機密性を重視したクラウド運用。 **［補助金対応・導入支援体制］** ・補助金を利用した導入支援のノウハウを持ち、自治体や国の ICT 補助制度に対応できる体制が整備されている。 **［ICT／IoT 連携による拡張性］** ・ベビーセンサーや IoT デバイスとの連携を前提とした設計（API 連携）により、園の機器導入と一体化した運用が可能。 **［ペーパーレス監査対応］** ・全国の施設で印刷不要な監査を実現しており、監査資料を電子で提示できる機能を導入している施設が多数。 **［高い導入実績と継続率］** ・全国で 2 万施設以上・公立施設 6,000 以上に導入され、サービス継続利用率 99.8%という実績がある。多くの園が「導入効果を実感した」と回答しており、信頼性が高い。
期待される効果	・**事務負担の大幅削減**：毎朝の欠席・遅刻連絡電話が削減、手書き記録や紙帳票の転記作業が減る → 職員が子どもと向き合う時間が増える。（上田市導入事例で「保育記録作成時間が約半分になった」という報告） ・**情報伝達の迅速化・正確化**：保護者・職員間の連絡がアプリ経由でリアルタイムに行えるため、抜け・遅延・誤伝達の低減が期待される。 ・**保護者満足度の向上**：園からの情報発信、連絡の正確性向上、写真・記録の共有などにより、保護者との信頼関係が強まる。導入事例資料でも「保護者からの評判 UP」が掲げられている。 ・**監査・ルール遵守の効率化**：監査資料を電子で提示できる機能があるため、ペーパーレスで監査対応可能な施設が増えている。 ・**ICT／IoT 活用による高度運用**：午睡センサーとの連携やデータ活用により、安全管理・記録精度が向上し、運営品質が底上げされる。
価格	初期費用無料 定員 30 名まで月額 3,300 円（税込）、31～60 名まで月額 5,500 円、61～100 名まで月額 8,800 円、101 名以上は 100 名ごとに月額 5,500 円加算 オプション利用は別途料金
導入事例	**①キッズスマイル江東東砂（認可保育園／東京都江東区）** 導入前の課題：職員研修の内容が十分に共有されず、価値観のズレが課題だった。 導入後の効果：職員の学びと意識が統一され、最新保育知見へのアクセスが容易に。保護者にも研修内容を共有して共通理解を深め、園内外のコミュニケーションが活性化した。

事例情報 42　ウェルキッズ（WEL-KIDS）

機器名称	ウェルキッズ（WEL-KIDS）
開発企業名	株式会社ウェルキッズ
参照 URL	https://www.wel-kids.com/?utm_source=yahoo&utm_medium=cpc&utm_campaign=YSL_wk_General&yclid=YSS.EAIaIQobChMIsP6N5f7OjwMV0AR7Bx0c-hFDEAAYAyAAEgKcGfD_BwE&sa_p=YSA&sa_cc=&sa_t=1757534659522&sa_ra=67
保育業務カテゴリ	複合型
機能	・**登降園管理**：タッチパネル打刻・QR コード入力、出欠簿連動 ・**保護者連絡機能**：欠席・遅刻連絡、預かり・延長保育申請の Web 受付、自動反映 ・**連絡帳・お知らせ配信**：園だより、ブログ機能、カレンダー表示 ・**記録機能**：指導計画、保育日誌、ドキュメンテーション、成長記録、健康記録、午睡チェック ・**請求管理**：保育料金の自動計算、口座振替対応 ・**職員管理**：勤怠、シフト自動作成、勤務表作成、休暇申請 ・**バス運行管理**：送迎バスの運行・連絡支援 ・**写真販売サービス**：「WEL-KIDS フォト」による写真撮影・共有・販売 ・**保護者向けアプリ**：欠席・遅刻連絡、連絡帳入力、献立やお知らせの閲覧
特徴	**［業務一元化と自動化で効率向上］** ・園児台帳・登降園記録・出欠簿・保育料計算・保育日誌・健康記録・午睡チェックなど、保育現場で必要な情報を統合管理。手作業・転記・重複入力を削減し、集計・帳票作成も自動化できるよう設計されている。 例えば、異なる利用時間・利用者に応じた延長保育料の自動計算や、請求書発行時の時間内訳の表示なども可能と伝えられており、保護者への説明性も意識されている。  **［わかりやすさ・現場視点での操作性］** ・パソコンやタブレット操作に慣れていない職員でも使いやすいよう、画面構成をシンプルにし、直感的な操作を重視しているという説明が複数で見られる。登降園記録にはタッチ入力／QR コード入力機能があり、記

	録の即時反映や出欠簿との連動も可能。 **［勤怠・シフト管理に特化した機能］** ・保育園特有の勤務形態やルールを考慮した設定ができ、シフト振り分けルールを予め登録しておくと自動作成が可能という機能も紹介されている。職員の勤務状況を一覧で把握でき、休暇申請・残業・勤務表作成といった機能も統合されている。 **［保護者コミュニケーション強化機能］** ・保護者がスマホで欠席・遅刻連絡、連絡帳入力、園のお知らせ閲覧・園カレンダー確認などができる。ブログ公開機能や献立表示機能もあり、保護者との日常情報共有を増やしコミュニケーションを深めることを意図している。また、登降園記録との連動により、保護者が入力した情報がそのまま出席簿へ反映され、記録の手間やミスを減らす構造。 **［セキュリティ・信頼性設計］** ・登録済みのパソコン以外からのアクセスをブロックする仕組みや、個別 ID・パスワードによる閲覧制限、操作ログ取得機能などが導入されている。 クラウド型であることを活かし、制度改正や機能改善を迅速に反映できる体制を持つ点も信頼性の一要素とされている。
期待される効果	・**朝の電話対応削減**：保護者がスマホから欠席・遅刻連絡でき、職員の電話負荷を軽減。 ・**事務作業時間の短縮**：請求・集計・記録を自動化し、紙業務を削減。 ・**正確性とミス低減**：自動計算により転記・手計算ミスを防止。 ・**保護者満足度向上**：園からのお知らせ、写真・記録共有で安心感と信頼性を高める。 ・**職員の働きやすさ改善**：事務負担が減り保育に集中できる時間を確保。園内の意思統一と円滑なコミュニケーションも促進。
価格	月額使用料は 5,500 円（税込）～（初期費用なし） 基本プラン＋選択機能方式で、園児機能のみ・職員機能のみなど最小構成から始められる。
導入事例	**①さい桜保育園** サポートが手厚く、ICT に不慣れでもスムーズに導入・定着できた。紙や Excel で行っていた勤怠・請求・記録作業が WEL-KIDS で一元管理され、数日かかっていた請求処理が半日で完了。朝の電話対応も激減し、保育に集中できる時間が増えた。段階的導入とサポート体制により、ICT が苦手でも安心して活用できている。

事例情報 43　ルクミー

機器名称	ルクミー
開発企業名	ユニファ株式会社
参照 URL	https://lookmee.jp/
保育業務カテゴリ	複合型
機能	・**園児台帳・登降園管理**：出欠管理、記録統合 ・**指導計画・日誌・帳票作成**：教育・保育記録の効率化 ・**午睡チェックセンサー連携**：体動検知・自動記録 ・**非接触検温・健康管理**：体温記録の自動化 ・**写真・動画共有（ルクミーフォト）**：撮影、販売、保護者共有 ・**保護者連絡機能**：連絡帳・お便り・お知らせ・アンケート配信 ・**送迎バス管理（オプション）**：位置情報通知 ・**保育料管理**：計算・請求・口座振替 ・**職員管理**：シフト作成、勤怠管理 ・**カレンダー・行事予定共有**：園内外でのスケジュール共有 ・**データ安心バック**（バックアップ・セキュリティ）
特徴	**［多機能連携による業務一元化］** ・出欠・記録・写真・保育料計算・連絡帳など保育運営に必要な業務を 1 つのプラットフォームに集約。複数システムを併用する必要がなくなり、データ重複や転記ミスを防ぐ。 **［リアルタイム性と即時反映］** ・保護者がアプリから送信した欠席・遅刻・延長保育・バス不要などの情報が即時に反映され、朝の電話対応や手入力が不要になる。職員は最新状況を常に確認でき、引き継ぎ・緊急対応が迅速になる。  **［午睡チェック・検温の ICT 化］** ・センサーとアプリの連動により、午睡時の体動や検温記録を自動化。目視チェックや手書き記録の負担を減らし、見落としやヒューマンエラーを防止する。 **［写真活用による保護者満足度向上］** ・写真・動画の共有販売機能を通じて、保育内容をリアルタイムに可視化。

	家庭と園の距離を縮め、園への信頼感を高める。 **［導入後の伴走型サポート体制］** ・導入マニュアル、動画研修、サポート窓口など、IT に不慣れな職員でも安心して使いこなせる仕組みを整備。複数園・複数職員で同一アカウントを共有でき、新人教育・マニュアル整備も簡便。 **［セキュリティ・信頼性の確保］** ・ISO 認証・プライバシーマーク取得、通信暗号化、アクセス制限などのセキュリティ対策を実施し、個人情報保護にも配慮。 **［柔軟な拡張性］** ・「みてね」など他サービスとの写真データ連携、今後予定される新機能にもスムーズに対応できる設計。園独自の運営スタイルに合わせてカスタマイズ可能。
期待される効果	・**業務効率化と職員負担軽減**：出欠・連絡・帳票・保育料計算を自動化し、電話対応・転記作業を削減。保育士が子どもと向き合う時間を増やせる。 ・**保護者の安心感・満足度向上**：欠席・遅刻連絡やバス位置通知、写真共有をアプリで完結。園の状況がリアルタイムで「見える化」され、送迎や料金確認も容易に。 ・**ミス防止と記録精度の向上**：午睡チェック・検温記録を自動化し、誤伝達やヒューマンエラーを低減。 ・**園内コミュニケーションの円滑化**：職員間で最新情報を共有し、引き継ぎや緊急対応、保護者対応がスムーズに。
価格	月額利用料：5,000 円（税抜）～（定員数・職員数に関係なく） 午睡センサー等オプション機器は個数に応じ別途費用 補助金・助成金制度にも対応
導入事例	**①埼玉県戸田市　公立保育園（戸田市内の 5 園）** 導入の目的：午睡中の子どもの安全性を高めるため。 保育士の記録作業負担を軽減し、業務効率化を図るため。 職員の心的負荷（常に子どもを見張る責任感など）を軽くしたいとの意図。 導入後の成果・効果：日次・定期的な体動・呼吸チェックを、5 分毎に自動でセンサーが音で通知。これにより、目視だけでは見落としや隙間ができる時間を補える。 体位・体動・確認時間・対応職員名といった記録が自動入力されるため、手書きや転記作業が不要に。 異常（うつ伏せ寝など）があればアラームで知らせるため、速やかな対応が可能。 保育士の精神的な負荷が軽減したとの声。 保護者にも安心材料として好評。「目視だけでなく ICT で見守ってくれている」という説明により、信頼感が向上。特に SIDS（乳幼児突然死症候群）リスクの高い年齢層の保護者にとっては、安心を訴求できる。

資料 2：保育・介護の DX 教育に係る既存教材等情報収集 保育・介護の DX に関わる既存教材情報 40 件

保育・介護の DX に関わる既存教材情報 40 件

保育 ICT/DX			
1	保育現場のＩＣＴ活用ガイド：実践に役立つ・業務の効率化につながる	指導計画作成、デジカメ記録など、保育現場での ICT 活用の基本からの入門書。	書籍
2	ＩＣＴを使って保育を豊かに：ワクワクがつながる＆広がる 28 の実践	従来の保育実践に ICT を取り入れた 28 の事例を紹介 ICT 活用可能性の実践書	書籍
3	豊かな直接体験をベースに ICT で広がる保育	直接体験を基盤に、子どもの育ちに有効な ICT の取り入れ方を豊富な写真で紹介	書籍
4	これからの保育のための ICT リテラシー＆メディア入門	保育士をめざす学生が保育現場で遭遇する ICT リテラシーからソフトの操作方法	書籍
5	ＩＣＴを活用する 新しい時代の教育方法	教育の方法、技術の内容を基に授業作り基礎、ICT を活用した授業実践情報活用	書籍
6	保育所等における ICT ハンドブック「はじめての ICT」	ICT 導入の目的、種類、効果、導入ステップ、ポイントと対策を解説した実用書	政府資料
7	生成 AI の導入・活用に向けた実践ハンドブック	自治体及び保育施設や子育て関連事業者対象 生成 AI を活用する際の基本	政府資料
8	保育分野における ICT の導入効果及び普及促進方策に関する調査研究報	ICT 導入の効果検証と普及促進方策をまとめた調査研究報告書。導入事例や課題	政府資料
9	ロボット・AI・ICT 等を活用した保育士の業務負担軽減・業務の再構築	ロボット・AI・ICT 等を活用した保育現場の好事例を収集したモデル事例集	政府資料
10	こども政策 DX モデル事業（令和 6 年度） 事例集 概要版/詳細版	こども家庭庁によるこども政策 DX モデル事業（令和 6 年度）の事例集	政府資料
11	幼児・保育者の直接体験を広げる ICT 活用に関する調査研究	幼児期の直接体験と ICT 活用の関係性を調査した研究報告書。	政府資料
12	保育現場における ICT 導入の現状と課題	ICT システムの導入による利点や欠点、さらに普及させるため解決すべき課題	学術研究・論文
13	ルクミー ICT 活用事例集	全国 2 万件以上の導入事例まとめ。ICT に絞って抽出可能	事例集
14	コドモン 導入事例	登降園・連絡帳・保護者連携等の事例。	事例集
15	コミュなび（幼稚園・保育園向け ICT 導入実例）	保育 ICT 支援サービス・アプリの導入事例集	事例集
16	DX 推進保育現場の業務効率化解説・実例	一般 DX サービス視点からの保育 ICT 導入のメリット・事例を紹介	解説記事
17	保育 DX で業務効率化・ICT システム具体導入事例	一般会計支援サービス視点からの保育 ICT 導入のメリット・事例を紹介	解説記事
18	コドモン「保育ドキュメンテーション」機能	販売している保育業務支援ツールの紹介記事	解説記事
19	地域社会のデジタル化 参考事例集（自治体・NPO 等）	「子育て」分野に保育 DX 事例あり	事例集
20	園の働き方を変える ICT 活用事例集	静岡県内の保育園における ICT 導入事例集	事例集

21	保育・教育の DX が子育て・学校、地方自治を変える	「保育・教育の DX が子育て、学校、地方自治を変える」	書籍
22	保育 ICT サービスカタログ（アプリ一覧資料）	保育 DX アプリを一覧で比較できる資料	カタログ
23	Hoic（ホイック）	業務管理＋安全管理をまとめて DX 化したい園向け	アプリ
24	ICT×保育を考える 保育内容総論	保育内容と ICT の関係を整理し、子どもの発達を支える適切な活用を解説	書籍
25	KidsView（キッズビュー）	記録・指導計画中心の DX	業務支援システム
26	Child Care System（チャイルドケアシステム）	AI・データ活用寄りの保育 DX	業務支援システム
27	ほいぴた	アプリ単体より「DX 環境丸ごと整備」	業務支援システム
28	保育 DX 推進のカギは誰が握る？県・市町・法人の役割解説	保育 DX は県・市町・法人の連携と ICT 活用の推進体制づくり	解説
29	保育におけるデジタルメディア導入の検討：領域「環境」の視点から	横井良憲の研究：保育におけるデジタルメディア導入の意義と課題を検討	論文
30	園児のデジタルデバイス使用から考える ICT 活用教育の一考察	津田敏の研究：幼児の ICT 利用は拡大し、適切な活用が必要と指摘	論文
31	NTT 西日本 保育支援 ICT	保育 DX のインフラ・運営支援型サービス	業務支援システム
介護 ICT/DX			
32	居宅サービス事業所における ICT 機器・ソフトウェア導入に関する手引き	介護現場の ICT 化推進のための公式ガイドライン。ICT 導入の 7 ステップを詳細に解説。	政府ガイドライン
33	書籍『ICT 導入から始める介護施設の DX 入門ガイド』	ICT 導入から運用までを徹底解説した実務書。12 の活用事例を掲載。	書籍
34	介護記録アプリ「CAREKARTE」「カイポケ」「CareViewer」「Care-wing」	介護記録アプリ・ソフトの主要 4 製品の特徴を比較してまとめた	業務支援システム
35	介護業界の AI 活用事例 9 選人手不足業務負担を解決する最新テクノロジーとは	簡単な事例集	事例集
36	介護ロボットの効果的な活用のための手引き	介護ロボットの効果的な活用方法に関する研究事業」検討委員会が発行したガイドブック	政府資料
37	デジタルリハビリツール「デジリハ」	デジタル技術を活用して、リハビリを「辛い訓練」から「楽しい遊び」に変える手法	業務支援システム
38	介護テクノロジーの利用促進（厚労省）	業務改善のポイント集、厚生労働省の取り組む介護テクノロジーの利用促進事業の紹介	事例集・情報
39	介護サービス事業における生産性向上（業務改善）に資するガイドライン	介護現場特有の「ムリ・ムダ・ムラ」を把握して業務効率化の視点を持つ。	政府資料
40	介護現場における ICT の導入・活用事例集	複数の ICT 機器を組み合わせた実践的な活用方法を学ぶ。	政府資料

保育 ICT／教材事例 **1**

教材・資料名	保育現場のＩＣＴ活用ガイド ―実践に役立つ・業務の効率化につながる―
作者・出典元	田中 浩二（著）／中央法規出版
学習対象者	・ICT に苦手意識を持つ保育士・幼稚園教諭 ・業務効率化や安全管理体制を強化したい園長・主任 ・保育者を目指す学生
学習形態	書籍（B5 変型判・138 頁）
学習目標	・ICT の基礎知識（インターネット、クラウドの仕組み等）を理解し、苦手意識を解消する ・指導計画やおたより作成など、日常業務の効率化に直結する具体的な ICT 活用法を身につける ・安全管理、園内研修、子どもの遊び、保護者支援など、シーン別の実践的活用ノウハウを学ぶ ・これから現場に出る保育学生が必要とされる ICT スキルを習得する
内容構成	【目次】 第 1 章 ICT と保育現場の現状 第 2 章 ICT を理解・活用するための基礎知識 ・ハードウェアとソフトウェア、ネットワークの基本 第 3 章 業務の効率化からみた ICT の活用 ・文書作成（Word）、表計算（Excel）、プレゼン（PowerPoint）の活用 第 4 章 保育の実践からみた ICT の活用 ・安全管理、園内研修、遊びの環境構成、創作活動 第 5 章 保護者との連携・情報発信としての ICT の活用 ・ホームページ、SNS、連絡帳アプリ 第 6 章 保育学生の ICT 活用術 ・実習日誌、レポート作成、就職活動

	
価格	2,200 円（税込）
関連 URL 等	https://www.chuohoki.co.jp/site/g/g80588941/

教材・資料名	ＩＣＴを使って保育を豊かに ―ワクワクがつながる＆広がる 28 の実践―
作者・出典元	秋田 喜代美・宮田 まり子・野澤 祥子（編著）／中央法規出版
学習対象者	・子どもの興味や関心を広げるツールとして ICT を活用したい保育者 ・具体的な実践事例（あそび、環境構成）を知りたい方
学習形態	書籍（B5 判・192 頁・フルカラー）
学習目標	・身近な ICT 機器（スマホ、タブレット、Web 会議等）を使った 28 の具体的な保育実践事例から学ぶ ・「業務効率化」だけでなく、「子どもの育ちを豊かにする」ための ICT 活用視点を養う ・保護者への発信や、園と地域をつなぐツールとしての活用法を習得する
内容構成	【目次概要】 第 1 章　保育の場における ICT 活用の現状 第 2 章　子どもの育ちを豊かにする ICT 活用事例 ・気づく・知る（植物の観察、図鑑アプリ等） ・探究する（顕微鏡モード、動画で振り返り） ・表す・没入する（デジタルお絵描き、プロジェクション） ・伝える・対話する（他園とのオンライン交流） 第 3 章　保護者と園をつなぐ ICT 活用事例 第 4 章　園と地域の輪を広げる連携ツールとしての活用事例 第 5 章　保育の場での業務改善と ICT 活用 第 6 章　国際的な動向

	
価格	2,420 円（税込）
関連 URL 等	https://www.chuohoki.co.jp/site/g/g80588719/

教材・資料名	豊かな直接体験をベースに ICT で広がる保育 ―子どもの興味＆意欲が高まる！ICT 活用実践例―
作者・出典元	大豆生田 啓友（編著）／チャイルド本社
学習対象者	・保育士、幼稚園教諭、認定こども園の保育教諭 ・ICT を「受け身」ではなく「能動的」な遊びに取り入れたい方 ・自然観察や表現活動などの「直接体験」を、デジタルでさらに深めたい方
学習形態	書籍（AB 判・96 ページ）
学習目標	・ICT 機器（スマホ、タブレット、マイクロスコープ等）を、子どもの「もっと知りたい」「やってみたい」を引き出す“道具”として活用する手法を学ぶ ・「直接体験」と「ICT」を対立させるのではなく、融合させることで遊びがどう広がるかを理解する ・18 の具体的な実践事例（自然観察、表現遊び、交流等）を通じて、環境構成や援助のポイントを習得する
内容構成	【目次・構成】 巻頭対談： ・ICT は子どもの「もっと」を広げるツール （大豆生田啓友 × 井桁容子） PART1：興味・関心が広がる！ICT 活用実践例 18 ・自然と出会う・科学する （マイクロスコープで拡大、タイムラプスで変化を見る、図鑑アプリ活用） ・表現する・イメージを広げる （プロジェクターで空間演出、コマ撮りアニメ、音遊び） ・人・社会とつながる （Google Earth で世界旅行、他園とのオンライン交流） PART2：ICT 活用の環境とルール ・機器の選び方、セキュリティ、健康面への配慮（視力等） ・保護者の理解を得るためのポイント Q&A：現場の「困った」に答えます

	 
価格	2,970 円（税込）
関連 URL 等	https://www.palsale.jp/members/productdetail?data_id=5049

教材・資料名	これからの保育のための ICT リテラシー＆メディア入門 ―Word・Excel・PowerPoint・動画編集―
作者・出典元	渡邉 裕（編）／株式会社みらい
学習対象者	・保育士を目指す学生 ・ICT 操作に不安のある現役保育士
学習形態	書籍（B5 判・224 頁）
学習目標	・保育現場で遭遇する情報漏えいや SNS トラブル等のリスクを理解し、適切な情報倫理（守秘義務・著作権等）を身につける ・「おたより」「指導案」「名簿管理」など、実際の保育実務に即した Word、Excel、PowerPoint の操作スキルを習得する ・各ソフトの連携（Word と Excel の統合等）や、簡単な動画編集・SNS アップロードの手法を学び、保護者への情報発信力を高める
内容構成	【目次】 リテラシー編 1. 身近にある守秘義務 2. 身近にある情報漏えい 3. 保護者間の SNS に関するトラブル 4. データの紛失 5. 著作権 6. インターネットにあふれる情報をどう読むか 7. メールの送り方と基本的なマナー PC 操作編 ・PC 操作の基本 Word 編 ・Word の基本と特徴 ・テーマ 1：Word の基本操作 ・テーマ 2：表の作り方の基本 ・テーマ 3：図や表の入った文書の作成の基本 ・テーマ 4：テキストボックスや段組みなど、総合的な Word の使い方とレイアウト ・演習課題
	Excel 編 ・Excel の基本と特徴 ・テーマ 1：Excel の基本操作 ・テーマ 2：Excel の応用操作 ・テーマ 3：データベースとピボットテーブル ・テーマ 4：グラフと印刷 ・演習課題 PowerPoint 編 ・PowerPoint の基本と特徴 ・テーマ 1：PowerPoint の基本操作 ・テーマ 2：図形の使い方 ・テーマ 3：図・イラスト・表の配置やレイアウト ・テーマ 4：写真や動画のスライドショーの作り方 ・演習課題 総合編 ・テーマ 1：Word と Excel の統合的な使い方 ・テーマ 2：動画編集ソフトを用いた動画制作と SNS へのアップロード 
価格	3,300 円（税込）
関連 URL 等	https://www.mirai-inc.jp/books/detail.php?9784860155780

教材・資料名	ＩＣＴを活用する 新しい時代の教育方法
作者・出典元	佐藤 仁・伊藤 亜希子・和田 美千代（編著）／ミネルヴァ書房
学習対象者	・教職課程の学生（「教育の方法及び技術」「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」履修者） ・現場の教員、教育委員会関係者
学習形態	書籍（A5 判・228 頁）
学習目標	・従来の「教育の方法及び技術」の基礎理論（授業づくり、教育目標、評価）を理解する ・GIGA スクール構想や教育職員免許法改正に対応した「ICT 活用の理論と実践」を学ぶ ・「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」を実現するための具体的な ICT 活用デザインを習得する ・情報活用能力の育成や、デジタル・シティズンシップ教育の重要性と実践手法を知る
内容構成	【第Ⅰ部 授業をつくる】 第 1 章 教育方法を考える――なぜ教育方法を学ぶのか 第 2 章 教育目標の考え方――どのように授業の目標を設定するか 第 3 章 教材づくりを考える――どのような教材をつくり，授業で使うか 第 4 章 授業の展開過程――どのように授業を進めるか 第 5 章 学習形態の工夫――どのような形態で授業を進めるか 第 6 章 主体的・対話的で深い学びと個別最適な学びの実践 第 7 章 教育評価の考え方と方法――どのように子どもの学びを評価するか 第 8 章 学習指導案の作成――どのような考え方で学習指導案を作るのか コラム 1 特別活動の教育方法――デジタル・シティズンシップ教育 【第Ⅱ部 ＩＣＴを活用する】 第 9 章 「ＩＣＴを活用する」ための基本的事項――教職課程で学ぶこと 第 10 章 ＩＣＴ教育推進校の取り組み――福岡市立福岡西陵高等学校の実践事例 第 11 章 遠隔授業／オンライン授業をめぐる動向とこれからの教育 第 12 章 社会科におけるＩＣＴ活用の実際――授業実践から見えてくること 第 13 章 情報活用能力の育成に向けた実践 第 14 章 多様な子どもに対する支援の手立てとＩＣＴの活用（ユニバーサルデザイン）

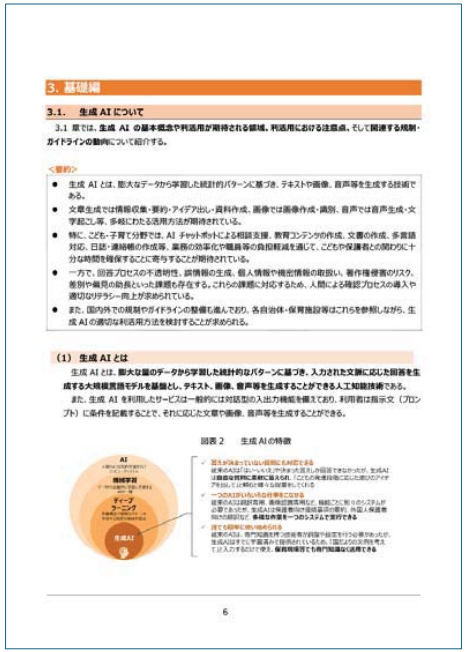
	第 15 章 ＩＣＴを活用した教育環境整備 コラム 2 コロナ禍における熊本市の ICT 活用 附録 学びを深めるためのリンク集 
価格	2,640 円（税込）
関連 URL 等	https://www.minervashobo.co.jp/book/b620336.html

保育 ICT／教材事例 **6**

教材・資料名	保育所等における ICT ハンドブック「はじめての ICT」
作者・出典元	こども家庭庁 （作成：三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング／作成協力：ユニファ株式会社）
学習対象者	・ICT の導入に不安を感じている園長・保育者 ・具体的な導入手順や他園の事例を知りたい施設運営者
学習形態	ハンドブック（PDF 資料・全 24 ページ）
学習目標	・「ICT は今の保育を否定するものではない」ことを理解し、導入の目的（働きやすさ、質の向上）を明確にする ・導入前の「土台づくり」から運用開始、振り返りまでの具体的な 4 ステップを習得する ・「保護者連絡」「請求事務」「記録業務」「成長見守り」など、タイプ別の活用事例を知る ・導入時の「つまずきポイント（資金、職員・保護者の理解）」への対処法を学ぶ
内容構成	第 1 章 保育 ICT 導入の前に ・「ICT 活用」には不安がある…？（大豆生田啓友先生からのメッセージ） ・保育分野における ICT ツール導入の目的 第 2 章 保育 ICT のはじめかた ・保育 ICT 導入のステップ ・【START】保育 ICT 導入前の「土台づくり」 ・【STEP01】導入するツールの決定 ・【STEP02】導入の準備・環境整備 ・【STEP03】保育 ICT ツールの導入 ・【STEP04】導入後の振り返りと次のステップ 第 3 章 保育 ICT 活用事例紹介 ・タイプ A：保護者コミュニケーションが円滑になった事例 ・タイプ B：請求関係の事務がカンタンになった事例 ・タイプ C：保育・監査等の記録を効率化した事例 ・タイプ D：一人ひとりの成長をより丁寧に見守る事例 ・Column：市全体の DX 化へ（岩手県北上市） ・応用編：データ連携でできること 第 4 章 保育 ICT 導入のポイント ・つまずきポイントと解決法（資金、体制、導入手順、理解促進）

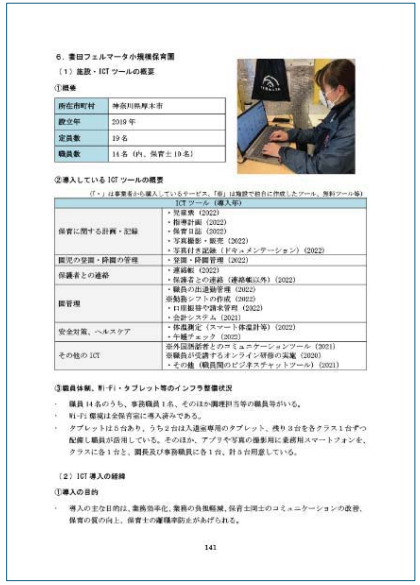
	・参考：アンケート調査からみえること 
価格	無料
関連 URL 等	https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2023/04/koukai_230413_12.pdf

教材・資料名	生成 AI の導入・活用に向けた実践ハンドブック（基礎編） 生成 AI の導入・活用に向けた実践ハンドブック（事例編）
作者・出典元	こども家庭庁
学習対象者	・制度主管課等に所属するこども・子育てに関わる自治体の職員 ・自治体及び関係機関等（保育施設や子育て関連事業者）の現場職員
学習形態	PDF 資料 ・実践ハンドブック（基礎編）：42 ページ ・事例編：50 ページ
学習目標	・生成 AI の基礎知識やこども・子育て分野における利活用可能性、リスク（ハルシネーション、個人情報等）を正しく理解する ・企画検討から導入準備、運用までの具体的な導入プロセスと、法令・ポリシーへの対応事項を習得する ・12 の実証事例（ユースケース）を通じ、自組織の課題に合った具体的な活用イメージと導入効果、難易度を把握する
内容構成	【実践ハンドブック（基礎編） 目次】 1. はじめに 1.1. ハンドブック作成の背景 1.2. ハンドブック作成の趣旨・目的 2. ハンドブックの使い方 2.1. ハンドブックの位置づけ 2.2. ハンドブックの構成及び活用方法 2.3. ハンドブックの留意事項 3. 基礎編 3.1. 生成 AI について (1) 生成 AI とは (2) 生成 AI の利活用が期待される領域 (3) こども・子育て分野での利活用可能性 (4) 生成 AI 利活用における注意点 (5) 規制やガイドラインの動向 3.2. 生成 AI の導入 (1) 生成 AI 導入の流れ (2) 企画検討フェーズ (3) 導入準備フェーズ (4) 導入・運用フェーズ

	(5) 法令・ポリシー等への対応事項 4. 事例編  【事例編（掲載事例一覧）】 1. 庁内資料(文章ベースの資料)の作成・修正作業支援 2. 広報物(イラストを含む資料)の作成支援 3. 「おたより」・「連絡帳」の作成支援 4. 会議記録・要約等の作成支援 5. 相談連絡記録の作成支援 6. 庁内データの加工・分析支援 7. こども・子育てに係るイベントや計画のアイデア創出支援 8. 保育施設等職員のカウンセリング支援 9. 住民・保護者に向けたお知らせの翻訳作業支援 10. こども・子育て関連の情報収集支援 11. 保育施設等内のインシデントの検知支援 12. こどもの写真の整理作業支援

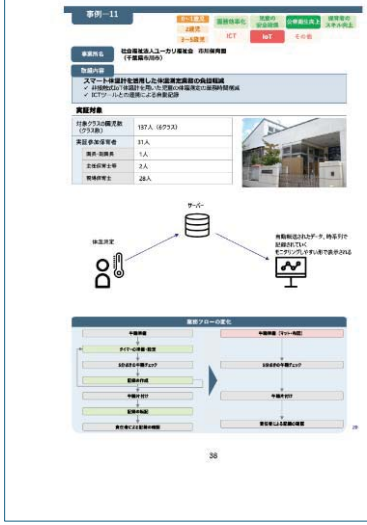
	
価格	無料
関連 URL 等	https://www.cfa.go.jp/councils/kodomo_seisaku_DX

教材・資料名	保育分野における ICT の導入効果及び普及促進方策に関する調査研究報告書
作者・出典元	三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング （こども家庭庁／令和 4 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業）
学習対象者	・行政職員（自治体の保育担当） ・保育施設の経営者、施設長（エビデンスに基づき導入検討したい方） ・保育研究者、団体関係者
学習形態	調査報告書（PDF 資料・全 400 ページ超）
学習目標	・保育者約 1,800 名へのアンケート結果に基づき、ICT 導入が業務負担（残業、持ち帰り仕事）や保育の質に与える定量的効果を把握する ・「ICT を使いこなせている層」と「そうでない層」の意識差を分析し、導入効果を高めるための要因（研修、リーダーの存在等）を特定する ・導入が進まない阻害要因（コスト、職員の苦手意識、自治体の意向）を理解し、その対策を検討する ・全国の先行事例（13 園・自治体）の詳細なヒアリング結果から、導入プロセスや現場での工夫を学ぶ
内容構成	【第 1 章 調査概要】 ・調査目的、実施概要（有識者会議、アンケート、ヒアリング） 【第 2 章 調査全体のまとめ】 ・調査の枠組み（初期アウトカム：業務負担、中期アウトカム：保育の質） ・調査結果の概要（導入効果、阻害要因、支援策の提言） 【第 3 章 保育者向けアンケート調査結果】 ・基本集計（属性、業務負担の実態、導入状況） ・ICT の導入効果に関する分析 - 使いこなし度とメリット実感の相関 - 業務負担（書類作成、残業等）との関係分析 - 保育の質（子どもとの関わり、保護者連携）との関係分析 【第 4 章 保育所等ヒアリング調査結果】 ・ICT 導入済み 10 事例 （認定こども園さくら、認定向山こども園、正休ののはな保育園、足立このみ保育園、妻田フェルマータ小規模保育園、公郷こども園、北上市、うれしの認定こども園、小規模保育園おおきな木、A 市） ・未導入・検討中 3 事例（B 園、C 園） 【第 5 章 保育所等におけるはじめての ICT 活用ハンドブック】 ・（※資料 6「はじめての ICT」の本体内容）

	【資料編】 ・調査票、統計表（クロス集計結果） 
価格	無料
関連 URL 等	https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/aa0e4fcc-4e05-48cf-a2a0-ff9a5f702230/635c4927/20231023_policies_kosodateshien_chousa_suishinchosar04-02_h02.pdf

保育 ICT／教材事例 **9**

教材・資料名	ロボット・AI・ICT 等を活用した保育士の業務負担軽減・ 業務の再構築に関する調査研究
作者・出典元	株式会社野村総合研究所 （厚生労働省／令和 2 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業）
学習対象者	・最新テクノロジー（AI、ロボット、IoT）の導入を検討している法人経営者 ・業務フローの抜本的な見直し（BPR）やタスクシフトに関心のある管理者 ・ICT 導入時の現場の心理的負担や抵抗感を軽減したい施設長
学習形態	調査報告書（PDF 資料・全 152 ページ）
学習目標	・午睡チェック、連絡帳、日誌作成等における ICT・ロボット活用の定量的効果（時間削減）を把握する ・モデル事業（実証実験）で明らかになった「導入当初の業務負荷」や「現場の心理的変化」を理解する ・「前方検証（仮説検証）」と「後方検証（導入済み園の分析）」の比較から、成功の要因を学ぶ ・単なるツール導入に留まらず、保育周辺業務の切り出し（タスクシフト）を行う重要性を知る
内容構成	第 1 章 本調査研究の背景・目的及び手法 第 2 章 モデル事業の実施 1. モデル事業の実施方法（前方検証・後方検証） 2. モデル事業の成果（実証 10 事例の検証結果） ・文書作成の省力化（音声入力、テンプレート活用） ・午睡チェックセンサーによる心理的負担軽減 ・スマート体温計による検温業務の効率化 ・動画研修システムの活用効果 第 3 章 ヒアリング調査結果（先進 10 施設の詳細事例） 1. 社会福祉法人善隣福祉会 東玉川善隣保育園 2. 社会福祉法人仁岳会 梅の実保育園 3. 社会福祉法人幸倫会 陽西保育園 4. 社会福祉法人ユーカリ福祉会 市川保育園 5. 株式会社日本保育サービス アスク大泉学園保育園 6. 社会福祉法人希望の会 こだま保育園 7. 企業内保育所 ヤクルトキッズスクール須磨保育園 8. 社会福祉法人やしろ中央会 社中央第一こども園 9. 企業主導型保育事業所 繭の糸保育園

	10. 株式会社グローバルキッズ（本部一括導入事例） 第 4 章 総括 ・ICT 導入における課題（通信環境、リテラシー、コスト） ・業務再構築（BPR）に向けた提言 
価格	無料
関連 URL 等	https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000861861.pdf

教材・資料名	こども政策 DX モデル事業（令和 6 年度）事例集 詳細版
作者・出典元	こども家庭庁（作成：こども政策 DX 推進チーム／受託事業者）
学習対象者	・自治体のこども・子育て支援担当職員（DX・BPR 推進担当） ・保育施設、産後ケア事業者の運営責任者 ・自治体 DX を支援するベンダー、開発事業者
学習形態	事例集（PDF 資料／259 ページ）
学習目標	・DX・BPR の推進手順（現状把握、課題特定、基本構想、体制構築、効果測定）を体系的に理解する ・「ロジックモデル」を用いた効果検証指標（KPI）の設定方法と、介入/非介入群の比較分析手法を学ぶ ・保育所補助金申請（沖縄県 3 自治体連携）や産後ケア（東京都東村山市、新潟県糸魚川市等）の先行事例から、具体的なシステム構成と導入効果（時間削減率等）を把握する ・導入時の「現場の抵抗感」や「デジタル不慣れな職員への対応」など、実務的な課題への対処法を知る
内容構成	【目次】 第 1 章 はじめに 1. 事例集の背景と目的 2. DX・BPR に関する基礎知識 3. DX・BPR と親和性が高い業務 第 2 章 DX・BPR の推進手順 1. 現状把握・課題の特定 2. 基本構想・導入準備 3. 体制構築 4. DX の導入時の工夫 5. DX・BPR の施策効果の測定・検証 第 3 章 モデル事業個別事例 事例① 沖縄県那覇市 ・テーマ：保育・行政 DX（補助金申請のオンライン化） ・取組：沖縄県 2 市 1 町共通の取組として、補助金申請や事務処理に係る自治体および保育施設の負担軽減を目指す。 事例② 沖縄県南城市 ・テーマ：保育・行政 DX（補助金申請のオンライン化） ・取組：広域連携（那覇市・西原町との共同）による標準化と業務効率化。

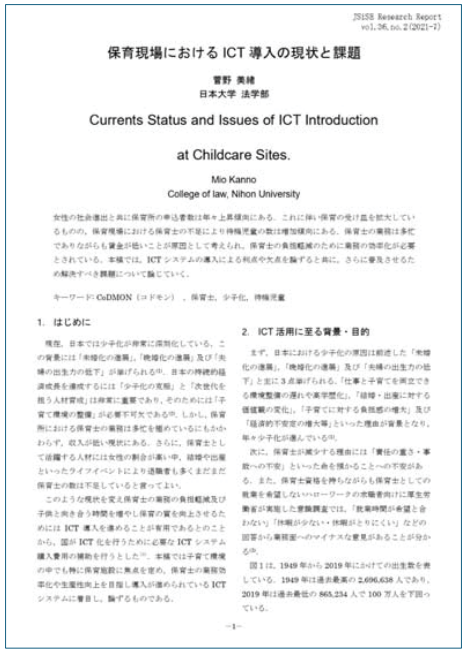
	事例③ 沖縄県西原町 ・テーマ：保育・行政 DX（補助金申請のオンライン化） ・取組：担当者が少ない小規模自治体における広域連携のメリット活用。 事例④ 東京都東村山市 ・テーマ：産後ケア DX ・取組：既存の市ポータルサイトと連携し、産後ケア事業の利用券をデジタルクーポン化。利用申請や実績確認等に係る市・事業者・利用者間の利便性向上と事務作業軽減を目指す。 事例⑤ 新潟県糸魚川市 ・テーマ：産後ケア DX ・取組：産後ケアの予約アプリ導入及び BPR により、利用者の利便性を向上させるとともに、自治体事務（産後ケア利用回数管理等）の軽減を目指す。 事例⑥ 沖縄県沖縄市 ・テーマ：産後ケア DX ・取組：産後ケアにおけるオンライン利用申請、施設予約システムと利用実績報告の連動等により、利用者・施設・行政の手続きをデジタル化し、業務負荷軽減を目指す。 事例⑦ 東京都青梅市 ・テーマ：窓口業務 DX ・取組：手当の説明・判断・書類記載・内容確認等の窓口対応に DX 化を講じることで、市民の利便性向上・職員の事務負担軽減を目指す。 事例⑧ 大阪府和泉市 ・テーマ：窓口業務 DX（プッシュ型通知） ・取組：LINE を活用して子育て関連サービスの通知を送信し、サービスの認知向上を目指す。子育て関連サービスのオンライン申請フォームの構築、庁内決裁の電子化を通じた事務処理負担の軽減を目指す。 事例⑨ 岩手県一関市 ・テーマ：その他（訪問支援・マッチング） ・取組：「子育て世帯訪問支援事業」「ファミリー・サポート・センター事業」の利用者/サポーター管理やマッチング業務への DX 導入により、業務効率化・市民の利便性向上を目指す。 事例⑩ 東京都府中市 ・テーマ：その他（相談業務） ・取組：過去に寄せられた相談事例データベースを導入し、市民の健康懸念や育児不安の解消および保健師の業務負担軽減を目指す。

	 
価格	無料
関連 URL 等	https://www.cfa.go.jp/councils/kodomo_seisaku_DX

教材・資料名	幼児・保育者の直接体験を広げる ICT 活用に関する調査研究 （令和 5 年度文部科学省委託「幼児教育施設の機能を生かした幼児の学び強化事業」報告書）
作者・出典元	文部科学省 （受託：学校法人七松学園 認定こども園七松幼稚園／協力：東京大学発達保育実践政策学センター 等）
学習対象者	・幼稚園教諭、保育士、保育教諭 ・幼児教育における ICT 活用のあり方を検討する研究者、行政担当者
学習形態	調査研究報告書（PDF 資料）
学習目標	・先進園における「幼児自身の ICT 活用実態」と、それに対する保育者の意識や環境要因を理解する ・ICT（タブレット、VR 等）が、幼児の直接体験や興味関心を阻害するのではなく、どう拡張・深化させるか（コロナ禍の知見含む）を学ぶ ・VR（仮想現実）を活用した「危険行為場面体験プログラム」の学習効果と、安全教育への応用可能性を知る
内容構成	序章 新型コロナウイルス感染症下における幼児の体験を豊かにする ICT 活用に関する調査研究 第 1 章 ICT 活用が進んでいる園での幼児の ICT 活用実態 ・先進園（七松幼稚園、宮川幼稚園など）での観察調査 第 2 章 幼児教育におけるデジタル機器・ICT ツールの活用に関する教諭の意識とその背景要因の検討 ・保育者へのアンケート調査分析 第 3 章 幼児の ICT 利用に関する保育者の認識 ・インタビュー調査結果 第 4 章 Virtual Reality を活用した子供の危険行為場面体験プログラムの学習効果 ・VR を用いた交通安全等の疑似体験とその教育効果の検証

	
価格	無料
関連 URL 等	https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1405077_00022.htm

教材・資料名	保育現場における ICT 導入の現状と課題 （JSiSE Research Report Vol.36, No.2）
作者・出典元	菅野 美緒（日本大学 法学部） 出典：教育システム情報学会（JSiSE）研究報告
学習対象者	・保育への ICT 導入効果や課題を客観的なデータ（アンケート結果）から知りたい研究者、学生 ・現場の保育士が抱える「ICT に対する本音（期待と不安）」を把握したい施設管理者
学習形態	研究報告書（PDF 論文・4 ページ／2021 年 7 月発行）
学習目標	・現役保育士へのアンケート調査（有効回答 54 名）に基づく、実際の ICT 導入率（約 48%）と利用実態を把握する ・ICT 導入により「業務効率が上がった」と感じる割合（約 88%）や、具体的に削減効果が高かった業務（登降園管理、連絡帳）を知る ・現場が抱える懸念事項（情報漏洩、システム障害への不安）を理解し、導入時の対策に活かす
内容構成	1. はじめに ・少子化、待機児童問題、保育士不足と業務過多（手書き業務の負担）の現状 2. 保育現場の現状 ・有効求人倍率の高止まりと低賃金の実態 3. アンケート調査の概要 ・対象：現役保育士（20 代中心、勤続 1〜5 年が過半数） 4. 調査結果 ・導入状況：導入済みは 48.1%、未導入は 51.9% ・利用機能：登降園管理（80.8%）、園児情報管理（57.7%）、連絡帳（34.6%） ・導入効果：約 9 割が効率化を実感 ・懸念点：個人情報の漏洩（70.4%）、システムダウン時の対応（63.0%） 5. おわりに ・負担軽減による「子どもとの関わり時間」の増加効果と、今後の普及課題

	
価格	無料（学会サイト等で公開）
関連 URL 等	https://www.jsise.org/society/committee/2021/2nd/TR-036-02-1-1.pdf

教材・資料名	ルクミー ICT 活用事例集 （導入園のビフォーアフター事例）
作者・出典元	ユニファ株式会社
学習対象者	・ICT 導入による具体的な効果（時間削減、質の向上）を知りたい経営者 ・「写真販売」「お昼寝チェック」など特定機能の活用法を学びたい現場リーダー
学習形態	Web 事例集（記事・インタビュー動画）
学習目標	・「午睡チェック」や「写真販売」などの単機能導入から始めるスモールスタートの有効性を知る ・ドキュメンテーション活用により、保護者との対話がどう変化するかを具体的エピソードから学ぶ ・ICT 導入によって生まれた時間を「保育の振り返り」や「子どもと向き合う時間」に転換した成功事例を知る
内容構成	【事例の分類】 1. 目的・成果別 ・手書き業務の削減、業務の手間を削減 ・心のゆとり創出、若い職員の成長 ・写真の保存・印刷・掲示の簡素化 ・保育の振り返り、ドキュメンテーションの活用 ・保護者コミュニケーション（保育の共有） ・安全性の向上（午睡チェック等） 2. 施設形態別 ・認可保育園、認定こども園、幼稚園 ・自治体・公立園（戸田市、袋井市、尾張旭市など） ・企業主導型、小規模保育 3. 利用機能別事例 ・「ルクミー午睡チェック」での安全性向上と記録負担減 ・「ルクミーフォト」導入による写真管理業務の自動化 ・「すくすくレポート（保育 AI）」活用による成長記録の言語化支援 【ルクミー サービス一覧】 ■保育現場の業務負荷軽減 ・ルクミークラスボード（クラス情報一元管理） ・ルクミー帳票管理（指導計画・日誌作成）

	・ルクミー午睡チェック（センサー・アプリ記録） ・ルクミー体温計（検温記録連携） ■保育の質＆保護者コミュニケーション支援 ・ルクミーフォト（インターネット写真販売・自動アップロード） ・ルクミードキュメンテーション（写真付き記録・掲示物作成） ・ルクミー連絡帳（アプリ連絡帳） ・ルクミーおたより（一斉配信） ・ルクミーバス位置情報（GPS 送迎バス管理） ・保護者対応すいすいパック（アンケート実施など） ■園・施設の運営支援 ・ルクミー園児メモリー（園児台帳・要録） ・ルクミー登降園（打刻管理） ・ルクミー請求管理（保育料計算・口座振替） ・ルクミーシフト管理（勤怠管理・シフト作成） ・ルクミー園モール（用品販売・キャッシュレス集金） 
価格	無料（Web サイトにて公開）
関連 URL 等	https://lookmee.jp/case/

教材・資料名	コドモン 導入事例 （公立・私立・施設類型別事例集）
作者・出典元	株式会社コドモン
学習対象者	・自園と同じ施設形態（幼稚園、認可外、学童、療育など）の成功事例を探したい方 ・特定の課題（残業削減、離職防止、監査対応）を解決したい経営者
学習形態	Web 事例集（検索機能付きデータベース）
学習目標	・「施設種別」「利用サービス」「成果」の 3 つの切り口から、自園にマッチする先行事例を見つける ・導入によって「どのような成果が出たか（保護者の評判 UP、残業削減など）」を具体的に知る ・他園がどの機能を組み合わせて課題解決したか（例：連絡帳＋午睡センサー＋請求管理）を学ぶ
内容構成	【導入事例の検索カテゴリー】 1. 施設種別で探す ・認可保育園、認定こども園、小規模認可保育園 ・認証・認定保育園、企業主導型保育園、認可外保育園 ・自治体・公立施設、小学校・中学校 ・学童保育、児童発達支援施設・放課後等デイサービス ・学習塾・習い事 2. 利用サービスで探す ・連絡帳・保護者連絡、登降園管理、請求管理、口座振替代行 ・帳票作成、保育ドキュメンテーション、写真共有・販売 ・シフト管理、給食管理、午睡チェック、バス運行管理 ・園児/職員募集、連携サービス、保育研修、基礎研修、職員間連絡 3. 成果で探す ・保護者からの評判 UP、手書き業務の削減、保育・教育の質向上 ・事務の省力化、先生間のコミュニケーション改善 ・電話対応業務の削減、先生の残業削減、離職率削減 ・施設状況の見える化、園児募集促進、職員求人応募数 UP 【お役立ち情報・コラム】

	・業界資料・レポート集（ICT 白書、調査データ等） ・コドモンコラム（保育の質、経営、ICT 活用ノウハウの解説記事） 
価格	無料（Web サイトにて公開）
関連 URL 等	https://www.codmon.com/case/

教材・資料名	コミュなび 導入実例 （バス位置情報・入退室管理特化型）
作者・出典元	株式会社テクラフト（販売：キヤノン MJ グループ等）
学習対象者	・通園バスの運行管理や安全対策に課題を持つ幼稚園・こども園 ・複雑な預かり保育の料金計算や請求業務を自動化したい事務担当者 ・保護者への電話連絡やプリント配布の手間を削減したい園長
学習形態	Web 事例紹介
学習目標	・具体的な導入事例（Before/After）を通じて、自園の課題（電話対応、バス運行管理、集金業務等）がどう解決されるかをイメージする ・「バスなび（GPS）」や「出欠申請なび」などの機能活用により、保護者と職員双方の負担がどう軽減されるかを知る ・現場の先生や保護者のリアルな声（メリット・デメリット）を参照し、システム選定の判断材料にする
内容構成	【主な導入事例詳細】 1. 学校法人 神宮学院（認定こども園寺尾幼稚園など／新潟県） [Before] ・感染症流行時の欠席電話対応に追われていた ・バスや預かり担当職員への伝達ミスが発生していた [After] ・電話対応が激減し、子どもと関わる時間が増加 ・アプリ経由の申請で、感染症状況が一目で把握可能に ・GPS バス位置情報により、雪や渋滞時の保護者の待ち時間を解消 2. 学校法人 杉の子学園（認定こども園すぎのこ幼稚園など／青森県） [Before] ・職員の業務負担を軽減したく、システムを探していた [After] ・煩雑な預かり保育の申請・集計・請求業務が大幅に軽減 ・忙しい朝の電話対応がなくなり、保護者・職員双方のストレスが減少 ・「教育・保育現場を熟知して作られた」使いやすい UI/UX を評価 3. その他の活用事例（短評） ・セント・ベル幼稚園（東京都）：日々の業務に不可欠なインフラとして定着

	・有馬白百合幼稚園（神奈川県）：帳票出力のカスタマイズ要望にも柔軟に対応 ・岩見沢聖十字幼稚園（北海道）：手厚いサポート体制を評価 【コミュなび 機能・サービス一覧】 ・バスなび：GPS によるバス位置情報配信、遅延通知 ・出欠申請なび：アプリからの欠席・遅刻連絡 ・登降園 and 精算なび：IC タグ/QR コード打刻、預かり保育料自動計算 ・連絡なび：一斉メール配信、既読確認、アンケート集計 ・ぎゅっとなび：おたより・動画配信、連絡帳機能 ・支払なび：口座振替データ作成、未納管理 ・写真コレなび：イベント写真のネット販売 ・シフトなび：職員のシフト作成・勤怠管理 ・みまもりなび：午睡チェックセンサー連携 
価格	無料（Web サイトにて公開）
関連 URL 等	https://tecraft.co.jp/comyu/example/

教材・資料名	保育業界で期待される DX 推進！現場の課題や活用事例 （NotePM 活用事例）
作者・出典元	NotePM（運営：株式会社プロジェクト・モード）
学習対象者	保育園・保育施設の経営者、園長、保育士、保育業界での業務改善や DX 導入に関心のある方
学習形態	Web 解説記事（ブログ形式）
学習目標	・保育業界における「DX」の定義と、単なる「デジタル化」との違いを理解する ・保育現場が抱える「人材不足」や「保育の質確保」といった課題に対し、DX がどう寄与するかを学ぶ ・登園管理や事務作業など、具体的に DX で効率化できる業務範囲を把握する ・実際の導入事例（労働条件の改善、保護者連携の円滑化、情報共有の強化）を通じて、自園での活用イメージを持つ
内容構成	1. 保育業界でも DX 推進が期待されている ・DX の意味と定義（経済産業省の定義など） ・「デジタル化」「ICT 化」と「DX」の違い 2. 保育業界で DX により解決したい課題 ・深刻な保育士不足への対応 ・業務効率化による「保育の質」の確保 3. 保育業界で DX による効率化が期待できる作業 ・登園管理（IC カードやタブレット活用） ・事務作業（日誌、指導案、自治体提出書類の自動化） ・園児情報管理（アレルギー情報などのデータベース化） ・保育料金集計（延長保育料等の計算自動化） 4. 保育業界における DX 活用事例 ・事例 1：業務時間削減による労働条件・定着率の改善 ・事例 2：アプリ活用による保護者連絡の負担軽減 ・事例 3：情報共有ツール（NotePM）による属人化解消と効率化 5. まとめ

	
価格	無料（Web サイトにて公開）
関連 URL 等	https://notepm.jp/blog/16030

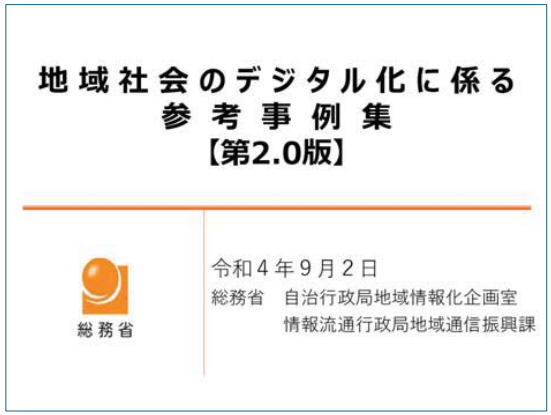
教材・資料名	導入事例：社会福祉法人昊天宮保育園（バックオフィス業務の DX 化で効率アップ！総業務時間 30％削減を実現）
作者・出典元	フリー株式会社
学習対象者	保育園・認定こども園・幼稚園の経営者、園長、事務長、バックオフィス担当者 （特に外部委託との連携に課題を感じている施設や、業務過多に悩む施設）
学習形態	Web 記事（導入事例インタビュー）
学習目標	・外部委託していた会計・給与計算業務をクラウドツールで内製化するメリットを学ぶ ・アナログ（手計算・紙）からデジタルへ移行することで、業務時間を 30%削減した実例を知る ・職員のスマホで給与明細を確認できるようにするなど、現場職員の満足度向上につなげる方法を理解する ・クラウド会計の導入により、経営層がリアルタイムに数字を把握し、意思決定を早める効果を学ぶ
内容構成	1. 導入前の課題 ・職員増加（55 名→75 名）に伴い、外部委託先との連携コストが増大 ・給与計算の締め切りに追われ、確認時間が確保できない（銀行振込がギリギリ） ・手計算や紙の給与明細によるミスや配布の手間 2. 導入の決め手 ・職員がスマートフォンで自身の給与明細や勤怠を確認できる利便性 ・クラウド上でのデータ共有により、外部委託（確定申告等）ともスムーズに連携可能 ・法改正（社会保険料率など）への自動対応 3. 導入プロセスと乗り越えた壁 ・旧来の手法と freee の並行運用による検証期間 ・チャットサポートを活用した不明点の解消 4. 導入後の効果 ・バックオフィス業務の内製化により、数字のブラックボックス化を解消 ・給与計算・振込業務に「丸 1 日」の余裕が生まれた ・社会保険・労働保険の手続きがボタン一つで完了し、大幅に効率化 ・経営層へのタイムリーな会計報告が可能になり、設備投資判断などが迅速化

	5. 今後の展望 ・freee を活用した職員の健康管理・健康診断の導入 
価格	無料（Web 公開記事）　※ツール利用料は別途必要
関連 URL 等	https://www.freee.co.jp/cases/jintengu-hoikuen/

教材・資料名	CoDMON 保育ドキュメンテーション
作者・出典元	株式会社コドモン （監修：玉川大学 教育学部 教授 大豆生田 啓友 氏）
学習対象者	保育士、幼稚園教諭、保育施設の施設長・主任 （特に「子ども主体の保育」を目指す園や、記録業務の効率化を図りたい現場職員）
学習形態	OJT（実務実践）、オンラインマニュアル、セミナー・研修動画 ※コドモンのシステム内で日々実践しながら学ぶ形式
学習目標	・「子ども主体の保育」を実現するための記録手法（ドキュメンテーション）を習得する ・日々の保育を「写真＋コメント」で記録し、振り返る習慣を身につける ・記録業務（日誌・掲示物・連絡帳・週日案）を一括作成し、業務時間を短縮する ・ドキュメンテーションを媒介に、職員間や保護者との対話を深め、保育の質を向上させる

内容構成	 1. 保育ドキュメンテーションの基礎（理論） ・ドキュメンテーションとは：子どもが活動に夢中になっている瞬間を「写真」と「コメント」で記録する手法 ・目的：子どもの興味・関心の見える化、対話のきっかけ作り 2. システム活用・実践（CoDMON 機能） ・「日々の記録」の作成：タブレット等で写真を撮り、コメントを入力 ・一括展開（ワンライティング・マルチユース）： 作成した記録を「クラス日誌」「掲示物（ドキュメンテーション）」「保護者連絡帳」「週日案」へ自動転記 3. 活用・振り返り（サイクル） ・対話・省察：写真を見ながら職員同士で語り合い、次の指導計画（予想・計画）へ活かす ・保護者共有：掲示物やアプリ配信を通じて、子どもの育ちを保護者と共有する
価格	コドモン利用料（オプション費用）
関連 URL 等	https://www.codmon.com/connect/documentation/

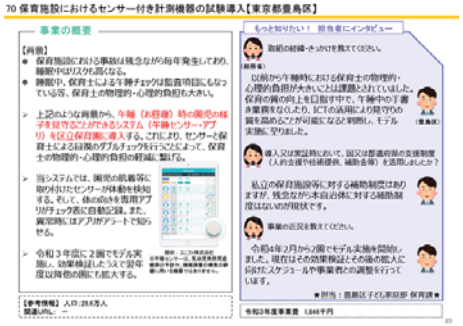
教材・資料名	地域社会のデジタル化に係る参考事例集【第 2.0 版】
作者・出典元	総務省 自治行政局・情報流通行政局 編集
学習対象者	・自治体の DX 推進担当者、政策企画担当者 ・保育園、幼稚園、学校教育関係の経営者および施設長 ・地域課題解決（子育て支援、防災、医療等）に取り組む NPO や民間企業
学習形態	PDF 資料（事例集・ハンドブック）
学習目標	・全国の自治体における DX 活用事例（全 200 事例）から、自組織の課題解決のヒントを得る ・「子育て」「教育」「医療・福祉」など分野ごとのデジタル実装パターンを理解する ・各事業の「事業費（予算規模）」や「活用した国の支援制度（補助金）」を把握し、導入計画の参考にする
内容構成	1. 地域活性化（地域おこし協力隊、マッチングハブ等） 2. 住民生活（広報アプリ、相談窓口等） 3. 消防・防災 4. 医療・福祉・健康 5. 子育て（SNS 相談、母子手帳アプリ、翻訳、午睡センサー、見守り） 6. 公衆衛生 7. 環境 ～（中略）～ 15. 教育（遠隔授業、不登校支援、AI ドリル等） 16. デジタルデバイド対策 ～（全 20 分野） 【抜粋・詳解】子育て・保育関連の DX 事例



1. 保育施設における午睡見守りの自動化（No.70）
実施団体: 東京都豊島区
取組名: 保育施設におけるセンサー付き計測機器の試験導入
課題: 保育士による午睡（お昼園）チェックの心理的・物理的負担（SIDS 対策等での目視記録の手間）。
DX の内容: 園児の肌着等に取り付けたセンサーが体動や体の向きを検知し、専用アプリがチェック表に自動記録。異常時にはアラートで通知するシステムを導入。
成果/効果: センサーと目視のダブルチェック体制により、安全性の向上と保育士の事務負担軽減（手書き業務の削減）を実現。
事業費: 1,846 千円（令和 3 年度）

2. 多言語翻訳アプリによる保護者連絡の円滑化（No.69）
実施団体: 静岡県菊川市
取組名: 言語による意思疎通の壁を取り払う翻訳アプリの導入
課題: 日本語での意思疎通が難しい外国人の保護者に対し、休園連絡などの緊急情報伝達が困難。
DX の内容: 市営幼稚園において、多言語同時翻訳アプリ「kotozna」を導入。109 か国語に対応し、ポルトガル語など需要の高い言語で円滑なコミュニケーションを図る。
成果/効果: 急な連絡や簡易なやり取りが可能となり、情報伝達の確実性が向上。
事業費: 19 千円（令和 3 年度）

	3. 母子手帳アプリとプッシュ型支援（No.68 & No.25） 実施団体: 北海道共和町（No.68）、千葉県千葉市（No.25） 取組名: 母子手帳アプリを活用した子育て支援 ／ 市民に向けたプッシュ型通知 課題: 予防接種スケジュールの管理が複雑で保護者の負担が大きい、支援制度を知らない人への周知漏れ。 DX の内容: 共和町: 電子母子手帳アプリ「きょうわにこっと」で成長記録のグラフ化、予防接種管理、沐浴動画などを提供。 千葉市: 市が保有する住民情報を分析し、対象者に SNS（LINE 等）で検診や手当の情報をプッシュ通知。 成果/効果: 接種忘れの防止、災害時の情報提供手段の確保、「支援が必要な人に情報を届ける」アウトリーチ型の支援を実現。 事業費: 共和町 264 千円 ／ 千葉市 3,439 千円（令和 3 年度） 4. SNS を活用した「こころの相談」窓口（No.67） 実施団体: 滋賀県 取組名: 子育てや学校など様々な悩み事に対応する SNS による相談 課題: コロナ禍での不安や、対面・電話では相談しにくい若年層・保護者の悩み。 DX の内容: LINE 等の SNS を活用した相談窓口「こころのサポートしが」を開設。子ども、保護者、若年女性などを対象に、毎日夕方～夜間に相談を受け付け。 成果/効果: 深刻化する前の早期支援につなげる。約 2,000 人以上の登録があり、心理的なハードルを下げて相談を促進。 事業費: 16,759 千円（令和 3 年度） 5. IoT タグによる子どもの見守りネットワーク（No.71） 実施団体: 福岡県粕屋町 取組名: IoT を活用したこどもの見守り・安全確保 課題: 地域の見守り力強化と、行方不明時などの早期解決。 DX の内容: 児童が見守り端末（BLE タグ等）を持ち、地域に設置した基地局や「見守りアプリ」を入れた住民とすれ違うことで位置情報を記録する「Qottaby」システムを導入。 成果/効果: 有事の際に位置情報を特定できるほか、保護者はアプリで通過通知を受け取れる（有料機能）など、地域全体での見守り網を構築。 事業費: （資料内で明記なし、または 0 千円表記の可能性あり※保護者負担型モデル等のため）

	
価格	無料
関連 URL 等	https://www.soumu.go.jp/main_content/000835175.pdf

教材・資料名	園の働き方を変える ICT 活用事例集 ～保育現場の ICT 化をはじめたい人へ～
作者・出典元	静岡県 健康福祉部 こども未来局こども未来課 （企画・編集協力：株式会社サンロフト）
学習対象者	・ICT 導入を検討しているが、何から始めればよいかわからない保育施設の園長・主任 ・既にシステムは導入しているが、活用しきれていないと感じている現場リーダー ・保育現場の業務改善（働き方改革）を目指す自治体担当者
学習形態	PDF 資料（事例集・ハンドブック）
学習目標	・県内 10 施設の具体的な導入事例（成功談だけでなく苦労や課題も含む）から自園に合った進め方を学ぶ ・「ICT 活用チェックシート」を用いて、自園の環境・知識・業務の現状を客観的に把握する ・ICT 導入の目的を「業務効率化」だけでなく「保育の質の向上」や「職員の働きやすさ」につなげる視点を持つ
内容構成	1. 背景と目的 ・保育ニーズの多様化に伴う業務の多忙化・複雑化 ・保育士の負担軽減と「保育の質の向上」の両立が急務 ・コミュニケーション円滑化や情報処理の自動化への期待 2. 現場の課題 ・インフラ整備（Wi-Fi 等）や職員の ICT スキルの不足 ・導入メリットの共通理解が得られていないことによる停滞 3. 本資料の成り立ち ・静岡県による「巡回支援」事業の報告書 ・導入段階の異なる 10 施設に対し、専門家が直接支援した記録



【導入・活用事例（全 10 事例）】
1. 隙間時間でも指導計画書づくりを可能に（認定こども園 草薙ふたばこども園）
2. 保育 ICT システムで働き方改革と保育の幅を拡充（相良保育園）
3. 諸費用計算・請求業務の自動化で時間創出（認定こども園 中央幼稚園）
4. 初の ICT 導入に向けて意識づくり（牧之原保育園）
5. 情報がより確実に行き届くしくみづくり（すこやか保育園）
6. 園内情報集約で職員連携を強化（しょうれんじこども園）
7. メッセージングアプリで職員間の情報共有を円滑に（こばと保育園）
8. 動画配信で保護者との関係性を深める機会創出（しいの木保育園）
9. PowerPoint・Excel を学ぶ研修で職員の安心感を醸成（みつばち保育園）
10. デジタル化で監査対応を効率化 BCP 対策にも（さんくすピッピ保育園）

【付録】
・ICT 活用チェックシート（環境・知識・業務の 3 観点）

	
価格	無料
関連 URL 等	https://www.pref.shizuoka.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/053/110/zireisyuu_2022.pdf

教材・資料名	保育・教育の DX が子育て・学校、地方自治を変える
作者・出典元	稲葉一将・稲葉多喜生・児美川孝一郎／出版社：自治体研究社
学習対象者	・保育・教育分野の関係者（保育士・教員など） ・教育政策や自治体行政に関心のある人 ・DX や教育デジタル化の影響を学びたい学生・研究者
学習形態	・書籍による個人学習（読書型） ・授業・研修・研究資料としての活用 ・政策・社会問題理解のための理論学習
学習目標	・保育・教育分野の DX の仕組みと影響を理解する ・子どもデータ活用・教育政策の動向を理解する ・デジタル化が子育て・学校・地方自治に与える変化を把握する
内容構成	「保育・教育の DX が子育て、学校、地方自治を変える」 Ⅰ　子どものデータ連携と行政組織における調整の強化 ―こども家庭庁新設の地方自治への影響― …… 稲葉一将 1 国家によって形成される「デジタル社会」の特徴 ・(1)「デジタル社会」が国家によって形成されることについて ・(2) 日本における「デジタル化」の特徴 2 子どもと行政に及ぶ「デジタル化」 ・(1)「重点計画」において示された「教育」と「こども」の「デジタル化」 ・(2) こどもに関する情報・データ連携副大臣プロジェクトチーム ・(3) こども家庭庁の設置とこども基本法の制定 ・(4) 教育データ利活用ロードマップ 3 転形期の子どもと行政 ・(1) 何が、どのように転形するのか ・(2) 地方自治との矛盾と保育や教育の専門性との矛盾 ・(3)「監視」の客体から主体形成へのもう一つの「転形」 Ⅱ　保育業務の SaaS 化とテック企業のデータ寡占 ―保育と一体で行われる子どもデータの収集― …… 稲葉多喜生 はじめに ・1 自治体業務のクラウド化が意味すること ・2 なぜ進む SaaS 化

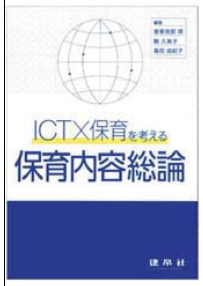
	・3 SaaS で保育の現場はどう変わるか ・4 SaaS で行われる保育データ収集の意味すること ・5 企業任せとなっている個人情報収集への「説明と合意」手続きの問題点 ・6 便利さの背後で進む、テック企業のデータ寡占化 ・7 子どものデータ連携で変わる保育 III　教育 DX が学びと学校を変える …… 児美川孝一郎 1 教育政策の転換 ―「2020 年教育改革」から「Society 5.0 型教育改革」へ― ・(1)「2020 年教育改革」の失速 ・(2)「Society 5. 0 型教育改革」へ 2「Society 5. 0 型教育改革」の構想―EdTech を通じた教育 DX の実現へ― ・(1) 経産省が主導する教育政策 ・(2) Society 5. 0 型教育とは ・(3) EdTech による教育改革へ 3 GIGA スクール構想とコロナ禍の教育政策―経産省と文科省の改革構想の分岐― ・(1) GIGA スクール構想の出自 ・(2) コロナ禍における改革構想の分岐 ・(3) 急進派としての経産省の活動 ・(4) 漸進派に転じた文科省 4 官邸主導による政策の調整・統合―CSTI 教育・人材育成ワーキンググループ― ・(1) 経産省、文科省それぞれの政策展開 ・(2) 官邸主導による調整・統合へ ・(3) 教育 DX のゆくえ 5 教育 DX は学びと学校をどう変えるか―溶けていく公教育― ・(1) 教育 DX が変える学びと学校 ・(2) 公教育の溶解と変質

	
価格	1,100 円（税込）
関連 URL 等	https://www.jichiken.jp/book/9784880377483/

教材・資料名	保育 ICT サービスカタログ（アプリ一覧資料）
作者・出典元	こども家庭庁
学習対象者	・保育施設の運営者（園長・管理者） ・保育士・職員 ・自治体の保育行政担当者 ・保育 ICT 導入を検討する関係者
学習形態	・PDF 資料等による閲覧型学習 ・ICT 導入検討の参考資料としての活用 ・園内研修・自治体研修での活用
学習目標	・保育 ICT サービスの種類と機能を理解する ・ICT 導入による業務効率化の方法を理解する ・施設に適した ICT サービス選定の参考にする
内容構成	保育 DX アプリを一覧で比較できる資料 ① 保育 ICT 導入の目的・背景（業務負担軽減・質向上など） ② 保育 ICT サービスの機能分類（登降園管理、連絡帳、保護者連絡、写真販売、請求管理など） ③ 各サービスの特徴・比較情報　④ 導入時の留意点・活用事 
価格	月額無料～
関連 URL 等	https://kodomodx.or.jp/ict-catalog/

教材・資料名	Hoic
作者・出典元	Hoic 運営企業による保育 ICT サービス（保育施設向け業務支援システム）
学習対象者	・保育施設の運営者（園長・管理者） ・保育士・職員 ・保護者対応や事務業務を担当する職員 ・保育 ICT 導入を検討する施設・自治体
学習形態	・クラウドサービス（ICT システム）を活用した実務学習型 ・業務運用を通した実践的活用 ・園内研修・操作研修による利用
学習目標	・保育業務の ICT 化による効率化を理解する ・登降園管理や連絡業務のデジタル化を実践する ・保護者との情報共有を円滑にする仕組みを理解する
内容構成	業務管理＋安全管理をまとめて DX 化したい園向け ① 登降園管理（出欠管理・打刻）　② 連絡帳・お知らせ配信 ③ 園児情報管理　④ 指導計画・記録管理 ⑤ 保護者連絡・情報共有機能　⑥ 事務業務の効率化支援 

	
価格	施設規模・利用機能により異なる
関連 URL 等	https://www.hoic.jp/

教材・資料名	ICT×保育を考える 保育内容総論 （理論と実践で学ぶ ICT 活用と保育内容）
作者・出典元	香曽我部 琢／駒久美子／島田由紀子（編著） 建帛社（発行）
学習対象者	・ICT を保育に活かしたい保育士・幼稚園教諭 ・保育教育カリキュラムで ICT 活用を学ぶ学生 ・保育計画や教材研究に ICT を取り入れたい実践者
学習形態	書籍
学習目標	・保育内容総論の基本となる理論を理解する ・ICT 機器・デジタル技術の活用可能性を保育計画に結びつける ・保育現場の一日を通した ICT 活用の実践事例を学ぶ ・計画・教材研究・記録・評価までの ICT 利活用の方法を身につける ・保育の理論と ICT 技術の統合的な活用視点を深める
内容構成	【特徴・ポイント】 ・理論 × 実践 の視点で保育内容を学べるテキスト ・保育現場の 1 日の流れ を活かした ICT 活用事例 ・児童理解・計画・評価を ICT と統合して学習できる 【学習活用のヒント】 ・保育計画の ICT でできること/できないこと を整理する ・実践編場面を 自園の実践に置き換える ワークとして活用 ・保護者への情報発信や記録のデジタル化について議論する  【概要】 ■理論編（保育内容と ICT の基礎） 第 1 章 保育内容とは

	保育の理念と基本 保育内容の意義と学び方 第 2 章 保育内容の歴史的展開 戦前から現代までの保育教育の変化 第 3 章 指導要領における保育内容 保育指針・幼児教育要領の概要 5 領域と乳児保育の視点 第 4 章 多様なニーズと保育内容 インクルーシブ保育と多文化対応 地域・家族との連携 第 5 章 発達連続性と生活理解 発達段階と日常生活をつなぐ保育 子ども理解の方法 第 6 章 計画と ICT 利活用 ICT を使った計画立案 JSON 記録・評価への応用 ICT 教材研究の基本と注意点 ■ 実践編（ICT×1 日の保育実践事例） 保育園での一日の流れを 場面ごとに ICT 活用の可能性と活用例 で解説 1. 朝のサークルタイムと室内遊び ICT を使った活動例 おままごと／ごっこ遊び 2. 工作・積み木・劇づくり 表現活動とデジタル教材・ツールの関係 3. 外遊び・自然との関わり 園庭・テラスでの ICT 記録の方法 4. 食事・片付け・日誌記録 連絡帳アプリ・カメラ記録の実際 5. 振り返り（リフレクション）と評価 データを活かした振り返り ICT で記録・計画・評価をつなぐ方法
価格	2,090 円（税込）
関連 URL 等	https://www.kenpakusha.co.jp/np/isbn/9784767951478/

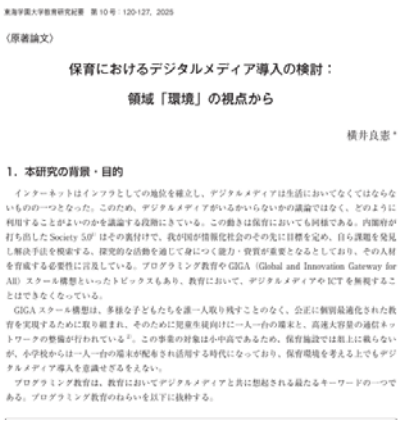
教材・資料名	KidsView
作者・出典元	KidsView 株式会社（保育施設向け ICT 業務支援サービス）
学習対象者	・保育施設の運営者（園長・管理者） ・保育士・職員 ・保護者対応や事務業務を担当する職員 ・保育 ICT 導入を検討する施設・自治体
学習形態	・クラウド型 ICT サービスの活用による実務学習 ・日常業務の運用を通した実践的活用 ・園内研修・操作研修による導入
学習目標	・保育業務の ICT 化による効率化を理解する ・登降園管理や保育記録のデジタル化を実践する ・保護者との情報共有を円滑にする仕組みを理解する
内容構成	記録・指導計画中心の DX サービス ① 登降園管理（出欠・打刻管理）　② 連絡帳・お知らせ配信 ③ 園児情報管理　④ 保育記録・指導計画管理 ⑤ 保護者連絡・情報共有　⑥ 写真共有などの保育支援機能 
価格	施設規模・利用機能により異なる
関連 URL 等	https://kids.nihonsoft.co.jp/

教材・資料名	Child Care System
作者・出典元	株式会社チャイルドケアシステム（保育施設向け ICT 業務支援サービス）
学習対象者	・保育施設の運営者（園長・管理者） ・保育士・職員 ・保護者対応や事務業務を担当する職員 ・保育 ICT 導入を検討する施設・自治体
学習形態	・クラウド型 ICT サービスの活用による実務学習 ・日常業務の運用を通した実践的活用 ・園内研修・操作研修による導入
学習目標	・保育業務の ICT 化による効率化を理解する ・園児管理や登降園管理のデジタル化を実践する ・保護者との情報共有や事務業務効率化の仕組みを理解する
内容構成	AI・データ活用寄りの保育 DX ① 登降園管理（出欠・打刻管理）　② 園児情報管理 ③ 連絡帳・お知らせ配信　④ 指導計画・保育記録管理 ⑤ 保護者連絡・情報共有　⑥ 事務業務支援（帳票・請求管理など） 
価格	施設規模・利用機能により異なる
関連 URL 等	https://c-c-s.jp/

教材・資料名	ほいぴた
作者・出典元	株式会社ほいぴた（保育施設向け ICT 業務支援サービス）
学習対象者	・保育施設の運営者（園長・管理者） ・保育士・職員 ・保護者対応や事務業務を担当する職員 ・保育 ICT 導入を検討する施設・自治体
学習形態	・クラウド型 ICT サービスの活用による実務学習 ・日常業務の運用を通した実践的活用 ・園内研修・操作研修による導入
学習目標	・保育業務の ICT 化による効率化を理解する ・登降園管理や連絡業務のデジタル化を実践する ・保護者との情報共有を円滑にする仕組みを理解する
内容構成	「DX 環境丸ごと整備」 ① 登降園管理（出欠・打刻管理）　② 連絡帳・お知らせ配信 ③ 園児情報管理　④ 保育記録・指導計画管理 ⑤ 保護者連絡・情報共有　⑥ 事務業務効率化支援 
価格	施設規模・利用機能により異なる
関連 URL 等	https://www.adtec.co.jp/wp-content/uploads/2025/07/%E3%81%BB%E3%81%84%E3%81%B4%E3%81%9F_%E4%BF%9D%E8%82%B2%E5%9C%92DX%E3%81%8A%E3%81%BE%E3%81%8B%E3%81%9B%E3%83%91%E3%83%83%E3%82%AF.pdf

教材・資料名	保育の DX（デジタルトランスフォーメーション）入門 ～DX って何？ICT 化との違いと保育現場での必要性～
作者・出典元	YouTube 「保育の DX」についてスライド 1 枚で解説 動画投稿者：一般社団法人　保育 ICT 推進協会
学習対象者	・保育現場の管理者・リーダー ・ICT／デジタル活用に関心のある保育者 ・保育者を目指す学生・研修受講者
学習形態	オンライン動画教材（YouTube）
学習目標	・DX（デジタルトランスフォーメーション）とは何かを理解する ・保育現場における ICT 化と DX の違いを説明できるようになる ・なぜ今、保育の現場で DX が必要なのかを学ぶ ・保育業務改善の方向性を考える視点を身につける
内容構成	 【学習活用のヒント】 ・DX を 単なるツール導入ではなく「仕組みと価値の変革」 と捉える ・保育現場における現状の課題を列挙し、DX でどう解決できるかを整理する ・DX 視点での 業務プロセス可視化 を行い改善ポイントを見える化する 【概要】 ■ 第 1 部：DX とは？ ・DX（デジタルトランスフォーメーション）の定義 ・「デジタル技術を活用して組織・業務・サービスを変革すること」 ・単なるデジタル化（ICT 導入）ではなく、 保育そのものの変革につなげる視点 が重要 ■ 第 2 部：ICT 化との違い

	・ICT 化　：単に IT ツールを導入・利用すること 例：連絡帳アプリ、業務管理システム、記録ツールの導入 ・DX　：ICT を 軸 に、保育業務・組織・働き方・サービス提供のあり方を見直し単なる作業効率改善にとどまらず、保育全体の価値を再構築する ■ 第 3 部：保育現場で DX が必要な理由 ・業務負担の増大・人手不足など、保育現場特有の課題 ・ICT 化だけでは業務効率は改善するが 現場の構造的課題は解決しにくい ・DX は保育者の 負担軽減・専門性強化・保育質向上 を目指す手段となる
価格	無料
関連 URL 等	https://www.youtube.com/watch?v=2pne9Vmbslo

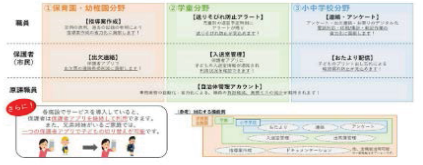
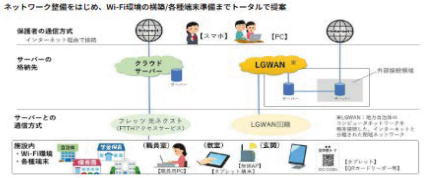
教材・資料名	保育におけるデジタルメディア導入の検討 ―領域「環境」の視点から―
作者・出典元	横井 良憲/東海学園大学 教育研究紀要
学習対象者	・保育士・幼稚園教諭 ・保育内容・保育環境を学ぶ学生 ・保育現場で ICT 導入を検討している管理職 ・保育とデジタルメディアの関係を研究する教育関係者
学習形態	学術論文（PDF）
学習目標	・保育領域「環境」の視点からデジタルメディアを捉え直す ・デジタルメディア導入の意義と課題を整理する ・子ども主体の環境構成としての ICT 活用を考察できるようになる ・保育現場での適切な導入条件・配慮事項を理解する
内容構成	 東海学園大学教育研究紀要　第10号：120-127，2025 〈原著論文〉 保育におけるデジタルメディア導入の検討： 領域「環境」の視点から 横井良憲* 1．本研究の背景・目的 インターネットはインフラとしての地位を確立し、デジタルメディアは生活においてなくてはならないものの一つとなった。このため、デジタルメディアがいるかいらないかの議論ではなく、どのように利用することがよいのかを議論する段階にきている。この動きは保育においても同様である。内閣府が打ち出したSociety 5.0[1]はその裏付けで、我が国が情報化社会のその先に目標を定め、自ら課題を発見し解決手法を模索する、探究的な活動を通じて身につく能力・資質が重要となるとしており、その人材を育成する必要性に言及している。プログラミング教育やGIGA（Global and Innovation Gateway for All）スクール構想といったトピックスもあり、教育において、デジタルメディアやICTを無視することはできなくなっている。 GIGAスクール構想は、多様な子どもたちを誰一人取り残すことのなく、公正に個別最適化された教育を実現するために取り組まれ、そのために児童生徒向けに一人一台の端末と、高速大容量の通信ネットワークの整備が行われている[2]。この事業の対象は小中高であるため、保育施設では直上に載らないが、小学校からは一人一台の端末が配布され活用する時代になっており、保育環境を考える上でもデジタルメディア導入を意識せざるをえない。 プログラミング教育は、教育においてデジタルメディアと共に想起される最たるキーワードの一つである。プログラミング教育のねらいを以下に抜粋する。 【教材の特徴】 ・保育領域「環境」の視点から、デジタルメディア導入を理論的に整理した研究論文。 ・ICT を単なる機器活用ではなく、子どもを取り巻く保育環境の一部として捉えている。 ・活用の可能性と課題の両面を示し、保育者の関わりや配慮点を考える材料となる。

	【概要】 1. 保育における「環境」とは何か 領域「環境」の基本的な考え方 子どもと環境の相互作用 物的環境・人的環境としての保育の捉え方 2. デジタルメディア導入の背景 社会のデジタル化の進展 保育現場での ICT 活用の広がり 国内外研究の動向 3. デジタルメディアの可能性 表現活動・探究活動への活用 協働的な学びの支援 子どもの主体性との関係 4. 導入における課題と留意点 使用時間・依存への配慮 保育者の関わりの重要性 ルールづくりと安全管理 保護者理解との連携
価格	無料
関連 URL 等	http://repository.tokaigakuen-u.ac.jp/dspace/bitstream/11334/1926/1/spkiyo_010_14.pdf

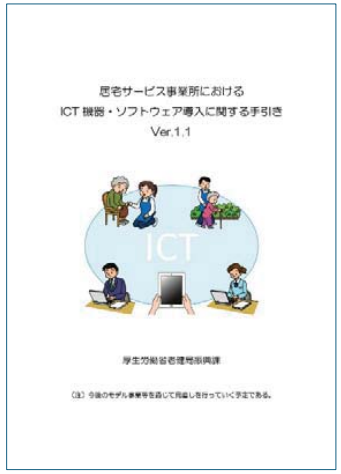
教材・資料名	園児のデジタルデバイス使用から考える ICT 活用教育の一考察
作者・出典元	津田 敏/姫路日ノ本短期大学 研究紀要
学習対象者	・保育士・幼稚園教諭 ・保育教育を学ぶ学生 ・保護者・保育現場の管理者 ・ICT と教育・発達の関係を検討したい研究者
学習形態	学術論文（PDF）
学習目標	・幼児の家庭におけるデジタルデバイス使用の実態を理解する ・ICT（スマホ・タブレット）利用と子どもの発達・教育的関わりを考察する ・保育現場で ICT 活用教育を設計・実践する際の視点を整理する
内容構成	 園児のデジタルデバイス使用から考える ICT 活用教育の一考察 津田 敏 姫路日ノ本短期大学 〒679-2131 兵庫県姫路市書写台 890 番地 A Study of ICT Utilization Education Considered from Children's Use of Digital Devices Satoshi Tsuda Himeji-Hinomoto College. 890 Kou. Kodera-Cho. Himeji 679-2131. Japan Abstract Nowadays, young children are increasingly using smartphones and tablets at home. Around 1990, the issue of watching television by young children was raised, and opinions and recommendations were made in various fields. In recent years, smartphones and tablets have been viewed as problematic devices for infants as well as televisions. This study takes up opinions and suggestions from each society regarding the use of smartphones and tablets for infants. In addition, I will investigate the current usage of infants' smartphones and tablets at home. Then, I will consider about ICT utilization education in children's schools, such as instructional education for children, and the responsibilities of training schools to train nursery teachers. 第1章 幼児の家庭におけるデジタルデバイスの使用と影響について 【教材の特徴】 ・幼児の現実のデジタルデバイス使用状況をデータで示す調査研究で、実態理解に役立つ。 ・家庭での使用と保育現場での ICT 活用教育を結びつけて考察している点が特徴。 ・専門家・学会の意見も取り入れ、教育的配慮や周囲の関わりの重要性を論じている。

	・保育実践・保育計画の改善、ICT 活用の設計における考える視点を提供する教材となる。 【概要】 1. 幼児の家庭でのデジタルデバイス使用とその状況 近年、幼児が家庭でスマートフォン・タブレットを使う機会が増えていることを示す統計とデータ 年齢別の利用実態と種類（スマホ／タブレット）別の使用傾向 2. メディア接触に対する学会・専門機関の見解 日本子ども学会、アメリカ小児科学会などが示す幼児のメディア接触に関する意見・提言 正しい使用と周囲の関わりの重要性 3. 調査研究（認定こども園の保護者・教員アンケート） 家庭での使用実態に関するアンケート調査結果 保護者と教員の ICT 活用への意識と期待 4. ICT 活用教育の方向性と課題 幼児教育における ICT の活用可能性 発達段階への配慮、周囲の関わりの必要性 教育的な活用設計の視点と今後の研究課題
価格	無料
関連 URL 等	https://www.himeji-hc.ac.jp/information/journal_of_studies/42tsuda.pdf

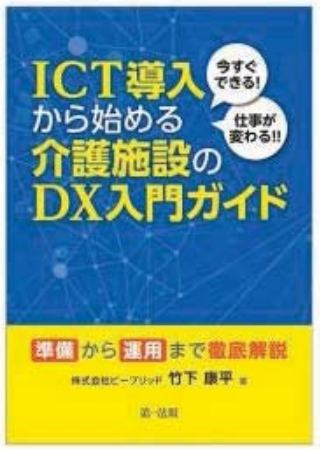
教材・資料名	NTT 西日本 保育支援 ICT
作者・出典元	メシウス株式会社（保育園・こども園・社会福祉施設向け園務 ICT 支援システム）
学習対象者	・保育園・認定こども園・幼稚園 ・園職員（園長・保育士・事務職員） ・保護者（連絡機能の利用）
学習形態	・クラウド型 ICT サービス ・園務支援システム（PC・タブレット利用） ・保護者向け連絡アプリ併用
学習目標	・園の業務効率化（ICT による DX 推進） ・保育記録・登降園管理のデジタル化 ・保護者との円滑な情報共有 ・職員の事務負担軽減・働き方改革
内容構成	① 登降園管理（打刻・出欠管理）② 園児情報管理 保育 DX のインフラ・運営支援型サービス ③ 指導計画・保育記録作成　④ 保護者連絡（連絡帳・お知らせ・欠席連絡） ⑤ 請求・集金管理　⑥ セキュリティ対策・データ管理支援 ⑦ ICT 導入支援（ネットワーク・端末含む総合支援） **1．ソリューション概要** 

	2．施設別利用場面と導入のメリット  **3．ネットワーク構成** 
価格	・個別見積（園の規模・構成により変動） ・初期費用＋月額利用料のケースが一般的
関連 URL 等	https://business.ntt-west.co.jp/smart10x/solution/017.html

介護 ICT／教材事例 **1**

教材・資料名	居宅サービス事業所における ICT 機器・ソフトウェア導入に関する手引き
作者・出典元	厚生労働省 老健局振興課
学習対象者	・居宅サービス事業所（訪問介護、通所介護等）の経営者・管理者 ・ICT 導入を検討している介護現場の担当者 ・介護ソフト・機器メーカー担当者
学習形態	政府ガイドライン（PDF 資料）
学習目標	・介護現場における ICT 導入の目的（生産性向上、人材確保、職場環境改善）を理解する ・導入計画の作成から、機器選定、運用、効果検証までの具体的なステップを習得する ・導入に伴う業務フローの見直しや、職員・利用者への説明などの実務的留意点を学ぶ ・先行導入法人の事例を通じて、成功のポイントと課題解決策を具体的に把握する
内容構成	 1. 本手引きの目的 (1) 本手引きの目的 (2) 実証事業の背景・目的 (3) 実証事業の実施概要 2. ICT 機器・ソフトウェアの導入上の留意事項と事例紹介 (1) ICT 機器・ソフトウェアの導入上の留意事項 ① ICT 機器・ソフトウェアの導入計画について ② ICT 機器・ソフトウェア導入に伴う業務フローの見直しについて ③ ICT 機器・ソフトウェア導入の際の実施体制について ④ ICT 機器・ソフトウェア導入に係る関係者への説明について ⑤ ICT 機器・ソフトウェア導入に関する職員への研修について ⑥ ICT 機器・ソフトウェア導入の効果の検証について (2) 実証事業における事例紹介 ① A 法人の事例紹介（訪問介護） ② B 法人の事例紹介（訪問介護） ③ C 法人の事例紹介（訪問介護） ④ D 法人の事例紹介（通所介護） ⑤ E 法人の事例紹介（通所介護） 3. 導入する ICT 機器・ソフトウェアの比較の方法について 4. セキュリティ上の課題と対策 5. 電子文書を前提にした実地指導の事例紹介 6. 今後の方向性 全 51 ページ 
価格	無料
関連 URL 等	https://www.mhlw.go.jp/stf/kaigo_ict.html

介護 ICT／教材事例 **2**

教材・資料名	今すぐできる！仕事が変わる！！ＩＣＴ導入から始める介護施設のＤＸ入門ガイド ―準備から運用まで徹底解説―
作者・出典元	株式会社ビープリッド 竹下康平 著 / 第一法規
学習対象者	・DX に取り組みたい介護施設の経営層・管理者 ・ICT 導入・運用を主導する現場の担当者 ・科学的介護（LIFE）の活用を目指す職員
学習形態	書籍（単行本・B5 判・192 ページ）
学習目標	・介護現場における ICT 導入の必要性と「生産性向上」の考え方を理解する ・体制構築、現状分析、製品選定、環境整備、職員教育のステップを習得する ・情報セキュリティリスクへの対策と情報管理の具体策を学ぶ ・導入後の「活用しきれない」課題（運用の落とし穴）への対処法を習得する ・各種 ICT 機器（見守り、記録ソフト等）の選定ポイントと事例を学ぶ ・科学的介護（LIFE）を推進し、ケアの質を向上させるための準備と実践方法を習得する
内容構成	 はじめに 第１章 なぜＩＣＴが必要なのか

	１.ＩＣＴとは何か ２.介護の質を持続するために ３.「生産性向上」なしには、未来の利用者は守れない ４.「科学的介護」でなぜケアの質が向上するのか 第２章 導入にあたり準備すべきこと １.体制・組織づくり ２.現状分析からはじめる問題・課題・解決策 ３.法人のポリシーの決定 ４.スケジュール化と予算化 ５.ＩＣＴの導入・選定 ６.環境整備 ７.ＩＣＴに関する教育の実施 第３章 情報管理の徹底 １.デジタル化が進む介護施設の脅威 ２.介護施設運営に潜む情報セキュリティリスク ３.介護施設が進めたい情報管理対策 第４章 運用の落とし穴 １.導入後、すぐには結果が出ない（我慢の期間） ２.職員全員がＩＣＴを活用するために ３.想定どおりに活用できているかを検証する ４.運用管理委員会を作り、改善を推進する 第５章 介護施設に求められるＩＣＴ機器 １.IoT（見守り支援機器） ２.介護記録（請求）ソフト ３.コミュニケーション機器 ４.業務省力化 第６章 科学的介護（LIFE）推進のすすめ １.科学的介護（LIFE）これまでの流れ ２.科学的介護が介護現場にもたらす効果 ３.科学的介護（LIFE）に取り組むことの必要性 ４.科学的介護（LIFE）実施にあたって準備すべきこと ５.今からでもできること おわりに / 著者紹介 / 事例提供会社
価格	3,080 円（本体 2,800 円＋税）
関連 URL 等	https://www.daiichihoki.co.jp/store/products/detail/104693.html

教材・資料名	介護記録・請求業務支援アプリ（事例 4 選） ①CAREKARTE（ケアカルテ） ②カイポケ ③CareViewer（ケアビューアー） ④Care-wing（ケアウイング）
作者・出典元	①株式会社ケアコネクトジャパン ②株式会社エス・エム・エス ③CareViewer 株式会社（さくら CS ホールディングスグループ） ④株式会社ロジック
学習対象者	・介護事業所の経営者・管理者（業務効率化、コスト削減を目指す方） ・現場の介護職員、サービス提供責任者（記録業務の負担を軽減したい方） ・訪問介護、通所介護、施設入所系サービスの ICT 推進担当者
学習形態	クラウド型アプリケーション / 業務支援ソフトウェア（PC・タブレット・スマホ対応）
学習目標	・介護記録の電子化による「転記作業の削減」と「ペーパーレス化」を実現する ・リアルタイムな情報共有により、多職種連携や管理者への報告連絡を効率化する ・請求システムとの連動により、月末の請求業務（レセプト作成）の時間を大幅に短縮する ・科学的介護情報システム（LIFE）へのデータ提出をスムーズに行い、加算取得につなげる
内容構成	【各アプリの特徴と導入ポイント】 ① CAREKARTE（ケアカルテ） 特徴: 記録から請求、プラン作成まで一気通貫で管理できる統合型システム。音声入力 AI アプリ「ハナスト」や、スマホで完結する「CAREKARTE Mobile」など、現場の入力負担を極限まで減らす機能が充実。 強み: 導入実績 19,000 事業所以上。記録のカスタマイズ性が高く、施設ごとの細かな運用ルールに対応しやすい。LIFE 連携も標準対応。



② カイポケ
特徴: 介護記録・請求機能に加え、採用支援、備品購入、ファクタリング（早期入金）など、経営支援サービスが一体となっているのが最大の特徴。
強み: タブレット貸与（iPad 無料レンタル）があり、初期コストを抑えて導入可能。小規模事業者から大規模まで幅広く対応し、特に通所・訪問系に強い。
③ CareViewer（ケアビューアー）
特徴: 介護現場（グループホーム等）の声から生まれた AI 介護記録アプリ。現場職員が直感的に使えるシンプルな UI/UX を重視。
強み: AI 音声入力機能により、スマホに話しかけるだけで記録が可能。バイタルや食事量などをグラフで可視化し、家族への共有機能も備える。初期費用 0 円でスタートしやすい。

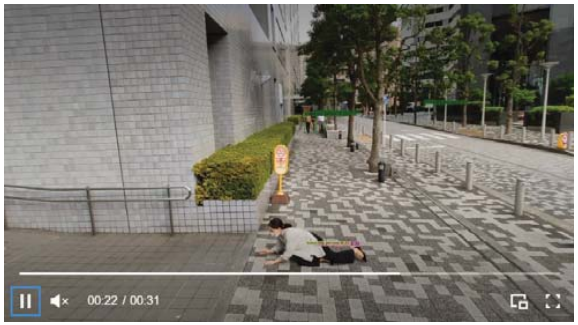




	④ Care-wing（ケアウイング） 特徴: 「IC タグ」を活用した訪問介護・看護特化型システム。利用者宅のタグにスマホをかざすだけで開始・終了時刻を正確に記録でき、不正防止やサービス提供責任者の確認業務を自動化する。 強み: スマホ操作が苦手な高齢ヘルパーでも「かざすだけ」で使える簡易さ。ヘルパーの移動管理やシフト調整機能も強力で、特定事業所加算の要件（指示・報告）もクリアしやすい。
価格	② CAREKARTE：要問い合わせ（一括初期費用+保守費用） ②カイポケ：月額定額制（サービス種別により異なる／例：通所介護 月額 25,000 円～（税別））、 ③CareViewer：月額 5,000 円/事業所 ＋ 300 円 ×定員数 ④Care-wing：要問い合わせ（利用者数・ID 数等による）
関連 URL 等	① https://www.carekarte.jp/ ② https://www.kaipoke.biz/ ③ https://care-viewer.com/ ④ https://www.care-wing.jp/

教材・資料名	介護業界の AI・IoT 活用事例集（Web 事例 4 選）
作者・出典元	①Shift AI（株式会社 Shift AI） ②HITOWA（HITOWA ホールディングス株式会社） ③Neural Opt（株式会社ニューラルオプト） ④XR CLOUD（株式会社 monoAI technology）
学習対象者	・介護事業所の経営者、施設長（人手不足解消やコスト削減を模索している方） ・DX 推進担当者（具体的な導入事例や効果を知りたい方） ・現場の介護リーダー（最新テクノロジーで何が変わるかを知りたい方）
学習形態	Web 記事・事例集（オンライン閲覧）
学習目標	・介護現場における AI・IoT 活用の 4 大領域（見守り、記録、ケアプラン、ロボット）を理解する ・具体的な導入事例を通じて、業務時間削減や事故防止の定量的な効果を把握する ・導入における課題（コスト、職員の IT スキル、プライバシー）と解決策を学ぶ ・自施設に最適なテクノロジーを選定するための基礎知識を習得する
内容構成	 【カテゴリー別詳細事例解説】 1. 見守り・安全管理システム（IoT センサー・AI 画像解析） ［導入前の課題］

・夜間の定時巡回による職員の身体的・精神的負担が大きい
・頻繁な訪室が入居者の睡眠を妨げ、生活リズムを崩す要因になる
・転倒事故などが起きた際、発見が遅れたり原因が不明確な場合がある
［活用技術・機能］
・ベッドセンサー（マット/シート型）：心拍・呼吸・体動をリアルタイムで検知
・AI カメラ・赤外線センサー：起床・端座位・離床の動きを識別し、危険度に応じて通知



・シルエット表示機能：プライバシーに配慮し、カメラ映像を人物のシルエット（影）のみで表示
［具体的な導入効果］
・夜間巡視回数の削減：定時巡回を廃止し「通知時のみ訪室」に切り替え、巡回業務を最大 40%～50%削減
・事故防止と早期対応：転倒発生を即座に検知し、駆け付け時間を短縮。録画映像による原因分析が可能に
・入居者の QOL 向上：不要な訪室が減り、朝までぐっすり眠れる入居者が増加

2. 記録・請求・計画作成の自動化（AI 音声入力・生成 AI）
［導入前の課題］
・現場でのケア中にはメモを取り、事務所に戻ってから PC へ転記するため残業が発生する
・ケアプラン作成において、文言の検討や過去情報の参照に多大な時間を要する
・記録内容にバラつきがあり、申し送りでの情報共有に時間がかかる
［活用技術・機能］
・音声認識 AI アプリ：介護独自の専門用語を高精度で認識し、スマホに話しかけるだけでテキスト化
・AI ケアプラン作成支援：利用者の基本情報やアセスメントデータを分析し、ケアプラン案（第 2 表）を自動提案
・排泄予測 AI：蓄積された排泄記録データから、次回の排泄タイミングを予測して通知



［具体的な導入効果］
・記録業務時間の短縮：音声入力活用により、1 人あたり月間 10 時間以上の残業削減事例あり
・事務負担の軽減：ケアプラン作成にかかる事務作業時間を最大 80%～90%削減し、相談援助業務に集中できる
・排泄ケアの最適化：空振りのトイレ誘導を減らし、失禁回数やオムツ交換回数を減少させる

3. コミュニケーション・精神ケア（介護ロボット・VR）
［導入前の課題］
・レクリエーションの企画・運営が職員の大きな負担（ネタ切れ、準備時間）になっている
・人手不足により、入居者の話し相手になる時間が十分に取れない
・認知症の方への対応において、同じ話を繰り返すなどの精神的ストレスがある
［活用技術・機能］
・コミュニケーションロボット（Palro, Pepper, LOVOT 等）：会話、歌、体操の進行を自動で行う
・アニマルセラピーロボット：動物のような反応で癒やしを提供
・VR 旅行体験：外出困難な高齢者が、VR ゴーグルで観光地への旅行を擬似体験する
［具体的な導入効果］

	・職員負担の軽減：ロボットがレクリエーションを進行している間に、職員は記録や個別ケアが可能に ・入居者の活性化：ロボットとの会話で笑顔が増え、発語量が向上。孤独感の解消に寄与 ・周辺症状（BPSD）の緩和：認知症の方の不穏な状態が落ち着くなどの事例報告あり 4. バックオフィス業務の最適化（送迎計画・シフト作成 AI） ［導入前の課題］ ・送迎ルート作成や勤務シフト作成は、複雑な条件（相性、資格、希望休）を考慮するためベテラン職員しかできない ・作成作業に毎月数時間～数日を要し、管理者の本来業務を圧迫している ［活用技術・機能］ ・AI 送迎ルート作成：利用者の住所、乗車定員、所要時間、利用者の相性を考慮し、最短・最適なルートを数秒で算出 ・AI シフト自動作成：職員の資格要件、常勤換算、希望休、夜勤回数などを満たすシフト案を自動生成 ［具体的な導入効果］ ・属人化の解消：経験の浅い職員でも最適な計画を作成可能になる ・業務時間の劇的短縮：送迎計画作成時間を毎日 30 分→5 分に短縮。シフト作成を月 3 日→半日に短縮
価格	無料（各 Web サイトにて記事全文を公開）
関連 URL 等	① https://ai-keiei.shift-ai.co.jp/ai-use-cases-in-the-nursing-care-industry/ ② https://www.hitowa.com/magazine/iot.html ③ https://neural-opt.com/nursing-ai-cases/ ④ https://xrcloud.jp/blog/articles/business/10858/

教材・資料名	介護ロボットの効果的な活用のための手引き
作者・出典元	厚生労働省（老人保健健康増進等事業） 発行：株式会社三菱総合研究所
学習対象者	・介護施設の経営者、施設長（ロボット導入による業務改善や人材確保を検討している方） ・介護現場のリーダー、職員（具体的な活用方法や操作運用を学ぶ方） ・介護ロボットメーカー、販売代理店担当者
学習形態	ハンドブック（PDF 資料・全 68 ページ）
学習目標	・介護ロボットの定義と開発重点分野（6 分野 13 項目）について正しく理解する ・自施設の課題（腰痛対策、夜間見守り、排泄自立等）に適したロボットを選定できるようになる ・導入前の準備から試用、本格運用、効果検証までのプロセス（PDCA サイクル）を習得する ・各ロボット（移乗、移動、排泄、見守り等）の具体的な活用シーンと留意事項を学ぶ
内容構成	 Ⅰ. 基本的な説明 1. この小冊子のねらい

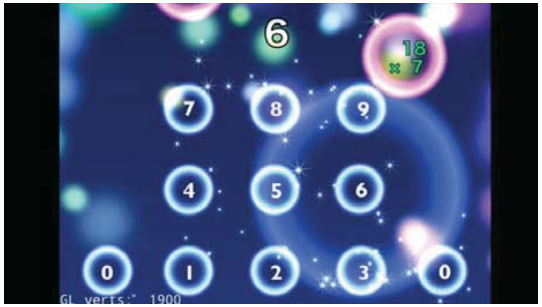
	2. この小冊子の使い方 3. 現場のケア・業務改善の目的別介護ロボット一覧 ・コミュニケーションの機会を増やしたい（社会参加） ・行動範囲を広げたい（外出支援） ・自立した生活を継続したい（排泄・入浴の自立） ・精神的負担の軽減（利用者・職員） ・安全なケアがしたい（転倒予防） ・利用者に合わせたケアがしたい（適切なトイレ誘導） ・眠りの質を高めたい ・身体的負担を減らしたい（腰痛予防） ・業務の効率化（記録時間の短縮、同時見守り） ・組織への効果（人材確保、離職防止、人員配置の適正化） 4. 利用者の状態像別介護ロボット導入例 ・生活シーン別（移乗、身じたく・着替え、排泄、買い物・散歩、日中活動、入浴、睡眠） 5. 介護ロボットとは ・ロボットはケアをより提供しやすいよう支援する「脇役」 ・導入効果のイメージ（転倒リスク減、体格差の克服、遠隔見守り、記録のデジタル化） Ⅱ. 導入施設の声 ・導入事例（特別養護老人ホーム、介護老人保健施設等）における課題と効果 ・コラム（腰痛軽減、夜間巡回の効率化など） Ⅲ. 介護ロボット別の説明 1. 移乗支援機器（装着）とは ・主な製品（マッスルスーツ、HAL 等）／導入費用／環境整備／有効な使い方／留意事項 2. 移乗支援機器（非装着）とは ・主な製品（Hug、リショーネ Plus、SASUKE 等）／導入費用／環境整備／有効な使い方／留意事項 3. 移動支援機器（屋外）とは ・主な製品（Flatia、歩行アシストカート等） 4. 移動支援機器（屋内）とは ・主な製品（屋内型ロボットウォーカー等） 5. 移動支援機器（装着）とは 6. 排泄支援機器（排泄物処理）とは ・主な製品（ベッドサイド水洗トイレ、ラップポン等） 7. 排泄支援機器（トイレ誘導）とは ・主な製品（DFree 等）

	8. 排泄支援機器（動作支援）とは 9. 見守り・コミュニケーション機器（施設）とは ・主な製品（Neos+Care、シルエット見守りセンサ、Mi-Ru 等） 10. 見守り・コミュニケーション機器（在宅）とは ・主な製品（いまイルモ等） 11. 見守り・コミュニケーション機器（生活支援）とは 12. 入浴支援機器とは ・主な製品（Wells リフトキャリー、バスアシスト等） 13. 介護業務支援機器とは ・主な製品（Ftcare-IAT コネクト、SCOP、介護業務支援システム等） Ⅳ. 介護ロボット導入にあたっての基本的な考え方 1. プロセスごとにみるロボット導入の取り組み方 ① 検討段階（体制整備、課題抽出、目標設定、仮選定） ② 準備段階（導入環境検討、評価指標設定、導入前評価） ③ 試用段階（教育実施、試用評価） ④ 運用段階（本格導入、継続的評価、改善活動） Ⅴ. 参考資料 1. 介護ロボットに関する情報公開サイト 2. 地域医療介護総合確保基金（介護ロボット導入支援事業）担当課一覧 3. 福祉用具・介護ロボットの展示等を行っている施設一覧 
価格	無料（厚生労働省ウェブサイトよりダウンロード可能）
関連 URL 等	https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/H30_100_3_handbook.pdf

教材・資料名	リハビリ・レクリエーション支援デジタルツール（事例 4 選） ①デジリハ ②リハプリ ③みんなのレクリエーション ④脳トレアプリ「HAMARU」
作者・出典元	①株式会社デジリハ ②株式会社ネットコム ③株式会社 GENIT ④Studio MS（スタジオムシ）
学習対象者	・介護施設の機能訓練指導員、作業療法士、理学療法士（リハビリのマンネリ化にお悩みの方） ・生活相談員、介護職員（日々のレクリエーション企画の負担を減らしたい方） ・施設の経営者（他施設との差別化や稼働率向上を目指す方）
学習形態	アプリケーション・専用システム（PC・タブレット・プロジェクター等を使用）
学習目標	・デジタル技術を活用して、リハビリを「辛い訓練」から「楽しい遊び」に変える手法を学ぶ ・ゲーミフィケーション（ゲーム要素）を取り入れた自発的なリハビリ参加を促進する ・準備時間の短縮や、記録の自動化による業務効率化を実現する ・高次脳機能障害や認知症予防に特化したデジタル脳トレの活用法を知る
内容構成	【各ツールの特徴と活用シーン】 ① デジリハ（Digital Interactive Rehabilitation System） 概要: センサーとプロジェクターを活用した「次世代型リハビリツール」。壁や床に投影された映像に触れたり体を動かすことで、ゲーム感覚でリハビリができる。 特徴: - 身体の動きをセンサーが感知し、映像がインタラクティブに反応（例：手を動かすと花が咲く、魚が逃げる等）。 - リハビリデータ（回数、可動域など）を自動で記録・可視化できるため、評価業務も効率化。 - 高齢者施設だけでなく、障害児施設でも導入実績多数。

	 ② リハビリテーション支援アプリ「リハプリ」 概要: iPad を活用した高次脳機能障害（特に注意障害）向けのリハビリ支援システム。 特徴: - 「色」や「文字」を用いた 5 種類のトレーニングを収録し、年齢を問わず直感的に操作可能。 - トレーニング結果はクラウドサーバーで一元管理され、自動でグラフ化。患者のモチベーション向上とセラピストの管理負担軽減を両立。 - 複数の iPad からデータを集約できるため、病院や大規模施設での運用に適している。 

	③ レクリエーションアプリ「みんなのレクリエーション」 概要: 福祉施設での利用を想定して開発された完全無料のレクリエーションアプリ。 特徴: - 「ピアノのおけいこ」「言うとおりじゃんけん」「トントン相撲」など、20 種類以上のメニューを搭載。 - 準備不要でタブレット一つですぐに開始でき、スタッフの「レクのネタ切れ」や「準備の手間」を解消。 - 広告表示がなく、誤操作防止など高齢者が使いやすい設計になっている。  ④ 脳トレアプリ「HAMARU」 概要:「爽快感」を重視した暗算パズルゲームアプリ。シリーズ累計数百万ダウンロードを誇る人気アプリ。 特徴: - 画面上から落ちてくる計算式を解くと、花火のような派手な光のエフェクトと心地よい効果音が鳴る。 -「学習」と「エンタメ」が見事に融合しており、認知症予防の脳トレとして高齢者が夢中（ハマる）になれる要素が満載。 - 無料で手軽に導入でき、隙間時間の頭の体操や個別レクとして活用しやすい。

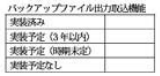
	
価格	①デジリハ：月額 44,000 円〜（税込） ※別途初期費用やセンサー等の機材費が必要 ②リハプリ：要問い合わせ（クラウドサーバー初期設定費＋月額利用料など） ③みんなのレクリエーション：無料 ④HAMARU：無料（アプリ内課金あり）
関連 URL 等	① https://www.digireha.com/ ② https://www.netcom-inc.co.jp/product/rehappli ③ https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000004.000053939.html ④ https://job.kiracare.jp/note/article/4946/ （紹介記事） ※アプリストア（App Store/Google Play）にて「HAMARU」で検索

介護 ICT／教材事例 **7**

教材・資料名	介護テクノロジーの利用促進（厚生労働省ポータルサイト）
作者・出典元	厚生労働省 老健局高齢者支援課 介護業務効率化・生産性向上推進室
学習対象者	・介護事業所の経営者・管理者（補助金活用やデータ連携の最新動向を知りたい方） ・自治体の介護保険担当者（地域での ICT 導入支援やモデル事業に関わる方） ・介護ソフトベンダー・開発事業者（標準仕様や国の施策方針を確認したい方）
学習形態	Web ポータルサイト（ガイドライン PDF、標準仕様書 Excel/CSV、研修動画、報告書等）
学習目標	・国が定める「介護テクノロジー利用の重点分野」と今後のロードマップを理解する ・ケアプランデータ連携システム等の「標準仕様」を入手し、事業所間のデータ連携を推進する ・ICT 導入支援事業や介護ロボット導入支援事業などの「補助金・助成金情報」を把握する ・医療・介護情報連携におけるセキュリティ対策や個人情報保護のガイドラインを習得する
内容構成	【主な掲載コンテンツとリソース】 1. ケアプランデータ連携・標準仕様 ケアプランデータ連携システム：居宅介護支援事業所とサービス提供事業所間でのデータ連携（予定・実績）を実現するためのシステム概要と説明資料。 業務改善のポイント集：データ連携システム導入による業務フロー見直しや、先進事例を紹介した PDF 資料。 標準仕様書（ダウンロード可）： - ケアプランデータ連携標準仕様（CSV レイアウト、Excel 定義書） - 入退院時情報連携標準仕様（居宅・医療機関・施設間の連携フォーマット） - 訪問看護計画等情報連携標準仕様（訪問看護ステーション・医師・ケアマネ間の連携）

	 2. 介護テクノロジーの普及・開発の重点分野 重点分野の定義：移乗支援、排泄支援、見守り、入浴支援など、国が開発・普及を推進するロボット技術の具体的定義と目標。 全体図と普及率：各テクノロジーの普及状況や今後の改訂方針（令和 6 年 6 月改訂など）に関する資料。

	（参考）介護テクノロジー利用の重点分野の全体図と普及率  ※赤破線で囲っている、排泄支援（排泄予測・検知）、見守り（施設）、見守り（在宅）、コミュニケーション、介護業務支援、機能訓練支援、食事・栄養管理支援、認知症生活支援・認知症ケア支援の項目においては他の機器・システムとの連携を定義文において明記 ※項目別の普及率は、『令和３年度介護報酬改定の効果検証及び調査研究に係る調査結果』を引用 ※緑枠線の、新たに追加される機能訓練支援、食事・栄養管理支援・認知症生活支援・認知症ケア支援の３項目に関しては、上記調査を実施していないため、普及率は未記載 3. 導入支援・補助金関連 介護テクノロジー導入・定着支援事業：介護ロボットや ICT 機器導入に対する補助事業の概要資料。 導入効果報告：過去の補助事業（令和元年度～3 年度）における導入事業所数や、具体的な導入効果（業務時間削減等）のまとめ資料。

	令和 7 年 10 月 20 日 介護記録ソフト　機能調査結果 会社名　株式会社ハローシステム ソフト名　楽にネット 製品 URL　https://www.raku2net.com/ ソフトの機能  一気通貫の対応（利用者の基本情報が自動反映される範囲）  バックアップファイル出力取込機能  販売形態：月額払い方式 4. セキュリティ・ガイドライン 医療情報システムの安全管理に関するガイドライン：介護事業所が遵守すべきシステム安全管理の基準。 個人情報の適切な取扱いのためのガイダンス：医療・介護関係事業者が個人情報を取り扱う際の実務的な指針と Q&A 事例集。 5. 調査研究・セミナー動画 調査研究報告書：データ連携による生産性向上に関する実証事業の結果や、ICT を通じた情報連携に関する調査レポート。 セミナー動画（YouTube リンク）：介護事業所における ICT 導入・普及セミナーのアーカイブ動画。
価格	無料（各種資料、仕様書、ツール類はサイトからダウンロード可能）
関連 URL 等	https://www.mhlw.go.jp/stf/kaigo-ict.html

介護 ICT／教材事例 **8**

教材・資料名	介護サービス事業における生産性向上（業務改善）に資するガイドライン
作者・出典元	厚生労働省
学習対象者	・介護施設・事業所の経営者、管理者 ・現場の業務改善（DX 推進）リーダー ・介護職員
学習形態	政府ガイドライン（PDF 資料）
学習目標	・現状の業務フローを可視化し、介護現場特有の「ムリ・ムダ・ムラ」を把握して業務効率化の視点を持つ。 ・ICT やテクノロジーの導入を前提とした具体的な業務改善のステップを習得する。
内容構成	・介護サービスにおける生産性向上の考え方と標準的な改善ステップ ・現場で実践できる「7 つの取組」 職場環境の整備 業務の明確化と役割分担 手順書の作成 記録・報告様式の工夫 情報共有の工夫 OJT の仕組みづくり 理念・行動指針の徹底 

	・チャットソフトや情報共有ツール等を活用した具体的な改善プロセスとモデル事例の紹介 ルールづくりと安全管理 保護者理解との連携  
価格	無料
関連 URL 等	https://www.mhlw.go.jp/stf/kaigo-seisansei-information.html

介護 ICT／教材事例 **9**

教材・資料名	介護現場における ICT の導入・活用事例集
作者・出典元	厚生労働省（老人保健健康増進等事業）
学習対象者	・介護施設・事業所の経営者、管理者 ・現場のリーダー、DX 推進担当者 ・ICT ツールの導入・運用に関わる介護職員
学習形態	事例集（PDF 資料）
学習目標	・介護記録ソフト、見守りセンサー、インカムなどの複数の ICT 機器を組み合わせた実践的な活用方法を学ぶ。 ・導入による業務時間の削減（夜間巡視の減少など）や、ケアの質向上（入居者の安全性向上）の定量的・定性的な効果を把握する。 ・現場の「IT への苦手意識」を払拭し、ツールを定着させるためのマネジメント手法を習得する。
内容構成	・スマートフォンやタブレット端末を活用した情報共有の迅速化とペーパーレス化の成功事例 ・見守りセンサー導入による夜間業務の最適化と、データに基づく介護の実践 ・インカム等を活用した職員間のコミュニケーション円滑化 ・導入時における現場職員への研修や、運用ルール（誰が・いつ・どう入力するか等）策定の工夫  居宅サービス事業所における ICT 機器・ソフトウェア導入に関する手引き Ver.1.1 ICT 厚生労働省老健局振興課 （注）今後のモデル事業等を通じて精査しを行っていく予定である。





価格	無料
関連 URL 等	https://www.mhlw.go.jp/stf/kaigo_ict.html

資料 2：保育・介護の DX 教育に係る既存教材等情報収集

保育・介護の DX に関わる既存カリキュラム（講座・セミナー等）情報 47 件

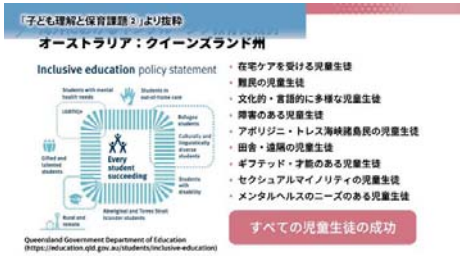
保育・介護の DX に関わる既存カリキュラム（講座・セミナー等）情報 47 件

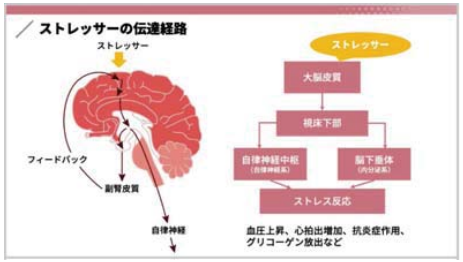
保育 ICT/DX			
1	保育 DX オンライン講座	保育現場での DX 導入の基礎や保育の質向上への応用を学ぶオンライン講座。	オンライン講座
2	保育 ICT 推進協会 セミナー・園内研修 保育 ICT 検定初級	保育士・保育運営者向け、保育士養成校向けの ICT に関するセミナーや研修	研修 資格・検定
3	保育 ICT 検定（中級）	保育業務の効率化を図るための ICT 知識日常業務をスムーズに行うスキルを学ぶ	資格・検定
3	保育 ICT 検定（上級・保育 DX 推進リーダー検定）	ICT/DX 推進を担う園内リーダー育成を目的としたｅラーニング型資格試験	資格・検定
4	保育 ICT ラボ事業	実践事例・研究協力園による解説。	政府事業
5	保育 DX セミナー（長崎県）	長崎県主催・県内 7 地区で開催された DX/ICT 推進セミナー	政府事業
6	2024 年度 保育 DX 勉強会（全国認定こども園協会）	全国認定こども園協会主催の DX 活用勉強会・政策動向や技術活用の講演を実施	政府事業
7	2024 年度 ICT 研修会「生成 AI 活用＆SNS 運用」	保育現場での生成 AI 活用と SNS 運用を学ぶオンライン研修	政府事業
8	2024 こども DX 研修会	こども分野 DX の最新動向・課題を講演し保育 ICT100%実現に向け議論	政府事業
9	紙媒体を残して OK な DX セミナー（船井総研）	保育業界 DX の基礎・紙書類削減など効率化ポイントを解説	政府事業
10	保育をどうしよう未来会議 2025（ルクミー/ユニファ）	保育者や専門家が登壇する無料オンライン講演イベント	政府事業
11	豊中市「往還型研修」	講義とワークショップで園の DX アクションプランを策定する全 6 回研修	政府事業
12	愛媛県「トライアングルエヒメ」保育 ICT 化研修	地域 DX 事業の一環として ICT 化の最新情報や事例紹介を実施	政府事業
13	埼玉県 保育所等経営者・管理者向けセミナー	ICT 導入意義や活用事例を学ぶ県主催研修	政府事業
14	先進事例から学ぶ ICT 活用セミナー（自治体職員向け）	国の施策担当者と企業が保育 DX の最新知見と先進事例を共有	政府事業
15	保育 ICT 協議会の設立・運営セミナー	先進自治体の事例に基づく協議会運営ノウハウ共有セミナー	政府事業
16	オンライン勉強会「#となりの園の ICT」	現場の ICT 活用課題をテーマに座談会形式で情報交換	政府事業
17	こども家庭庁 保育 ICT ラボ in 岡山市「生きる力をはぐくむ保育・教育のため	保育現場の DX 化や ICT 活用の未来をテーマに、導入事例や課題解決のヒントを紹介	政府事業
18	保育博ウエスト 2024 セミナー	保育 ICT の最新動向や監査・給付 DX の展望を専門家が討論	政府事業

19	保育施設の書類、どう減らす？自園に合った帳票整理の考え方	保育施設の書類、どう減らす？ 自園に合った帳票整理の考え方	オンラインセミナー
20	働き方改革とデータ連携で拓く！ シームレスで持続可能な「教育」×「子	教育・子育て支援分野の DX やデータ連携に関心のある自治体職員向け DX 化による働き	オンラインセミナー
21	「スムーズに導入できる！無料で使える ICT　操作方法を大公開」	登降園・年間指導計画・午睡チェック・連絡帳・デイリーボードの操作/実演を中心とし	オンラインセミナー
22	保育士の負担を軽減! “先進事例から学ぶ” ICT を活用した業務効率化と 保育の	市内の全公立保育施設に ICT を導入した白岡市より、導入前後の具体的な取り組み事例を	オンラインセミナー
23	病児保育 DX vol.2～拡がる養育者にやさしい医療支援のかたち～	地域全体で子育て世代を支える仕組みの構築と地域展開を見据え現場の実践共有	オンラインセミナー
24	2024 年度保育 DX 勉強会「保育の課題をデジタルで解決！みんなで描く DX の未	特定非営利活動法人全国認定こども園協会	対面・オンライン
25	保育 DX オンライン講座（DX がよくわかるオンライン講座）	DX 分野の基礎（全 10 回）	オンライン講座
26	保育 DX オンライン講座（DX がよくわかるオンライン講座）	これからの保育と DX 時代（全 10 回）	オンライン講座
27	豊中市と学ぶ！保育 AI によるデータ利活用と保育 ICT 化の加速のヒント	「業務省力化に留まらない保育 ICT 利用」と「地域全体の保育 ICT 活用支援」をテーマに	オンラインセミナー
28	つくば市と学ぶ！地域全体の保育 ICT 化を加速するヒント～施設の ICT 活用が進	「ICT の普及」を課題とするつくば市が、専門家である保育 ICT 推進協会と連携し、その	オンラインセミナー
29	これから求められる保育 ICT システムとは? 登降園管理、保護者連絡、キャッシ	これから求められる「保育内容」の DX 化の姿について詳しく解説する	オンラインセミナー
30	なぜ、あの園はうまくいっているのか？導入事例から見える成功の秘訣	保護者から「選ばれる園」として保育の質を維持・向上させるための具体的手法	オンラインセミナー
31	あなたの学びが、こどもの学びになる。保育 DX人材養成プログラム	社会の変化や研究の進化に伴う保育現場の変化紹介。ICT に関する知識・スキル	オンラインセミナー
32	いまさら聞けない！「保育に ICT って本当に必要？　～ICT 導入の意味を改めて	保育園 ICT システムの概要、システム導入のメリット、おすすめ保育園 ICT システム紹介	オンラインセミナー
33	加速する「保育 DX」に自治体はどう向き合う？～こども家庭庁の動きと全国公	全国公立保育施設の ICT 導入状況、ICT 化によって得られる具体的な効果の共有と自治体	オンラインセミナー
34	こども家庭庁 保育 ICT ラボ in 岡山市」講演会	生きる力をはぐくむ保育・教育のためにー ICT をどう活用するのかー	オンライン／現地
35	保育現場における「生成 AI」の活用 -効率化できた時間で保育の質の向上に取	第 1 部：保育現場における生成 AI の活用事例　第 2 部：保育施設で気を付けたいデジタ	オンライン／現地
36	ー業務効率化を確実に進め、その先の「遊び」と「学び」につなぐ ICT 活用ー	先進現場の具体事例や、システム変更の検討プロセスを通して、保育 ICT の“導入のリア	現地
37	【宗像市】保育 ICT ラボ事業における取組① ICT 活用を自治体から推進｜導入か	市内施設関係者を対象に、導入後の活用促進を見え、ICT 活用の目的や体制づくりについ	研修/グループワーク
38	こども家庭庁 保育 ICT ラボ in 厚沢部町 先端 ICT 活用 見学会	保育の質を上げるドキュメンテーション運用 地域活性や保護者連携強化	現地

39	こども家庭庁「保育 ICT ラボ」事業 in 豊見城市 ―業務効率化を確実に進めた	保育 ICT 活用を始めたい・活用を促進したいと考えている保育者対象	現地
40	愛媛県伊予郡松前町内「保育 ICT ラボ事業」見学会・成果報告会を開催　―般社	一般社団法人 保育 ICT 推進協会 愛媛県伊予郡松前町内「保育 I 町立保育園 4	現地
41	実践園から学ぶ ICT で変わる園業務	現場から見えてきた園業務の本当の課題や、 ICT 化・DX 化するためのステップ	オンライン
介護 ICT/DX			
42	介護分野における生産性向上の取組の進め方	DX 推進の必要性や改善プロセスを解説する 全 17 本の動画と分析ツールを公開	e ラーニング
43	デジタル・テクノロジー基本研修	介護ロボット・ICT 活用人材を育成する研修プログラム	研修プログラム・セミ
44	介護 DX オンライン講座	介護福祉分野の DX 化をテーマ ICT、AI、IoT、データサイエンスの基礎	オンライン講座
45	スマート介護士資格試験	介護ロボット・ICT 活用人材を認定する民間資格。3 つのレベル	資格・検定
46	デジタル中核人材養成研修（厚生労働省）	介護テクノロジーの導入と活用による介護現場の生産性向上推進する人材養成	研修プログラム
47	セミナー介護 DX 推進の重点と効果的な生産性向上推進体制加算につい	令和 6 年度介護報酬改定において新たな加算の創設等から取組の全体像について	セミナー

教材・資料名	保育 DX オンライン講座
作者・出典元	一般社団法人教員等育成事業推進機構（開設：新島学園短期大学）
学習対象者	・DX に関心のある方 ・これからの保育に関心がある方 ・保育・幼児教育分野への就職・復職を目指す方（保育士資格・幼稚園教諭免許保有者には就職サポートあり）
学習形態	オンライン講座（オンデマンド型 e ラーニング）
学習目標	・あらゆる業種で求められる DX の基礎知識と、AI・IoT・データサイエンスの基本を習得する ・保育現場における DX 化（ICT 活用）がもたらす業務効率化、安全管理、育ちの可視化等のメリットを理解する ・保育関連アプリやドキュメンテーションの実践的活用方法を学ぶ ・乳幼児期の発達障害やインクルーシブ保育、保育者のメンタルヘルスに関する最新知見を学び、保育の質を高める
内容構成	【構成：全 20 回（標準学習時間 20 時間）】 ■1. DX 分野の基礎（全 10 回） 社会の中で求められている DX とはどのようなものか Society4.0 における情報化について Society5.0 と社会の発展 AI とは 知識の表現と探索 機械学習とディープラーニング、生成系 AI データサイエンスとデータサイエンティストとは IoT 入門 IoT と AI、データサイエンス DX と社会、セキュリティ

	 ■2. これからの保育と DX 時代（全 10 回） 保育と ICT に関わる現状 子どもへの保育活動・教育活動 保育者の働き方や業務 保育関連アプリの活用 ドキュメンテーションの実際 気になる子どもと発達障害 インクルーシブ保育 気になる子どもと保護者支援 保育園のメンタルヘルス対策 保育士のメンタルヘルス 
価格	1 講座 10,000 円（税込） ※2 講座受講で計 20,000 円
関連 URL 等	https://hoikudx.naruyoko.jp/

教材・資料名	保育 ICT 推進協会 セミナー・園内研修 保育 ICT 検定初級
作者・出典元	一般社団法人 保育 ICT 推進協会
学習対象者	・保育施設の経営者、園長、保育士 ・保育士養成校の学生 ・自治体の保育担当職員
学習形態	・セミナー/研修：オンラインまたは対面（園内研修） ・検定初級：オンライン受検（事前学習動画あり）
学習目標	・保育現場における ICT 化の必要性とメリットを理解する ・ICT 導入におけるトラブル事例とその対処法を知る ・情報セキュリティや個人情報保護の基礎知識を身につける ・（初級）ICT 活用の基礎的なリテラシーがあることを証明する
内容構成	【1. 保育施設・保育団体向け研修】 ・「保育の ICT とは？実践例から学ぶ活用法」 （導入から活用までのロードマップ、ICT 化とより良い保育の関係） ・「園内の情報共有の見直しと ICT 化の考え方」 （情報の種類と扱い方、セキュリティと個人情報の注意点） ・「保育に AI？どういうこと？そしてどう使うの？」 （生成 AI の基礎、業務における活用事例、注意点） ・「保育に YouTube ってどうなの？」 （デジタル時代の子どもへの影響、環境としてのデジタル活用）  【2. 養成校（学生）向け講義】 ・「保育現場における ICT の活用」 （国の最新動向、実際のシステムを使ったデモンストレーション）

	・「ICT を活用したドキュメンテーション」 （記録作成の実践、保護者共有の意義） ・「保育 ICT 検定初級（一斉受験）」 （事前講座動画 30 分＋オンライン選択式試験） 
価格	・団体研修：要相談（内容・時間により異なる） ・養成校向け講義：２講座　各 10,000 円 ・検定初級：無料（養成校での一斉受験やキャンペーン等で実施）
関連 URL 等	https://hoiku-ict.or.jp/seminar

教材・資料名	保育 ICT 検定（中級・上級） ・中級：保育 ICT リテラシー検定 ・上級：保育 DX 推進リーダー検定
作者・出典元	一般社団法人 保育 ICT 推進協会
学習対象者	【中級】 ・保育施設で働く現役の保育士、職員 ・就職を控えた保育士養成校の学生 ・園内の ICT 担当者を目指す方 【上級】 ・園長、主任、分野別リーダーなどの管理職層 ・施設内の ICT 推進担当者 ・組織全体の業務改善を主導する立場にある方
学習形態	【中級】 ・事前講座動画の視聴（約 120 分） ・オンライン選択式試験（約 70 問） 【上級】 ・事前講座動画の視聴（約 6 時間 30 分／全 14 本） ・オンライン選択式試験（90 問）
学習目標	（中級）保育業務の効率化を図るための実務的な ICT 活用スキルを習得する （上級）ICT 導入を単なるツール導入で終わらせず、園全体の業務改善・変革（DX）へと導くマネジメント能力を養う 組織的な情報セキュリティ体制の構築手法を学ぶ
内容構成	中級： 1. コンピュータの基礎知識 ・ハードウェア、OS、ファイル管理などの基本操作 2. インターネット ・クラウドサービスの仕組み、ブラウザ操作、ネットワークの基礎 3. セキュリティ ・パスワード管理、ウイルス対策、SNS 利用の注意点、情報漏洩対策 4. 表計算ソフトの使い方 ・Excel 等の基本操作、関数、表作成、データ管理の基礎 （※保育現場で多用されるシフト作成や名簿管理を想定）

	上級 1. 保育施設の社会的役割と変化 ・保育分野の ICT 化、BPR（業務改革）、DX の定義 2. 保育現場における DX ・施設の目標（保育理念）を軸とした DX の進め方 3. 推進体制と運営のポイント ・ワーキンググループの活用方法 ・DX におけるリーダーシップ、マネジメント、ファシリテーション 4. 法務・リスクマネジメント ・プライバシーポリシー／セキュリティポリシーの策定 ・情報セキュリティ事故（インシデント）対応 ・データのバックアップと著作権
価格	【中級】12,500 円（税込） ※学割・団体割あり 【上級】22,000 円（税込）
関連 URL 等	https://hoiku-ict.or.jp/hoikuict-kentei-intermdiate https://hoiku-ict.or.jp/advanced

保育 ICT／カリキュラム事例 **4**

教材・資料名	保育 ICT ラボ事業 （こども家庭庁 採択事業）
作者・出典元	こども家庭庁 （運営・情報発信：参加自治体・法人・ICT ベンダー各社）
学習対象者	・保育 ICT の「先進的な活用事例」を知りたい園長、理事長 ・地域の保育 DX を推進する自治体職員 ・国の最新施策やモデル事業の動向を把握したい業界関係者
学習形態	・Web ポータル（事例記事、動画、イベント情報） ・見学会、シンポジウム（対面・オンライン）
学習目標	・「事務負担軽減」の先にある「保育の質向上」への ICT 活用方法を学ぶ ・全国のモデル園（ラボ事業採択園）での実証実験結果や具体的な成果を知る ・AI 活用（保育記録の自動化、見取り支援）などの最先端トレンドを把握する ・自治体が主導して地域全体の ICT 化を進めるためのノウハウ（研修、補助金活用）を得る

内容構成	 1. 保育 ICT ラボ事業とは？ ・事業の目的：ICT 活用事例を作り、全国へ広げる ・参加者紹介：採択された自治体（神戸市、豊中市、つくば市など）、園、ベンダー（コドモン、ユニファ等） 2. 事例集・取組内容（Case Studies） ・大規模園（400 名規模）での効率化と安全対策（町田自然幼稚園） ・「対話」から始めた業務改善ストーリー（認定こども園 はぜる） ・保育 AI による「見取り」支援と人間との協働（聖ミカエル保育園） ・公立園でのゼロからの導入・定着支援（愛媛県松前町） 3. イベント情報 ・ICT 公開保育見学会（「未来の保育現場を見に行こう！」） ・自治体職員向け研修会、シンポジウム、成果報告会
価格	無料（自治体が採択された場合の公的支援事業として実施） ※詳細は自治体または協会へ要問い合わせ
関連 URL 等	https://hoiku-ict.jp/

教材・資料名	保育 DX セミナー（長崎県）
作者・出典元	長崎県 こども未来課（委託先：株式会社 JTB 長崎支店）
学習対象者	・長崎県内の保育所、認定こども園、幼稚園等の施設長・職員 ・自治体職員 ※県内 7 地区（長崎、県北、県央、五島、壱岐、対馬など）で開催
学習形態	対面セミナー（各地区の文化会館等で開催）＋グループワーク
学習目標	・保育現場における DX・ICT 化の目的（負担軽減、離職防止）を理解する ・国の動向（保育のワンスオンリー、給付・監査の共通基盤化）を把握する ・先進事例や具体的な導入方法を学び、自園での ICT 活用検討に役立てる
内容構成	【プログラム（約 2 時間半）】 1. 保育 DX・ICT とは、その目的について 2. 国の動向（保育のワンスオンリー等） 3. 保育現場において活用が可能な DX・ICT 機器等の紹介 4. 全国の先進事例紹介 5. 導入方法（検討から導入に至るまで） 6. グループワーク 7. 質疑応答 
価格	無料
関連 URL 等	https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/hukushi-hoken/kosodateshien-shoshikataisaku/youjikyouiku-center/youjikyouikuadvisor/733027.html

教材・資料名	2024 年度 保育 DX 勉強会 「保育の課題をデジタルで解決！みんなで描く DX の未来」
作者・出典元	特定非営利活動法人 全国認定こども園協会
学習対象者	・全国認定こども園協会の会員施設 ・DX に関心のある非会員施設の経営者・職員
学習形態	ハイブリッド開催（会場：赤坂サンスカイルーム ＋ オンライン Zoom）
学習目標	・保育 DX に関する国の最新政策動向（こども家庭庁）を理解する ・安全管理（午睡チェック、バス置き去り防止等）におけるテクノロジー活用を学ぶ ・これからの保育 DX の展望について、行政・事業者・団体の対談を通じて知見を深める
内容構成	1. 行政説明「保育 DX に関する最新の政策動向について」 （こども家庭庁 成育局保育政策課） 2. 講演「保育 DX の現在地と今後の展望」 （ユニファ株式会社 代表取締役 CEO 土岐泰之氏） 3. 講演「安心・安全な保育の実現：テクノロジーとデータで支える次世代の安全管理」 （株式会社 Mj 代表取締役 藤田将氏） 4. 対談「保育 DX で明るい未来を描く」 齋藤祐善（保育 DX 推進委員会委員長）【モデレーター】 横田洋和氏（こども家庭庁成育局保育政策課課長補佐） 土岐泰之氏（一般社団法人こども DX 推進協会理事、ユニファ株式会社代表取締役 CEO） 藤田将氏（一般社団法人こども DX 推進協会 理事、株式会社 M 代表取締役） 堀 昌浩（保育 DX 推進委員会）

教材・資料名	2024 年度 ICT 研修会 「これからの保育者の役に立つ 生成 AI 活用＆SNS 運用」
作者・出典元	特定非営利活動法人 全国認定こども園協会
学習対象者	・保育現場での ChatGPT 等の生成 AI 活用に関心がある方 ・園の SNS 運用（採用・広報）を担当している職員
学習形態	オンライン（ライブ配信 ＋ アーカイブ配信）
学習目標	・生成 AI（ChatGPT 等）を日常業務（お便り作成、行事企画等）に活用する手法を習得する ・SNS（Instagram 等）を通じた効果的な情報発信と、炎上リスクなどの運用注意点を学ぶ
内容構成	【プログラム（全 3 時間半）】 1. 生成 AI を園内業務に活用してみよう！（90 分） ・生成 AI の基礎知識 ・具体的なプロンプト（指示出し）の事例 ・業務効率化への応用 2. SNS、運用できていますか？（90 分） ・採用や広報における SNS の役割 ・効果的な投稿内容と運用のコツ ・リスク管理 講師：豊福竜大氏（crack 株式会社 取締役） 
価格	・会員：無料・非会員：10,000 円
関連 URL 等	https://kodomoenkyokai.or.jp/archives/3824

	
価格	会員：3,000 円 非会員：5,000 円
関連 URL 等	https://kodomoenkyokai.or.jp/archives/3773

保育 ICT／カリキュラム事例 **8**

教材・資料名	2024 こども DX 研修会 「国が進めるこども DX の現状について」
作者・出典元	一般社団法人 こども DX 推進協会 ／ 社会福祉法人 日本保育協会青年部
学習対象者	・日本保育協会青年部員 ・こども DX 推進協会の会員 ・保育業界の経営層、次世代リーダー
学習形態	対面研修会（講演 ＋ 対談）
学習目標	・こども DX の全体像（子育て、給付・監査、施設 DX）を体系的に理解する ・「保育 ICT100%」が実現した未来像と、そこに至る課題を共有する ・東京都の GovTech（行政 DX）の取り組みから、自治体との連携のあり方を学ぶ
内容構成	 1. 開会挨拶 2. 基調講演：こども DX の全体像 講師：こども DX 推進協会 理事 兼 施設 DX 委員長　土岐泰之氏 3. テーマ別講演 ・テーマ別講演①：子育て DX 講師：こども DX 推進協会　理事 兼 母子手帳 DXPT 長　谷川一也氏 ・テーマ別講演②：給付・監査 DX 講師： こども DX 推進協会　理事 兼 給付・監査 DX 分化会会長　髙石尚和氏 ・テーマ別講演③：東京都の推し進めるこども DX 講師： GovTech 東京　業務執行理事　畑中洋亮氏

	4. 対談：保育 ICT100%が実現した世界と、そこに向かうための課題とは？ 講師：GovTech 東京　業務執行理事　畑中洋亮氏 こども DX 推進協会　代表理事　小池義則氏 日本保育協会青年部　部長　新保雄希氏 
価格	無料（要会員登録等の条件あり／詳細は主催者へ確認）
関連 URL 等	https://kodomodx.or.jp/news/?id=66 (資料) https://45f9b021-a056-474e-9e75-f4acad2be566.filesusr.com/ugd/79f25f_49b23f5df28540d1b3e502140d4dd2ba.pdf https://45f9b021-a056-474e-9e75-f4acad2be566.filesusr.com/ugd/79f25f_00a307c1c2f54b4f97c1456af644d807.pdf

教材・資料名	書類が多い保育園向け！紙媒体を残して OK な「DX」セミナー
作者・出典元	株式会社 船井総合研究所
学習対象者	・書類業務が多く、現場の負担を感じている経営者・園長 ・ICT システムを導入したが使いこなせていない方 ・「完全ペーパーレス化」にハードルを感じている方
学習形態	オンラインセミナー（Web 配信）
学習目標	・無理に全てをデジタル化せず、「紙」と「デジタル」を併用する現実的な DX 手法を学ぶ ・「デジタル化」「ICT 化」「DX」の違いと、保育現場での定義を整理する ・現場の抵抗感を減らしながら業務効率化を進めるための体制づくりを習得する
内容構成	 【講座内容】 1. 保育業界における DX とは？ ・ICT 化、デジタル化との違い 2. 紙媒体を残してもよい DX 解説 ・実際の保育園事例に基づく「目指すべき DX の形」 ・残すべき紙、なくすべき紙の選別 3. 保育園 DX の第一歩 ・明日から実践できる具体的なアクション
価格	・一般価格：5,500 円（税込） ・会員価格：4,400 円（税込）
関連 URL 等	https://www.funaisoken.co.jp/seminar/088629

教材・資料名	保育をどうしよう未来会議 2025 （テーマ：社会みんなで育むこどもの笑顔と未来）
作者・出典元	ユニファ株式会社（ルクミー）
学習対象者	・全国の教育・保育施設に関わる保育者 ・保育法人運営者 ・保護者、学生
学習形態	オンライン形式（録画配信セッション）
学習目標	・「社会全体でこどもを育てる」視点から、園・家庭・地域の連携のあり方を学ぶ ・SNS を活用した採用・定着戦略（人が集まる園づくり）の成功事例を知る ・こども家庭庁「保育 ICT ラボ」の取り組みや、安全ガイドライン作成の裏側を学ぶ ・こどもの日常写真の撮影ノウハウや、ICT 導入の段階別攻略法を習得する
内容構成	 【配信セッション一覧（タイトル／登壇者）】 1. 社会みんなで育むこどもの笑顔と未来（基調講演・事例・トークセッション） ・「はじめの 100 か月」で育む未来への希望（大豆生田 啓友氏） ・預けるだけじゃない、あなたの地域の保育園（石田 雅一氏） ・【トークセッション】大豆生田 啓友氏 × 石田 雅一氏 2. 人が集まる・人が辞めない保育施設へ ～SNS 活用が実現する採用・定着術～ ・日向 美奈子氏（株式会社ハイフライヤーズ 取締役社長） ・石井 渚氏（株式会社ハイフライヤーズ 広報部ディレクター） 3. 【こども家庭庁 保育 ICT ラボ in 町田市】「こども誰でも通園制度」における安全ガイドライン作成に向けて ・小保内 俊雅氏（東京都立多摩北部医療センター 小児科部長）

	・猪熊 弘子氏（駒沢女子大学 教授） ・齋藤 祐善氏（学校法人正和学園 理事長） ・土岐 泰之氏（ユニファ株式会社 代表取締役 CEO） 4. 園だから撮れるこどもの日常写真 ～改めて考える写真の意味と保育中の写真撮影のコツ～ ・鈴木 秀康氏（フォトグラファー） 5. 【2025 年版】立ちはだかる保育 ICT 化の壁 ～導入段階ごとに徹底解説！～ ・三好 冬馬氏（一般社団法人保育 ICT 推進協会 代表理事） 6. 記録が変われば保育が変わる！ ～ドキュメンテーション実践事例からの学び～ ・無藤 隆氏（白梅学園大学 名誉教授） ・貝瀬 かおり氏（光の子幼稚園 園長） ・秋葉 美咲氏（光の子幼稚園 新入職員） 7. 対話と記録で深めるこども理解 ～AI は保育の専門性を高めるために活かせるのか～ ・中村 章啓氏（社会福祉法人柿ノ木会 野中こども園 副園長） 8. みんなが「自分らしくいられる」を育むインクルーシブ保育 ～多様なこどもたちの育ちを支える保育実践～ ・渡邉 英則氏（学校法人渡辺学園 理事長／港北幼稚園 園長） ・長岐 裕美氏（一般社団法人うるの木 代表理事） 9. 【こども家庭庁 保育 ICT ラボ in 栃木市】こどもと先生の笑顔が広がる保育と ICT ・大豆生田 啓友氏 ・丸山 桂里奈氏（タレント／元サッカー日本女子代表） ・堀 昌浩氏（認定こども園さくら 園長） ・土岐 泰之氏 10. 【次世代園長・リーダー必見】変化の波をチャンスに変える！持続可能な園経営の羅針盤 ・松尾 創氏（学校法人双恵学園 理事長／全埼玉私立幼稚園連合会 会長） ・土岐 泰之氏

	11. こどもが夢中になる！ ～園での探究活動の実践例～ ・村田 美緒氏（みちてる保育園 園長） ・西野 三季氏（ピノキオ幼児舎高円寺南保育園） ・藤田 大樹氏（ピノキオ幼児舎井荻保育園） 12. 「誰でも通園」で変わる！園の役割とこども・保護者支援の新しいかたち ・伊藤 唯道氏（順正寺こども園 園長） ・藤田 将氏（株式会社 MJ 代表取締役社長） ・土岐 泰之氏
価格	無料（会員サイト「ルクミールーム」への登録が必要）
関連 URL 等	https://info.lookmee.jp/miraikaigi/

教材・資料名	豊中市「往還型研修」 （こども家庭庁 保育 ICT ラボ事業）
作者・出典元	株式会社コドモン（コドモンコラム） 協力：大阪府豊中市、一般社団法人保育 ICT 推進協会
学習対象者	・豊中市内のモデル保育施設（9 園が参加） ・ICT 導入・活用に課題を感じている現場リーダー
学習形態	往還型研修（全 6 回／2025 年 7 月～2026 年 2 月） 集合研修 ＋ 自園での実践 ＋ 振り返りを繰り返す形式
学習目標	・学んだ内容を園で実践し、再度研修で振り返る「往還型（おうかんがた）研修」の仕組みとメリットを理解する。 ・他園の悩み（手書きへの執着、セキュリティ不安等）を共有し、ICT 化が「保育の質の向上」や「監査の簡素化」にどう繋がるかの展望を持つ。 ・自園の課題を可視化し、具体的な「保育 DX アクションプラン」を策定・実行するプロセスを学ぶ。
内容構成	 1. 保育 ICT 導入や活用促進を支援する「往還型研修」とは ・研修と実践を繰り返すサイクルの解説 ・2025 年 7 月～2026 年 2 月までの研修スケジュール 2. 豊中市の保育園が抱える課題と保育 ICT の導入状況 ・高い導入率（約 7 割）の一方で生じている活用状況の格差 ・公立・私立の垣根を越えた意見交換の重要性 3. 保育 ICT の活用を目指す「往還型研修」第一回目の内容（2025 年 7 月 8 日） ・ワークショップ①：保育 ICT について感じていること（期待・課題・不安）の可視化

	・ワークショップ②：課題の本質を洗い出し「保育 DX アクションプラン」を作成 4. 第二回目の研修（2025 年 9 月 8 日） ・「記録・計画の見直し」への焦点化（こども家庭庁の最新方針共有） ・ペーパーレス監査の現状と、効率的な情報共有（フロー型とストック型）の提案 5. 往還型研修を受講した方の感想 ・受講者の意欲の変化と「業務の形骸化」への気づき 6. 保育 ICT 導入に関するご相談・お問い合わせ 
価格	無料（モデル事業として実施）
関連 URL 等	https://hoiku-ict.or.jp/archives/2749 https://www.codmon.com/column/hoiku-ictlab_07/

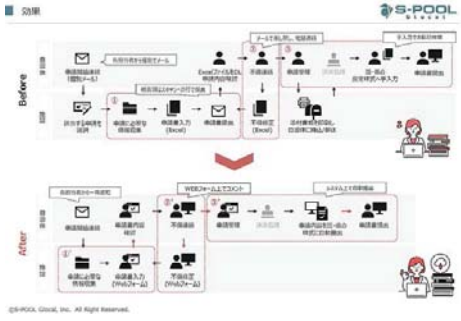
教材・資料名	愛媛県「トライアングルエヒメ」保育 ICT 化研修
作者・出典元	主催：トライアングルエヒメ保育 ICT 化協議会事務局 （運営：一般社団法人 保育 ICT 推進協会）
学習対象者	・愛媛県内の保育に携わる方（保育施設関係者、自治体職員など） ・保育の ICT 化について基礎から学びたい方、他園の事例を知りたい方
学習形態	対面研修（愛媛県内 3 エリア：南予・中予・東予で開催）
学習目標	・保育 ICT に関する国の動向や、最新の ICT 関連情報の現状を理解する ・先進的な施設における ICT 活用事例や、実証実験（愛媛県デジタル実装加速化プロジェクト）の結果を学ぶ ・国の通知やガイドラインに基づき、保育記録を効率的に見直すための考え方や改善手法を習得する
内容構成	

	【研修テーマ】 1. 保育の ICT の現状と活用事例 ・国の動向や最新の ICT 関連情報の提供 ・先進的な施設における具体的な活用事例の紹介 2. 保育記録の見直しの考え方 ・国の通知やガイドラインを基にした記録見直しの注意点 ・実際の改善事例の紹介 【展示・相談会】 ・実証実験で使用した機器の展示 - ツール 1：保育園支援システム（登降園管理、保護者連絡等） - ツール 2：午睡センサーマット・スマート体温計（午睡チェック、検温記録の自動化） ・ICT 導入・活用個別相談会（無料・要事前予約） 【講師】 ・三好 冬馬 氏（一般社団法人 保育 ICT 推進協会 代表理事） 
価格	無料
関連 URL 等	https://hoiku-ict.or.jp/archives/1895

教材・資料名	埼玉県 保育所等経営者・管理者向けセミナー （保育士の負担軽減・就業継続支援）
作者・出典元	埼玉県 ／ 実施委託先：株式会社ポピンズプロフェッショナル
学習対象者	・埼玉県内の保育所等の経営者、園長、主任保育士、事務長
学習形態	オンラインセミナー（Zoom ライブ配信／全 2 回）
学習目標	・ICT システム導入の意義と具体的な進め方を学び、業務効率化を図る ・保護者対応（苦情解決）の仕組みづくりを学び、トラブルを未然に防ぐ ・職員のメンタルヘルスケアやキャリアマネジメントの手法を習得し、離職防止につなげる
内容構成	【第 1 回】 ■オリエンテーション ・株式会社ポピンズプロフェッショナル ■保育所等における ICT システム活用の意義と導入の進め方、活用事例 ・三好 冬馬 氏（一般社団法人 保育 ICT 推進協会 代表理事／こども DX 推進協会 保育 DX 委員会 専門委員／松山東雲女子大学 人文科学部 心理子ども学科 非常勤講師） ■保護者対応・苦情解決の仕組み ・小崎 恭弘 氏（大阪教育大学健康安全教育系教育学部 教員養成課程家政教育部門 教授） 【第 2 回】 ■オリエンテーション ・株式会社ポピンズプロフェッショナル ■保育所等における ICT システム活用の意義と導入の進め方、活用事例 ・渡邉 かなえ 氏（株式会社ポピンズエデュケア 施設長） ■職員の就業継続支援（職場環境の改善、メンタルヘルス、職員のキャリアマネジメント） ・神林 佑介 氏（株式会社川原経営総合センター 経営コンサルティング部 副統括）
価格	無料
関連 URL 等	https://poppins-education.jp/saitama-keieisha/

教材・資料名	先進事例から学ぶ ICT 活用セミナー ～ICT を活用した業務効率化と保育の質向上への道～
作者・出典元	ジチタイワークス（株式会社ホープ）
学習対象者	・自治体の保育担当職員 ・公立保育所の運営担当者
学習形態	オンラインセミナー（Webinar）
学習目標	・「ドキュメンテーション」の ICT 化が、業務削減だけでなく保育の質向上（対話のきっかけ）になることを理解する ・LINE 等を活用した「電話が鳴らない保育園」の実現手法（欠席連絡、一時保育予約の自動化）を学ぶ ・自治体と施設をつなぐデータ連携の標準化について知る
内容構成	 【第 1 部】ドキュメンテーションの ICT 化と保育の質向上 （登壇：株式会社コドモン 徳永氏） ・「記録のための記録」からの脱却。 ・写真付きのドキュメンテーションにより、保育士同士の対話が活発化し、保護者との信頼関係が深まることで、保育の質そのものが向上するプロセスを解説。

	 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会 連絡のとりまとめ【概要】 1．保育所等における保育の質の基本的な考え方 2．保育実践の質の確保・向上に向けた取組の在り方 3．今後の展望 【第 2 部】“電話が鳴らない”保育園を DX で実現。保育士に時間の余裕を。 （登壇：株式会社 MJ 藤田氏） ・朝の欠席連絡や電話対応による業務の中断を ICT で解消。 ・保護者へのプッシュ通知や Web 予約を徹底し、物理的に電話が鳴らない環境をつくることで、保育士の精神的な余裕と集中できる環境を創出した事例。 【第 3 部】三方徳の保育～ ICT 導入でラクになる保育士・家庭・自治体～ （登壇：一般社団法人保育 ICT 推進協会 三好氏） ・ICT 導入を「保育士・家庭・自治体」の三者が Win-Win になる「三方徳」の視点で捉える。 ・単なる事務削減に留まらず、自治体の監査効率化やデータの有効活用までを見据えた本質的な DX のあり方を提言。 【第 4 部】保育×集金 DX で保育士の負担を軽減！ （登壇：日本郵便株式会社 氏） ・現金管理のリスクと手間を排除する集金 DX。 ・郵便局のネットワークを活用した口座振替や集金代行サービスを導入し、保育現場から「お金を扱う心理的負担」をなくす取り組みを紹介。 【第 5 部】保育施設と自治体をつなぐ DX ～複数自治体での標準化の取り組み～ （登壇：那覇市・南城市・西原町 担当者） ・自治体ごとに異なる補助金申請様式を、複数自治体で共通のプラットフォーム（kintone 等）に「標準化」した先進事例。 ・施設側の申請負担を大幅に軽減し、自治体側の審査業務も抜本的に効率化した広域連携の成果を共有。

	 効果 S-POOL Before After WEBフォームとFTPコント ©S-POOL Cloud, Inc. All Right Reserved.
価格	無料
関連 URL 等	https://jichitai.works/articles/3115

教材・資料名	自治体向け 無料オンラインセミナー 「保育 ICT 協議会の設立・運営に関する事例紹介」
作者・出典元	一般社団法人 こども DX 推進協会
学習対象者	・自治体職員（保育・こども政策関連部署の担当者） ・地域での ICT 化を推進したい保育関係者
学習形態	オンラインセミナー（Zoom 等）
学習目標	・こども家庭庁が推奨する「保育 ICT 協議会」の役割と、設立による補助率嵩上げ等のメリットを理解する ・先行自治体の事例から、協議会の立ち上げフローや効果的な運営ノウハウを学ぶ ・地域全体でデータを活用し、保育の質向上と行政負担軽減を両立させる手法を知る
内容構成	各自治体が直面する「導入の壁」をどう乗り越えるか。地域特性の異なる二つの成功事例から、DX 推進を加速させる「協議会運営」の要諦を解説。 1．北海道 帯広市：強力なリーダーシップによる「デジタル格差」の解消 ・課題：公立園と私立園の間で進んでいた ICT 導入状況の格差。 ・アプローチ：既存の園長会議を母体とした協議会を設立し、初期導入を強力にバックアップ。 ・成果：導入率 20〜30%という停滞状況から、短期間で市内全域 100%達成を実現。官民一体となったボトムアップ型の推進事例。 2．神奈川県 小田原市：現場ニーズに寄り添う「活用フェーズ」の最適化 ・課題：導入済み園と未導入園の混在による、支援ニーズの多様化。 ・アプローチ：月次の保育会を活用し、事前に現場の悩みや要望を徹底ヒアリング。その声を反映させた講演会やサポート体制を構築。 ・成果：現場の納得感を高めることで、例年を大きく上回る導入件数を記録。継続的な活用を促すための運営モデル。 まとめ：フェーズに応じた DX 推進のヒント ・初期導入フェーズ：標準化と格差解消に向けた強力な推進体制の作り方 ・活用展開フェーズ：現場の声に基づいたソフト支援とニーズの反映方法
価格	無料
関連 URL 等	https://kodomodx.or.jp/news/?id=85

教材・資料名	保育施設の書類、どう減らす？自園に合った帳票整理の考え方
作者・出典元	ほいくる by 小学館
学習対象者	・「書類を減らしたいけれど、記録はおろそかにできない」 そんな悩みを抱える先生方向け
学習形態	オンライン
学習目標	・他園（となりの園）のリアルな ICT 活用事情を知り、自園の改善に活かす ・「端末の管理方法」「ドキュメンテーションの運用」など、具体的テーマについて意見交換する ・現場レベルでの悩みや成功体験を共有し、モチベーションを向上させる
内容構成	これまでの ICT テーマ 1 回「ICT 化した保育って実際どんな感じ？」 2 回「感動する卒園スライドショーの作り方！」 3 回「#せんせいプライム ってなに？こんな特典あったらいいな大会議」 4 回「コドモンはじめて使うならまずはコレ」 5 回「コドモン☆de☆指導案」 6 回「コドモンでできる保護者連絡」 7 回「児童票の ICT 化ってどういうこと？」 8 回「そもそも ICT って？DX？保育はどうなる？」 9 回「ドキュメンテーション実現に向けての秘策」 10 回「ICT のデメリット」 11 回「連絡帳 1 ヶ月使ってみた」 12-17 回「保育士の仕事 1 回全部書きだしてみる」 18 回「アプリの連絡帳　導入に向けて第一歩」 19 回「園日誌園日誌のシステム化」 20 回「ICT システムとセキュリティ」 21 回「Google を使った保育の ICT 化」 22 回「成功する ICT 化と失敗する ICT 化」 23 回「ZOOM を使った園見学と園交流」 24 回「ICT 活用ロードマップ」 25 回「ICT 化を進めるための推進体制と役割分担」 26 回「保育園での LINE 活用」

	
価格	無料
関連 URL 等	https://hoiku-ict.or.jp/archives/128

教材・資料名	こども家庭庁 保育 ICT ラボ in 岡山市 「生きる力をはぐくむ保育・教育のために ―ICT をどう活用するのか―」
作者・出典元	主催：三和マッチシステム株式会社 後援：岡山県、岡山市 （こども家庭庁「保育 ICT ラボ事業」の一環として実施）
学習対象者	・幼保施設職員（園長、主任、保育者、教諭、事務職など） ・自治体関係者 ・保育者を目指す学生、保育者養成教育関係者
学習形態	講演会・セミナー（現地開催およびオンライン配信のハイブリッド形式）
学習目標	【・保育現場でなぜ ICT 導入が必要なのか、AI などの先端 ICT をどう利活用するかを具体事例から学ぶ。 ・モデル園の「ナマの声」を通して、ICT 化・DX 化の実践における課題解決のヒントを得る。 ・AI 時代に求められる「創造性・想像力」と、遊びを通した「生きる力」の育みについて、専門的な知見から理解を深める。
内容構成	第 1 部：ICT 研修＆先端的 ICT 事例紹介 ・保育 ICT セミナー：ICT 導入の必要性と先端技術（AI 等）の利活用について。 ・先進的 ICT 利活用事例の紹介。 第 2 部：モデル園・園長講演およびトークセッション ・講演「ICT 化・DX 化・現場のナマの声」 登壇：小西 安志 氏（保育 ICT ラボ事業モデル園「かわい保育園」園長） ・トークセッション「先端的 ICT の活用で保育現場はどう変わる」 パネリスト： - 青木 多寿子 氏（岡山大学教授／発達心理学） - 片山 美香 氏（岡山大学教授／発達臨床心理学） - 三沢 良 氏（岡山大学教授／産業・組織心理学） - 土岐 泰之 氏（ユニファ株式会社 代表取締役 CEO／AI・ICT を活用した保育支援） 第 3 部：特別講演 ・講演「AI 時代の創造性・想像力 ～生きる力は遊びを通して育まれる～」 講師：内田 伸子 氏（IPU・環太平洋大学教授／お茶の水女子大学名誉教

	授） 【会場展示】 ・システム展示：実機による操作体験コーナー。 
価格	無料（事前申込み制）
関連 URL 等	https://hoiku-ict.jp/events/detail/23

教材・資料名	保育博ウエスト 2024 エデュケーションセミナー 「日本のこども DX 最前線！保育 ICT の今と監査・給付 DX の展望」
作者・出典元	主催：保育博（メッセフランクフルトジャパン） 登壇：一般社団法人 こども DX 推進協会
学習対象者	・保育博（展示会）に来場した施設経営者、園長 ・自治体職員、業界関係者
学習形態	対面セミナー（展示会場内ステージ）
学習目標	・こども家庭庁が掲げる「令和 8 年度までに保育 ICT 導入率 100％」に向けた施策と、ICT 導入がもたらすデータ連携のメリットを理解する。 ・午睡センサーや見守りタグ等のテクノロジーを活用した、予測に基づく安全管理の重要性を学ぶ。 ・監査・給付・保活といった行政手続きのオンライン化が、施設・自治体・保護者の三者にどのような負担軽減をもたらすか、その展望を把握する。
内容構成	 【登壇者】 ・小池 義則 氏（こども DX 推進協会 代表理事／株式会社コドモン 代表取締役） ・土岐 泰之 氏（こども DX 推進協会 理事／ユニファ株式会社 代表取締役 CEO） ・藤田 将 氏（こども DX 推進協会 理事／株式会社 MJ 代表取締役社長） ・三好 冬馬 氏（ファシリテーター：保育 ICT 推進協会 代表理事） 【前半：保育 ICT 導入の今と今後の展望】 ・保育施設での ICT 導入の現状と、令和 8 年度の導入率 100％目標に向けた自治体施策。 ・ICT 導入によって得られるデータの連携・活用方法の提示。

	・進化するテクノロジー（午睡センサー、置き去り防止ブザー等）による可視化と安全管理の強化。 ・現場の抵抗感をなくすための操作性向上と、他社システムとの連携強化の必要性。 【後半：こども家庭庁が進める保育 DX の最新動向と今後の展望（監査・給付・保活）】 ・「デジタル田園都市国家構想交付金 TYPES」を活用したプロジェクトの紹介。 ・保育 ICT を基盤としたオンライン化による、監査・給付・保活事務の抜本的な効率化。 ・施設が安心して ICT を活用できるよう、自治体への積極的な提案やサポート体制の整備（こども DX 推進協会の役割）を表明。 
価格	無料（保育博への来場事前登録が必要）
関連 URL 等	https://kodomodx.or.jp/news/?id=48

教材・資料名	保育施設の書類、どう減らす？ 自園に合った帳票整理の考え方
作者・出典元	ほいくる by 小学館
学習対象者	「書類を減らしたいけれど、記録はおろそかにできない」 そんな悩みを抱える先生方向け
学習形態	オンライン
学習目標	・保育記録に関する国のガイドラインの基本を理解する ・自園の帳票を整理・見直すための具体的な手順を学ぶ ・記録の質を保ちながら業務負担を軽減する方法を理解する ・ICT を活用した帳票管理の考え方を学ぶ
内容構成	 講演：一般社団法人 保育 ICT 推進協会 代表理事 三好冬馬氏 • 国のガイドラインに見る、保育記録の基本と整理の考え方 • 自園に合った、帳票を減らす・整えるためのステップ • 記録の質を保ちながら負担を軽減する工夫 • ICT を活用した帳票管理のポイントと実践事例
価格	無料
関連 URL 等	https://hoiclue.jp/767605/300002.html

教材・資料名	働き方改革とデータ連携で拓く！シームレスで持続可能な 教育×子育て支援体制
作者・出典元	自治体通信 ONLINE
学習対象者	自治体関係者（行政職員・議員）
学習形態	ウェビナー形式（zoom ウェビナー）
学習目標	・教育・子育て支援分野における DX 推進の背景と政策動向を理解する ・働き方改革を実現するための具体的な ICT 活用事例を学ぶ ・データ連携によるシームレスな子育て支援体制の在り方を理解する ・教育・保育現場の負担軽減と質向上を両立する実践手法を学ぶ
内容構成	 ・講演①「保育 DX 政策の現在」 こども家庭庁 成育局 保育政策課 課長補佐 高橋裕子氏 ・講演②「こども誰でも通園制度を支える保育 DX とは？」 BABY JOB 株式会社 事業推進部 部長 福森 章太郎氏 ・講演③「学びが変わる！箕面市 ICT 活用教育の最前線」 箕面市教育委員会事務局 子ども未来創造局 学校教育室 高科侑来氏 ・講演④「デジタル技術を活用した校務の効率化の推進状況について」 文部科学省 初等中等教育局 教育職員政策課 課長補佐 飯塚悟氏 ・講演⑤「『つながるデータ、変わる働き方』＝共通 ID で集めてつなげるこれからの時代のデータ連携を見据えた業務改革」 奈良市 CIO 補佐官 奈良教育大学教授 小﨑 誠二氏 奈良市 教育 DX 推進課 教育 ICT 推進係 米田 力氏
価格	無料
関連 URL 等	https://go.jt-tsushin.jp/jt_webinar_202601-02?utm_source=202512&utm_medium=banner&utm_content=LP

教材・資料名	「無料で使える ICT　操作方法を大公開」
作者・出典元	SEN　（千株式会社）
学習対象者	保育に関わる先生、自治体
学習形態	Web 開催（Zoom）
学習目標	・無料で活用できる保育 ICT サービスの全体像を理解する ・ICT 導入時につまずきやすいポイントを把握する ・スムーズな ICT 導入のコツを学ぶ ・「はいチーズ！システム」の主要機能と具体的な操作方法を理解する
内容構成	 1．ICT 導入の際につまずきやすいポイント 2．ICT をスムーズに導入するコツ 3．無料で使える ICT サービスの概要 4．「はいチーズ！システム」主要 5 機能の具体的な操作方法
価格	無料
関連 URL 等	https://sencorp.co.jp/8443/

教材・資料名	オンライン開催セミナー「病児保育 DX～拡がる養育者にやさしい医療支援のかたち～」
作者・出典元	自治医科大学　医師・研究者キャリア支援センター
学習対象者	自治医大職員、保育士、薬剤師、看護師、医師、企業・行政関係者、医療機関、保育・病児保育施設、地域薬局、育児支援に関心のある企業・自治体
学習形態	オンラインセミナー（Zoom）
学習目標	・病児保育分野における DX および遠隔医療の取り組みを理解する ・産官学連携による地域支援モデルの実践事例を学ぶ ・医療・保育・薬局等が連携した支援体制の構築方法を理解する ・地域全体で子育て世代を支える仕組みづくりの可能性を考察する
内容構成	 ・「保育園も薬局も巻き込もう！地域で広げる病児保育の輪」 園田正樹（株式会社グッドバトン代表取締役/東京大学医学部産婦人科学教室） ・「遠隔病児保育産官学連携における研究報告」 小太刀豪（自治医科大学 小児科学講座 医師） ・「院内保育施設 「あいりす」での遠隔診療の取り組みについて」 廣野敦子（自治医科大学保育施設「あいりす」看護師） ・「オンライン診療 X 院内保育：養育者にやさしい医療支援のかたち～ 地域展開」

	松原 大輔（自治医科大学 地域医療学部門 医師 / 医師・研究者キャリア支援センターアドバイザー） ・質疑応答
価格	無料
関連 URL 等	https://www.jichi.ac.jp/c-support/20251014_ky/

教材・資料名	豊中市と学ぶ！保育 AI によるデータ利活用と保育 ICT 化の加速のヒント
作者・出典元	ほいくる by 小学館
学習対象者	全国の自治体（保育担当課・DX 課）、保育施設・民間本部職員
学習形態	オンライン
学習目標	・業務省力化にとどまらない保育 ICT 活用の考え方を理解する ・保育 ICT データと AI を活用した「保育の質向上」の可能性を学ぶ ・ICT 活用が進まない施設への支援・動機づけの手法を理解する ・自治体による地域全体の ICT 活用支援の進め方を学ぶ
内容構成	 ① 保育 ICT 上のデータを用いた AI 解析をもとにした「保育の質向上の可能性」 ② 保育 ICT 活用が進まない施設に対する「動機づけのポイント」 ③ 事業検討に活かせる「地域全体の ICT 活用支援に関する示唆」 登壇 ・豊中市 こども未来部 こども事業課 ・株式会社とりんく／山中 健太郎氏 ・宗教法人 日本聖公会 東豊中聖ミカエル教会 聖ミカエル保育園／市原容子園長・斉藤 みち先生 ・一般社団法人保育 ICT 推進協会／三好 冬馬氏
価格	無料
関連 URL 等	https://hoiclue.jp/767605/300003.html

教材・資料名	つくば市と学ぶ！地域全体の保育 ICT 化を加速するヒント～施設の ICT 活用が進まない本当の理由～
作者・出典元	ほいくる by 小学館
学習対象者	・「巡回型の活用支援」や「ICT 普及に関する説明会」「施設見学会」の効果に興味がある方 ・「ICT の活用」に向けた施策を推進する自治体職員様におすすめ
学習形態	オンライン
学習目標	・保育施設で ICT 活用が進まない要因を構造的に理解する ・施設への効果的な動機づけ・支援方法を学ぶ ・自治体が担うべき ICT 化支援の役割と効果を理解する ・ベンダー・専門団体との連携による事業推進のポイントを学ぶ
内容構成	 ① 施設の ICT 活用が進まない「本当の理由」と、動機づけのポイント保育 ICT 活用が進まない施設に対する「動機づけのポイント」 ② 自治体が「やるべき支援」とその効果登壇 ③ 事業検討に活かせる ICT 化支援に関する示唆 登壇 ・つくば市 こども部 幼児保育課 ・一般社団法人保育 ICT 推進協会／三好 冬馬氏
価格	無料
関連 URL 等	https://attendee.bizibl.tv/sessions/seEgonjZbyMj?utm_source=pr&utm_medium=hoiclue

教材・資料名	「これから求められる保育 ICT システムとは？」登降園管理、保護者連絡、キャッシュレス、その次は―
作者・出典元	Child Care Web
学習対象者	保育事業に携わる方全て
学習形態	オンライン
学習目標	・これから求められる「保育内容」の DX 化の方向性を理解する ・登降園管理・保護者連絡等の業務 ICT 化の次の段階を学ぶ ・指導案・記録作成における ICT 活用の可能性を理解する ・ChildCareWeb の機能と活用ポイントを把握する
内容構成	 登降園管理や保護者連絡の ICT 化が先行した 10 年。次の波は、保育の本丸となる「保育内容」に深く切り込んだシステムが注目されるようになるはずです。本セミナーでは、これから求められる「保育内容」の DX 化の姿について詳しく解説すると共に、指導案・記録作成において保育 ICT をリードする『ChildCareWeb』では何ができるのか、そのポイントをご紹介いたします。
価格	無料（事前登録制）
関連 URL 等	https://home.childcareweb.jp/news/4652/

教材・資料名	保育 DX人材養成プログラム 文部科学省「DX 等成長分野を中心とした就職・転職支援のためのリカレント教育推進事業」採択事業
作者・出典元	大阪キリスト教短期大学産官学連携推進センター
学習対象者	現役保育者、これから保育者を目指す方
学習形態	オンライン
学習目標	・幼児教育・保育分野における DX の最新動向を理解する ・ICT を活用した先進的な保育実践を学ぶ ・多様な課題（障害児保育・広報・経営等）に対応する知識を身につける ・保育 DX 時代に求められるリテラシーとキャリア形成の視点を養う
内容構成	 保育業界の今・未来を知る ・幼児教育・保育の最前線と ICT 活用（仮） ・ICT を活用した保育の最前線と未来 ・先進的な園を見る・聞く 知識・スキルを身につける ・求められる多様性への対応。障害児保育を学ぶ ・保育所余り時代に求められる広報・マーケティング ・多様な ICT サービスを知る。使いこなす！ リテラシー/キャリア ・各分野の第一人者に聞く「保育の未来」 ・あなたらしい保育を考える
価格	無料
関連 URL 等	https://www.occ.ac.jp/recurrent2022/

教材・資料名	加速する「保育 DX」に自治体はどう向き合う？～こども家庭庁の動きと全国公立園の ICT 化状況～
作者・出典元	株式会社コドモン
学習対象者	全国の自治体（保育担当課・DX 課）、保育施設・民間本部職員
学習形態	オンライン
学習目標	・こども家庭庁 が推進する「保育 DX」の目的と全体像を理解する ・全国公立保育施設における ICT 導入状況を把握する ・ICT 化による具体的な効果を理解する ・自治体における保育 DX 推進の具体的なアクションを学ぶ
内容構成	 本ウェビナーでは、こども家庭庁が推進する「保育 DX」の目的や全体像を整理したうえで、保育原課のみなさまが、「今、何に取り組むべきか」を明らかにします。
価格	無料
関連 URL 等	https://attendee.bizibl.tv/sessions/seOk8TMOPzDy?s=te0n5hutueo&utm_source=seminar&utm_medium=ss

教材・資料名	保育現場における「生成 AI」の活用 -効率化できた時間で保育の質の向上に取り組むために-
作者・出典元	nanoty （株式会社サンロフト）
学習対象者	保育に関わるすべての方
学習形態	ZOOM によるオンライン配信
学習目標	・保育現場における生成 AI の基本的理解を深める ・生成 AI の具体的な活用事例を学ぶ ・生成 AI 活用に伴うリスクと対策を理解する ・保育施設におけるデジタルリスクの基礎知識を身につける
内容構成	 【第 1 部】保育現場における生成 AI の活用事例 ✓生成 AI とは？（入門編） ✓保育業務でどのように活用できる？ ✓利用する際のリスクと対策 【第 2 部】保育施設で気を付けたいデジタルリスクあるある ✓デジタルリスクとは？ ✓よくある事例から学ぶデジタルリスク ✓トラブルを未然に防ぐために
価格	無料
関連 URL 等	https://www.occ.ac.jp/recurrent2022/

教材・資料名	こども家庭庁「保育 ICT ラボ」事業 in 大阪キリスト教短期大学 ―業務効率化を確実に進め、その先の「遊び」と「学び」につなぐ ICT 活用―
作者・出典元	保育 ICT ラボ
学習対象者	保育 ICT 活用を始めたい・活用を促進したいと考えている保育者
学習形態	現地（大阪キリスト教短期大学）
学習目標	・保育 ICT 導入における業務効率化の具体的な進め方を理解する ・事務作業・情報共有・記録業務の負担軽減の実践例を学ぶ ・ICT 活用を「遊び」や「学び」の質向上につなげる視点を身につける ・システム変更を含む導入プロセスと課題対応の実際を理解する
内容構成	保育ICTラボ Childcare ICT Lab ・開会挨拶 ・基調講演「ICT による業務改革と遊びと学びをつなぐ ICT 活用」 講師：亀山秀郎　先生（学校法人七松学園 認定こども園 七松幼稚園 理事長・園長） ・実際のシステム変更の検討現場に学ぶ、保育 ICT 導入と課題 講師：延千奈美（学校法人 OCC 情報システム担当） 個別相談会（希望者のみ）
価格	無料
関連 URL 等	https://www.occ.ac.jp/recurrent2022/

教材・資料名	【宗像市】保育 ICT ラボ事業の概要 ICT 活用を自治体から推進｜導入から“活用”へ前進させる支援のあり方
作者・出典元	保育 ICT ラボ
学習対象者	市内施設関係者
学習形態	ワーキンググループ・モデル園巡回・成果報告会
学習目標	・ICT の「導入」から「活用」への段階的移行 ・ソフト（運用支援）とハード（設備補助）の両面支援 ・園内で自走できる推進人材の育成 ・自治体主導による持続可能な ICT 活用体制の構築
内容構成	 （1）巡回訪問

	市内２園をモデル園として選定し機器購入補助を行うほか、設備増強の効果を最大化するための伴走支援（年３回）を実施。現状の活用の課題や停滞の要因を整理し、段階的な改善支援を行います。 ・現場ヒアリングに基づく課題の洗い出し ・改善テーマ設定とその評価 ・ICT システム導入・活用ステップの検討支援　等 （２）人材育成と推進体制の構築 段階的な学びと実践を通じて、「ICT を活かす」意識の醸成を図ります。また、各園で ICT 活用を牽引し、自走できる人材の育成を進めています。 ① 初回全体研修 ・ICT 化の目的についての共通認識 ・目標設定の重要性やチームで進める推進体制　などを学ぶ全体研修を実施 ② グループ研修 ・各園が自園の課題と改善方針を検討 ・他園との意見交換をしながら今後の取組を設定 ・モデル園での事例紹介 ③ 「保育 ICT 検定」の無償提供 ・希望する職員に保育 ICT 検定（中級・上級）を無償提供 ・ICT 運用や推進に必要な基礎知識の習得を支援 （３）成果発信 取組の成果や学びを広く共有し、活用進化の土台とするため、モデル園の見学会・成果報告会を開催します。 ・取組内容・成果の発表 ・自治体職員との情報交換・意見共有 ・ICT 運用に関する実践的知見の共有
価格	不明
関連 URL 等	https://hoiku-ict.jp/casestudies/detail/37

教材・資料名	～保育現場の「困った」を「できた」に変える、未来の保育を体験！～ こども家庭庁 保育 ICT ラボ in 厚沢部町
作者・出典元	保育 ICT ラボ
学習対象者	幼保施設職員（施設長、主任、保育士、保育教諭、幼稚園教諭、事務職員など）、保育士養成校の学生、自治体職員
学習形態	ワーキンググループ・モデル園巡回・成果報告会
学習目標	・業務負担軽減の具体的手法を学ぶ ・ICT 活用による保育の質向上の実践を理解する ・自治体・園・ICT サービスの連携モデルを把握する ・自園での ICT 活用推進のヒントを得る
内容構成	 ・認定こども園はぜる　園見学 ・基本 ICT の研修 ・認定こども園はぜるにおける ICT 利活用事例紹介 ・一時預かりの取り組み紹介 ・交流
価格	無料
関連 URL 等	https://hoiku-ict.jp/events/detail/6

教材・資料名	こども家庭庁「保育 ICT ラボ」事業 in 豊見城市 ―業務効率化を確実に進めた先の、未来の園を考える―
作者・出典元	保育 ICT ラボ
学習対象者	保育 ICT 活用を始めたい・活用を促進したいと考えている保育者
学習形態	現地（豊見城市中央公民館）
学習目標	・目先の ICT 導入にとどまらず、将来のあるべき園の姿を踏まえた保育 ICT 活用の方向性を理解する ・保育 ICT の全体像と AI 活用の可能性を学ぶ ・実証事例を通して、業務効率化の先にある保育の質向上を考察する
内容構成	保育ICTラボ Childcare ICT Lab ・開会挨拶 ・保育 ICT の全体像と AI を活用した未来の保育 ・豊崎こども園での AI カメラを活用した実証実験の紹介 講師：原山 青士（教育テック大学院大学 特任講師） ・豊崎こども園における ICT 活用の現状と課題 講師：名嘉元 克己氏（社会福祉法人 群星福祉会 豊崎こども園 園長） ・パネルディスカッション ・個別相談会（希望者のみ）
価格	無料
関連 URL 等	https://hoiku-ict.jp/events/detail/30

教材・資料名	実践園から学ぶ ICT で変わる園業務―働きやすい保育の環境向上を目指して―
作者・出典元	株式会社福祉医療共済会
学習対象者	経営者・園長・管理者
学習形態	ZOOM によるオンライン配信
学習目標	・保育現場における ICT 活用の現状を把握する ・園業務の本質的課題を整理する ・ICT 化・DX 化を進めるための具体的ステップを理解する ・目先の ICT 導入にとどまらず、将来のあるべき園の姿を踏まえた保育 ICT 導入の方向性を学ぶ
内容構成	 1）保育現場における ICT 現状 2）保育施設における ICT に関するお悩み 3）実践園における ICT 活用による事例 4）いま考えること 講師 株式会社サンロフト nanoty 事業部 次長 望月翔太 氏
価格	無料
関連 URL 等	https://www.fi-k.jp/blog/wp-content/uploads/2024/06/20240726%E4%BF%9D%E8%82%B2ICT%E6%B4%BB%E7%94%A8.pdf

教材・資料名	要録・児童票作成に革命！ 日々の記録を有効活用できる「こどもストーリー」とは？
作者・出典元	ほいくる by 小学館
学習対象者	経営者・園長・管理者
学習形態	オンライン（Zoom）
学習目標	・保育記録の振り返りを効率化する方法を理解する ・こどもの育ちを保護者へ効果的に伝える方法を学ぶ ・AI を活用した新しい保育記録の活用方法を理解する ・業務負担軽減と保育の質向上を両立する実践を学ぶ
内容構成	 第一部　保育の質を高める記録ってなんだろう？　大豆生田啓友先生（玉川大学教授） 第二部　保育者の振り返りをサポートする「こどもストーリー」とは？ ～実証研究から見えた業務削減と質の向上につながる成果～ 第三部　「こどもストーリーおためし版」申込み受付開始のご案内 ※これから「保育ドキュメンテーション」を契約・活用いただく先着 200 施設限定！ 登壇者 玉川大学教育学部　大豆生田 啓友 教授
価格	無料
関連 URL 等	https://hoiclue.jp/778813/300001.html

教材・資料名	静岡県働きやすい保育の環境向上事業 働きやすい職場環境をつくる ICT 活用セミナー
作者・出典元	パステル IT 新聞
学習対象者	静岡県内の保育所等で働く施設管理者および保育士等が対象
学習形態	対面　（基調講演・第 1 部はオンラインでもご参加）
学習目標	・保育現場における ICT 活用の可能性と必要性を再確認する ・ICT 導入効果を「見える化」する視点を学ぶ ・導入と活用の課題を整理する ・働きやすい職場環境づくりに向けた具体的アクションを理解する
内容構成	 ・受付開始・開始挨拶 ・基調講演「デジタル時代の保育における ICT の活用」 保育現場において ICT 化が急速に広がっています。しかし、多くの場合で導入と活用に関する課題が存在します。この講演では、保育現場の現状に焦点を当て、実際の導入事例や活用の手法、考え方について詳しくご紹介します。 ・休憩・ICT 体験会 ・第 1 部：事例紹介 「実践園から学ぶ、ICT で変わる園業務」 静岡県内 3 施設の事例をもとに、実際に導入した ICT により実現した業務改善の好事例を紹介します。 園事例①：保育 ICT システムが実現する園務改善 園事例②：職場の生産性向上！Google Workspace for Education の活用 園事例③：情報共有ツールの活用による職員間の円滑なコミュニケーション

	第 2 部：交流会（会場参加者限定） 「他園との交流を通して向き合う ICT」 業務全般や ICT 活用において、課題に感じていることやこれまで各園で実践してきた取り組みを共有し合い、働きやすい職場環境づくりの実現に向けて、これから取り組むべきことを考えましょう。 ・ICT 体験会・退出
価格	無料
関連 URL 等	https://passtell.jp/seminar/20231129/32241/

教材・資料名	第 31 回日本小児突然死予防医学会学術集会プログラム シンポジウム II「保育安全」
作者・出典元	WEL-KIDS（株式会社ウェルキッズ）
学習対象者	① 全国の保育・教育施設（保育園・幼稚園・こども園・学童等）に関わる保育者 ② 保育施設を経営されている法人様
学習形態	現地参加・オンライン参加
学習目標	・保育施設における「日常の安全管理」の最新知見を学ぶ ・「こども誰でも通園制度」に伴うリスクへの対応を理解する ・専門家監修による安全ガイドラインを把握する ・ICT・IoT を活用した安全対策の可能性を理解する
内容構成	 1.「こども誰でも通園制度」の死角と対策 不定期・短時間利用が前提の制度特性上、避けにくい「不慣れな環境」によるリスク。園としての向き合い方を、医学的・実践的視点で解説します。 2.専門家監修 「安全ガイドライン」を初公開 小児科医・大学教授らのワーキンググループが作成した、現場ですぐ使える具体的なマニュアルをいち早くご紹介します。 3. ICT・IoT で「ダブルチェック体制」 人の目×テクノロジーで見守る、安心・安全の最前線。導入イメージとともに具体例を提示します。
価格	無料
関連 URL 等	https://www.wel-kids.com/press/seminar/wk-seminar-symposium-hoikuanzen/

教材・資料名	第 31 回日本小児突然死予防医学会学術集会プログラム シンポジウム II「保育安全」
作者・出典元	WEL-KIDS（株式会社ウェルキッズ）
学習対象者	現役保育者、元保育者
学習形態	オンデマンド配信
学習目標	・保育・幼児教育におけるデジタル活用の基本的理解 ・ICT 導入の進め方の習得 ・園の労務管理・保育業務で活かす ICT 活用方法の理解 ・具体的ソリューションの理解と実践的スキル習得 身に付くスキル ・ドキュメント作成スキル ・Google Workspace 活用スキル ・保育現場におけるデジタル化推進スキル 得られる資格 ・Google for Education 認定教育者レベル 1 取得
内容構成	 経済産業省からの支援によって共同運営するリスキリング支援事業 ・キャリアプランの相談 複数回の面談を通し、支援者の希望と適性を見極めて講座の必要性を考えます。 ・講義によるリスキリング提供 全 10 回の講義を通じて保育・幼児教育の現場で活躍する ICT 人材へ育成します。 ・転職支援（相談や職業紹介） 業界に詳しい担当者からの書類添削や面接対策も提供します。 ・キャリアアップの実現 支援者が望むキャリアアップのために最後までフォローアップしていきます。
価格	無料
関連 URL 等	https://www.wel-kids.com/press/seminar/wk-seminar-symposium-hoikuanzen/

教材・資料名	AI を活用する保育 クリエイティブな道具としての ICT」
作者・出典元	Kits
学習対象者	保育、幼児教育に携わる人
学習形態	オンライン
学習目標	・「保育の中の AI」をテーマに子どもたちの遊びの中での AI 活用事例を知る ・保育者の業務効率化のための AI 活用を学ぶ
内容構成	 ゲスト 玉川大学教授　大豆生田啓友先生 宮城県仙台市 向山こども園 副園長 木村創先生を ・事例①こどもの遊びの中の AI ・事例②保育者の補助となる AI ・質疑応答
価格	無料
関連 URL 等	https://kdkits.jp/news/kI7vMGmR

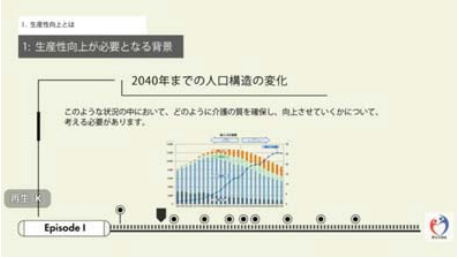
教材・資料名	遊びから探求へ幼保小接続と ICT の可能性　環境を通した学びと幼保小の接続を考えるシンポジウム
作者・出典元	Kits
学習対象者	幼稚園・保育園・こども園の関係者様、養成校の職員及び学生のみ
学習形態	現地
学習目標	・幼児教育が大切にする「環境を通した学び」の本質を理解する ・幼保小接続における新しい学びの在り方を考察する ・ICT を「子どもの道具」として活用する視点を学ぶ ・小学校教育との接続における ICT の可能性を学ぶ
内容構成	 登壇者 玉川大学教授　大豆生田啓友先生 熊本市教育長 遠藤 洋路 ・第 1 部：公開保育 @ 城山幼稚園 子どもが自分で選び、考えて動ける藤森メソッド・見守る保育スタイル。集団の中でも一人ひとりの思いが生きるよう、日々の遊びや保育環境を工夫しています。主体性を育む環境 をご覧いただけます ・第 2 部：シンポジウム ・講演会・パネルディスカッション 実践発表 テーマ: ICT で広がる保育～こどもの道具としての ICT～ 講演 テーマ: 幼保小の架け橋を考える 「乳幼児教育から小学校も学ぶ、環境を通した学び」 玉川大学教授 大豆生田 啓友 氏 「これからの学校教育とこどもの ICT」 熊本市教育長 遠藤 洋路 氏 ・懇親会

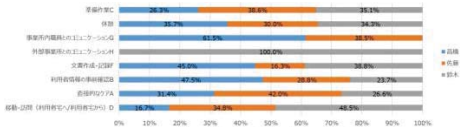
価格	1 日参加: 10,000 円（昼食費込み） 2 部（午後）のみ参加: 5,000 円 懇親会参加費: 別途費用（自由参加）
関連 URL 等	https://kdkits.jp/news/kI7vMGmR

教材・資料名	ICT&保育 DX 研修会「保育の課題をデジタルで解決！みんなで描く DX の未来」
作者・出典元	全国認定こども園協会
学習対象者	全国認定こども園協会　会員または全国の保育・教育施設（保育園・幼稚園・こども園等）に関わる保育者、保育施設を経営されている法人
学習形態	対面またはオンライン
学習目標	・ICT および DX の「現在地」を確認する ・保育 DX の今後の方向性を共有する ・保育現場が DX とどのように関わり、活用していくべきかを検討する ・助成金を活用したリスキリング・DX 研修の実践事例を学ぶ
内容構成	 1. 会場・入室 2. 開会行事 3. 趣旨説明 4. 情報提供「現在の保育 DX の現状について」（60 分） 特定非営利活動法人全国認定こども園協会 5. 休憩 6. 事例紹介「助成金を活用した人材研修（リスキリング・DX 化）」 学校法人野澤学園　理事長　野澤 貴春 氏、株式会社 Clack 7. 休憩 8. ディスカッション「保育 DX で明るい未来を描くために」 保育 DX 推進委員会 齋藤　祐善、堀　昌浩、新保　雄希、青木　一永、飯盛　裕介、輿水　基 9. 閉会行事 キャリアアップ研修について キャリアアップ研修対応（1 号関係） 今回の研修は「マネジメント（255

	分/4 時間 15 分）」に該当いたします。 　受講修了が確認され次第、マナブルより修了証をダウンロードいただけます。
価格	会員　5,000 円／非会員　10,000 円
関連 URL 等	https://kodomoenkyokai.or.jp/archives/4986

介護 ICT／カリキュラム事例 **1**

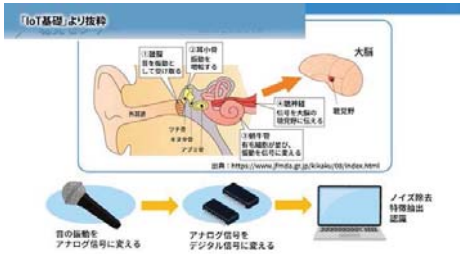
教材・資料名	介護分野における生産性向上の取組の進め方
作者・出典元	厚生労働省 老健局高齢者支援課
学習対象者	介護事業所の経営層、管理者、介護職員、生産性向上委員会メンバー
学習形態	e ラーニング（動画視聴）、ワークショップ、分析ツール活用
学習目標	・生産性向上の必要性と背景を理解する ・現場の課題を可視化し、分析する手法を習得する ・業務改善の 7 つの取組手法を理解し、実践できる ・ICT・デジタルツールの活用方法を学ぶ ・取組の効果を測定し、継続的な改善を推進できる
内容構成	【動画コンテンツ構成】 手順 1：改善活動の準備をしよう 　・生産性向上とは何か（約 8 分） 手順 2：現場の課題を見える化しよう 　・生産性向上の一連のプロセス（約 8 分 10 秒） 　・課題把握ツール（Excel）の活用 　・業務時間見える化ツール 手順 3～6：課題解決の取組をしよう 　1. 職場環境の整備（1 動画：約 4 分 10 秒） 　2. 業務の明確化と役割分担（3 動画：約 14 分 10 秒） 　3. 手順書の作成（2 動画：約 6 分 40 秒） 　4. 記録・報告様式の工夫（2 動画：約 8 分 10 秒） 　5. 情報共有の工夫（3 動画：約 15 分 20 秒） 　6. OJT の仕組みづくり（3 動画：約 9 分 50 秒） 　7. 理念・行動指針の徹底（1 動画：約 5 分）  総動画数：全 17 本　総視聴時間：約 71 分

	【支援ツール】 ・課題把握抽出ツール（Excel）  ・業務時間見える化ツール（Excel）  ・課題分析シート、改善方針シート、進捗管理シート、効果測定ツール 
価格	無料
関連 URL 等	https://www.mhlw.go.jp/stf/kaigo-seisansei-elearning.html

教材・資料名	介護現場のデジタル技術活用研修プログラム 1) デジタル・テクノロジー基本研修 2) 導入前セミナー
作者・出典元	1) 公益社団法人日本福祉士会 2) 東京都福祉保健財団
学習対象者	1) 介護福祉士、介護職員、介護事業所の管理者、介護現場での ICT・テクノロジー導入を検討する職員 2) 東京都が実施する予定の補助金事業への補助申請を検討している介護保険事業所等
学習形態	1) オンデマンド動画+集合研修 2) セミナー
学習目標	・介護現場における ICT・介護ロボットの活用方法を理解する ・介護現場の生産性向上に貢献できる人材を育成する ・次世代介護機器・介護業務支援システムの効果的な導入方法を学ぶ
内容構成	1) デジタル・テクノロジー基本研修 ■介護福祉の実践力 ◯介護過程の応用的理解（70 分・オンデマンド動画） ◯科学的介護の基礎的理解（90 分・オンデマンド動画） ◯介護職の倫理と利用者の全人性・尊厳の実践的理解（70 分・オンデマンド動画） ■チームをまとめる力 ◯チームがまとまり成果を生み出す考え方と方法（80 分・オンデマンド動画） ■介護現場の生産性を向上させる力 ◯介護現場の問題発見と解決スキル（70 分・オンデマンド動画） ◯介護ロボット・ICT 活用の基礎的理解（40 分・オンデマンド動画） ◯介護現場の業務改善（演習）（180 分・集合研修） ◯介護ロボット・ICT の導入（演習）（180 分・集合研修） ◯利用者支援に向けた活用（演習）（180 分・集合研修）

	 2） 介護テクノロジー導入前セミナー ～基本編～  （1）介護テクノロジー（次世代介護機器・介護業務支援システム）利用の重点分野説明 （2）アドバンスト施設による取組事例紹介 （3）機器導入の手法（講義・個人ワーク・質疑応答） （4）東京都による補助金説明 ～ワーク編（次世代介護機器編 / 介護業務支援システム編）～

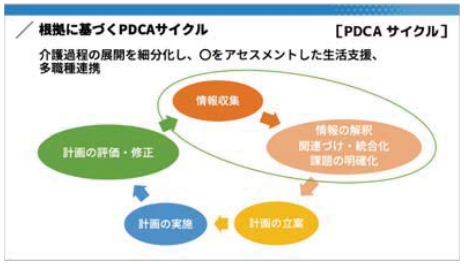
	 「次世代介護機器編」 （1）次世代介護機器の説明 （2）機器導入の 6 つの手順の説明 （3）ワーク ①課題の見える化 ②導入計画づくり ③機器選定のポイント 「介護業務支援システム編～」 （1）介護業務支援システムの説明 （2）機器導入の 6 つの手順の説明 （3）ワーク ①課題の見える化 ②導入計画づくり ③記録業務の棚卸し
価格	無料
関連 URL 等	1） デジタル・テクノロジー基本研修 https://ads.kaipoke.biz/column/operation/digital-technology-training.html 2） 介護現場改革促進等事業　導入前セミナー https://www.fukushizaidan.jp/206genbakaikaku/mae_seminar/

教材・資料名	介護 DX オンライン講座
作者・出典元	同朋大学 一般社団法人教員等育成事業推進機構
学習対象者	・介護福祉分野への就職・復職を目指す方 ・キャリアアップを目指す介護福祉関係者 ・これからの介護福祉に関心がある方 ・ご家庭などで介護の知識を増やしたい方 ・DX に関して基礎から学びたい方
学習形態	オンライン講座（Zoom） 約 90%オンデマンド学習、最終日に対面講座 1 日のみ
学習目標	DX 化がどのように介護福祉の質を高めるのかを学ぶ
内容構成	A.介護福祉の DX 理論講座  A. 介護福祉の DX 理論講座 ■ オンデマンド講習 A1：ICT と介護福祉（全 18 回） 1. 介護福祉分野における ICT 基礎が必要な理由 2. Society4.0 における情報化について 3. Society5.0 という社会への発展 4. 社会の中で求められている DX とはどのようなものか 5. 情報に関する法律の紹介 (1) 6. 情報に関する法律の紹介 (2) 7. 情報に関する法律の紹介 (3) 8. 情報に関する法律の紹介 (4) 9. ネットワークのマナーについて 10. マルウェアとその対策方法 11. マルウェア以外の対策方法

	12. ID とパスワードの管理 13. 職場におけるネットワークセキュリティ (1) 14. 職場におけるネットワークセキュリティ (2) 15. これからの情報教育 16. 情報共有の手段としての ICT 活用 17. 介護福祉分野における多職種協働 18. 介護福祉分野における個別支援の確立と学びの仕組みの再編 ■ オンデマンド講習 A2：AI と介護福祉（全 18 回） 1. 介護福祉分野でどのように AI が活用されうるか？ 2. AI とは (1) 3. AI とは (2) 4. 情報処理の基礎 (1) 5. 情報処理の基礎 (2) 6. AI の種類と理論 (1) 7. AI の種類と理論 (2) 8. 機械学習とディープラーニング (1) 9. 機械学習とディープラーニング (2) 10. 自然言語処理 (1) 11. 自然言語処理 (2) 12. 人工知能と教育 (1) 13. 人工知能と教育 (2) 14. 人工知能と情報社会 (1) 15. 人工知能と情報社会 (2) 16. 介護ケアの科学化について ～介護ケアコードの必要性～ 17. 臨床知識の構造化 18. LIFE とドナベディアンモデル ■ オンデマンド講習 A3：IoT と介護福祉（全 14 回） 1. 介護福祉分野でどのように IoT 活用を進める必要があるのか？ 2. IoT とは (1) 3. IoT とは (2) 4. インターネットの歴史と現状 5. インターネットの通信プロトコル 6. 有線と無線、暗号化 7. インターネットのアプリケーション、クラウド (1) 8. インターネットのアプリケーション、クラウド (2) 9. センサの種類と役割 10. IoT と AI、データサイエンス 11. IoT と社会、セキュリティ 12. 福祉住環境と IoT

13. 5 つの基本的なケアと IoT
14. 介護福祉分野における IoT 活用と倫理的課題
■ オンデマンド講習 A4：データサイエンスと介護福祉（全 14 回）
1. 根拠に基づく介護福祉実践のためにはデータサイエンスが必要
2. データサイエンスとデータサイエンティストとは
3. データとは何か？
4. データ活用の第一歩
5. データ活用の第二歩
6. FACTFULNESS
7. データの活用を考える (1)
8. データの活用を考える (2)
9. データの活用を考える (3)
10. データの活用を考える (4)
11. サポートとしての AI 活用
12. 認知症ケアの可視化に役立つ認知症ケアマッピング
13. 生活の質は睡眠の質に現れる
14. 生活支援におけるリスクの可視化
■ オンライン演習 AX：DX 理論講座 オンライン演習
・グループワーク、質疑応答、振り返り

B. 介護福祉の DX 実践講座



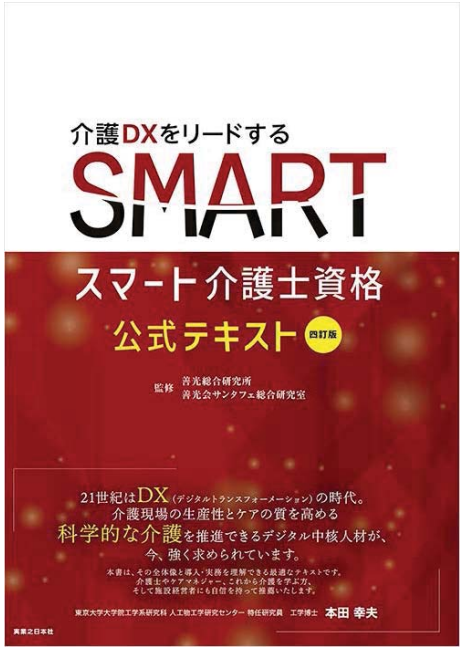
■ オンデマンド講習 B1：睡眠リズムの適正化の支援（全 16 回）
1. 非装着型アクチグラフを活用した生活リズム再構築の支援
2. 生活を構成する 5 つの要素の中での「睡眠・休養」
3. 睡眠に影響を及ぼす心身の仕組み等
4. 睡眠に影響を及ぼす心身の仕組みの不調等
5. 睡眠リズムが乱れる要因の理解
6. 機器の紹介 (1)「パラマウントベッド：眠りスキャン」
7. 機器の紹介 (2)「パラマウントベッド：眠り Connect」
8. 非装着型アクチグラフを用いた介護過程の展開 (1)
9. 非装着型アクチグラフを用いた介護過程の展開 (2)
10. 非装着型アクチグラフを用いた介護過程の展開 (3)
11. 非装着型アクチグラフを用いた介護過程の展開 (4)
12. 非装着型アクチグラフを用いた介護過程の展開 (5)
13. IoT とは？
14. センサーの種類と仕組み
15. 未来のモビリティから医療応用まで
16. より積極的に非装着型アクチグラフを活用するために
■ オンデマンド講習 B2：排泄リズムを把握した個別性に基づいた排泄支援（全 17 回）
1. 導入講義
2. 生活を構成する 5 つの要素の中での「排泄」
3. 排泄の理解 〈排尿〉〈排便〉
4. 排泄に影響を及ぼす心身の仕組み等
5. 排泄に影響を及ぼす心身の仕組みの不調等
6. 機器の紹介 (1)「超音波測定機器の仕組み」
7. 機器の紹介 (2)「排泄予測支援機器リリアムスポット 2」
8. 排泄予測支援機器を用いた排尿日誌の作成 (1)
9. 排泄予測支援機器を用いた排尿日誌の作成 (2)
10. 排泄予測支援機器を用いた介護過程の展開 (1)
11. 排泄予測支援機器を用いた介護過程の展開 (2)
12. 排泄予測支援機器を用いた介護過程の展開 (3)
13. 排泄予測支援機器を用いた介護過程の展開 (4)
14. 排泄予測支援機器を用いた介護過程の展開 (5)
15. 介護現場における排泄支援の現状
16. より積極的に排泄予測支援機器を活用するために
17. まとめ・振り返り
■ オンデマンド講習 B3：移動支援機器の活用による自立支援と負担軽減（全 17 回）
1. 移動支援機器の活用による生活の再構築
2. 生活を構成する 5 つの要素の中での「移動」
3. 移動に影響を及ぼす心身の仕組み等
4. 移動に影響を及ぼす心身の仕組みの不調等
5. 移動に関わる福祉用具の活用
6. 機器の紹介 (1)「移乗支援ロボット：Hug（ハグ）」
7. 機器の紹介 (2)「装着型サイボーグ：HAL」
8. 移動・移乗支援機器を用いた介護過程の展開 (1)
9. 移動・移乗支援機器を用いた介護過程の展開 (2)
10. 移動・移乗支援機器を用いた介護過程の展開 (3)

	11. 移動・移乗支援機器を用いた介護過程の展開 (4) 12. 移動・移乗支援機器を用いた介護過程の展開 (5) 13. リハビリテーションの視点を取り入れた移動支援 14. 介護現場における安全管理と機器の活用 15. 多職種連携による移動支援の質の向上 16. より積極的に移動支援機器を活用するために 17. まとめ・振り返り ■ オンデマンド講習 B4：転倒予測並びに安全な歩行の再構築のための支援（全 23 回） 1. 導入講義 2. 生活を構成する 5 つの要素の中での「移動」 3. 移動に影響を及ぼす心身の仕組み等 4. 移動に影響を及ぼす心身の仕組みの不調等 5. 臥位→座位→立位等、姿勢・重心の移動 6. 安定した歩行を構成する要素の理解 7. 歩行を構成する要素の不調・低下等 8. 機器の紹介 (1)「RSscan 社：footscan」 9. 機器の紹介 (2)「RSscan 社：footscan（海外の活用事例）」 10. 機器の紹介 (3)「Zero C Seven 社：StepLab」 11. 移動のための福祉用具の理解 12. 歩行分析器を使用した歩行の解析 (1) 13. 歩行分析器を使用した歩行の解析 (2) 14. 歩行分析器を使用した歩行の解析 (3) 15. 適切な福祉用具を使用した歩行とその解析 (1) 16. 適切な福祉用具を使用した歩行とその解析 (2) 17. 転倒予防のための環境整備 (1) 18. 転倒予防のための環境整備 (2) 19. AI とは 20. 知識の表現と探索 21. 機械学習とディープラーニング、生成系 AI 22. 自然言語処理と ChatGPT 23. より積極的に歩行分析器を使用するために ■ オンデマンド講習 B5：ボディメカニクスを意識した移乗の支援（全 24 回） 1. 導入講義 2. 利用者の動作の理解（臥位→座位→立位等、姿勢・重心の移動） 3. 利用者の動作に対する AI 行動解析 (1) 4. 利用者の動作に対する AI 行動解析 (2) 5. 支援者の動作の理解：ボディメカニクスの理解

	6. 利用者の状態に応じた適切な福祉用具の選定 (1) 7. 利用者の状態に応じた適切な福祉用具の選定 (2) 8. 機器の紹介 (1)「ネクストシステム：VP-Motion」 9. 機器の紹介 (2)「ネクストシステム：VP-Motion」 10. 機器の紹介 (3)「大修館書店：見比べレッスン」 11. AI 行動解析を使用した移乗の支援動作の解析 (1) 12. AI 行動解析を使用した移乗の支援動作の解析 (2) 13. AI 行動解析を使用した移乗の支援動作の解析 (3) 14. 2 画面動画の比較分析による生活支援技術の確認 (1) 15. 2 画面動画の比較分析による生活支援技術の確認 (2) 16. 2 画面動画の比較分析による生活支援技術の確認 (3) 17. 様々な生活支援技術と AI 行動解析と 2 画面動画 (1) 18. 様々な生活支援技術と AI 行動解析と 2 画面動画 (2) 19. 社会の中で求められている DX とはどのようなものか 20. Society4.0 における情報化について 21. Society5.0 と社会の発展 22. DX と社会、セキュリティ 23. DX と未来人材の育成 24. より積極的に AI 行動解析システムを使用するために ■ オンライン演習 BX：DX 実践講座 オンライン演習 ・グループワーク、質疑応答、振り返り
価格	A. 介護福祉の DX 理論講座 全受講 オンデマンド講習 4 科目 および オンライン演習 1 回　25,000 円 部分受講 オンデマンド講習 1 科目 または オンライン演習 1 回　6,000 円 B. 介護福祉の DX 実践講座 全受講 オンデマンド講習 5 科目 および オンライン演習 1 回　30,000 円 部分受講 オンデマンド講習 1 科目 または オンライン演習 1 回　6,000 円
関連 URL 等	https://doho.naruyoko.jp/

教材・資料名	スマート介護士資格試験
作者・出典元	主催：株式会社善光総合研究所 協力：社会福祉法人善光会（サンタフェ総合研究所）
学習対象者	・介護 DX・ICT・介護ロボットに興味がある人 ・キャリアアップのために有望な資格を得たい人 ・現場のオペレーションを改善したい人 ・LIFE や科学的介護などの最新情報を学びたい人
学習形態	オンライン試験（24 時間受験可能な「Starter」もあり） 公式テキストによる自己学習 オンライン講座（動画視聴）
学習目標	・介護ロボットやセンサー（ケアテック）の知識と、介護現場での実践的な活用スキルを認定する。 ・「介護の質」と「生産性」の両方を向上させるためのオペレーション構築能力を養う。 ・科学的介護（LIFE 等）の基礎を理解し、データを活用したケアを実践できる人材を育成する。
内容構成	 スマート介護士 Starter（基礎） ・24 時間 365 日いつでもオンラインで受験可能 ・試験時間：20 分、問題数：15 問（選択式 14 問+記述式 1 問） スマート介護士 Basic（初級） ・対象：一般の介護職員、介護ロボットメーカー職員 ・試験時間：60 分、問題数：60 問（4 択選択式） ・合格基準：正答率 70%以上 ◯スマート介護士 Expert（中級） ・対象：オペレーション構築者、管理者 ・試験時間：60 分、問題数：60 問（4 択選択式）

	・合格基準：正答率 70%以上 【試験日程】年 3 回実施（5 月、8 月、11 月）  【学習教材】 ・公式テキスト「四訂版 スマート介護士資格 公式テキスト」

	 第 1 章 スマート介護士概論 第 2 章 ケアテック基礎論 第 3 章 科学的介護基礎論 第 4 章 ケアテック導入の実践理論 第 5 章 科学的介護の実践理論
価格	Starter（基礎）：無料 Basic（初級）：6,600 円（税込） Expert（中級）：8,800 円（税込） Basic・Expert 併願：13,860 円（税込）
関連 URL 等	https://smartcaregiver-online.studio.site/ これまで 16 回の試験実施、約 6,000 名が受験

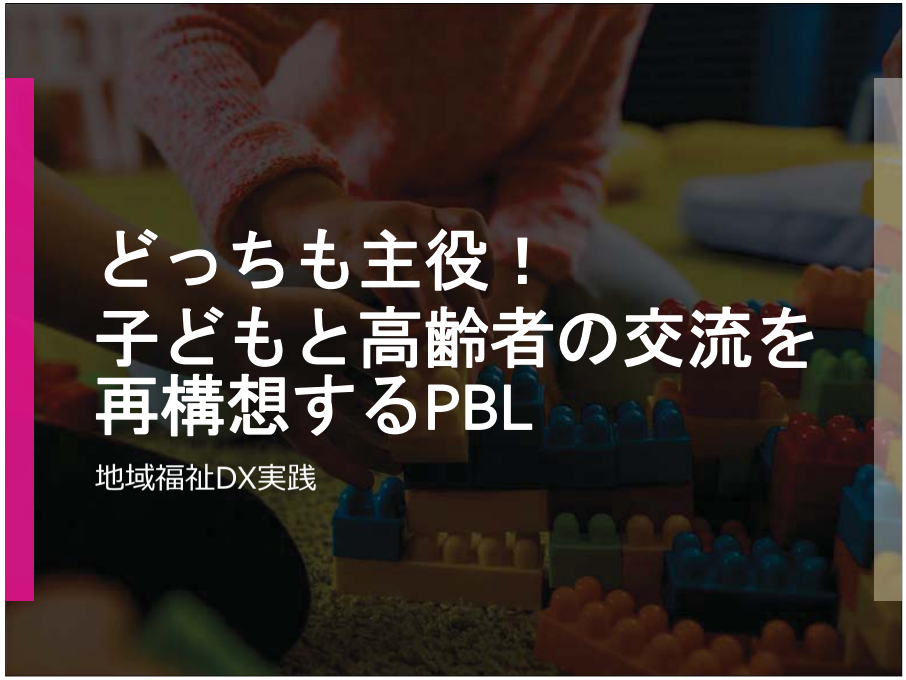
教材・資料名	1) デジタル中核人材養成研修 2) IT 介護リーダー育成プログラム
作者・出典元	1) 厚生労働省 / 公益社団法人日本介護福祉士会 2) インフィック株式会社
学習対象者	1) デジタル中核人材養成研修： ・介護サービス施設・事業所での勤務経験 3 年以上 ・業務改善や介護テクノロジー導入に関わっている、または取り組みたい方 2) IT 介護リーダー育成プログラム： ・介護事業所でリーダー的役割を担う方 ・施設の DX 推進を牽引する人材を目指す方
学習形態	1) Web 動画・オンデマンド学習 + オンライン集合学習（Zoom）+ 自職場での実践 2) e ラーニング（動画視聴）
学習目標	・介護テクノロジーの導入と活用により生産性向上を推進できる人材を養成する ・業務改善や介護テクノロジー導入に関する実践的スキルを習得する ・Google アプリ、Zoom、ビジネスチャットツールを体験的に学ぶ ・施設の DX 化を加速させるキーパーソンとなる IT リテラシーを向上させる
内容構成	1) デジタル中核人材養成研修

	 ■事前学習 ・Web 動画視聴： ❶,❷厚生労働省令和 7 年度「生産性向上ビギナーセミナー」動画 2 本 ❸Zoom に挑む！ ❹介護施設の ICT 化プロジェクト ・オンデマンド学習： ❶介護職の倫理と利用者の全人性・尊厳の実践的理解 ❷介護過程の応用的理解 ❸介護テクノロジー活用の基礎的理解 ■集合学習（オンライン・各 180 分） ❶介護現場の業務改善（演習）180 分 ❷介護テクノロジーの導入（演習）180 分 ❸利用者支援に向けた活用（演習）180 分 ■自職場での実践 課題①：業務分析 ・課題②：介護テクノロジー導入計画書の作成 ■確認テスト（オンライン形式） 2) IT 介護リーダー育成プログラム / IT 介護士中級

	  ■学習内容 （1 日目） 1. なぜ DX を進めなくてはならないのか？ 1-①. 介護 DX、生産性向上とは 1-②. 業務改善に向けた一歩目 1-③. センサーの分類について知る（センサーメリットやデメリットの把握） 2. どのルートで DX を進めるのか 2-①. 目的思考の考え方、課題収集 2-②. ロードマップ、スケジュール管理 （2 日目） 3. チームで連携して DX 推進 3-①. チーム力を上げて DX 推進 3-②. リーダーとしてのコミュニケーション力 4. ネットワークの知識、トラブルシューティング 4-①. 介護 IT 機器の解説（メーカー招致）、介護 IT 機器導入の実践 4-②. ソフトウェアを活用した時短テクニック
価格	1) デジタル中核人材養成研修：無料 2) IT 介護リーダー育成プログラム： 受講料：107,800 円（税込）
関連 URL 等	1) デジタル中核人材養成研修 https://www.jaccw.or.jp/news/20250815 2) IT 介護リーダー育成プログラム： https://it-kaigoshi.lp.infic.net/leader

資料 3：開発教材プロトタイプ

「地域福祉 DX 実践 PBL」



どっちも主役！
子どもと高齢者の交流を再構想するPBL

地域福祉DX実践

本PBLの演習の概要

■演習目標

保育士と介護福祉士が協働して、
子どもと高齢者の交流の現状を互いの観点から分析し、
そこから見えてきた課題を手がかりに、
既存の枠組みにとらわれない新しい関わり方を構想し、
具体的な交流企画として提案する。

■演習テーマ

保育士と介護福祉士が協働し、ディスカッションや生成AIを活用して、
子どもと高齢者の関わり方を整理し、新しい交流のかたちを構想する。

■演習設定

地域の保育職と介護職が互いの専門性を理解し、価値を高め合う新しい取り組みが進められている。本演習では、事例調査や相互理解調査を通じて交流のあり方を検討し、企画を提案書としてまとめる。

■演習時間

15時間

2

PBL（課題解決型学習）とは？①

定義

Project Based Learningの略称
自分たちで課題を見つけ、その解決策を考え、実際に行動しながら学ぶ学習方法です。

従来型との違い

PBLは、知識を覚える学習ではなく、課題解決から始める学習です。

育成される力

- **論理的に考える力**
- **自分の考えを伝える力**
- **情報を正しく集め、活用する力**

これらの力を、グループワークや話し合いを通して総合的に育てます。



3

PBL（課題解決型学習）とは？②

通常の学習

教員主導で講義・演習を実施

講義（知識）や演習を通して学ぶ

知識や技術の習得

PBLによる学習

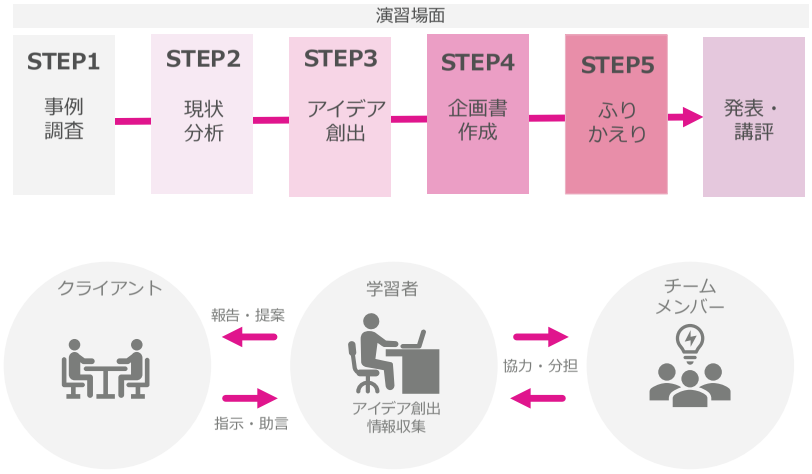
受講者主導で計画を立て準備し実行

実務の擬似体験を通じて学ぶ

総合力（実践力）を養う

4

PBL（課題解決型学習）とは？③



5

生成AIって何？

本PBLでは生成AIを活用します。

生成AIとは、新しいコンテンツを自動で作り出す次世代の人口知能技術です。

創造するAI

文章、画像、音声等
様々なコンテンツを生成

学習技術

ディープラーニング
で膨大なデータから
パターンを取得

人間のような出力

自然な文章や
美しい画像を自動生成

代表的なサービス

- ChatGPT/GoogleGemini(文章生成)
- Stable Diffusion（画像生成）
- その他多数のAIツール

従来のAIとの違い

分析・分類中心から**創造的な出力**へ進化しました

6

どうやって使うの？

生成AIの始め方

01
何を使うか決める
それぞれのサイトに接続
・ChatGPT
・Gemini

02
質問を入力
「〇〇について教えて」
など具体的に依頼

03
結果を確認
AIがすぐに回答や
文章を生成

上手に使うコツ

具体的にわかりやすい支持を出すことが重要です。
例：「高校生にもわかるように説明して」

7

生成AI活用方針①

生成AIの向き合い方

使う前に、正しい向き合い方や注意点を確認してから活用してください。

調査・思考を補助するパートナー	アイデアのたたき台	最終判断は人が決める
情報収集や整理、発想を補助するツール。思考のスピードを上げ、視野を広げるために活用します。	AIの出力結果は「原案」や「参考例」として活用します。そこから作り上げていくことが重要です。	提案に対して必ず自分たちで検討し、現場で実現可能か、価値があるか判断します。

8

生成AI活用方針②

生成AIを使う上での注意点

AIの出力をそのまま答えにしない

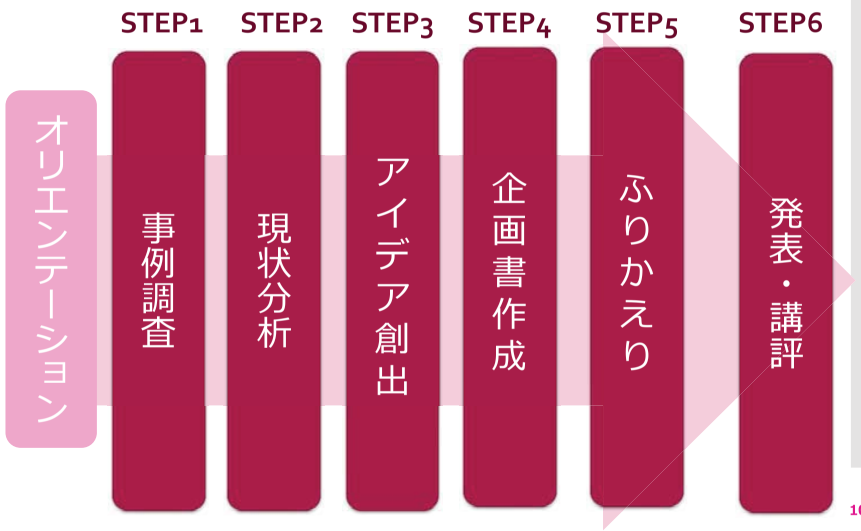
AIの答えは参考の一つとして考え、自分たちで考え直すことが大切です。

情報の正しさは必ず自分たちで確認する

AIの出力は、間違った情報が含まれることがあります。
存在有無などWeb検索や本など、ほかの情報も調べて、
正しいかどうかを確かめることが大切です。

9

学習手順



10

学習の内訳

項目	時間配分	アウトプット
オリエンテーション	1時間	
STEP1.事例調査	3時間	・事例調査シート ・相互理解調査シート（1）（2）
STEP2.現状分析	3時間	・現状分析シート（1）（2）
STEP3.アイデア創出	3時間	・アイデアシート
STEP4.企画書作成	3時間	・企画書
STEP5.ふりかえり	1時間	・相互理解振り返りシート
STEP6.発表	1時間	
合計	15時間	

11

状況設定

地域では、保育や介護の仕事をする人たちが、子どもや高齢者、その家族を支えています。
最近は、地域全体で人を支える考え方が広がり、
専門職同士が仕事や考え方を知り合い、
協力し合う取り組みが進んでいます。



こうした中、自治体の担当者から、
子どもと高齢者のより良い交流の
あり方について相談がありました。

あなたたちはこの相談を受け、
地域を調べた上で、前向きな
価値を生み出す交流の企画を考え、
その内容を企画書としてまとめて発表することになりました。

12

STEP 1 事例調査

保育職と介護職が関わる交流事例を調査し、
互いの仕事や考え方を整理しましょう。

講義資料

①課題（１）　②事例調査シート
③課題（２）　④相互理解シート（１）（２）

13

STEP1　事例調査

課題設定

**保育職と介護職が関わっている交流や連携の事例を調べ、
それぞれの仕事や考え方への理解を深めます。
その上で、お互いの立場から見た価値や特徴を整理します。**

**こうした理解をもとに、
次のステップで、新しい価値や関わり方を考えるための視点を
見つけることを目指します。**

14

STEP1　事例調査

①課題（１）

状況説明

今回、自治体では、地域福祉をより良くすることを目的に、
保育職と介護職が協力して行う交流事業の検討を進めることになりました。

その取り組みの一つとして、自治体から依頼を受け、
あなたたちは、この事業のプロジェクトメンバーとして選ばれました。

事業の方向性を考えるにあたり、
まずは、**保育職と介護職の交流に関する事例**を調べ、
その内容を整理し、共有してほしいとの指示がありました。

15

STEP1　事例調査

作業手順

**①生成AIを活用して、事例調査のテーマや観点を、
チームで話し合って決めましょう。**

＜生成AI活用事例＞

・ 保育職と介護職の交流事例を調査するにあたり、テーマとして考えられる切り口をいくつか提案して
例：多世代交流、健康づくり、地域とのつながり など。
・保育職と介護職の交流事例を調査する際にどのような観点で整理するとよいか教えて

②調査の進め方を考え、観点ごとに役割分担をしましょう。

**③担当するテーマについて、
生成AIを活用しながら個人で調査を行いましょう。**

生成AIで調査し出力結果は、信頼性の確認（公式サイトや公的資料があるか）も忘れずに行う。

16

STEP1　事例調査

④調査結果をチームで共有し、
共通点や違いを整理した上で、生成AIを使ってまとめましょう。

＜生成AI活用事例＞

- 各事例の共通点と違いを整理して
- 事例ごとに、事例名／実施地域／目的／内容／関係者と役割／頻度を表でまとめてください。

具体的で明確な問いかけをすることで、より実用的な情報が得られます。

⑤整理した内容を、事例調査シートに記入しましょう。

⑥調査結果をチームで発表しましょう。

17

②事例調査シート（1/3）

事例名/事業名	
実施地域・主体	
目的	
内容	
関係者及びその役割 誰が、どの立場で関わっているか	
実施頻度	
参考URL	

18

②事例調査シート（2/3）

事例名/事業名	
実施地域・主体	
目的	
内容	
関係者及びその役割 誰が、どの立場で関わっているか	
実施頻度	
参考URL	

19

②事例調査シート（3/3）

事例名/事業名	
実施地域・主体	
目的	
内容	
関係者及びその役割 誰が、どの立場で関わっているか	
実施頻度	
参考URL	

20

STEP1　事例調査

参考URL

・「いろどり保育園 の園児たちが、同法人の介護・福祉施設（デイサービス等）を訪問して慰問・交流」社会福祉法人あすか
https://asukafukushikai.com/2024/02/16/%e3%81%84%e3%82%8d%e3%81%a9%e3%82%8a%e4%bf%9d%e8%82%b2%e5%9c%92%e3%80%80%e6%85%b0%e5%95%8f-2/

・「子どもと高齢者がともに支えあえる環境づくりと、自立支援に取り組む」社会福祉法人アルペン会　あしたねの森
https://www.wam.go.jp/content/wamnet/pcpub/kaigo/torikumijirei/c02_20161207_01.html

・「地域の子どもや高齢者がごちゃまぜで遊び、お互いを思いやる場を作りたい」東京都福祉局
https://www.fukushi1.metro.tokyo.lg.jp/hometown/project/project_details/index2810.html?id=FruitBasket

21

STEP1　事例調査

②課題（２）



状況説明

事例調査を通して、
保育職と介護職が関わる、さまざまな交流の形が
整理されました。
次に自治体から、事業の方向性をよりはっきりさせるため、
保育職と介護職、それぞれの立場から見た、交流事業の
メリットやデメリットを整理してほしい、との依頼がありました。
あなたたちはプロジェクトメンバーとして、
自分の立場ではなく、**相手の職種の立場**になって考えることで、
交流事業で大切にすべき点や注意すべき点を
明らかにすることになりました。

22

STEP1　事例調査

作業手順

① チーム内で、調査した事例をもとに、
保育職は「介護職の立場」、介護職は「保育職の立場」になって、
この事例における相手職の仕事や役割を想像しましょう。

②想像した内容をもとに、
相手職の立場から見たメリットとデメリットを整理しましょう 。

③チーム内で、保育職役・介護職役に分かれ、
＜相互理解シート（１）相手職視点シート＞に記入しましょう。

23

STEP1　事例調査

④記入後、チーム内で実際の保育職・介護職の意見を聞き、
想像した内容との違いや共通点を確認しましょう。

⑤聞き取った内容をもとに、
想像と実際の差や新たな気づきを
＜相互理解シート（２）差異・気づき整理シート＞にまとめましょう。

⑥まとめた結果をチームで発表しましょう。

24

相互理解シート（１）相手職視点シート

対象実例名	
相手職	□介護職　　□保育職
相手職の役割	
メリット	
デメリットや負担	
疑問	
備考	

25

相互理解シート（２）差異・気づき整理シート

対象実例名	
聞き取りした相手職	□介護職　　□保育職
実際の考え 大切にしてること、良い点、大変だと思われる点	
想像との共通点	
想像との差異（ギャップ）	
活かせそうな視点 今後の交流企画に生かせそうな視点（配慮、工夫等）	

26

STEP2 現状分析

相手職のことを理解した上で、
そこから生まれそうな価値や
可能性を整理しましょう。

講義資料

①課題　②現状分析シート

27

STEP2　現状分析

課題設定

**これまでに調べた事例や相互理解の結果をもとに、
今行われている保育職と介護職の交流のやり方を整理します。**

**その整理を出発点として、
これからどのような交流を目指したいかを段階的に考え、
次のステップにつながる方向性をまとめることを課題とします。**

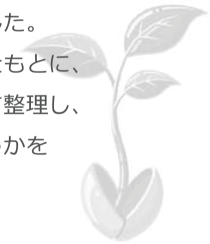
28

STEP2　現状分析

①課題

状況説明

事例調査や相互理解のプロジェクトを通して、
保育職と介護職が関わる交流の実際の様子や、
相手の立場から見た考え方や感じ方が整理されました。
次に自治体から、これまでに分かった事例や理解をもとに、
現在行われている交流の在り方を一度立ち止まって整理し、
そこから、どのような交流を目指すことができそうかを
考えてほしい、との依頼がありました。
あなたたちはプロジェクトメンバーとして、
今の交流を出発点に、これからの交流の方向性や目指す姿を
明らかにすることになりました。



29

STEP2　現状分析

作業手順

① STEP1で行った事例調査や検討結果をもとに、現在の交流のやり方について、チームで話し合ったり、生成AIを活用したりして整理しましょう。

<生成AI活用事例>

- STEP1の事例をもとに、現状の交流の特徴を整理して
- 保育職と介護職、それぞれの立場から考えられるメリットとデメリットを教えて

②整理した内容を、<現状分析シート（１）現状の交流の在り方>に記入しましょう。

30

STEP2　現状分析

③ <現状分析シート（１）現状の交流の在り方>をもとに、チームで話し合いや生成AIを活用しながら、どのような交流を目指したいかを検討しましょう。

①AIで視点や切り口を広げる　②共感できるものを選ぶ　③自分たちなりの言葉で価値を整理する

<生成AI活用事例>

- 今の保育職と介護職の交流のやり方をふまえて、目指したい交流の方向性をいくつか挙げて
- 今行われている保育職と介護職の交流について、「続けやすさ」「関わりやすさ」「広げやすさ」の視点から、目指すべき交流の姿を整理して

④検討した結果を、<現状分析シート（２）目指すべき交流の姿>に記入しましょう。

⑤まとめた内容をチームで発表しましょう。

31

現状分析シート（１）現状の交流の在り方

現状の交流の目的			
特徴 実施頻度、運営の形			
メリット		保育職	介護職
デメリット・負担			
全体	メリット		
	デメリット		
まとめ 総じてどのような交流か			

32

現状分析シート（２）目指すべき交流の姿

現状の制約 続けにくい点や広がりにくい点		
目指すべき方向性 実施頻度やかかわり方主体等		
目指すべき交流の姿		
交流によって得られる価値	保育職	介護職
期待される効果		

33

STEP3 アイデア創出

STEP2の整理結果をもとに、
相手職への理解を踏まえながら、
交流の新しいアイデアや可能性を考えましょう。

講義資料

①課題　②アイデアシート

34

STEP3　アイデア創出

課題設定

STEP2で整理した現状分析や、目指すべき交流の姿をもとに、
相手の職種への理解を大切にしながら、
保育職と介護職が協力して実現できそうな交流のアイデアを
考えます。

今の制約や負担にも気を配りつつ、これまでの交流を発展させる
新しい取り組みや関わり方の可能性を整理し、
次の企画検討につながるアイデアをまとめることを課題とします。

35

STEP3　アイデア創出

①課題



状況説明

現状分析を通して、
保育職と介護職が関わる交流のやり方や、目指すべき交流の姿が
整理されました。
次に自治体から、これまでに整理した内容をもとに、
目指す交流の姿を、具体的な取り組みとして形にするための
アイデアを考えてほしい、との依頼がありました。

あなたたちはプロジェクトメンバーとして、相手の職種への理解を
大切にしながら、今の制約にもそって、実現できそうな交流のアイデアを
考えることになりました。

36

STEP3　アイデア創出

作業手順

① SETP2で考えた、目指すべき交流の姿をもとに、
生成AIを活用して、いくつかのアイデアを出しましょう。

<生成AI活用事例>

- 目指すべき姿に合った交流のアイデアを、いくつか出してください。

・生成AIを使って、アイデアの幅を広げましょう。
・最初から完璧を目指さず、まずは数を出すことを大切にしましょう。

STEP3　アイデア創出

②生成AIを活用して、アイデアを比べるための
「評価のポイント（実現できそうか、人手は足りるか など）」を決め、
どのアイデアがよいかをチームで話し合いましょう。

<生成AI活用事例>

- 複数の交流アイデアを比べるための、評価のポイントを提案してください。
- その評価ポイントを使って、アイデアを評価してください。

現実の制約を考えながら、アイデアを絞り込んでいきましょう

③チームでアイデアを一つ選び、
アイデアシートに記入しましょう。

④アイデアをチームで発表しましょう。

アイデアシート

タイトル		
ねらい		
概要（どんな交流か）		
役割	保育職	介護職
期待される価値		
懸念事項		
選んだ理由		

STEP4 企画書作成

STEP3のアイデアをもとに、
相手職への理解を踏まえながら、
交流によって生まれる価値や可能性を整理し、
企画書としてまとめましょう。

講義資料

①課題　②企画書

STEP4　企画書作成

課題設定

STEP3で考えた交流アイデアをもとに、
相手の職種への理解を大切にしながら、
保育職と介護職が協力して行う交流企画を具体的に考えます。

企画の目的や内容、実施方法、期待される効果を整理し、
関係者に分かりやすく伝えられる
交流企画書としてまとめることを課題とします。

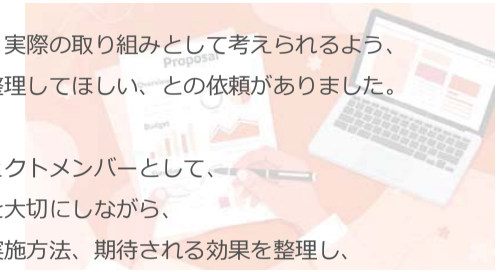
41

STEP4　企画書作成

①課題

状況説明

STEP3のアイデア創出を通して、
保育職と介護職が協力して取り組めそうな交流アイデアが整理されました。
次に自治体から、
検討したアイデアを、実際の取り組みとして考えられるよう、
具体的な企画として整理してほしい、との依頼がありました。



あなたたちはプロジェクトメンバーとして、
相手の職種への理解を大切にしながら、
交流の目的や内容、実施方法、期待される効果を整理し、
関係者に共有できる企画書としてまとめることになりました。

42

STEP4　企画書作成

作業手順

①企画書を作成するために、
チームで必要な情報を整理しましょう。
必要に応じて、追加の調査を行ってもかまいません。
情報を整理する際には、生成AIを活用してもよいです。

②チームで整理した内容をもとに、交流企画書を作成しましょう。

③発表は、次の STEP5「ふりかえり」 の後に行います。
ここでは企画書の作成まで行い、次のSTEPへ進みましょう。

43

STEP4　企画書作成

参考URL

- 「営業企画書に書くべき5つの要素とは？提案書との違いと書き方を解説」Urumo!
  https://www.innovation.co.jp/urumo/project-proposal/#__t_9

- 「【テンプレあり】イベント企画書の書き方と5つの重要ポイントとは」空間広告マガジン
  https://www.tohgashi.co.jp/magazine/proposal_howto/

- 「企画書の書き方と具体例＆作成のポイント｜簡単テンプレートも！」DocumentBiz
  https://doc-biz.work/836?srsltid=AfmBOoqqq0NtoK-rArNIcaRegUrljNtZoPTRM9eJH0oWxlQdTHP6mFEP

44

STEP5 ふりかえり

プロジェクトを通して得られた、
相手の職種への理解や気づきを振り返り、
交流から生まれる価値や、これからの可能性を整理しましょう。

講義資料

①課題　②相互理解ふりかえりシート

45

STEP5　ふりかえり

課題設定

本プロジェクトを通して得られた内容をもとに、
相手の職種への理解がどのように深まったかを振り返ります。

あわせて、保育職と介護職が協力することで生まれそうな
価値や可能性を整理し、
今後の交流や実践につながる気づきをまとめます。

46

STEP5　ふりかえり

①課題

状況説明

企画書を作成するまでのプロジェクトを通して、保育職と介護職が協力する交流について、さまざまな視点から検討が行われました。
次に自治体から、今回のプロジェクトで得られた相手の職種への理解や気づきを整理し、交流によって生まれそうな価値や可能性を振り返ってほしい、との依頼がありました。

あなたたちはプロジェクトメンバーとして、
これまでの検討の流れを振り返りながら、
相互理解の変化や学びを整理し、
今後の交流や実践につながる視点をまとめることになりました。

47

STEP5　ふりかえり

作業手順

① 企画書を作成するまでのプロジェクトを振り返り、
相手の職種への理解がどのように変わったか、
また、お互いが協力することで生まれそうな価値や可能性について、
チームで話し合いましょう。

②話し合った内容を「相互理解ふりかえりシート」にまとめましょう。

③発表は企画書とあわせて次のステップで行います。

48

相互理解ふりかえりシート

	保育職	介護職
以前の相手職のイメージ		
現在の相手職のイメージ		
イメージ変化の気づき		
交流を考える上で大切なこと		
今後に活かしたいこと		

49

STEP6 発表

プロジェクトを通して得られた、
相手の職種への理解や気づきをもとに、
交流から生まれる価値や可能性について発表し、
全体で共有しましょう。

講義資料

①課題

50

STEP6　発表

課題設定

これまでのプロジェクトで整理してきた内容をもとに、
相手の職種への理解をふまえながら、
保育職と介護職が協力することで生まれそうな価値や、
実現できそうな交流企画書を発表します。

各チームは、事例調査から現状分析、アイデア出し、
企画の検討までの中で得られた気づきや、目指す交流の姿を
共有し、他のチームの考え方から学びを深めることを
目的とします。

51

STEP6　発表

①課題

状況説明



一連のプロジェクトを通して、
保育職と介護職が協力する交流について、
事例調査から現状分析、企画の検討までを行ってきました。
自治体からは、各チームが考えた交流企画について、
相手の職種への理解をふまえた企画書として提案し、
その価値や期待される効果を説明してほしい、との依頼がありました。

あなたたちはプロジェクトメンバーとして、
これまでの学びや気づきを整理し、
交流企画の内容とその意義を、企画書として発表することになりました。

52

STEP6　発表

作業手順

①チーム内で発表の流れや役割分担を確認しましょう。

②「企画書」と「相互理解振り返りシート」を発表しましょう。

53

②事例調査シート（1/3）

回答例

事例名/事業名	いろどり保育園/いきいき保育園　慰問活動（特別養護老人ホーム 煌奏館）
実施地域・主体	福岡県糟屋郡粕屋町　あすか福祉会関連施設
目的	・高齢者福祉施設の利用者に 園児の訪問・演技・ゲーム等を通して楽しさ・刺激を提供すること ・異世代（幼児・高齢者）間の 交流機会の創出と心の触れ合い ・施設利用者の気分転換、生活の変化、笑顔や会話機会の増加を図ること
内容	2023年から2025年にかけて、いろどり保育園と老人ホームでは継続的に異世代交流が行われている。 2023年は、歌やダンスの披露、質問タイムを行うオンライン交流会を実施した。 2024年は、園児が訪問し、歌や演奏、ゲームを通じた対面型の慰問へと発展した。 2025年は、これまでの発表に加え、自由な会話や触れ合いの時間を増やし、より深い交流を行った。 いずれの年度も、園児の存在が高齢者にとって大きな刺激となり、生活の中に楽しみや活力をもたらしている。 同時に、園児にとっても高齢者と接することで、思いやりや社会性を育む貴重な学びの機会となっている。

1

②事例調査シート（1/3）

回答例

関係者及びその役割 誰が、どの立場で関わっているか	■社会福祉法人あすか福祉会 ・交流事業全体の企画・調整、実施方針の決定 ■いろどり保育園/いきいき保育園（保育園、保育士） ・園児の引率および交流内容（歌・ダンス等）の企画・準備 ・園児の安全管理および心理的サポート ・交流中の行動補助、円滑な進行の支援 ■保育園児 ・歌やダンス、あいさつ等を通じて高齢者と交流 ・高齢者に楽しみや活力を届ける役割 ■特別養護老人ホーム（職員） ・会場準備、当日の運営調整 ・利用者の体調管理、移動や参加時の介助 ・交流時の見守りおよび安全確保 ■高齢者利用者 ・慰問活動の参加者 ・園児との会話、鑑賞、ゲーム等を通じた交流の担い手
実施頻度	年一回
参考URL	2023.02.14　保育園児のみんなと交流会 https://asukafukushikai.com/2023/02/14/%e4%bf%9d%e8%82%b2%e5%9c%92%e5%85%90%e3%81%ae%e3%81%bf%e3%82%93%e3%81%aa%e3%81%a8%e4%ba%a4%e6%b5%81%e4%bc%9a/ 2024.02.16　いろどり保育園　慰問 https://asukafukushikai.com/2024/02/16/%e3%81%84%e3%82%8d%e3%81%a9%e3%82%8a%e4%bf%9d%e8%82%b2%e5%9c%92%e3%80%80%e6%85%b0%e5%95%8f-2/ 2025.02.17　いろどり保育園☆慰問 https://asukafukushikai.com/2025/02/17/%E3%81%84%E3%82%8D%E3%81%A9%E3%82%8A%E4%BF%9D%E8%82%B2%E5%9C%92%E2%98%86%E6%85%B0%E5%95%8F/

2

②事例調査シート（2/3）

回答例

事例名/事業名	多世代交流の拠点づくり　あしたねの森（社会福祉法人アルペン会）
実施地域・主体	富山県富山市　社会福祉法人アルペン会
目的	・子どもと高齢者が日常的に関わり合える居場所づくり ・多世代が支え合い、互いの存在や生活が豊かになる仕組みの推進 ・自立支援につながる環境整備と、福祉サービスの質向上
内容	社会福祉法人アルペン会が運営する複合施設「あしたねの森」は、高齢者施設、保育所、障害福祉サービス等を同一敷地内に併設し、総合的な福祉・医療サービスを提供している。 施設は渡り廊下や中庭でつながれており、自然に行き来できる設計となっている。そのため、特別なイベントを設けなくても交流が生まれる環境が整えられている。 高齢者はデイサービスや生活の場の中で子どもたちと接し、会話や散歩、見守りなどを通じて関係を築いている。 保育所では、子どもたちが高齢者と日常的に顔を合わせることで、思いやりや社会性を育む機会としている。 このように「あしたねの森」は、福祉・保育・医療を一体化し、日常生活の中で自然に多世代が関わる仕組みを構築している点が大きな特徴である。

3

②事例調査シート（2/3）

回答例

関係者及びその役割 誰が、どの立場で関わっているか	■社会福祉法人アルペン会（法人経営層・管理者） ・多世代交流・自立支援を軸とした全体方針の策定・統括 ・企画・調整、実施方針の決定 ■保育園（保育士） ・園児の引率、歌・ダンス等の慰問内容の企画・準備 ・園児の安全管理、心理的サポート当日の進行補助や円滑な交流の支援 ■保育園児 ・歌やダンス、あいさつ等を通じて高齢者と交流 ・高齢者に楽しみや活力を届ける役割 ■高齢者福祉施設（職員） ・会場準備、当日の運営調整 ・利用者の体調管理と安全確保 ■高齢者利用者 ・園児の発表鑑賞、会話、ふれあいを通じて交流 ・精神的な充足感や生活意欲の向上につながる存在
実施頻度	日常的に交流
参考URL	あしたねの森 https://www.ashitanenomori.jp/index.html 子どもたちがやってくる老人ホーム https://www.ashitanenomori.jp/nursing.html 子どもと高齢者がともに支えあえる環境づくりと、自立支援に取り組む https://www.wam.go.jp/content/wamnet/pcpub/kaigo/torikumijirei/c02_20161207_01.html

4

②事例調査シート（3/3）

回答例

事例名/事業名	「あそび」を通してコミュニケーションを育む「フルーツバスケット」
実施地域・主体	東京都小金井市　団体名：フルーツバスケット　拠点：介護老人保健施設 小金井あんず苑
目的	・子どもと高齢者が一緒にあそびながら互いを理解する ・世代の枠を超えた対等な関わりをつくる ・あそびを通じてコミュニケーションを育む
内容	この交流は、子どもと高齢者が同じ場所で自由に遊ぶ場であり、フルーツバスケットなどの簡単なゲームや体を動かす遊びが中心である。 子どもと高齢者は輪になって順番に動きながら関わり、保育士や施設スタッフは近くで見守り、安全を確保しつつ必要以上に手を出さない。 参加者は自分の判断で声をかけたり手をつないだりし、遊びの準備や進行も自分たちで行うことがある。 活動中に上手さや感想を評価することはなく、自然に世代を超えた交流が生まれる。 こうして遊びを通してコミュニケーションが育ち、子どもと高齢者の理解が深まり、地域全体のつながりが広がるのである。

5

②事例調査シート（3/3）

回答例

関係者及びその役割 誰が、どの立場で関わっているか	■団体名：フルーツバスケット ・企画・調整、実施方針の決定 ・遊びの進行、環境準備 ■保育園（保育士） ・子どもを安全に参加させ、遊びの進行補助や円滑な交流を支援 ■保育園児 ・ゲームや遊びを通じて高齢者と関わり、交流のきっかけをつくる ■高齢者福祉施設（職員） ・会場準備や運営の調整、利用者の安全管理 ■高齢者 ・子どもと遊びや会話で関わり、交流を通じて楽しみや生活意欲を得る
実施頻度	敬老の日などに定期的に実施
参考URL	地域の子どもや高齢者がごちゃまぜであそび、お互いを思いやる場を作りたい！ https://www.fukushi1.metro.tokyo.lg.jp/hometown/project/project_details/index2810.html?id=FruitBasket

6

相互理解シート（1）相手職視点シート

回答例

対象実例名	いろどり保育園/いきいき保育園　慰問活動（特別養護老人ホーム 煌奏館）
相手職	□介護職　　☑保育職
相手職の役割	・子どもの命と安全を最優先に守る ・年齢や成長に合わせて交流内容を考える ・無理のない楽しい交流になるよう配慮する ・不安や緊張に寄り添い安心できるよう支援する ・交流後も様子を見守り、今後の保育に活かす
メリット	・子どもが高齢者と関わることで、思いやり人を大切にする気持ちが育つ ・子どもが「ありがとう」「役に立てた」という経験を持てる ・地域とのつながりを感じられる
デメリットや負担	・移動時や施設内での安全管理の負担が大きい ・子どもが環境に不安を感じないか心配がある ・練習や説明、引率など準備に時間がかかる ・イベント化すると保育業務が忙しくなる ・事故やトラブル発生時の責任が重い
疑問	・この交流は、子どもの成長に本当に役立っているのか？ ・子どもに無理をさせていないか？ ・高齢者の体調が急に悪くなったら、どう対応するのか？ ・交流の目的は「見せるため」になっていないか？
備考	保育職は、子どもと遊ぶだけでなく、命や気持ちを守りながら安心できる環境をつくる専門職だと感じた。 交流の場でも、子どもが無理をしていないかを気にかけ、成長につながる経験になるよう支えている姿が印象的だった。 責任が大きく、専門性の高い仕事だと思った。

7

相互理解シート（1）相手職視点シート

回答例

対象実例名	いろどり保育園/いきいき保育園　慰問活動（特別養護老人ホーム 煌奏館）
相手職	☑介護職　　□保育職
相手職の役割	・高齢者の命や健康、安心した生活を守っている ・交流中も体調や様子に気を配っている ・移動や参加を安全に支えている ・安心できるよう声かけや場づくりをしている ・交流後も体調の変化を確認している
メリット	・子どもと関わることで、表情が明るくなる、会話が増える、気持ちが前向きになるなどの良い変化が期待できる ・利用者が「教える」「見守る」立場になり、役割や生きがいを感じられる ・施設内に明るい雰囲気が生まれる
デメリットや負担	・交流中は通常以上に注意して見守る必要がある ・転倒や体調悪化など事故への不安がある ・子どもの予測できない行動に即時対応が求められる ・通常業務に加えて対応が増え、負担が大きい・体調差があり、全員参加への配慮が難しい
疑問	・高齢者にとって、本当に無理のない交流になっているか？ ・子どもの元気さについていけない利用者はいないか？ ・交流後の疲れや体調変化をどうフォローすればよいか？ ・参加が義務のようになっていないか？ ・負担や本音を安心して伝えられる環境か？
備考	介護職の方は、交流の場でも高齢者の命や健康を最優先に考え、強い責任感を持って関わっていると感じた。 一人ひとりの体調や気持ちに合わせて無理のない参加を支え、小さな変化にも気づく観察力と経験の深さが印象的だった。 高齢者を尊重し、その人らしさを大切にする姿勢が重要だと感じた。

8

相互理解シート（２）差異・気づき整理シート

回答例

対象実例名	いろどり保育園/いきいき保育園　慰問活動（特別養護老人ホーム 煌奏館）
聞き取りした相手職	□介護職　　☑保育職
実際の考え 大切にしてること、良い点、大変だと思われる点	■大切にしていること ・子どもが安心して参加できることを一番に考えている ・無理に交流させず、「やりたい」「見ていたい」など子どもの気持ちを尊重する ・高齢者の体調や気分にも配慮し、双方が心地よい関係になるよう意識している ■良い点 ・子どもが高齢者に自然と優しく接する姿が見られる ・普段の保育では得られない経験や学びにつながる ・子どもが人との関わり方を学ぶ良い機会になっている ■大変だと思う点 ・移動や交流中の安全管理に常に気を使う ・子どもの反応が予想できず、気持ちの変化への対応が必要 ・通常の保育業務に加えて準備や調整が発生する
想像との共通点	・子どもの安全と気持ちを最優先に考えている ・交流は「楽しいイベント」よりも、無理のない経験であることが大切 ・子どもによって参加の仕方が違ってよいと考えている
想像との差異（ギャップ）	・子どもの気持ちの変化にとても細かく対応している ・交流の経験をその後の保育にどう活かすかまで考えている ・楽しさだけでなく、子どもに負担がないかを常に意識している
活かせそうな視点 今後の交流企画に生かせそうな視点（配慮、工夫等）	・参加や見学など、子どもが選べる形を用意する ・交流後に様子を振り返り、職員で共有する ・目的を「成功」ではなく「安心して経験すること」に置く ・無理をせず、子どもの様子に合わせて調整する

9

相互理解シート（２）差異・気づき整理シート

回答例

対象実例名	いろどり保育園/いきいき保育園　慰問活動（特別養護老人ホーム 煌奏館）
聞き取りした相手職	☑介護職　　□保育職
実際の考え 大切にしてること、良い点、大変だと思われる点	■大切にしていること ・高齢者の体調・安全を最優先にする ・無理のない関わりと、参加を選べる雰囲気づくり ・保育職と情報共有し、連携して見守る ■良い点 ・表情や会話が増え、生きがいにつながる ・高齢者が教える・見守る立場になれる ・職員のやりがいにもつながる ■大変だと思う点 ・転倒や体調急変などへの不安が常にある ・子どもの動きが予測しにくく、緊張感が高い ・業務が増え、全員への配慮が必要
想像との共通点	・高齢者の安全と体調管理が最優先であること ・無理に参加させないことが大切だという考え ・交流中も常に気を配り、気が抜けないこと
想像との差異（ギャップ）	・交流後の疲れや体調の変化を細かく確認している ・楽しい交流でも精神的な負担に配慮している ・良い刺激になる一方で、全員に合うとは限らないことを意識している
活かせそうな視点 今後の交流企画に生かせそうな視点（配慮、工夫等）	・高齢者側も「参加・見学・途中退出」を選べる仕組みをつくる ・交流時間は短めにし、回数や内容を調整する ・交流後の利用者の様子を保育職と共有する ・「盛り上げること」より「安心して関われること」を重視する ・一人ひとりのペースを尊重した交流を行う

10

現状分析シート（１）現状の交流の在り方

回答例

現状の交流の目的		現在行われている保育職と介護職の交流は、子どもと高齢者が直接関わる機会をつくることで、子どもには思いやりや社会性を育み、高齢者には生きがいや生活意欲の向上をもたらすことを目的としている。 また、世代を超えた関わりを通して地域の支え合いを広げ、保育や介護の現場を地域に開かれた存在にしていくことも目指している。	
特徴 実施頻度、運営の形		・行事や慰問などイベント型・単発型が中心 ・年に数回など不定期開催が多い ・どちらか一方が主催し、もう一方が受け入れる形になりやすい そのため、担当者が変わると続きにくく、準備の負担が大きく広がりにくい課題がある。	
メリット		保育職	介護職
		・子どものやさしさや思いやりが育つ ・いろいろな世代の人と関わる力が育つ	・高齢者が笑顔になり、元気が出る ・生活に楽しみや変化が生まれる
デメリット・負担		・子どもの体調や気持ちにより参加が難しい場合がある ・準備や引率などの負担増加	・転倒・体調急変への不安 ・通常業務に加えて対応が増える
全体	**メリット**	・分かりやすく実施しやすい ・成果が見えやすく、外部にも説明しやすい	
	デメリット	・準備や調整の負担が大きい ・継続しにくく、広がりにくい	
まとめ 総じてどのような交流か		現在の交流は分かりやすい取り組みである一方、職員の負担が大きく、継続性や取り組みの広がりに課題がある交流となっている。 そのため担当者が変わると続きにくく、特定の施設だけの活動になりがちである。 今後は、無理なく続けられ、日常に取り入れやすい交流の形を考えることが大切である。	

11

現状分析シート（２）目指すべき交流の姿

回答例

現状の制約 続けにくい点や広がりにくい点	・職員の業務負担が増えやすい ・事故・トラブルへの不安が大きい ・参加者（子ども・高齢者）に無理が生じやすい ・施設や人に依存し、横展開しにくい ・「イベント成功」が目的化しやすい	
目指すべき方向性 施頻度やかかわり方主体等	・年に数回の行事ではなく、月1回など無理のない回数で続ける ・長時間ではなく、短時間で気軽に参加できる形にする ・一方が主役にならず、互いに自然に関われる内容にする ・無理をせず、できる範囲で参加できる仕組みにする	
目指すべき交流の姿	・特別なイベントではなく、日常の中にあるあたたかい交流 ・子どもも高齢者も無理をせず、自分らしく参加できる関わり 保育職と介護職が協力し合いながら、安心・安全を大切にする交流。そして、楽しいだけでなく、お互いの成長や学びにつながる交流を目指します。	
交流によって得られる価値	保育職	介護職
	・子どもの成長を違う場面で見ることができる ・地域の中で子どもを育てていると実感できる	・高齢者の笑顔や元気が増えること ・高齢者の新しい一面を発見できること
期待される効果	・子どもと高齢者の両方が心豊かになる ・世代をこえた理解や思いやりが広がる ・地域の中で支え合う気持ちが育つ ・施設どうしの協力関係が深まる ・交流が続くことで、安心できる地域づくりにつながる	

12

アイデアシート

回答例

タイトル	日常の延長でつながる「あいさつ・見守り交流」	
ねらい	特別なイベントにせず、短時間・高頻度で無理なく交流を続けることができる。	
概要（どんな交流か）	登園や送迎、散歩など日常のタイミングを活用し、子どもと高齢者があいさつや一言の会話を交わす。 立ち止まって大きな活動を行うのではなく、自然にすれ違う中で行う交流を大切にする。	
役割	保育職	介護職
	・子どもが安心して交流できる環境を整える ・あいさつや声かけの手本を示し、真似しやすくする	・高齢者の体調を見ながら、あいさつや声かけを支える ・あいさつや声かけのきっかけを作り、自然な会話を促す
期待される価値	・自然に人と関わる経験ができる ・気持ちやペースを大切にできる ・負担が少なく日常に取り入れやすい ・顔なじみができ、安心感が高まる	・無理なく子どもと関われる ・安全面の不安が少ない ・準備の負担が少ない ・継続で意欲や安心感が高まる
懸念事項	・交流の効果が分かりにくい ・形骸化しやすい	
選んだ理由	交流をイベントではなく日常の関わりとして捉えることで、無理なく続けやすい形になると考えた。 短時間で参加も選べるため、子どもや高齢者への負担が少ない点も特徴。 その結果、他施設にも広げやすい取り組みになると考えた。	

13

相互理解ふりかえりシート

回答例

	保育職	介護職
以前の相手職のイメージ	・交流を明るく盛り上げてくれる存在 ・子どもをまとめ、交流を進行する役割 ・比較的柔軟に対応できる職種	・高齢者の生活全般を支える専門職 ・交流を楽しませてくれる立場 ・子どもとの関わりに余裕がある職種
現在の相手職のイメージ	・子どもの命と気持ちをいちばん大切にしている ・小さな変化に気づき、無理に参加させない ・交流後の様子も見守っている ・楽しいだけでなく、成長につながる経験を大切にしている	・高齢者の安全と体調を最優先に考えている ・交流中も事故や体調変化に気を配っている ・一人ひとりの気持ちやペースを大切にしている ・見えない負担や責任を担っている ・安心して関われる環境を整えている
イメージ変化の気づき	保育職は、交流を進めるだけでなく、子どもの安全や気持ちを最優先に守る専門職だと分かった。 無理をさせず、常に配慮しながら関わっていることに気づいた。	介護職はゆったり見守る立場だと思っていましたが、実際は高齢者の体調や安全に強く気を配る専門職だと分かった。 楽しさだけでなく、疲れや負担にも注意し、無理をさせない役割を担っていることに気づいた。
交流を考える上で大切なこと	交流では「参加させること」よりも「安心して過ごせること」を大切にする必要がある。 不安ややりたくない気持ちも尊重し、無理をさせないことが重要。 そのうえで、保育職と介護職が互いの専門性を理解し協力することが、良い交流につながると考えられる。	
今後に活かしたいこと	今後は回数や内容よりも、関わりの質を大切にしたい。 短時間であっても、参加者が「安心できた」「楽しかった」と感じられる交流を積み重ねることが重要である。 また、気づきを職員同士で共有し、次の交流や日々の保育・介護に活かすことが求められる。	

14

保育職と介護職の
○○○○○事業

企画書

令和○○年○○月○○日
○○チーム

メンバー

氏名	役割（任意）

交流事業名

■交流事業名
「　　」

企画の背景

■現在の交流の状況
-
-
-

■本企画を検討するに至った理由
-
-
-

企画の目的

■この交流で目指すこと

-
-
-

■どのような関係性を作りたいか

-
-
-

5

交流内容

■どのような交流を行うか

-

■主な活動内容

-
-
-

6

実施方法

■実施場所

-

■実施頻度・期間

-

■対象者

-

■役割分担

-

7

期待される効果

■子どもへの効果

-
-
-

■高齢者への効果

-
-
-

8

期待される効果

■保育職への効果

-
-
-

■介護職への効果

-
-
-

■地域への効果

-

9

想定される課題・留意点

■実施上の課題

-
-
-

■安全・負担・運営面での留意点

-
-
-

10

課題への対応案

■工夫や対策の方向性

-
-

11

まとめ

■本企画の特徴

■伝えたいポイント

12

回答例

保育職と介護職の
まいにちつながり
プロジェクト事業

企画書

令和○○年○○月○○日
○○チーム

メンバー

回答例

氏名	役割（任意）
A田A子	保育職
B橋B美	介護職

2

交流事業名

回答例

■交流事業名
「まいにちつながりプロジェクト」

3

企画の背景

回答例

■現在の交流の状況

- 現在の交流はイベント型・単発型が中心で、職員が企画・準備・運営を担っている。
- 成果は分かりやすいものの、負担や責任が大きく、継続や広がりが難しく日常に定着しにくい状況。

■本企画を検討するに至った理由

- 現在の交流はイベント中心で負担が大きく、継続が難しい課題がある
- そこで、日常の中で子どもと高齢者が自然に関われる、
安心で楽しい交流企画を立案した。

4

企画の目的

回答例

■この交流で目指すこと

- 世代を超えた関わりを日常に広げる
- 互いの専門性を生かした協働
- 前向きな価値を生み出す交流
- 継続的で広がりやすい仕組みづくり

■どのような関係性を作りたいか

- 子どもと高齢者の安心で自然なつながり
- 世代や職種を超えた協力の関係
- 地域全体で人を支え合う関係

5

交流内容

回答例

■どのような交流を行うか

- 子どもと高齢者が日常の中で自然にあいさつや会話を交わす交流とし、特別な準備や長時間のイベントは行わず、短時間・高頻度で無理なく続けられる関わりを目指す
- 安心して参加できる関係性を大切にします。

■主な活動内容

- 登園・送迎時のあいさつ
  子どもと高齢者がすれ違う際に声をかけ合う
- 散歩や屋外活動中の交流
  子どもが歩く道すがら、自然に手を振ったり一言交わす
- 見守り・声かけの支援
  介護職が高齢者の体調や反応を見守りながら声かけをサポート
- 安心感の提供
  保育職が子どもに無理強いせず、自由に関われる雰囲気をつくる

6

実施方法

回答例

■実施場所

- 登園・送迎ルート、園庭や施設周辺の散歩道など、
  子どもと高齢者が自然にすれ違える日常の空間
- 特別な準備や設備が不要で、安全に移動できる場所

■実施頻度・期間

- 毎日の登園・送迎や散歩のタイミングに短時間で実施
- 特定の期間に限定せず、継続的に日常の中で行う

■対象者

- 園児・保育所児童
- 施設利用中の高齢者
- 必要に応じて家族も見守る形で参加

■役割分担

- 保育職
  子どもに安心感を与え、無理に関わらせない
  交流の機会を日常生活に自然に組み込み、観察や安全管理を行う
- 介護職
  高齢者の体調や安全を確認し、無理のない声かけを支援
  交流時のフォローや見守りを行う

7

期待される効果

回答例

■子どもへの効果

- 思いやり・社会性の育成
- 生活習慣やルールの理解
- 人との関わりを楽しむ力の向上

■高齢者への効果

- 生きがい・生活意欲の向上
- 社会的つながりの維持
- 軽い運動や活動のきっかけ
- 心理的安心感

8

期待される効果

回答例

■保育職への効果
- 交流を通して思いやりや社会性を育める
- 無理なく関わり安心感や自発性を支援できる
- 介護職と協働し専門性理解や連携力が向上する

■介護職への効果
- 高齢者の笑顔でやりがい向上
- 役割分担で協働力や判断力向上
- 準備負担少なく日常業務で関われる

■地域への効果
- 日常交流で世代を超えたつながりや支え合いが育まれる
- 交流の様子が家族や地域の理解や参加につながる
- 継続的交流で安心感や信頼感が地域に広がる

9

想定される課題・留意点

回答例

■実施上の課題
- 短時間で自然な交流のため、効果が見えにくい
- 職員の意識次第で形式的になり形骸化する
- 子どもや高齢者によって参加の受け止め方に差が出る

■安全・負担・運営面での留意点
- 高齢者の転倒や体調変化に注意し、子どもの動きやすさも考慮する
- 役割分担を明確にし、交流を日常業務に組み込み負担を分散する
- 交流のタイミングや動線を調整し、記録・共有で改善につなげる

10

課題への対応案

回答例

■工夫や対策の方向性
- 登園・送迎・散歩などの生活の中で短時間・高頻度に実施する
- 保育職と介護職が役割分担し、無理のない範囲で見守りや声かけを行う
- 簡単な記録や気づきの共有で交流の成果や変化を把握する
- 子ども・高齢者が無理せず関われるよう、
  自由で自然な関わりを重視する

11

まとめ

回答例

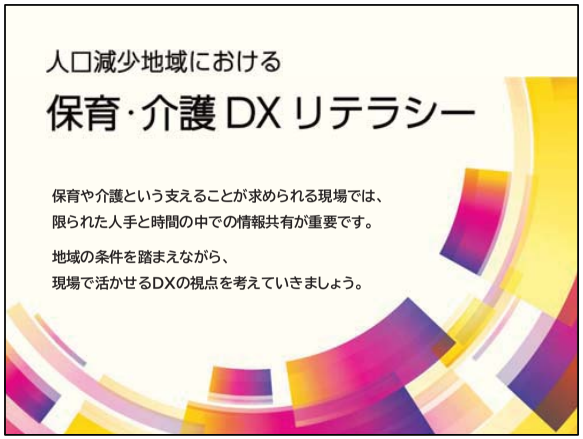
■本企画の特徴
- イベントではなく短時間・高頻度で実施
- 顔なじみの関係づくりで心理的安全を確保
- 職員の負担が少なく、無理なく継続できる設計
- 高齢者・子ども・職員・地域に前向きな影響をもたらす

■伝えたいポイント
- 特別なイベントでなくても十分な効果がある
- 日常生活の中で無理なく実施しやすく広がりやすい
- 介護職と保育職が連携することで安全・安心と学びを両立
- 子ども・高齢者・地域全体に前向きな関係性を育む

12

資料 3：開発教材プロトタイプ

共通科目：「人口減少地域における保育・介護 DX リテラシー」



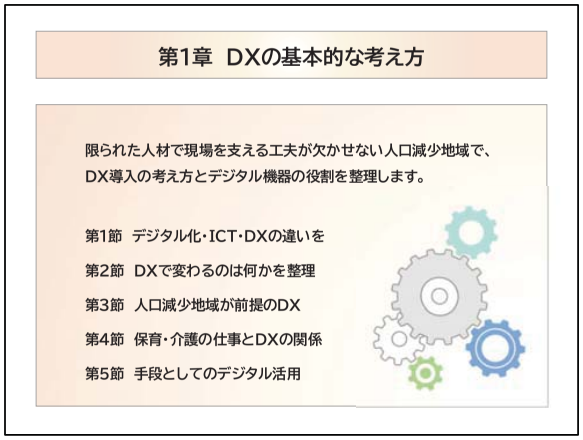
人口減少地域における保育・介護DXリテラシー

保育や介護という支えることが求められる現場では、限られた人手と時間の中での情報共有が重要です。
地域の条件を踏まえながら、現場で活かせるDXの視点を考えていきましょう。



目次

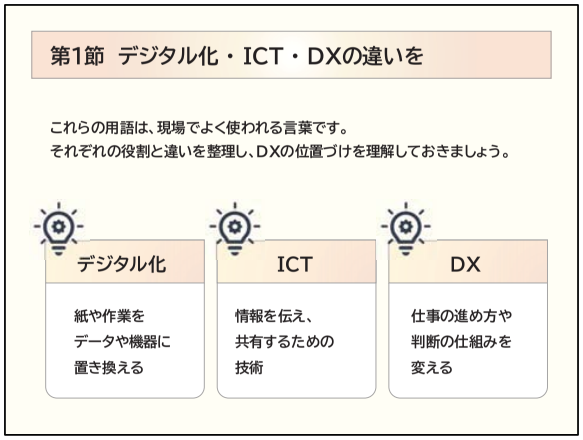
第1章　DXの基本的な考え方
第2章　人口減少地域という条件を読む
第3章　仕事の流れを見える化する
第4章　情報・記録・データの扱い方
第5章　保育の専門性とDX
第6章　介護の専門性とDX
第7章　保育と介護を同時に捉える視点
第8章　DXを用いた再設計の考え方



第1章　DXの基本的な考え方

人口減少地域では、限られた人材で現場を支える工夫が欠かせません。
第1章では、DX導入の考え方と、デジタル機器の役割を整理します。

第1節　デジタル化・ICT・DXの違いを
第2節　DXで変わるのは何かを整理
第3節　人口減少地域が前提のDX
第4節　保育・介護の仕事とDXの関係
第5節　手段としてのデジタル活用



第1節　デジタル化・ICT・DXの違いを

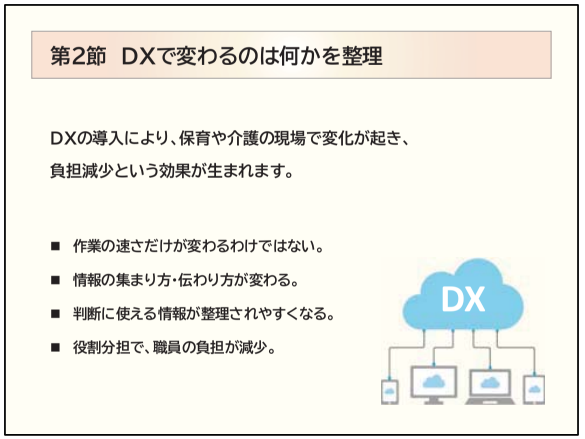
これらの用語は、現場でよく使われる言葉です。
それぞれの役割と違いを整理し、DXの位置づけを理解しておきましょう。

デジタル化とは、紙や作業をデータや機器に置き換えることを指します。
ICTとは、Information and Communication Technology の略で、情報を伝えたり、共有したりするための情報通信技術です。
DXとは、それらを導入し、仕事の進め方や判断の仕組みを変えることを意味します。

現場で、デジタル化やICTの技術を取り入れると、作業の速さが変わり、情報の集まり方や伝わり方も変わります。
さらにDXを導入することにより、役割分担がしやすくなり、職員の負担が減少し、仕事の仕組みそのものが変わっていきます。

このように、デジタル化やICTは、DXを進めるための手段の一部です。
言葉の違いを理解することで、現場で何を変えようとしているのかが見えやすくなります。

DXを正しく捉えることが、無理のない改善を進めるための土台になります。



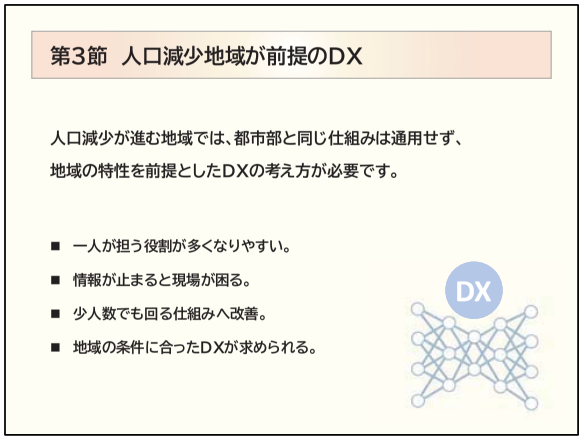
第2節　DXで変わるのは何かを整理

DXの導入により、保育や介護の現場で変化が起き、負担減少という効果が生まれます。

作業の速さだけが変わるわけではありません。
情報の集まり方や伝わり方が変わることで、判断に使える情報が整理されやすくなります。
その結果、役割分担がしやすくなり、職員の負担が減少していきます。

DXは、単に仕事を早く終わらせるためのものではなく、情報・判断・役割の関係を見直すための考え方です。
こうした変化によって、特定の役割に負担が集中することを防ぎ、全体の負担軽減につながっていきます。

特に、減少地域の現場を考えるうえで、重要になっていきます。

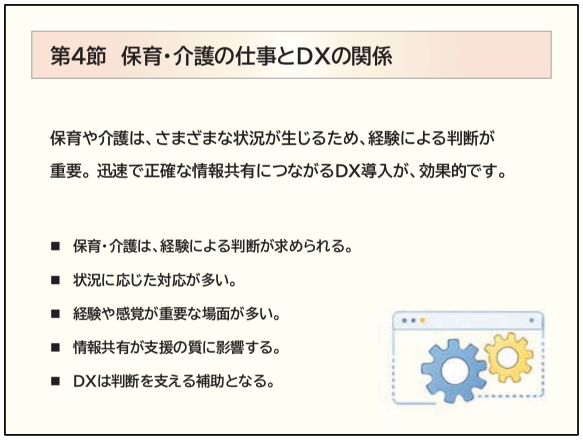


第3節　人口減少地域が前提のDX

人口減少が進む地域では、都市部と同じ仕組みは通用せず、地域の特性を前提としたDXの考え方が必要です。

人口減少地域の現場では、一人が担う役割が多くなりやすく、情報が止まると現場が困る状況が生じやすくなります。
そのため、少人数でも回る仕組みへ改善していくことが求められます。
こうした背景から、地域の条件に合ったDXが必要とされます。

人口減少地域では、人や時間に余裕がない中で、支援のための移動が多くなります。
だからこそ、無理に都市部のやり方を当てはめるのではなく、現場の条件に合った形でDXを考えることが重要です。
この視点を持つことが、支援を続けていくための土台になります。

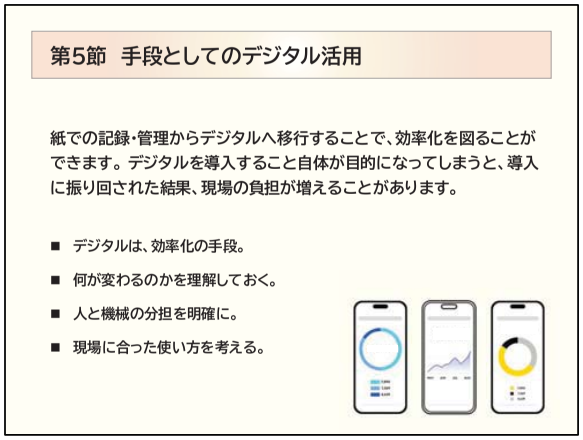


第4節　保育・介護の仕事とDXの関係

保育や介護は、さまざまな状況が生じるため、経験による判断が重要です。
迅速で正確な情報共有につながるDX導入が、効果的です。

保育・介護は、経験による判断が求められる仕事であり、状況に応じた対応が多く発生します。
そのため、経験や感覚が重要な場面が多く、情報共有のあり方が支援の質に大きく影響します。
DXは、このような現場の判断を置き換えるものではなく、判断を支える補助となります。

DXを導入することで、経験や感覚に頼る判断を支える情報が整理され、多職種間連携の中で、情報が必要な人に伝わりやすくなります。
その結果、支援の質を安定させることにつながります。



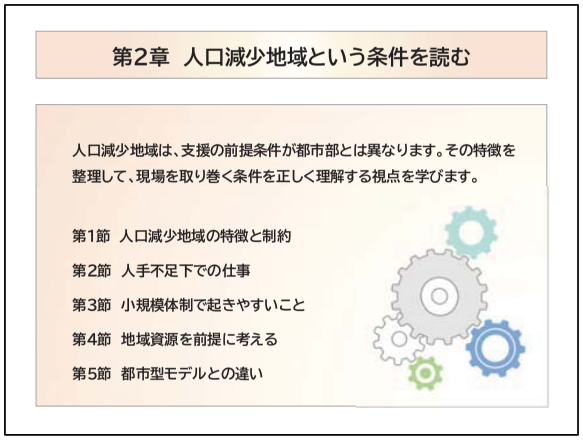
第5節　手段としてのデジタル活用

紙での記録・管理からデジタルへ移行することで、効率化を図ることができます。しかし、デジタルを導入すること自体が目的になってしまうと、導入に振り回された結果、現場の負担が増えることがあります。

デジタルは、効率化の手段であり、何が変わるのかを理解しておくことが重要です。
そのためには、まず、人と機械の分担を明確にし、現場に合った使い方を考えていく必要があります。

仕事の流れの中で、人が行った方がよいこと、機械に任せた方がよいことを切り分けることから始まり、現場の実情に合わせて使い方を調整していき、改善を積み重ねる視点も求められます。

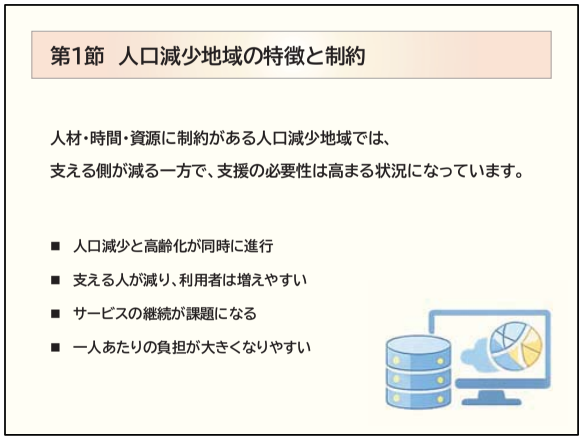
DXは、デジタルを導入すること自体が目的ではありません。



第2章　人口減少地域という条件を読む

人口減少地域では、仕事や支援の前提条件が都市部とは異なります。
第2章では、人口減少地域ならではの特徴や制約を整理し、現場を取り巻く条件を正しく理解する視点を学びます。

第1節　人口減少地域の特徴と制約
第2節　人手不足下での仕事
第3節　小規模体制で起きやすいこと
第4節　地域資源を前提に考える
第5節　都市型モデルとの違い



第1節　人口減少地域の特徴と制約

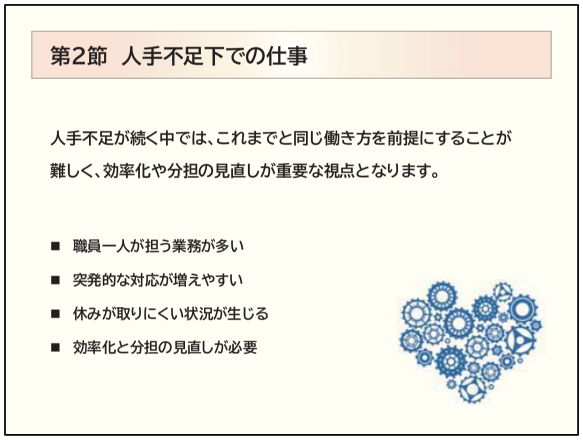
人材・時間・資源に制約がある人口減少地域では、支える側が減る一方で、支援の必要性は高まりやすい状況になっています。

このような地域では、人口減少と高齢化が同時に進行し、支える人が減る一方で、利用者は増えやすくなります。

その結果、サービスの継続が課題となり、一人あたりの負担が大きくなりやすい状況が生じます。

人口減少地域では、これまでと同じ体制を前提にすることが難しくなっています。

現場の努力だけで支え続けるのではなく、条件を正しく理解したうえで、支援のあり方を見直すことが重要になります。

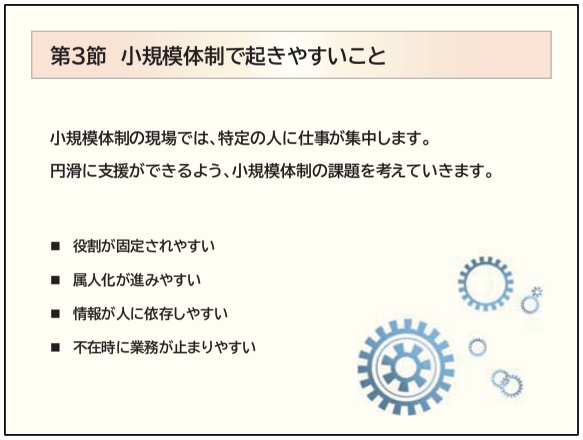


第2節　人手不足下での仕事

人手不足が続く中では、これまでと同じ働き方を前提にすることが難しく、効率化や分担の見直しが重要な視点となります。

このような状況では、職員一人が担う業務が多くなり、突発的な対応が増えやすくなります。
それは、休みが取りにくい状況を生み出しかねませんので、改善にむけた効率化と分担の見直しが必要です。

人手を増やすことが難しい現場だからこそ、仕事の進め方や役割の持ち方を見直すことが求められます。
個人の頑張りだけで支え続けるのではなく、効率化や分担を前提とした仕組みづくりが、無理のない働き方と安心して働ける環境につながります。



第3節　小規模体制で起きやすいこと

小規模体制の現場では、特定の人に仕事が集中します。
円滑に支援ができるよう、小規模体制の課題を考えていきます。

このような現場では、役割が固定されやすく、属人化が進みやすい状況が生じます。
その結果、情報が人に依存しやすくなり、不在時に業務が止まりやすい状態が生まれます。

こうした状況は、個人の能力や努力の問題ではなく、小規模体制だからこそ起こりやすい構造的な課題です。
DX導入にむけて、このような現場の課題を正しく理解することが、次の改善につながります。

第4節　地域資源を前提に考える

人口減少地域では新しい資源を増やすことより、
まずは、限られた人材や施設、仕組みの活用から考えていきます。

- 人材・施設・仕組みは限られている
- 新しい資源を増やすのは難しい
- 地域内の連携が鍵となる
- 現実的な条件を前提に考える



第4節　地域資源を前提に考える

人口減少地域では、新しい資源を増やすことよりも、まず、限られた人材や施設、仕組みの活用から考えていきます。

人口減少地域では、人材・施設・仕組みが限られており、新しい資源を増やすことは難しい状況がほとんどです。
そのため、地域内の連携が鍵となり、現実的な条件を前提に考える視点が求められます。

人も施設も足りないという状況は、現場の努力だけで解決できるものではありません。
今ある資源をどのようにつなぎ、活かすかを考えることで、無理なく支援を続けられる体制づくりが可能になります。
この視点が、人口減少地域における実践的な支援につながります。

第5節　都市型モデルとの違い

人数や役割分担が可能な地域と同様のモデルは、現場に負担を生むこともあります。地域の条件に合った考え方で進めることが大切です。

- 人数が多い前提の仕組みが多い
- 分業が成立しやすい
- 代替人材が確保しやすい
- 人口減少地域には合わない場合がある

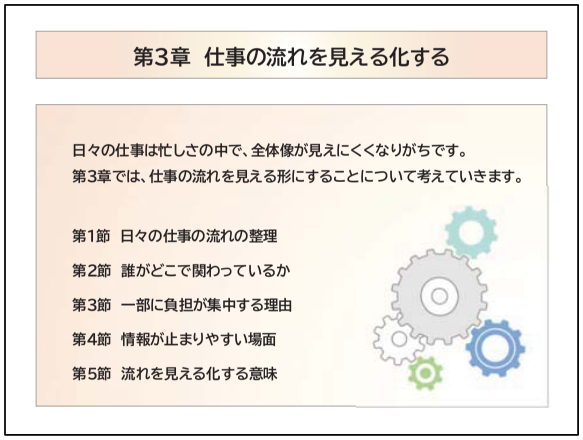


第5節　　都市型モデルとの違い

人数や役割分担が可能な地域と同様のモデルは、現場に負担を生むこともあります。
地域の条件に合った考え方で進めることが大切です。

都市型モデルは、人数が多い前提の仕組みが多く、分業が成立しやすい特徴があります。
また、代替人材が確保しやすく、人が入れ替わっても業務が回りやすい構造になっています。
しかし、このようなモデルは、人口減少地域には合わない場合があり、同じやり方を当てはめることで、かえって現場の負担が大きくなることがあります。

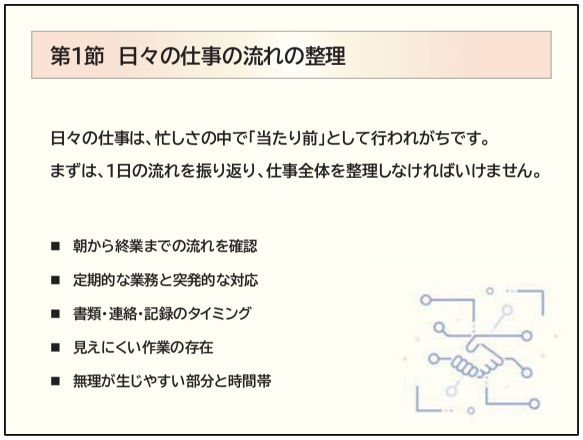
まずは地域の条件を正しく理解し、地域の条件を前提にした考え方を選ぶことが、無理のない支援と持続可能な運営につながります。
都市型と同様を目指すのではなく、現実にできる形を考えていかなければ、DXを導入しただけで終わる可能性もあります。



第3章　仕事の流れを見える化する

日々の仕事は忙しさの中で、全体像が見えにくくなりがちです。
第3章では、仕事の流れを見える形にすることについて考えていきます。

第1節　日々の仕事の流れの整理
第2節　誰がどこで関わっているか
第3節　一部に負担が集中する理由
第4節　情報が止まりやすい場面
第5節　流れを見える化する意味



第1節　日々の仕事の流れの整理

日々の仕事は、忙しさの中で当たり前として行われがちです。
まずは、1日の流れを振り返り、仕事全体を整理しなければいけません。

現場では、朝から終業までの流れを確認することなく業務が進み、定期的な業務と突発的な対応が重なり合って行われています。
そのような日々の業務が流れていくと、書類・連絡・記録のタイミングがばらばらになり、見えにくい作業の存在が負担として積み重なっていきます。
結果として、無理が生じやすい部分や時間帯が見えてきます。

見える化は、改善に向けた最初の一歩です。
忙しさの根底に何があるのかを見極めるため、仕事の流れを整理していくと、どこに負担が集中しているのかが見えやすくなります。
表に出にくいものの、裏で支えている業務や、気づかれにくい連携の存在なども明確にしていく作業です。
この整理が、次に考える情報共有やDX導入の土台になります。

第2節　誰がどこで関わっているか

仕事は一人で完結しているように見えて、実際には多くの人が関わり、
情報伝達がおこなわれています。

- 誰がどの場面に関わるか
- 情報を受け取る人・渡す人
- 判断をする人の位置
- 裏で支えている業務
- 見えにくい連携の存在



第2節　誰がどこで関わっているか

仕事は一人で完結しているように見えて、実際には多くの人が関わり、情報伝達がおこなわれています。

現場の仕事を見ていくと、誰がどの場面に関わっているのか、また、情報を受け取る人と渡す人がどこにいるのかが、はっきりしないまま進んでいることがあります。
その中で、判断をする人の位置が見えにくくなり、裏で支えている業務や、見えにくい連携の存在が埋もれてしまうこともあります。

このような状況があるため、関わっている人や役割を整理すると、情報や判断の流れが見えやすくなります。
これが、役割の偏りや伝達の滞りに気づくための手がかりになります。

第3節　一部に負担が集中する理由

忙しさの原因は、仕事量の多さだけではありません。
負担が偏る構造が隠れていることがあります。

- 経験者に頼りがち
- 判断が特定の人に集中
- 「わかる人」が固定される
- 引き継ぎが難しい業務
- 気づかれにくい負担



第3節　一部に負担が集中する理由

忙しさの原因は、仕事量の多さだけではありません。
負担が偏る構造が隠れていることがあります。
現場では、経験者に頼りがちになり、判断が特定の人に集中しやすくなります。
その結果、「わかる人」が固定され、引き継ぎが難しい業務が増えていきます。
こうした状況は、気づかれにくい負担として積み重なっていきます。

負担が集中する背景には、個人の能力や姿勢の問題ではなく、仕事や情報の持ち方に偏りが生まれる構造があります。
できる人がやってしまえば問題がないように見えますが、本人も周囲も、その負担に気づかない状況になっていきます。

だからこそ、支え方の仕組みを見直す視点が必要です。
この構造に気づくことが、負担を分散し、無理のない業務の進め方を考えるための出発点になります。

第4節　情報が止まりやすい場面

保育や介護の現場は、日常業務が慌ただしく、記録・情報の共有が
後回しになりがちです。

- 口頭だけで伝えられる情報
- 記録されていない判断
- 忙しさによる伝達漏れ
- 不在時の情報断絶
- 場所や人に依存した情報



第4節　情報が止まりやすい場面

保育や介護の現場は、日常業務が慌ただしく、記録・情報の共有が後回しになりがちです。

現場では、口頭だけで伝えられる情報が多く、判断が記録されないまま進んでしまうことがあります。
忙しさによって伝達漏れが起こりやすく、不在時には情報が断絶してしまう場面も見られます。
その結果、場所や人に依存した情報の持ち方になりやすくなります。

このような状況では、大切な判断や対応に遅れが生じる危険性があります。
そのため、情報が止まる場面を把握しておかなければいけません。
どこで共有が滞りやすいのかを見えるようにしておくことが、情報の整理や共有の仕組みを考えるための出発点になります。

第5節　流れを見える化する意味

現場の状況や課題を共有することは、質の良い支援につながります。
現状と課題を把握、改善に向けるためには、見える化が必要です。

- 全体像を把握できる
- 問題の位置が見えやすい
- 役割の整理につながる
- 情報共有の改善点が分かる
- DX導入の土台になる

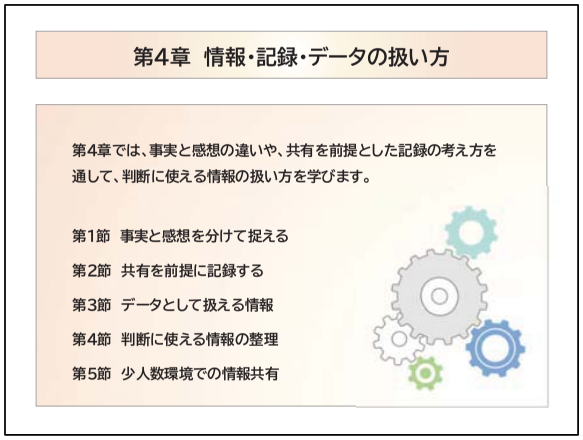


第5節　流れを見える化する意味

現場の状況や課題を共有することは、質の良い支援につながります。
現状と課題を把握、改善に向けるためには、見える化が必要です。

仕事の流れを見える化することで、全体像を把握できるようになり、問題がどこにあるのか、その位置が見えやすくなります。
その結果、役割の整理につながり、情報共有の改善点も分かるようになります。
こうした整理は、DX導入の土台となります。

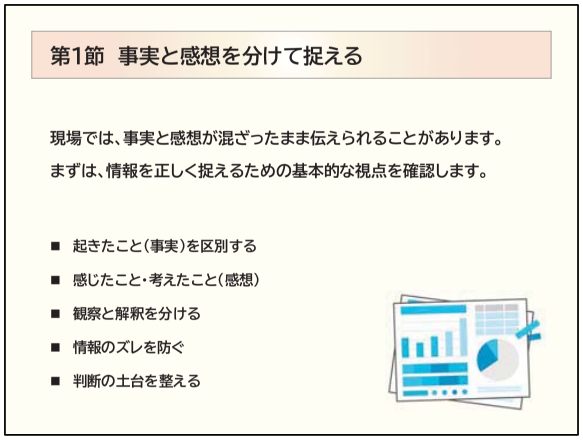
見える化は、忙しい理由や負担の偏りを感覚ではなく事実として捉えることができますが、管理のためだけのものではありません。
現場の理解をそろえ、改善に向けた共通認識をつくるための手段です。
この視点が、現場に合った現実的な改善と質の高い支援につながっていきます。



第4章　情報・記録・データの扱い方

第4章では、事実と感想の違いや、共有を前提とした記録の考え方を通して、判断に使える情報の扱い方を学びます。

第1節　事実と感想を分けて捉える
第2節　共有を前提に記録する
第3節　データとして扱える情報
第4節　判断に使える情報の整理
第5節　少人数環境での情報共有



第1節　事実と感想を分けて捉える

現場では、事実と感想が混ざったまま伝えられることがあります。
まずは、情報を正しく捉えるための基本的な視点を確認します。

情報を整理していくうえでは、起きたこと、事実を区別し、感じたことや考えたこと、感想と分けて捉えることが重要です。
そのためには、観察と解釈を分けて考える視点が必要です。
この違いを意識すると、情報のズレを防ぎやすくなり、判断の土台となる情報を整えることができます。

的確な支援をおこなうために、事実と感想を分けて捉えることは基本です。
他の人と情報を共有する際の誤解を減らすことにつながり、正確な情報の積み重ねが、安定した判断と支援の質を支えます。

第2節　共有を前提に記録する

記録は、自分のためだけのものではありません。
他の人が見て理解できることが重要になります。

- 誰が読んでも分かる記録
- 背景が伝わる書き方
- 後から確認できる内容
- 不在時の引き継ぎを意識
- チームで使える記録



第2節　共有を前提に記録する

記録は、自分のためだけのものではありません。
他の人が見て理解できることが重要になります。

記録を共有の視点で見直すと、誰が読んでも分かる記録であることや、背景が伝わる書き方になっているかが大切になります。
また、後から確認できる内容であることや、不在時の引き継ぎを意識した記録であるかどうかも重要です。
こうした視点を取り入れることで、チームで使える記録になっていきます。

共有を前提に記録することで、情報が人に依存しにくくなり、引き継ぎもスムーズになります。
記録のあり方を見直すことが、現場全体の判断を支える基盤となります。

第3節　データとして扱える情報

すべての情報が、そのままデータになるわけではありません。
扱いやすい形に整えることが必要です。

- 繰り返し出てくる情報
- 数値や選択肢で表せる
- 内容記録の基準がそろっている
- 比較しやすい形式
- 後から活用できる情報



第3節　データとして扱える情報

すべての情報が、そのままデータになるわけではありません。
扱いやすい形に整えることが必要です。

情報をデータとして活用するためには、繰り返し出てくる情報であるかどうかや、数値や選択肢で表せる内容であるかを意識する必要があります。
また、内容記録の基準がそろっていることや、比較しやすい形式で記録されていることも重要です。
こうした条件が整うことで、後から活用できる情報になっていきます。

このように、情報を整理してデータとして扱える形にすることで、判断の根拠を共有しやすくなります。
その結果、記録は「残すもの」から「活かすもの」へと変わっていきます。

第4節　判断に使える情報の整理

情報が多くても、判断に使えなければ意味がありません。
必要な情報を選び、整理する視点が求められます。

- 判断に必要な情報を選ぶ
- 優先順位をつける
- 見やすい形にまとめる
- 迷いを減らす
- 判断の共有につなげる



第4節　判断に使える情報の整理

情報が多くても、判断に使えなければ意味がありません。
必要な情報を選び、整理する視点が求められます。

現場では、判断に必要な情報を選ぶことが重要になり、その情報に優先順位をつけて整理していく必要があります。
また、見やすい形にまとめることで内容を把握しやすくなり、迷いを減らしながら判断を進めることができます。

こうした整理は、判断の共有につなげるためにも重要であり、必要な情報を見極め、使える形に整えることです。
この視点が、現場での判断を支え、支援の質を安定させていきます。

第5節　少人数環境での情報共有

少人数の現場では、情報共有の遅れが大きな影響を与えます。
限られた人員でも回る共有の形を考えていきます。

- 情報が人に偏らない工夫
- 不在時でも分かる
- 仕組みが必要な人に届く
- 共有無理のない共有方法
- 現場に合った形を選ぶ



第5節　少人数環境での情報共有

少人数の現場では、情報共有の遅れが大きな影響を与えます。
限られた人員でも回る共有の形を考えていきます。

少人数環境では、情報が人に偏らない工夫が求められ、不在時でも分かる形で情報が残っていることが重要になります。
また、仕組みとして必要な人に届くようにし、無理のない共有方法を選ぶことが欠かせません。
そのうえで、現場に合った形を選ぶ視点が必要になります。

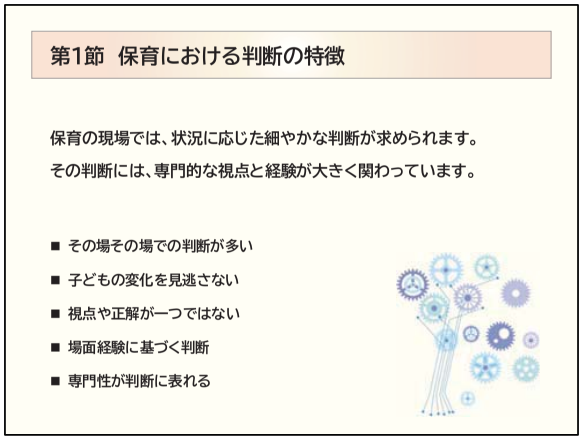
少人数だからこそ、情報共有はシンプルで分かりやすいことが重要です。
人に頼りすぎない共有の仕組みを整えることで、判断の遅れや負担の偏りを防ぎ、安定した支援につながります。



第5章　保育の専門性とDX

第5章では、保育における判断の特徴を整理し、その専門性をDXがどのように支えるのかを見ていきます。

第1節　保育における判断の特徴
第2節　子どもの様子の捉え方
第3節　保育で扱われる情報
第4節　専門性を言葉にする
第5節　保育判断を支えるDX

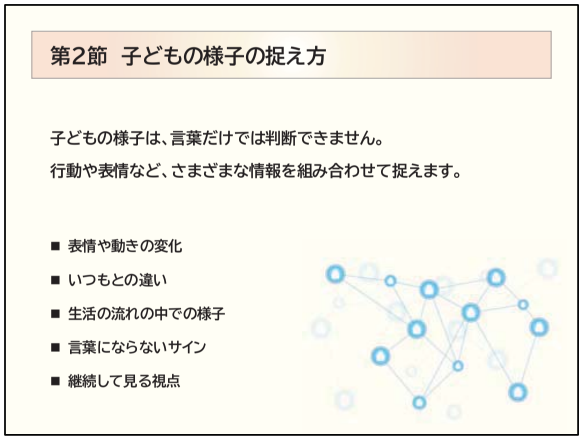


第1節　保育における判断の特徴

保育の現場では、状況に応じた細やかな判断が求められます。
その判断には、専門的な視点と経験が大きく関わっています。

保育の仕事では、その場その場での判断が多く、子どもの小さな変化を見逃さないことが重要になります。
また、視点や正解が一つではなく、場面ごとの経験に基づいた判断が積み重ねられています。
こうした判断の積み重ねに、保育者の専門性が表れていきます。

保育における判断は、マニュアルだけでは対応できないものです。
経験や専門性を大切にしながら、判断を支える情報や共有の仕組みを整えることが、現場全体の支援の質を高めることにつながります。

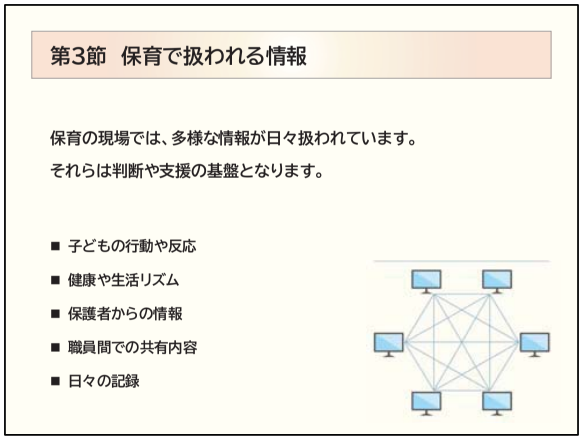


第2節　子どもの様子の捉え方

子どもの様子は、言葉だけでは判断できません。
行動や表情など、さまざまな情報を組み合わせて捉えます。

保育の現場では、表情や動きの変化に注意を払い、いつもとの違いを感じ取ることが大切になります。
また、生活の流れの中での様子を継続して見ることで、言葉にならないサインに気づくことができます。
こうした観察を継続することで、子どもの状態をより正確に捉えられるようになります。

子どもの様子は、瞬間的な判断だけでは成り立ちません。
日々の関わりの中で、継続して見る視点を持つことが重要です。
この視点が、適切な関わりや支援につながっていきます。



第3節　保育で扱われる情報

保育の現場では、多様な情報が日々扱われています。
それらは判断や支援の基盤となります。

現場では、子どもの行動や反応をはじめ、健康や生活リズムに関する情報が日常的に確認されています。
また、保護者からの情報や、職員間での共有内容、日々の記録など、さまざまな情報が積み重なって、日々の業務が慌ただしく進んでいきます。

しかし、これらの情報は、保育における判断や関わりを支える大切なものです。
保育で扱われる情報は、一つひとつが独立しているわけではありません。
複数の情報を組み合わせて捉えることで、子どもの状態が見えやすくなります。
情報を整理し、共有することが、適切な判断と支援につながっていきます。

第4節　専門性を言葉にする

経験に基づく判断は、言葉にしにくいことがあります。
しかし、共有するためには言語化が重要です。

- 感覚的な判断の言語化
- なぜそう判断したのか
- 他者に伝わる表現
- 記録として残す意味
- 専門性の共有につながる



第4節　専門性を言葉にする

経験に基づく判断は、言葉にしにくいことがあります。
しかし、共有するためには言語化が重要です。

保育の現場では、感覚的な判断が多く行われていますが、なぜそう判断したのかを言葉にすることで、他者に伝わる表現として共有しやすくなります。
こうした判断を記録として残すことは、適切な保育において大きな意味があります。
このように、専門的な視点や考え方を後から振り返ることができるように記録を整理することが、専門性の共有につながっていきます。

専門性を言葉にすることは、経験や視点を共有し、現場全体で学び合うための手段です。
言語化された専門性が、支援の質を安定させていきます。

第5節　保育判断を支えるDX

DXは、保育の判断を置き換えるものではありません。
専門的な判断を支える役割を担います。

- 判断の背景を残す
- 情報を整理し共有する
- 職員間の認識をそろえる
- 経験の蓄積を支える
- 保育の質の安定につながる

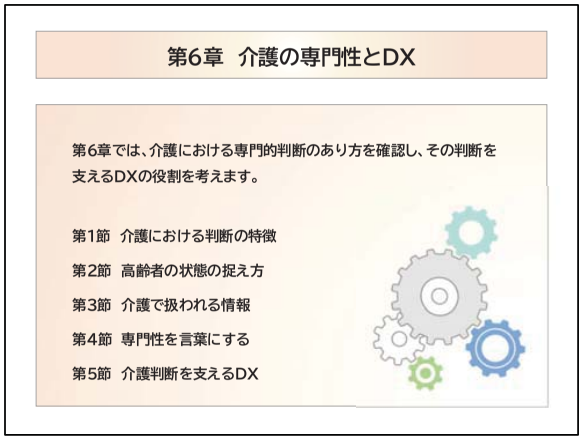


第5節　保育判断を支えるDX

DXは、保育の判断を置き換えるものではありません。
専門的な判断を支える役割を担います。

DXを活用することで、判断の背景を残しやすくなり、情報を整理して共有することが可能になります。
その結果、職員間の認識をそろえやすくなり、個人の経験に頼りすぎない形で、経験の蓄積を支えることができます。
こうした積み重ねが、保育の質の安定につながっていきます。

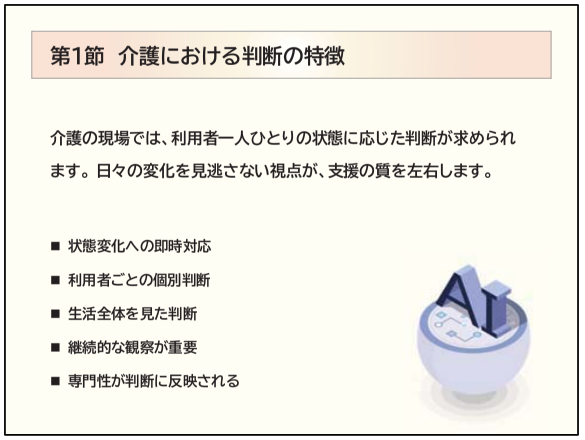
ここで大切なのは、DXが判断の代わりをするものではなく、判断を支える土台であるという点です。
専門性を可視化し、共有できる形で残すことで、現場全体で判断の質を高めていくことができます。
これが、保育の現場におけるDXの役割です。



第6章　介護の専門性とDX

第6章では、介護における専門的判断のあり方を確認し、その判断を支えるDXの役割を考えます。

第1節　介護における判断の特徴
第2節　高齢者の状態の捉え方
第3節　介護で扱われる情報
第4節　専門性を言葉にする
第5節　介護判断を支えるDX

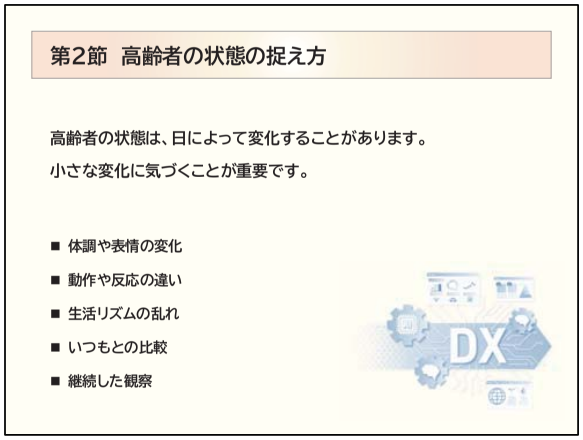


第1節　介護における判断の特徴

介護の現場では、利用者一人ひとりの状態に応じた判断が求められます。
日々の変化を見逃さない視点が、支援の質を左右します。

介護の仕事では、状態変化への即時対応が必要になる場面が多く、利用者ごとの個別判断が日常的に行われています。
また、身体状況だけでなく、生活全体を見た判断が求められ、そのためには継続的な観察が重要になります。
こうした判断の積み重ねに、介護職の専門性が反映されていきます。

介護における判断は、マニュアルだけでは対応しきれないものが多くあります。
そのため、日々の観察と専門的な視点をもとに判断を重ね、利用者にとって安心できる支援につなげていくことが求められています。

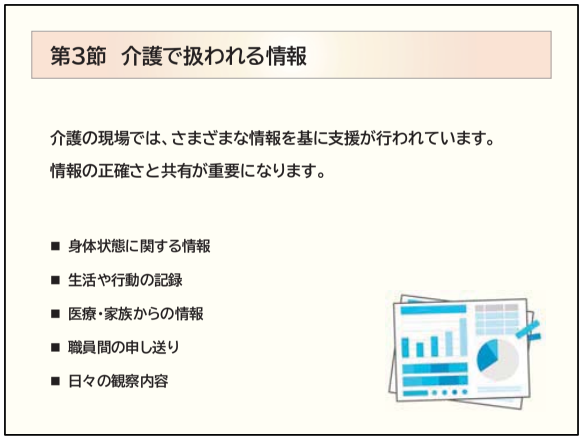


第2節　高齢者の状態の捉え方

高齢者の状態は、日によって変化することがあります。
小さな変化に気づくことが重要です。

介護の現場では、体調や表情の変化に注意を払い、動作や反応の違いを丁寧に見ていくことが求められます。
また、生活リズムの乱れや、いつもとの比較を通して、普段とは異なる状態に気づくことが大切になります。
こうした判断には、継続した観察が欠かせません。

高齢者の状態は、一時的な様子だけでは判断できません。
そのため、日々の関わりの中で変化を積み重ねて捉えることが重要です。
この視点が、早めの対応や安心できる支援につながります。

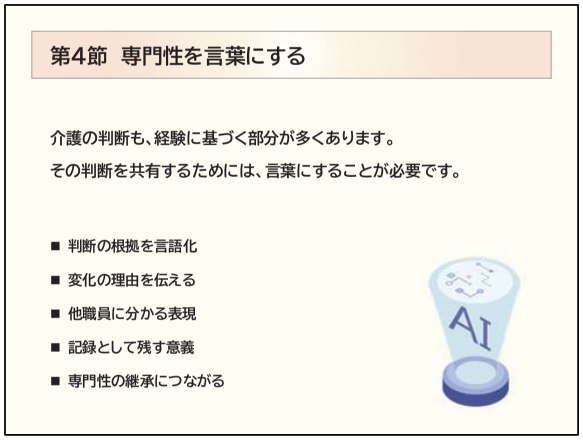


第3節　介護で扱われる情報

介護の現場では、さまざまな情報を基に支援が行われています。
情報の正確さと共有が重要になります。

現場では、身体状態に関する情報をはじめ、生活や行動の記録が日常的に蓄積されています。
また、医療機関や家族からの情報、職員間の申し送りや日々の観察内容など、多様な情報が組み合わさって介護の判断が行われています。

これらの情報は、それぞれが独立しているわけではありません。
正確に整理し、共有することで、利用者の状態を立体的に捉えることができます。
情報を活かす視点が、適切な判断と安定した支援につながっていきます。

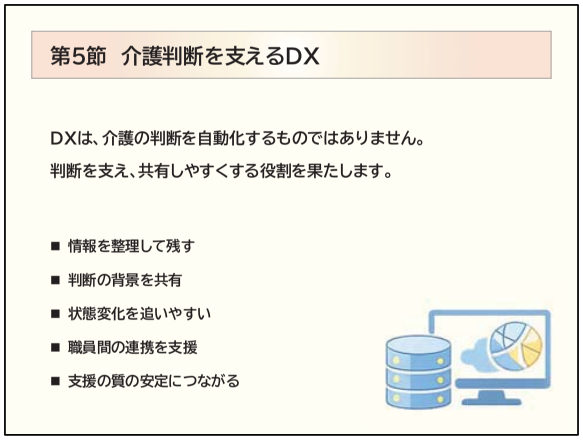


第4節　専門性を言葉にする

介護の判断も、経験に基づく部分が多くあります。
その判断を共有するためには、言葉にすることが必要です。

介護の現場では、判断の根拠を言語化し、なぜそのように判断したのか、変化の理由を伝えることが求められます。
その際、他の職員にも分かる表現で伝えることが重要になり、判断を記録として残すことには大きな意義があります。
こうした積み重ねが、専門性の継承につながっていきます。

専門性を言葉にすることは、個人の経験を共有することでもあります。
判断の背景を共有できるようになることで、現場全体で学び合い、支援の質を安定させていくことができます。

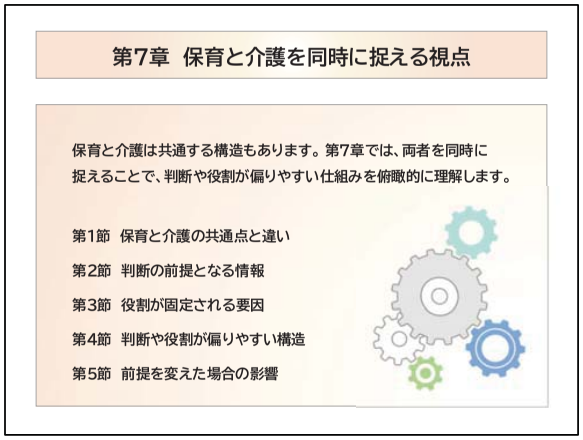


第5節　介護判断を支えるDX

DXは、介護の判断を自動化するものではありません。
判断を支え、共有しやすくする役割を果たします。

DXを活用することで、情報を整理して残しやすくなり、判断の背景を他の職員と共有することが可能になります。
また、状態変化を追いやすくなることで、職員間の連携を支援し、判断のズレを減らすことにつながります。
こうした取り組みが、支援の質の安定につながっていきます。

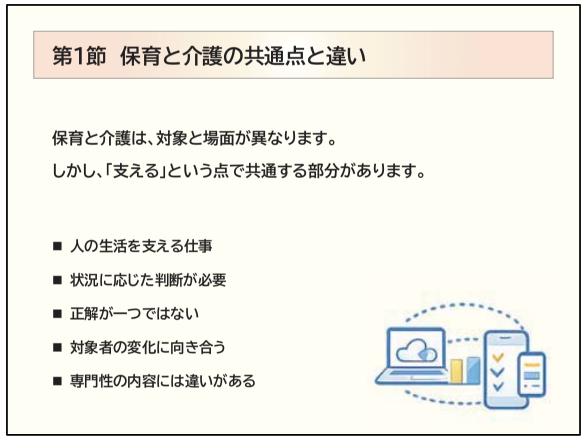
DXは、判断の代わりではなく、判断を支える土台です。
この考え方は、保育でも介護でも変わりません。
情報と判断を共有できる形で残すことで、少人数の現場でも、安心して支援を続けられる環境づくりにつながります。



第7章　保育と介護を同時に捉える視点

保育と介護は共通する構造もあります。第7章では、両者を同時に捉えることで、判断や役割が偏りやすい仕組みを俯瞰的に理解します。

第1節　保育と介護の共通点と違い
第2節　判断の前提となる情報
第3節　役割が固定される要因
第4節　判断や役割が偏りやすい構造
第5節　前提を変えた場合の影響



第1節　保育と介護の共通点と違い

保育と介護は、対象と場面が異なります。
しかし、支えるという点で共通する部分があります。

保育と介護はいずれも、人の生活を支える仕事であり、状況に応じた判断が常に求められます。
その判断には、正解が一つではない場面が多く、対象者の変化に向き合いながら支援を続けていく点が共通しています。
一方で、専門性の内容には違いがあり、それぞれの分野で必要とされる知識や視点は異なります。

共通点と違いを整理することで、保育と介護を同時に捉える視点が生まれます。
違いを理解したうえで共通する考え方を見つけることが、連携やDXを考える際の重要な土台になります。

第2節　判断の前提となる情報

どのような判断も、情報を基に行われています。
前提となる情報が変わると、判断も変わります。

- 観察によって得られる情報
- 記録や申し送りの内容
- これまでの経過
- 周囲の環境条件
- 情報の不足や偏り



第2節　判断の前提となる情報

どのような判断も、情報を基に行われています。
前提となる情報が変わると、判断も変わります。

現場での判断は、日々の観察によって得られる情報を土台としています。
それに加えて、記録や申し送りの内容、これまでの経過が判断に影響します。
また、周囲の環境条件も判断の前提となり、情報の不足や偏りがあると、同じ状況でも判断が変わってしまうことがあります。

そのため、判断そのものだけでなく、どのような情報を前提にしているのかを見直すことが重要です。
そうすることで、情報が整理され、共有されていれば、判断のズレや迷いを減らすことができます。
この視点が、保育と介護を同時に捉え、安定した支援につなげるための基盤になります。

第3節　役割が固定される要因

現場では、知らないうちに役割が固定されることがあります。
その背景には、いくつかの要因があります。

- 経験のある人に集中
- 判断できる人が限られる
- 情報を持つ人が固定
- 忙しさによる分担の固定
- 引き継ぎの難しさ



第3節　役割が固定される要因

現場では、知らないうちに役割が固定されることがあります。
その背景には、いくつかの要因があります。

現場では、経験のある人に業務や判断が集中しやすく、判断できる人が限られることで、特定の人に役割が固定されていきます。
また、情報を持つ人が固定されると、周囲が頼りやすくなり、忙しさによって分担を見直す余裕がなくなることで、役割の固定化が進みやすくなります。
その結果、引き継ぎが難しい業務が増えていきます。

役割の固定は、個人の問題ではなく、現場の構造から生じるものです。
この要因に気づくことで、役割や情報の持ち方を見直す視点が生まれます。
それが、負担を分散し、柔軟に支え合える体制づくりにつながっていきます。

第4節　判断や役割が偏りやすい構造

個人の問題ではなく、仕組みとして偏りが生まれることがあります。
その構造を整理し、どこで偏りが生じているのかを確認していきます。

- 情報が人に依存する
- 判断の根拠が共有されない
- 見えない業務が多い
- 不在時の代替が難しい
- 負担が特定の人に集中



第4節　判断や役割が偏りやすい構造

個人の問題ではなく、仕組みとして偏りが生まれることがあります。
その構造を整理し、どこで偏りが生じているのかを確認していきます。

現場では、情報が人に依存することで、判断の根拠が共有されないまま業務が進むことがあります。
また、見えない業務が多くなると、誰がどの役割を担っているのかが分かりにくくなり、不在時の代替が難しい状況が生じやすくなります。
その結果、負担が特定の人に集中し、偏りが固定されていきます。

こうした偏りは、個人の能力や努力の問題ではありません。
情報や判断がどのように共有されているかという、仕組みの影響によって生まれます。
構造に目を向けることで、役割や判断を分散し、無理のない体制を考えることが可能になります。

第5節　前提を変えた場合の影響

前提となる考え方を変えると、現場の動きや判断の仕方も変わり、
その変化が、役割や情報の持ち方を見直すきっかけになります。

- 情報共有の方法が変わる
- 判断の分担がしやすくなる
- 役割の柔軟性が高まる
- 負担の偏りが減る
- 次の改善につながる

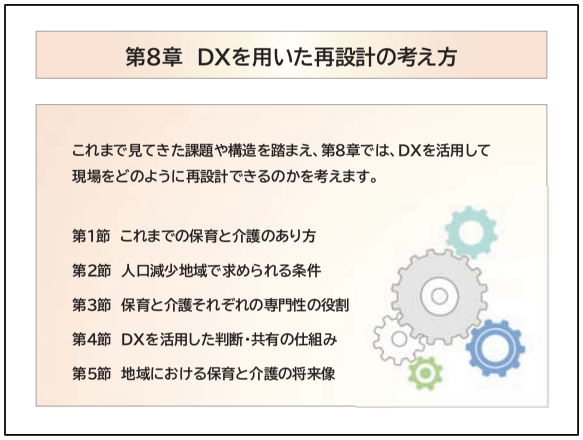


第5節　前提を変えた場合の影響

前提となる考え方を変えると、現場の動きや判断の仕方も変わり、その変化が、役割や情報の持ち方を見直すきっかけになります。

前提を見直すことで、情報共有の方法が変わり、必要な情報が、必要な人に届きやすくなります。
その結果、判断の分担がしやすくなり、役割の柔軟性が高まっていきます。
こうした変化により、負担の偏りが減り、次の改善につながる余地が生まれます。

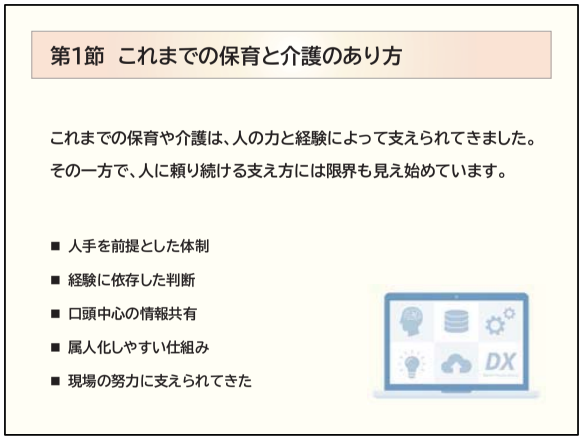
前提を変えることは、現場を否定することではありません。
これまで当たり前としてきた考え方を見直すことで、より無理のない支援や、継続しやすい体制をつくることができます。



第8章　DXを用いた再設計の考え方

これまで見てきた課題や構造を踏まえ、第8章では、DXを活用して現場をどのように再設計できるのかを考えます。

第1節　これまでの保育と介護のあり方
第2節　人口減少地域で求められる条件
第3節　保育と介護それぞれの専門性の役割
第4節　DXを活用した判断・共有の仕組み
第5節　地域における保育と介護の将来像



第1節　これまでの保育と介護のあり方

これまでの保育や介護は、人の力と経験によって支えられてきました。

現場では、人手を前提とした体制のもとで業務が組み立てられ、経験に依存した判断が多く行われてきました。
情報共有は口頭中心で進められることが多く、その結果、属人化しやすい仕組みになりやすい状況が生まれていました。
こうした現場は、職員一人ひとりの努力によって支えられてきた側面があります。

厚生労働省が進める働き方改革が進む中でも、現場では依然として業務の負担が大きく、人の頑張りに支えられた過酷な状況が続いてきました。
しかし、DXを導入することで、こうした「人の努力に依存する流れ」を見直し、支え方そのものを変えていくことが可能になります。

これまでのやり方を否定するのではなく、積み重ねてきた経験を活かしながら、次の形へとつなげていく視点が求められています。

第2節　人口減少地域で求められる条件

人口減少地域では、これまでと同じやり方を続けることが難しくなっており、現実の条件に合った支援の形を考える必要があります。

- 少人数でも回る仕組み
- 判断を分担できる体制
- 情報が止まらない構造
- 無理を前提にしない運営
- 継続できる支援体制



第2節　人口減少地域で求められる条件

人口減少地域では、これまでと同じやり方を続けることが難しくなっています。

現場では、少人数でも回る仕組みを前提とした体制づくりが求められます。
一人に判断が集中しないよう、判断を分担できる体制を整えることが重要になります。
また、情報が止まらない構造をつくることで、不在時や引き継ぎの場面でも支援が滞りにくくなります。
そのうえで、無理を前提にしない運営を考え、継続できる支援体制を整えていく必要があります。

人口減少地域では、頑張り続けることでは支援を維持できません。
続けられる形を前提に、仕組みそのものを整えることが重要です。
この視点が、DXを用いた再設計を考えるための出発点になります。

第3節　保育と介護それぞれの専門性の役割

保育と介護には、それぞれ異なる専門性があります。
その役割を活かすことが重要です。

- 専門的判断は人が担う
- 経験と知識を活かす
- 判断の背景を共有する
- 役割の違いを尊重する
- チームとして支える



第3節　保育と介護それぞれの専門性の役割

保育と介護には、それぞれ異なる専門性があります。
その役割を活かすことが重要です。

保育や介護の現場では、専門的な判断は人が担うことが前提となります。
それぞれの分野で培われてきた経験や知識を活かしながら、日々の判断が行われています。
その際、判断の結果だけでなく、判断の背景を共有することで、他の職員にも意図が伝わりやすくなります。
役割の違いを尊重し合いながら、それぞれの専門性を活かすことが、チームとして支える体制につながります。

専門性は、個人の中だけに留めるものではありません。
互いの役割や判断を理解し合うことで、連携がスムーズになります。
こうした関係性が、保育と介護を同時に支える仕組みづくりの土台になります。

第4節　DXを活用した判断・共有の仕組み

DXは、現場の判断を置き換えるものではありません。
判断と共有を支える仕組みとして活用します。

- 情報を整理して残す
- 判断の根拠を共有
- 必要な人に届く仕組み
- 不在時でも分かる構造
- 現場負担の軽減



第4節　DXを活用した判断・共有の仕組み

DXは、現場の判断を置き換えるものではありません。
判断と共有を支える仕組みとして活用します。

DXを活用することで、情報を整理して残しやすくなり、判断の根拠を他の職員と共有することが可能になります。
また、必要な人に情報が届く仕組みを整えることで、不在時でも状況が分かる構造をつくることができます。
こうした仕組みが、現場負担の軽減につながっていきます。

DXは、判断を任せるためのものではなく、判断を支えるためのものです。
情報と判断を共有できる形で残すことで、少人数の現場でも、無理なく支援を続けられる体制づくりが可能になります。

第5節　地域における保育と介護の将来像

DXを活用することで、地域の条件に合った保育・介護のかたちや、
将来の姿を考えていきます。

- 地域条件に合った運営
- 専門性が活きる現場
- 支援の質の安定
- 働き続けられる環境
- 持続可能な地域づくり

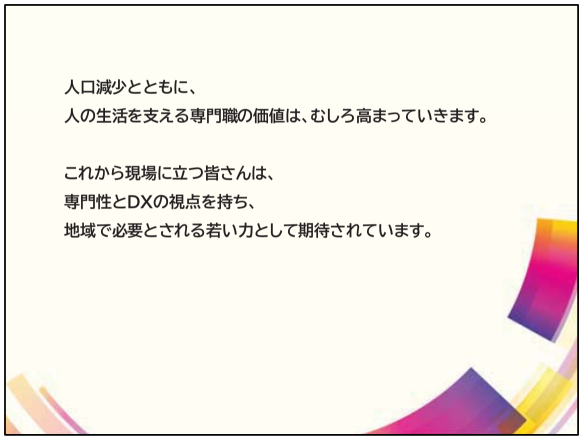


第5節　地域における保育と介護の将来像

DXを活用することで、地域の条件に合った保育・介護のかたちや、将来の姿を考えていきます。

地域の条件に合った運営を行うことで、無理のない体制づくりが可能になります。
その中で、保育や介護それぞれの専門性が活きる現場が整い、判断や支援の質を安定させることにつながります。
また、働き続けられる環境を整えることで、人に頼りきらない形での支援が実現しやすくなります。
こうした取り組みが、持続可能な地域づくりへとつながっていきます。

DXは、地域の課題を一気に解決するものではありません。
しかし、地域の条件を踏まえて活用することで、保育と介護を支え続けられる将来像を、現実的に描くことができます。



人口減少とともに、人の生活を支える専門職の価値は、むしろ高まっていきます。
これから現場に立つ皆さんは、専門性とDXの視点を持ち、地域で信頼され、必要とされ続ける存在として期待されています。

教材名:　人口減少地域における保育・介護DXリテラシー

章番号	問題番号	問題文	選択肢	解答	解説
1	1	DX（デジタルトランスフォーメーション）の定義として、最も適切なものはどれですか？	a 紙の書類をスキャンしてデータ化すること b チャットツールで連絡を速くすること c デジタルで仕事の仕組みや判断のあり方を変えること d 全てのアナログ作業を機械に置き換えること	c デジタルで仕事の仕組みや判断のあり方を変えること	単なるデジタル化ではなく、それによって仕事の進め方や仕組みを改善することがDXです。
1	2	DXの導入によって、現場で期待される「情報の変化」について正しい説明はどれですか？	a 作業速度が上がるだけで、伝わり方は変わらない b 判断に必要な情報が整理され、役割分担が進む c 蓄積されたデータで、人間が考えなくて済むようになる d 情報がオープンになり、個人の判断が不要になる	b 判断に必要な情報が整理され、役割分担が進む	情報を整理して共有することで、特定の個人に依存せずチームで判断・協力しやすくなります。
1	3	人口減少地域の現場が抱える「情報の構造的な課題」として、解決すべき点は何ですか？	a 都会に比べて通信インフラが不足していること b 記録の量が多く、物理的な保管場所が足りないこと c 特定の職員に情報や判断が依存し、不在時に業務が止まること d 職員のITスキルに差があり、機械を触れる人が限られること	c 特定の職員に情報や判断が依存し、不在時に業務が止まること	人手が少ない地域では、属人化を解消し、誰でも情報を基に動ける仕組み作りが最優先です。
1	4	専門職による判断とデジタル技術（DX）の理想的な関係はどれですか？	a 熟練者の経験をデータ化し、AIによる自動判断に切り替える b 経験が浅い職員でも迷わないよう、全ての対応をマニュアル化する c 専門職が質の高い判断をするための「補助」として情報を活用する d 現場の負担を減らすため、情報の記録はすべて機械に任せる	c 専門職が質の高い判断をするための「補助」として情報を活用する	デジタルはあくまで道具です。専門職がより良いケアを判断するための材料を整えるのが役割です。
1	5	デジタル活用の「目的」について、現場が注意すべき考え方はどれですか？	a 紙をなくすことや、機器の導入自体を目的化しない b 現場の負担軽減よりも、最新機器の導入率を優先する c 補助金を得るために、多機能な高額システムを導入する d 職員の意見を聞かずに、管理職だけで導入機種を決める	a 紙をなくすことや、機器の導入自体を目的化しない	導入自体が目的になると現場が操作に振り回されます。解決したい課題を明確にすることが重要です。
2	6	人口減少地域でサービスを継続するために必要な「地域の現実」の捉え方は？	a 都市部と同じ成功モデルを、時間をかけて再現する b 人手や資源に制約があることを前提に仕組みを作る c 利用者の減少に合わせて、サービスの種類を大幅に絞る d 外部からのボランティアに頼る体制を永続的に構築する	b 人手や資源に制約があることを前提に仕組みを作る	資源が限られる現実を認め、その条件でも質の高いサービスを維持できる工夫が求められます。
2	7	人手不足の現場において、効率化や分担の見直しが必要な主な理由は？	a 職員に余計な仕事をさせず、楽をさせるため b 限られた人数で、増加する支援ニーズに応え続けるため c 経営コストを削減し、利益を最大化するため d 職員のITスキルを無理やり向上させるため	b 限られた人数で、増加する支援ニーズに応え続けるため	一人あたりの負担が増える構造を理解し、チーム全体で持続可能な働き方に変える必要があります。
2	8	小規模体制の現場で「属人化（特定の人しか分からない状態）」が招くリスクは？	a 専門性が高まり、サービスの質が向上する b 特定の職員がいないと判断ができず、現場が混乱する c 役割が明確になり、他の職員の責任が軽くなる d 職員同士の結束力が、自然と強まる	b 特定の職員がいないと判断ができず、現場が混乱する	情報が人に依存すると、不在時の対応遅れや、その人への過度な負担集中が発生します。
2	9	地域資源を前提に考える際、DXが果たすべき役割として正しいものは？	a 新しい施設や人材を外部から大量に呼び込むこと b 今ある限られた資源を、デジタルで効率的に繋ぎ活用すること c 地域特有の慣習をすべて廃止し、デジタル中心に変えること d 外部の専門家にすべての判断をアウトソーシングすること	b 今ある限られた資源を、デジタルで効率的に繋ぎ活用すること	限られた人材や施設を最大限に活かすため、情報の共有や連携をデジタルで支えることが有効です。
2	10	都市型モデルを人口減少地域に導入する際、直面しやすい課題はどれですか？	a 最新の機器を導入するための予算が、都会より多くかかる b 分業を前提とした仕組みが、少人数の現場に合わない c 職員の年齢層が高いため、デジタルの活用自体が不可能である d 地域の利用者が、デジタルの活用に強く反対する	b 分業を前提とした仕組みが、少人数の現場に合わない	専門分化された都市型モデルは、一人が多役を担う地域の現場では逆に負担になることがあります。
3	11	日々の仕事の流れを整理し、改めて確認する最大の目的は何ですか？	a 職員のサボりや無駄な動きを、厳しくチェックするため b 慣習で行っている作業の中に、無理や無駄がないか見つけるため c 記録の時間を削って、その分、直接介助の時間を増やすため d マニュアルを書き換え、職員に厳しいルールを課すため	b 慣習で行っている作業の中に、無理や無駄がないか見つけるため	「当たり前」の作業を疑い、どこにデジタルの助けが必要かを見極めるために見える化します。

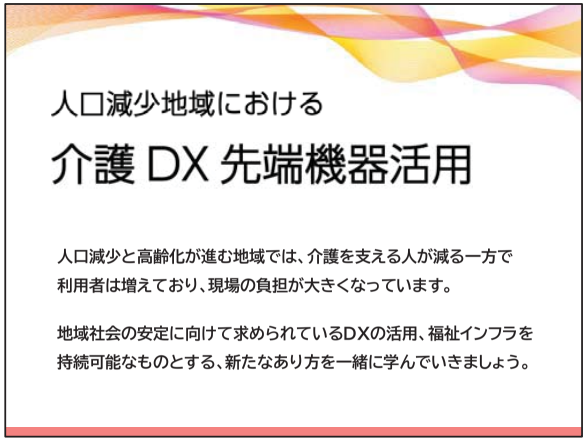
3	12	業務における「情報の受け渡し」を整理することで、明確になることは？	a 誰が一番、責任を持って仕事をしているか b どの場面で情報が止まり、判断が遅れているか c 誰が一番、記録を書くのが遅いか d 会議に誰を呼れば、一番早く終わるか	b どの場面で情報が止まり、判断が遅れているか	情報の流れを知ることで、チームの連携がスムーズにいかない「原因」を特定できます。
3	13	現場で特定の経験者に負担が集中する「構造的な原因」は何ですか？	a その人の能力が高すぎて、周りが頼り切っていること b 判断の根拠が言葉にされず、他の職員が動けないこと c 周囲の職員が、意図的に難しい判断を避けていること d 施設長が、特定の職員ばかりに仕事を命じていること	b 判断の根拠が言葉にされず、他の職員が動けないこと	経験や知識が共有可能な「データ」になっていないことが、負担の偏りを生む根本原因です。
3	14	現場で情報共有が後回しになりやすい「仕組み上の要因」はどれですか？	a 職員が記録の重要性を、正しく理解していないから b ケアの最中に、情報を入力・確認する環境が整っていないから c 口頭での伝達だけで、十分に仕事が回っているから d 情報を共有しても、ケアの質には関係がないから	b ケアの最中に、情報を入力・確認する環境が整っていないから	忙しさのせいにするのではなく、動線や道具（スマホ等）の問題として捉える必要があります。
3	15	仕事の流れを「見える化」することが、DX導入の土台となる理由は？	a 導入するシステムの機能を、網羅的に把握できるから b どこをデジタルで解決すべきか、優先順位がはっきりするから c 職員全員に、IT化への危機感を持たせることができるから d 導入にかかる費用を、正確に見積もることができるから	b どこをデジタルで解決すべきか、優先順位がはっきりするから	現状の課題が明確になって初めて、どのデジタルツールが現場に有効かを判断できます。
4	16	情報を正確に捉える際、まず区別すべき二つの要素として正しいものは？	a 過去のデータと、現在の新しいデータ b 実際に起きた「事実」と、自分の「感想や推測」 c 声で聞いた内容と、文字で書かれた内容 d 緊急性の高い情報と、緊急性の低い情報	b 実際に起きた「事実」と、自分の「感想や推測」	感想が事実のように伝わると判断を誤ります。主観を分けて記録することが連携の基本です。
4	17	「共有を前提とした記録」において、最も重視すべき書き方はどれですか？	a 自分だけがわかれば良いという備忘録の書き方 b その場にいない人でも当時の状況が具体的にイメージできる書き方 c できるだけ文字数を減らし、箇条書きだけで簡潔に済ませる書き方 d 自分の感情を詳しく書き、当時の大変さを伝える書き方	b その場にいない人でも当時の状況が具体的にイメージできる書き方	チームケアでは、不在の職員や他職種が読んで正しく状況を把握できる記録が不可欠です。
4	18	情報を「データとして活用しやすい形」にする工夫はどれですか？	a 自由記述の欄を増やし、詳しい内容を自由に書けるようにする b 基準を揃えた数値や選択肢、共通のチェック項目を用いる c 職員ごとに個性を出した、表現豊かな文章で記録を残す d 記録の時間を短縮するため、記号だけで済ませるルールを作る	b 基準を揃えた数値や選択肢、共通のチェック項目を用いる	形式を揃えることで、後から「いつもとの違い」をグラフや表で客観的に比較可能になります。
4	19	情報過多な現場で、判断を迷わせないための「情報の整理」とは？	a 全ての状態変化を、時系列で漏れなく詳細に記録すること b 判断の根拠となる重要な情報を絞り込み、目立たせること c 職員全員の意見を均等に集め、平均的な意見を採用すること d 難しい判断が必要な情報は、あえて記録から外しておくこと	b 判断の根拠となる重要な情報を絞り込み、目立たせること	情報を「集める」だけでなく「捨てる・整理する」ことで、迅速な判断を助けることができます。
4	20	少人数の現場で、情報共有の漏れを防ぐためのデジタル活用法は？	a 毎日全員が揃うまで、重要な決定を先送りにする b 伝達事項をチャット等で一斉送信し、既読状況を把握する c 全ての情報を一人で管理し、責任を持って全員に伝える d 情報をホワイトボードに書き、全員が見に来るのを待つ	b 伝達事項をチャット等で一斉送信し、既読状況を把握する	場所や時間に縛られず、必要な人がいつでも正確な情報にアクセスできる仕組みが重要です。
5	21	保育現場での「判断」において、特に重要とされる特徴は何ですか？	a 常にマニュアル通りの対応を、厳格に貫くこと b 子どもの日々の変化に合わせ、状況に応じて柔軟に対応する c 迷ったときは、最新のAIが提案する正解にすべて従う d 効率を優先し、全員に対して同じ声かけや支援を行う	b 子どもの日々の変化に合わせ、状況に応じて柔軟に対応する	保育は成長過程にあり、一人ひとりの個性や瞬時の変化を捉えた判断が専門性です。
5	22	保育者が子どもの状態を捉える際、言葉以外で注目すべき視点は？	a 他の子どもと比べて、発達が早いか遅いかという点 b 遊びの中での表情や動きの変化、言葉にならない感情のサイン c 保護者の社会的地位や、家庭の経済的な環境の変化 d 教室内にある玩具や設備が、安全に配置されているか	b 遊びの中での表情や動きの変化、言葉にならない感情のサイン	専門職は生活の連続性の中で、些細なしぐさや目線の変化から子どもの内面を読み取ります。
5	23	保育現場で扱う「多様な情報」を、DXで管理する最大のメリットは？	a 子どもの成長記録を、親に見せるための「商品」にできる b 膨大な情報から、子どもの健康や発達の予兆に気づきやすくなる c 職員の勤務実態を監視し、サボリを完全に防止できる d 保育の質を数値でランキングし、園同士で競い合える	b 膨大な情報から、子どもの健康や発達の予兆に気づきやすくなる	情報がつながることで、一人の職員の気づきをチームの共通認識として早期支援に活かせます。

5	24	保育の専門性を「言語化（言葉にする）」することの効果はどれですか？	a 職員の教養を高め、保護者に対して権威を示すことができる b 熟練者の「勘」の根拠を共有でき、若手の教育や連携に役立つ c 記録の量を増やすことで、行政からの評価が高くなる d 自分の判断が正しいことを、周囲に強く証明できる	b 熟練者の「勘」の根拠を共有でき、若手の教育や連携に役立つ	言葉にできない専門性を共有可能な形にすることが、チーム全体の保育の質を底上げします。
5	25	保育判断を支えるDX（デジタル）の正しい位置付けはどれですか？	a 子どもの安全管理をすべて機械に任せ、人間は休憩する b 判断に必要な情報を整理し、保育者がより深く考えるのを助ける c 熟練保育士の代わりに、AIが毎日のカリキュラムを決定する d 記録や報告書をすべてAIが作成し、人間は確認もしない	b 判断に必要な情報を整理し、保育者がより深く考えるのを助ける	デジタルは判断を代行しません。保育者がより子どもと向き合い、考える時間を創ります。
6	26	介護の専門的な「判断」において、質の高さを左右する視点は？	a 常に最新の医療知識に基づき、機械的な管理を行うこと b 利用者の「いつもの状態」を知り、わずかな変化を捉える c 利用者の要望をすべて聞き入れ、指示通りに動くこと d 介護保険の点数を、いかに効率よく算定できるか考える	b 利用者の「いつもの状態」を知り、わずかな変化を捉える	介護は生活を支える仕事です。生活リズムや表情の小さなズレに気づくことが専門性です。
6	27	高齢者の状態変化を追い続ける際、デジタル技術が役立つ場面はどれですか？	a バイタル等のデータを自動でグラフ化し、推移を一目で把握する b 職員の代わりに、AIが利用者と24時間休まず対話をする c 徘徊する利用者を、部屋から出られないように自動で施錠する d 全員のケアプランを、AIが共通のテンプレートで自動作成する	a バイタル等のデータを自動でグラフ化し、推移を一目で把握する	データの推移が見える化されることで、目視だけでは気づけない不調の兆候を捉えられます。
6	28	介護で扱う情報の「正確さ」が、安全なケアに繋がる理由は？	a 記録が正確であれば、事故が起きても職員の責任を問われないから b 医療職など他職種との連携において、誤った判断を防ぐため c 正確な記録をたくさん残すことで、行政処分を免れるため d 家族に対して、適切なサービスを提供している証拠になるため	b 医療職など他職種との連携において、誤った判断を防ぐため	正確な情報は、身体状態や服薬管理など、命に関わる多職種連携の重要な基盤となります。
6	29	介護の判断根拠を「言葉にする」ことが、チームに与える影響は？	a 判断の基準が統一され、どの職員が対応しても質の高いケアができる b 職員の作業時間が大幅に増え、現場の不満が高まる c 専門用語を多用することで、家族が介入しにくい雰囲気を作る d リーダーの判断に誰も異を唱えられないような環境ができる	a 判断の基準が統一され、どの職員が対応しても質の高いケアができる	属人的な判断を言葉にすることで、チーム全体で支援の方向性を揃えることができます。
6	30	介護判断を支えるDXの役割として、適切な考え方はどれですか？	a 利用者の行動をデータで完全に予測し、先回りして管理すること b 判断材料を整理して提示し、専門職が最終的な意思決定を行う支援 c 職員の経験や勘を「古いもの」として排除し、データだけを信じる d 面倒な介護記録を、AIが本人の許可なく自動で要約・公開する	b 判断材料を整理して提示し、専門職が最終的な意思決定を行う支援	DXは判断の主役ではありません。専門職が自信を持って判断するための背中を押す道具です。
7	31	保育と介護の両方の現場に共通する「仕事の本質」は何ですか？	a 決まったマニュアル通りに対象者を管理・統制すること b 対象者の生活に寄り添い、変化を捉えて意思決定を支える c 事務作業の速さと正確さで、組織の効率を追求すること d 最新のテクノロジーを導入して、職員の人数を削減すること	b 対象者の生活に寄り添い、変化を捉えて意思決定を支える	どちらも「人の生活」を対象としており、状況に応じた継続的な判断が求められる点にあります。
7	32	「判断の前提となる情報」の重要性について、正しい認識はどれですか？	a 情報が不足していても、経験があれば常に正しい判断ができる b 観察や記録によって得られる情報の質が、判断の質を決定づける c 情報は多ければ多いほど良く、整理する必要はない d 情報の共有よりも、その場の職員の直感を優先すべきである	b 観察や記録によって得られる情報の質が、判断の質を決定づける	良質な判断には、良質な情報が欠かせません。情報の整理・共有がケアの質そのものです。
7	33	現場で役割が特定の人に「固定」されてしまう、大きな要因は何ですか？	a 特定の職員が、自分にしかできない仕事を作って独占している b 判断に必要な情報が特定の人の頭の中にしかなく、共有されていない c 他の職員に、新しい仕事を覚えようとする意欲が欠けている d 組織の規模で、役割を分担することが禁止されている	b 判断に必要な情報が特定の人の頭の中にしかなく、共有されていない	情報の不透明さが役割を固定させます。情報を開示し共有することで分担が可能になります。
7	34	判断や役割の偏りを解消するために、まず着手すべきことはどれですか？	a 特定の人に頼りすぎている現状を、厳しく批判し反省させる b 属人的な知識や情報を「組織の共有データ」に変える仕組み作り c 役割を強制的にローテーションさせ、無理やり仕事を覚えさせる d 人を増やすまで、現状の負担の偏りは仕方がないと諦める	b 属人的な知識や情報を「組織の共有データ」に変える仕組み作り	個人の努力の問題ではなく、情報の持ち方という「仕組み」から変えていく必要があります。
7	35	DXにより「情報の持ち方」を変えた場合、現場に起きる良い影響は？	a 誰でも同じ情報にアクセスでき、判断を分担し助け合えるようになる b 責任の所在が曖昧になり、誰も責任を取らなくて済むようになる c 情報を共有する手間が増え、職員の残業時間が大幅に増加する d 管理職が現場のすべてを把握し、細かい指示を出しやすくなる	a 誰でも同じ情報にアクセスでき、判断を分担し助け合えるようになる	情報を「個」から「チーム」のものにすることで、役割の柔軟性が生まれ、負担も分散します。

8	36	「人の手と経験」だけに頼り続けてきたこれまでの在り方の限界とは？	a 技術が進化しすぎて、人間の介助が必要なくなったこと b 人手不足で、個人の努力だけではサービスを維持できなくなったこと c 職員が楽をすることに慣れてしまい、質の高いケアができなくなった d 昔のやり方が古すぎて、今の利用者には受け入れられないこと	b 人手不足で、個人の努力だけではサービスを維持できなくなったこと	人口減少下では、人の精神力や体力に頼るモデルは早晩立ち行かなくなります。
8	37	人口減少地域で「持続可能な支援体制」をつくるための必須条件は？	a 職員に長時間労働を強いてでも、サービスの質を維持すること b 少人数でも情報が滞らず、専門職が判断に集中できる仕組み c すべてのサービスを自動化し、無人で運営できる形を目指すこと d 都会の成功事例を参考に、大規模な施設へと集約すること	b 少人数でも情報が滞らず、専門職が判断に集中できる仕組み	限られた人員を事務や単純作業から解放し、専門性が最も発揮される場面に集中させます。
8	38	DXで再設計された現場において、専門職である「人」の真の価値は？	a 機械やタブレットの操作に誰よりも精通していること b データに基づき、一人ひとりの背景に合わせた細やかな判断を行う c システムが故障したときに、自分の手で修理・復旧ができること d 機械が記録したデータを、ただ眺めて確認すること	b データに基づき、一人ひとりの背景に合わせた細やかな判断を行う	データの先にある「人の心や生活」を読み解き、意思決定を支えるのは人間にしかできません。
8	39	DXを活用した「共有の仕組み」が、現場にもたらす最大の安心とは？	a 自分のミスを機械がすべて自動で修正してくれる安心感 b 自分が不在のときでも、適切なケアがチームで継続される安心感 c 24時間機械が見守っているため、何もしなくて良い安心感 d 難しい判断をすべて機械に任せ、責任を負わなくて良い安心感	b 自分が不在のときでも、適切なケアがチームで継続される安心感	情報が背景まで共有されることで、チームとして利用者を守り続けることができます。
8	40	DXを活用した先にある、地域の保育・介護の将来像として正しいものは？	a デジタル化によって、地域の人間関係が希薄になった未来 b 地域の制約を克服し、専門職が誇りを持って働き続けられる未来 c すべての支援がデジタルで完結し、人が関わらなくなる未来 d 都会と同様の画一的なサービスが、地域全域に提供される未来	b 地域の制約を克服し、専門職が誇りを持って働き続けられる未来	DXは地域を支える専門職の価値を最大化し、誰もが安心して暮らせる社会を守る力です。

資料 3：開発教材プロトタイプ

専門科目：「人口減少地域における介護 DX 先端機器活用」



人口減少地域における介護DX先端機器活用

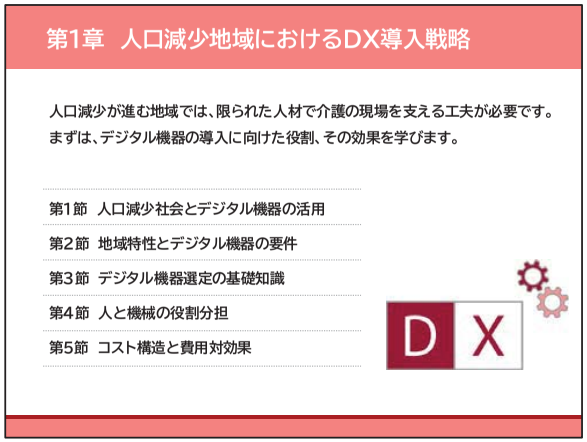
人口減少と高齢化が進む地域では、介護を支える人が減る一方で利用者は増えており、現場の負担が大きくなっています。

地域社会の安定に向けて求められているDXの活用、福祉インフラを持続可能なものとする、新たなあり方を一緒に学んでいきましょう。


第1章：人口減少地域におけるDX導入戦略
・第1節：人口減少社会とデジタル機器の活用
・第2節：地域特性とデジタル機器の要件
・第3節：デジタル機器選定の基礎知識
・第4節：人と機械の役割分担
・第5節：コスト構造と費用対効果
第2章：分野で活用が進む最新デジタル機器
・第1節：記録業務の音声入力とデジタル化
・第2節：スマートフォンの業務活用と連携
・第3節：タイムスタディ調査による業務の可視化
・第4節：バックオフィスDX
・第5節：通信環境の選択
・第6節：人口減少地域での移動削減と時間創出
第3章：支援用機器の種類・活用例・導入効果・課題・事例
・第1節：アシスト機器（移乗支援）
・第2節：コミュニケーション用機器
・第3節：運搬・移動支援機器
・第4節：成功事例
・第5節：実装の課題
・第6節：人口減少地域での道路保守と運用
第4章：センサー機器の種類・活用例・導入効果・課題・事例
・第1節：環境モニタリングセンサー
・第2節：バイタルセンシングと活動量計
・第3節：睡眠・シルエットセンサー
・第4節：排泄予知・検知システム
・第5節：効果的活用事例
・第6節：人口減少地域での集落見守り自動化
第5章：AI活用の種類・活用例・導入効果・課題・事例
・第1節：科学的介護情報システム（LIFE）の活用
・第2節：データに基づくケアプランの作成
・第3節：生成AI・対話AIの活用
・第4節：AI行動解析による認知症ケア
・第5節：業務時間削減の成功事例
・第6節：人口減少地域でのAIによる判断支援
第6章：その他のデジタル機器を活用した介護事例
・第1節：ケアプランデータ連携システム
・第2節：AIアバターと観覚支援ツール
・第3節：遠隔医療・オンライン面会
・第4節：地域医療・介護情報連携
・第5節：リハビリテーションDXとAI運動解析
・第6節：人口減少地域での生活インフラ連動
第7章：DXに関する法制度と倫理
・第1節：法規制とガイドライン
・第2節：データ保護とプライバシー
・第3節：デジタル機器利用における倫理的考慮
・第4節：アクセシビリティの確保
・第5節：労働法規とデジタル活用
・第6節：人口減少地域での規制緩和の活用
第8章：未来の姿と展望
・第1節：最新動向
・第2節：人間中心の設計
・第3節：個別化とパーソナライズケア
・第4節：グローバルな動向
・第5節：社会システムとの統合
・第6節：人口減少地域での持続可能な地域再編
第9章：人口減少地域の変革マインドセット
・第1節：人口減少と変革の受容
・第2節：デジタルを武器にする「使う力」
・第3節：現場を動かすリーダーシップ
・第4節：組織の合意形成と地域連携
・第5節：変革を支える持続的な人材育成

目次

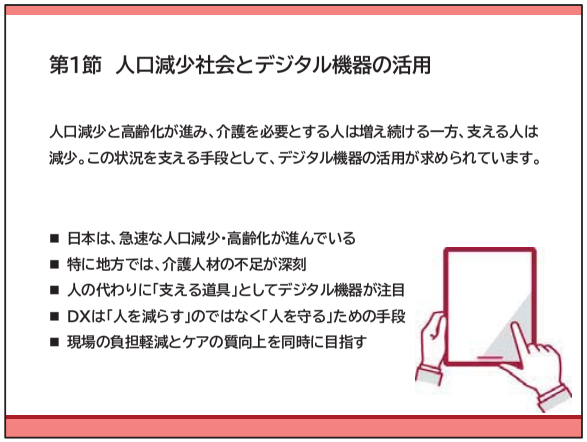
第1章　人口減少地域におけるDX導入戦略
第2章　分野で活用が進む最新デジタル機器
第3章　支援用機器の種類・活用例・導入効果・課題・事例
第4章　センサー機器の種類・活用例・導入効果・課題・事例
第5章　AI活用の種類・活用例・導入効果・課題・事例
第6章　その他のデジタル機器を活用した介護事例
第7章　DXに関する法制度と倫理
第8章　未来の姿と展望
第9章　人口減少地域の変革マインドセット



第1章　人口減少地域におけるDX導入戦略

人口減少が進む地域では、限られた人材で介護の現場を支える工夫が必要です。
まずは、デジタル機器の導入に向けた役割、その効果を学びます。

第1節　人口減少社会とデジタル機器の活用
第2節　地域特性とデジタル機器の要件
第3節　デジタル機器選定の基礎知識
第4節　人と機械の役割分担
第5節　コスト構造と費用対効果



第1節　人口減少社会とデジタル機器の活用

人口減少と高齢化が進み、介護を必要とする人は増え続ける一方、支える人は減少しています。
深刻なこの課題を解消することは急務課題となっており、この状況を支える手段として、デジタル機器の活用が求められています。

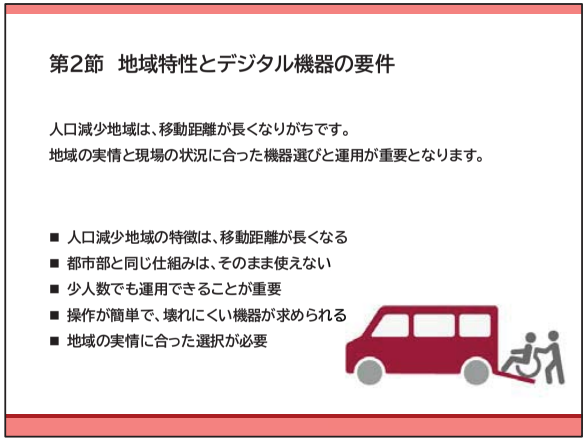
重大かつ急速な課題として、

日本は急速な人口減少・高齢化が進んでいる。
特に地方では、介護人材の不足が深刻。

ということがあります。

そのため、
人の代わりに支える道具としてデジタル機器が注目されています。

DXは、人を減らすのではなく人を守るための手段であり、現場の負担軽減とケアの質向上を同時に目指すものです。



第2節　地域特性とデジタル機器の要件

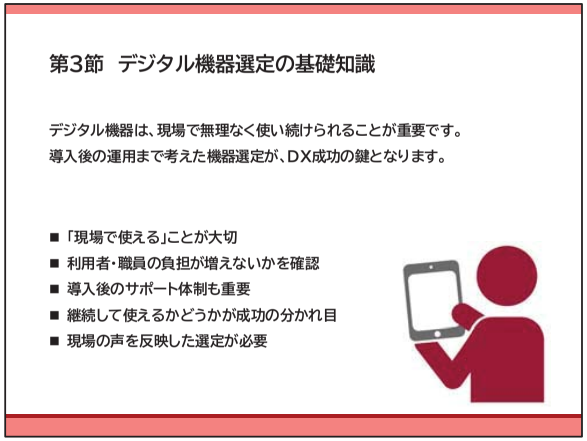
人口減少地域は、交通手段が限られ、移動距離が長くなりがちです。
そのような地域こそデジタル活用が求められており、地域の実情と現場の状況に合った機器選びと運用が重要となります。

現場の特徴として、

人口減少地域の特徴は、移動距離が長くなる。
都市部と同じ仕組みは、そのまま使えない。
ということがあります。

そのため、
少人数でも運用できることが重要で、操作が簡単、壊れにくい機器が求められます。

このように、地域の実情に合った選択が必要です。

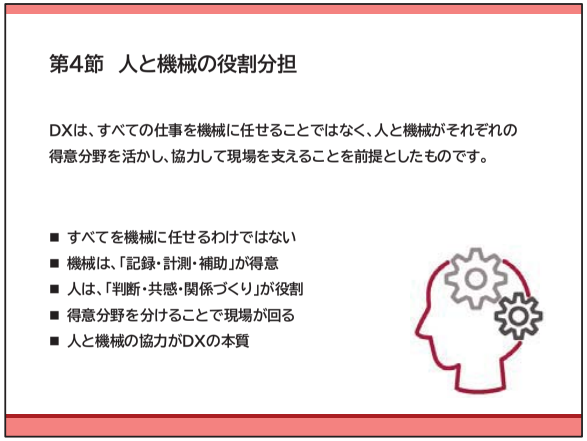


第3節　デジタル機器選定の基礎知識

デジタル機器は、移動なども考慮し、現場で無理なく使い続けられることが重要です。
また、導入後の運用まで考えた使える機器の選定が、DX成功の鍵となります。

特に大切なことは、現場で使えるという点です。
利用者・職員の負担が増えないかを確認しなければいけません。

また、
導入後のサポート体制も重要です。
短期間で終えるものではなく、継続して使えるかどうかが成功の分かれ目で、これには現場の声を反映した選定が必要となります。



第4節　人と機械の役割分担

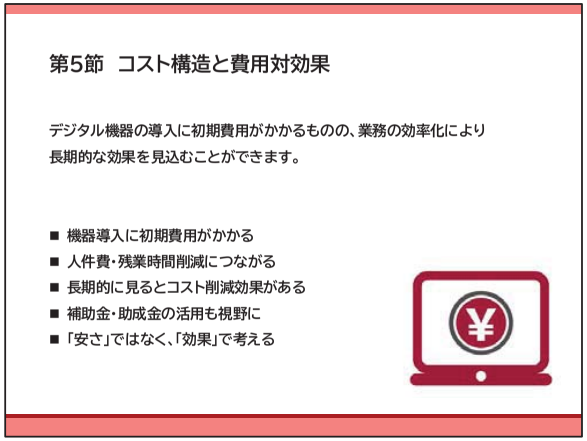
DXは、すべての仕事を機械に任せることではなく、人と機械がそれぞれの得意分野を活かし、協力して現場を支えることを前提としたものです。

利用者は人です。
向き合う職員の役割がなくなるわけではありません。
すべてを機械に任せるわけではないという認識を忘れないようにしましょう。

機械は、私たち人間が間違いやすい記録、計測が得意です。また、指示を受けて補助をすることにも適しています。

そのため、
人は、判断・共感・関係づくりが役割となり、得意分野を分けることで現場が円滑に動いていきます。

このように、
人と機械の協力がDXの本質です。

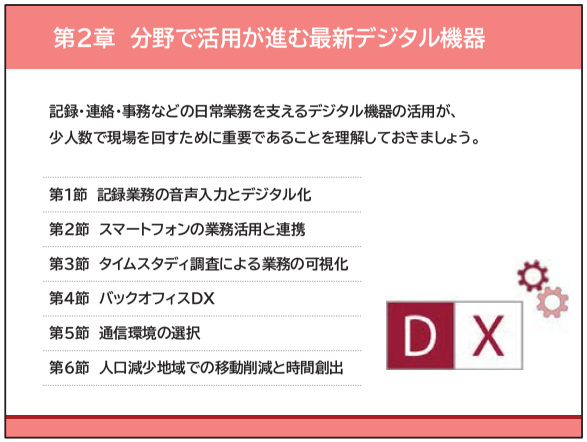


第5節　コスト構造と費用対効果

デジタル機器の導入に初期費用がかかるものの、業務の効率化により長期的な効果を見込むことができます。

これまで人の手でおこなってきたことをデジタルで運用するにあたっては、機器導入に初期費用がかかり、一時的には懸念されるかもしれません。
しかし、人件費・残業時間削減につながるため、長期的に見るとコスト削減効果があります。

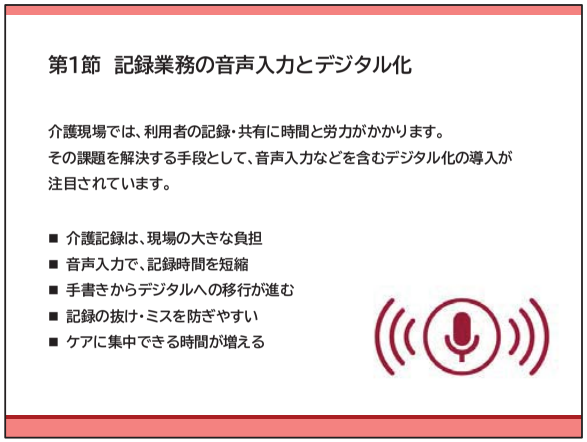
自治体などでは、補助金・助成金も用意されているため、それらの活用も視野に入れると良いでしょう。
一時的なものでないからこそ、導入時の安さではなく、効果で考えることが求められます。



第2章　分野で活用が進む最新デジタル機器

記録・連絡・事務などの日常業務を支えるデジタル機器の活用が、少人数で現場を回すために重要であることを理解しておきましょう。

第1節　記録業務の音声入力とデジタル化
第2節　スマートフォンの業務活用と連携
第3節　タイムスタディ調査による業務の可視化
第4節　バックオフィスDX
第5節　通信環境の選択
第6節　人口減少地域での移動削減と時間創出

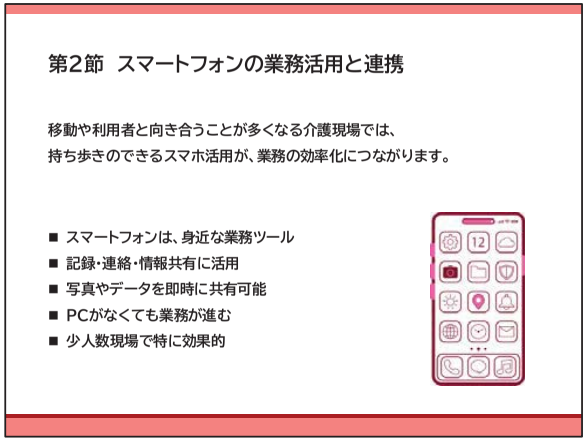


第1節　記録業務の音声入力とデジタル化

介護現場では、利用者の記録・共有に時間と労力がかかります。
その課題を解決する手段として、音声入力などを含むデジタル化の導入が注目されています。

介護記録は、現場の大きな負担です。
そのため、音声入力で記録時間を短縮したり、
手書きからデジタルへの移行が進めると、記録の抜け・ミスが防ぎやすくなります。

その結果、ケアに集中できる時間が増えるという利点があります。
このように、デジタル化で業務を見直していくと、人でなければできない業務に集中しやすくなります。

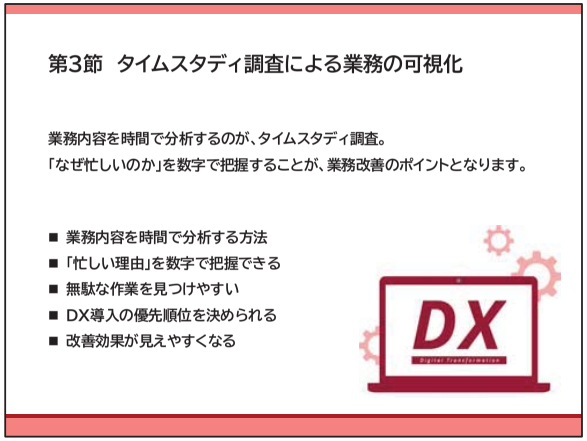


第2節　スマートフォンの業務活用と連携

移動や利用者と向き合うことが多くなる介護現場では、持ち歩きのできるスマホ活用が、業務の効率化につながります。

誰もが使いやすいスマートフォンは身近な業務ツールとして有効で、
記録・連絡・情報共有に活用したり、
写真やデータを即時に共有することもできます。

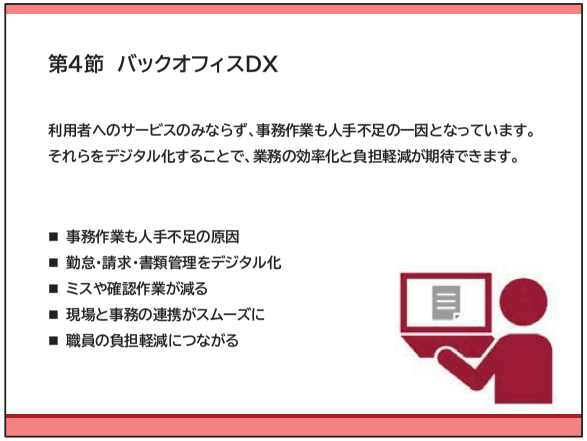
室内での移動だけでなく、地域への移動など、パソコンがなくても業務が進む仕組みは重要です。
特に、少人数現場では効果的。積極的に活用したいものです。



第3節　タイムスタディ調査による業務の可視化

業務内容を時間で分析するのが、タイムスタディ調査。業務量調査とも言います。
なぜ忙しいのか？ということを数字で把握することが、業務改善のポイントとなります。

業務内容を時間で分析する方法は、いつ・誰が・何を・どれくらいの時間かかるのかということを明確にすることができます。
忙しい理由を数字で把握できると、無駄な作業を見つけやすくなり、DX導入の優先順位を決めることができます。
また、導入後の改善効果も見えやすくなります。

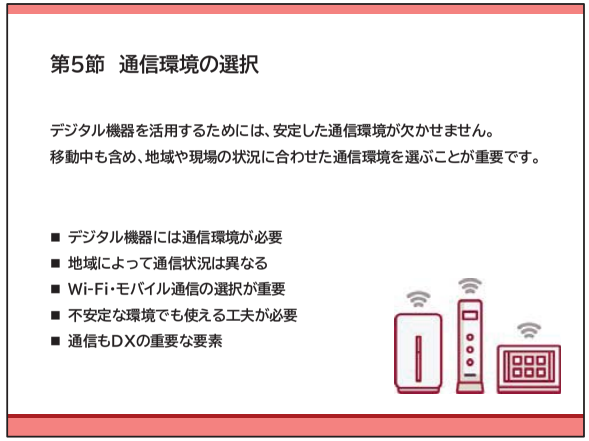


第4節　バックオフィスDX

利用者へのサービスのみならず、事務作業も人手不足の一因となっています。
それらをデジタル化することで、業務の効率化と負担軽減が期待できます。

利用者と向き合うことが多い現場ですが、そのことにまつわる事務作業も人手不足の原因です。
そのため、勤怠・請求・書類管理をデジタル化すると、ミスや確認作業が減少します。

現場と事務の連携がスムーズに進むことは、職員の負担軽減につながります。

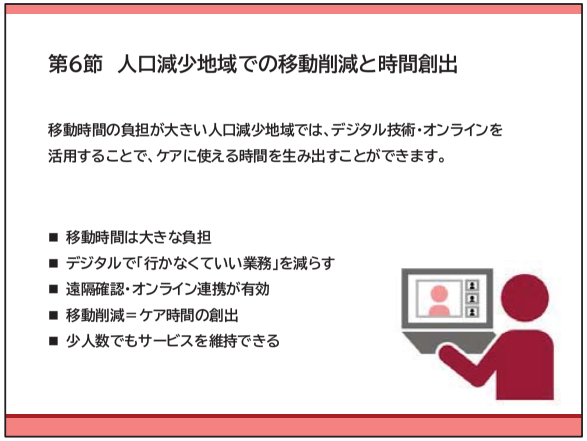


第5節　通信環境の選択

デジタル機器を活用するためには、安定した通信環境が欠かせません。
移動中も含め、地域や現場の状況に合わせた通信環境を選ぶことが重要です。

職員の負担が軽減されるデジタル機器の導入には、通信環境が必須となります。
地域によって通信状況は異なりますが、中山間地域などでは通信可能なエリアであっても通信が遮断されることも考えられます。

その場合も、Wi-Fi・モバイル通信の選択が重要で、メインの通信の他、不安定な環境でも使える工夫が必要となります。
通信もDXの重要な要素です。

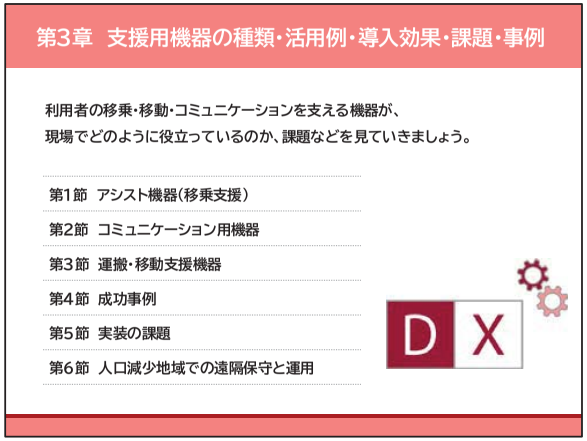


第6節　人口減少地域での移動削減と時間創出

移動時間の負担が大きい人口減少地域では、デジタル技術・オンラインを活用することで、ケアに使える時間を生み出すことができます。

移動時間は、往復となりますので大きな負担です。
そのような場合は、デジタルで行かなくていい業務を減らすことも視野に入れなければいけません。
天候などに左右されない安定した支援にもなり、遠隔確認・オンライン連携が有効です。

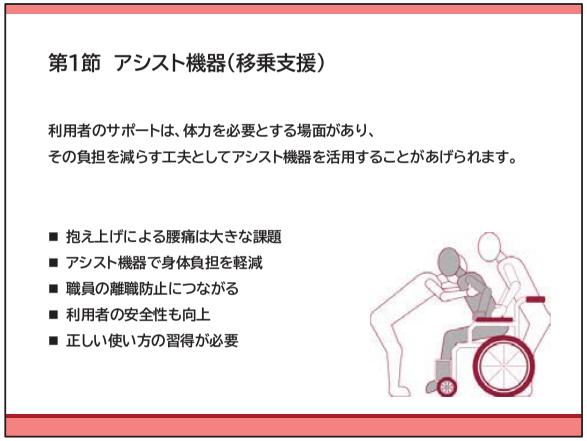
移動削減は、すなわちケア時間の創出です。
少人数でもサービスを維持できる仕組みがこれから求められます。



第3章　支援用機器の種類・活用例・導入効果・課題・事例

利用者の移乗・移動・コミュニケーションを支える機器が、現場でどのように役立っているのか、課題などを見ていきましょう。

第1節　アシスト機器、移乗支援
第2節　コミュニケーション用機器
第3節　運搬・移動支援機器
第4節　成功事例
第5節　実装の課題
第6節　人口減少地域での遠隔保守と運用

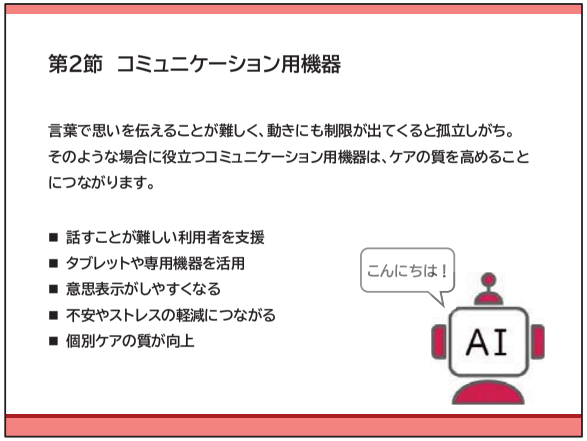


第1節　アシスト機器　移乗支援

利用者のサポートは、体力を必要とする場面があり、その負担を減らす工夫として
アシスト機器を活用することがあげられます。

これまで職員がおこなってきた抱え上げによる腰痛は、大きな課題です。
しかし、アシスト機器を使って、職員の身体負担を軽減することができれば長く勤務
することができ、離職防止につながります。

また、利用者の安全性も向上。
安心して、移乗支援装置を利用するためには、正しい使い方の習得が必要です。



第2節　コミュニケーション用機器

言葉で思いを伝えることが難しく、動きにも制限が出てくると孤立しがちです。
そのような場合に役立つコミュニケーション用機器は、ケアの質を高めることにつな
がります。

話すことが難しい利用者を支援するために、タブレットや専用機器を活用すれば、
意思表示がしやすくなります。
人にとって、話すという行動は、とても大切。
不安やストレスの軽減につながり、認知予防もできます。

個別ケアの質が向上するコミュニケーションロボットやコミュニケーション機器の積極
的な活用が望まれます。

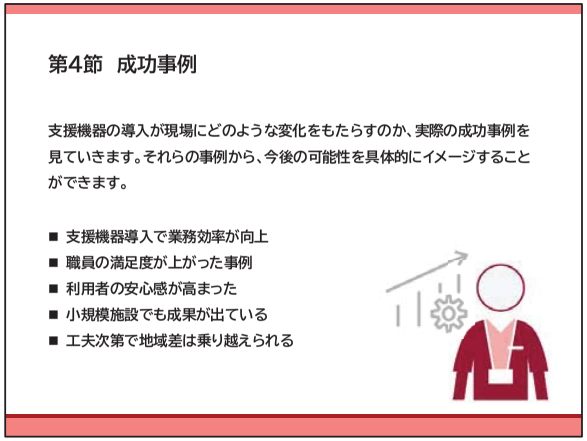


第3節　運搬・移動支援機器

介護の現場では、物品の運搬、職員や利用者の移動が日常的に発生します。
そのため、運搬・移動支援機器を活用し、負担軽減と安全性向上を考えます。

物品運搬は意外と負担が大きいため、ロボットや自動運搬機を活用すれば、職員の移動距離を減らせます。
転倒リスクの低減にもつながる機器の利用は、少人数施設で効果が高くなります。

運搬や移動は、誰でもできる作業と見られがちですが、実際には腰や膝への負担が大きい業務です。
支援機器を活用することで、無理のない働き方を支えることができます。

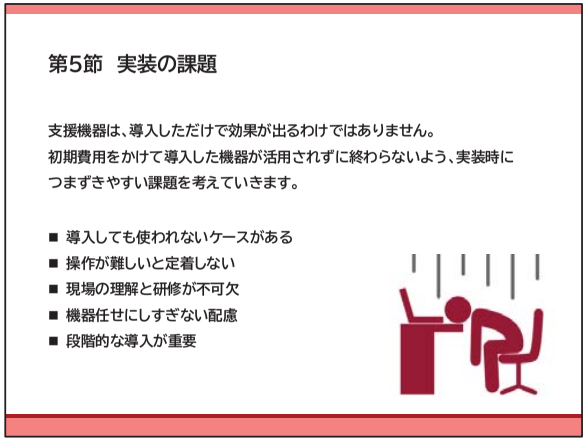


第4節　成功事例

支援機器の導入が現場にどのような変化をもたらすのか、実際の成功事例を見ていきます。それらの事例から、今後の可能性を具体的にイメージすることができます。

支援機器導入で業務効率が向上し、職員の満足度が上がった事例があります。
それにより、利用者の安心感が高まるという小規模施設でも成果が出ていますので、工夫次第で地域差は乗り越えられるということがわかります。

また、成功している事例には、導入そのものではなく、現場の課題に合わせた工夫や使い方があります。
規模や地域が違っても、そのような考え方や進め方は参考にすることができます。



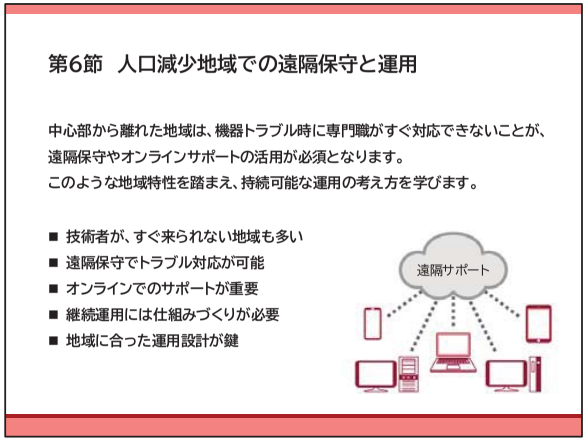
第5節　実装の課題

支援機器は、導入しただけで効果が出るわけではありません。
初期費用をかけて導入した機器が活用されずに終わらないよう、実装時につまずきやすい課題を考えていきます。

導入しても、使用が困難であったり、規模に合っていなかったりという、使われないケースがあります。
操作が難しいと定着しないことも導入時に考慮しなければいけません。

そのためには、現場で使用する職員の理解と研修が不可欠です。
機器任せにしすぎない配慮と、一度に入れ替えて混乱を招かないよう、段階的な導入が重要です。

また、実装段階でつまずく多くの原因は、何のために導入するのか？ということが共有されていないことにあり、目的を明確にし、現場と一緒に進める姿勢が求められます。

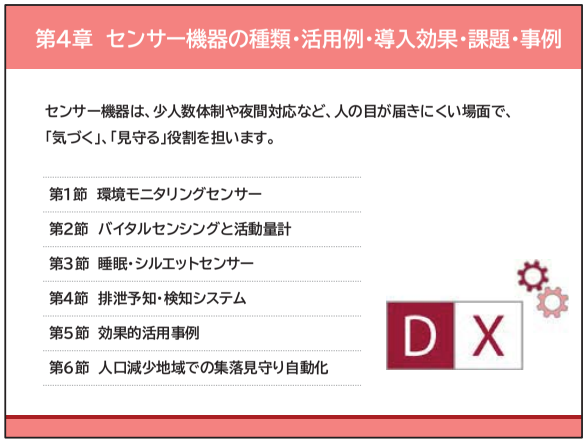


第6節　人口減少地域での遠隔保守と運用

中心部から離れた地域は、機器トラブル時に専門職がすぐ対応できないことが、遠隔保守やオンラインサポートの活用が必須となります。
このような地域特性を踏まえ、持続可能な運用の考え方を学びます。

トラブル時の対応は迅速であることがポイントですが、技術者がすぐ来られない地域も多いものです。
その場合、遠隔保守でトラブル対応が可能、オンラインでのサポートという点が重要です。

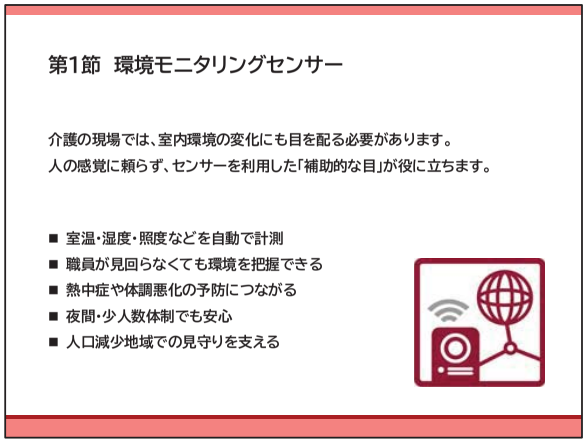
継続運用には仕組みづくりが必要ですので、移動時のことも充分に考え、地域に合った運用設計が鍵となります。
このような点が解消できれば、少人数でも機器を使い続けられる体制を整えることができます。



第4章　センサー機器の種類・活用例・導入効果・課題・事例

センサー機器は、少人数体制や夜間対応など、人の目が届きにくい場面で、気づく、
見守る役割を担います。

第1節　環境モニタリングセンサー
第2節　バイタルセンシングと活動量計
第3節　睡眠・シルエットセンサー
第4節　排泄予知・検知システム
第5節　効果的活用事例
第6節　人口減少地域での集落見守り自動化



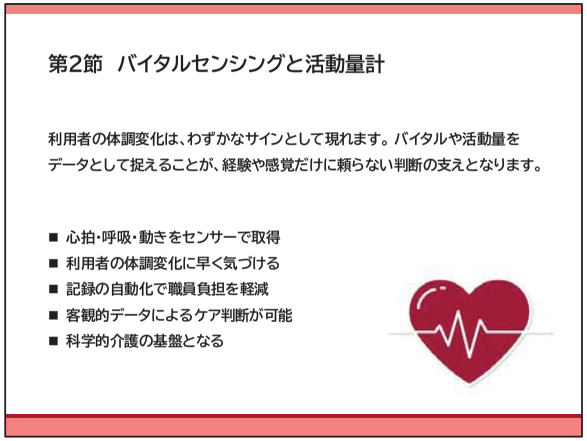
第1節　環境モニタリングセンサー

介護の現場では、室内環境の変化にも目を配る必要があります。
人の感覚に頼らず、センサーを利用した「補助的な目」が役に立ちます。

センサーは、室温・湿度・照度などを自動で計測し、職員が見回りをしなくても室内
環境を把握できるという利点があります。
これにより、暑さや寒さ、明るさの変化などに早く気づくことができ、熱中症や体調悪
化の予防につながります。
特に夜間や少人数体制の現場では、すべてを人の目で確認することが難しいため、
センサーによる見守りが安心です。
特に、人口減少地域においては、人の目が行き届きにくい状況を補う手段として、
環境モニタリングセンサーが必要とされています。

ただし、センサーは異常を「知らせる」ことが目的であり、判断や対応そのものを自
動で行うものではありません。
数値や通知をどのように受け取り、どの時点で人が対応するのかといった運用ルー
ルを明確にする必要があります。
また、センサーに頼りすぎず、人の観察や利用者との関わりと組み合わせて使うこ

とが、現場に合った活用につながります。

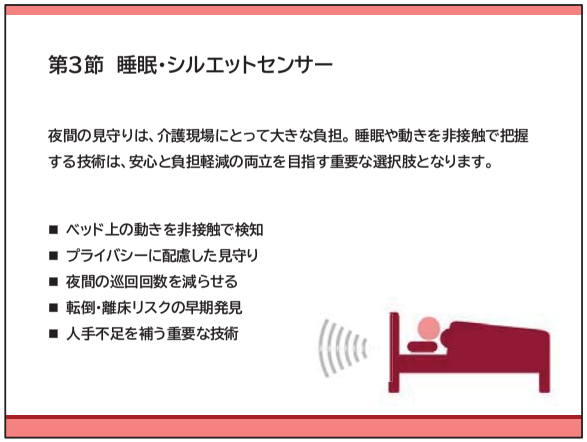


第2節　バイタルセンシングと活動量計

利用者の体調変化は、わずかなサインとして現れます。
バイタルや活動量をデータとして捉えることが、経験や感覚だけに頼らない判断の支えとなります。

バイタルセンシングや活動量計を用いることで、心拍・呼吸・動きといった情報をセンサーで取得し、利用者の体調変化に早く気づくことが可能になります。
これらのデータは、自動で記録されるため職員の記録負担を軽減し、記録漏れや主観によるばらつきを防ぐ効果があります。
客観的なデータをもとにすることで、ケアの判断や振り返りがしやすくなり、科学的介護を支える基盤として活用することができます。

この時、数値やグラフだけを見て判断してしまうと、利用者の表情や生活背景といった大切な情報を見落とすおそれがあります。
データは、判断材料の一つとして位置づけ、人の観察や対話と組み合わせて活用するという経験による判断も大切です。
導入時には、データの見方や共有方法を職員間で統一することが必須となります。



第3節　睡眠・シルエットセンサー

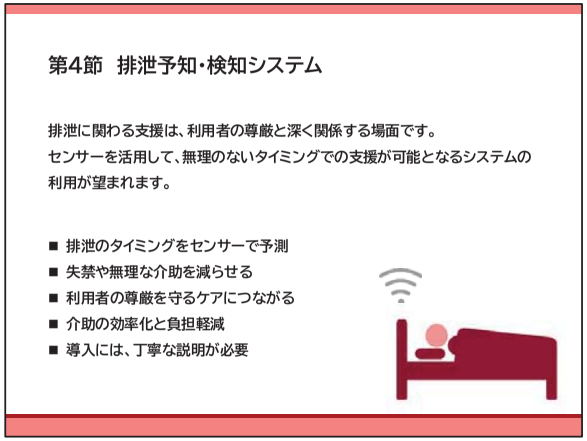
夜間の見守りは、介護現場にとって大きな負担。
睡眠や動きを非接触で把握する技術は、安心と負担軽減の両立を目指す重要な選択肢となります。

睡眠・シルエットセンサーは、ベッド上の動きや起き上がり、離床などを非接触で検知することができます。
カメラを使わず、姿や顔を映さない仕組みのため、利用者のプライバシーに配慮した見守りが可能です。

この活用は、夜間の巡回回数を減らすことができ、職員の身体的・精神的な負担軽減につながります。
また、転倒や離床のリスクを早期に把握できるため、事故防止の観点からも重要で、人手不足が深刻な現場においては、少人数体制を支える技術です。

しかし、センサーの通知が多すぎると、かえって職員のみならず、利用者にとっても負担になる場合があります。
どの動きを対応が必要なサインとするのかを細かく整理し、アラート設定や対応

ルールを明確にすることが求められます。



第4節　排泄予知・検知システム

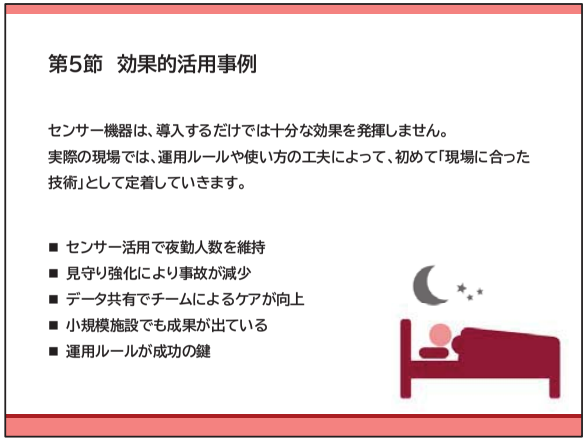
排泄に関わる支援は、利用者の尊厳と深く関係する場面です。
センサーを活用して、無理のないタイミングでの支援が可能となるシステムの利用が望まれます。

このシステムは、排泄のタイミングをセンサーで予測することで、失禁や介助の負担を減らす目的で利用されています。
システムで管理ができると、適切なタイミングでの声かけや支援が可能となり、利用者の尊厳を守ったケアにつながります。

また、排泄介助にかかる時間や負担が軽減されることで、業務の効率化ができます。
これは、利用者と職員の双方にとって安心感のあるケア環境を支えるものとなります。

排泄に関するデータは、プライバシー性が高いため、導入時には利用者や家族への丁寧な説明と同意が不可欠です。
また、センサーの予測は万能ではないことも考慮しておかなければなりません。
排泄支援を、効率化だけで捉えるのではなく、尊厳を守るケアとしてどう活かすかと

いう視点も必要です。



第5節　効果的活用事例

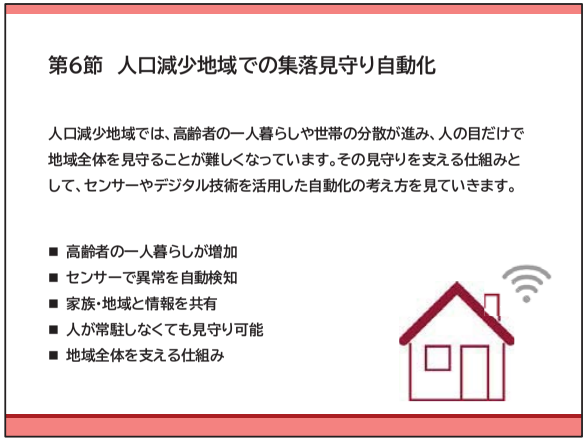
センサー機器は、導入するだけでは十分な効果を発揮しません。
実際の現場では、運用ルールや使い方の工夫によって、初めて現場に合った技術として定着していきます。

センサー機器を効果的に活用している現場では、夜勤人数を維持しながら見守り体制を強化し、事故の減少につなげている事例が見られます。
得られたデータを職員間で共有することで、チームによるケアが向上していきます。

小規模施設であっても、運用方法を工夫することで成果が出ている事例があり、規模に関わらず活用の可能性があることが分かります。
これらの事例に共通しているのは、機器そのものよりも、現場に合った運用ルールが整えられている点です。

成功事例から分かるのは、センサー活用の鍵が技術ではなく使い方にあるという点です。
導入目的が曖昧なままでは、通知に振り回されたり、使われなくなったりする可能性があり、課題を整理したうえで、どの情報を、誰が、どのように活かすのかを明確に

することが、効果的な活用につながります。

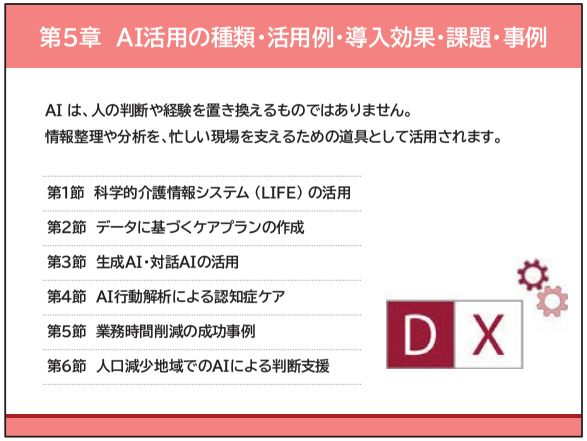


第6節　人口減少地域での集落見守り自動化

人口減少地域では、高齢者の一人暮らしや世帯の分散が進み、人の目だけで地域全体を見守ることが難しくなっています。
その見守りを支える仕組みとして、センサーやデジタル技術を活用した自動化の考え方を見ていきます。

人口減少地域では、高齢者の一人暮らしが増加し、家族や支援者が常に近くにいるとは限らない状況が広がっています。
そのような中で、センサーを用いて異常を自動的に検知する仕組みは、見守りを継続するための重要な手段となります。
検知された情報を家族や地域、関係機関と共有することで、人が常駐しなくても状況を把握でき、必要なときに支援につなげることが可能になります。
こうした仕組みは、地域全体で高齢者の暮らしを支えるための基盤としてこれからますます需要が高まっていくと考えられます。

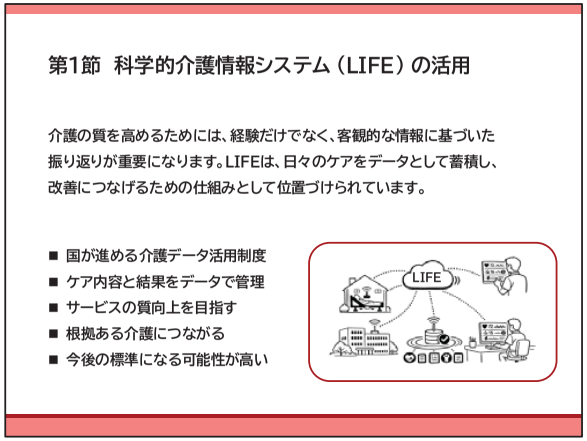
見守りの自動化は、限られた人手で見守りを続けるための工夫です。
地域の実情に合わせて、誰がどの情報を受け取り、どのように対応するのかを明確にして活用されることが求められます。



第5章　AI活用の種類・活用例・導入効果・課題・事例

AIは、人の判断や経験を置き換えるものではありません。
情報整理や分析を、忙しい現場を支えるための道具として活用されます。

第1節　科学的介護情報システム　LIFEの活用
第2節　データに基づくケアプランの作成
第3節　生成AI・対話AIの活用
第4節　AI行動解析による認知症ケア
第5節　業務時間削減の成功事例
第6節　人口減少地域でのAIによる判断支援

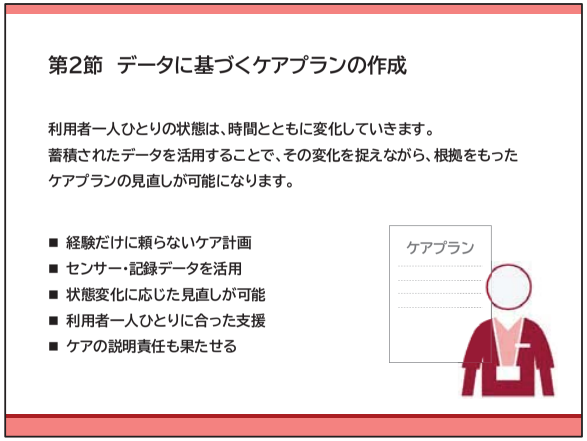


第1節　科学的介護情報システム LIFEの活用

介護の質を高めるためには、経験だけでなく、客観的な情報に基づいた振り返りが重要になります。
LIFEは、日々のケアをデータとして蓄積し、改善につなげるための仕組みとして位置づけられています。

LIFEは、国が進める介護データ活用の制度であり、日々のケア内容や結果をデータとして管理する仕組みです。
ケアの実施内容とその結果を蓄積・分析することで、サービスの質向上を目指すことができます。
感覚や経験だけに頼らず、根拠のある介護につなげることができる点が特徴であり、今後は介護現場の標準的な仕組みとして活用が広がっていく可能性があります。

この仕組みは、現場をより良くするための振り返りに活かすことができます。



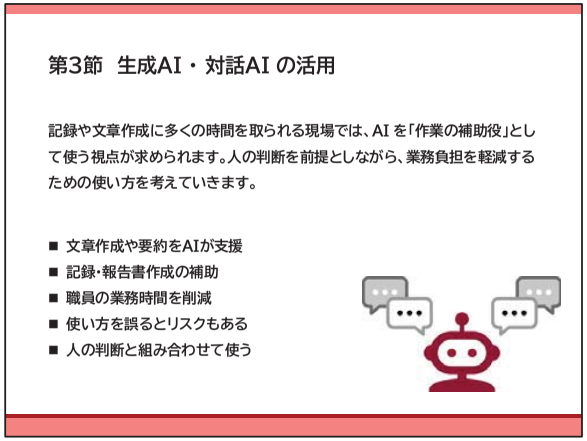
第2節　データに基づくケアプランの作成

利用者一人ひとりの状態は、時間とともに変化していきます。
蓄積されたデータを活用することで、その変化を捉えながら、根拠をもったケアプランの見直しが可能になります。

データに基づくケアプランの作成は、経験だけに頼らず、センサーや記録から得られた情報も活用します。
データは、利用者の状態変化を客観的に把握できるため、その時々の状況に応じたケア内容の見直しができます。
これらの活用により、一人ひとりに合った支援を検討できれば、個別性の高いケアにつながります。
また、データをもとに説明ができるため、ケアの内容や判断についての説明責任を果たしやすくなります。

これらのデータは、それをどう読み取り、どう判断に活かすかという部分が、人の役割になります。
数字や記録を集めること自体が目的になってしまうと、利用者の生活や思いが見えにくくなる恐れがありますので、データを判断の根拠として活かしながら、現場の気

づきや対話と結びつけていくことが必要です。



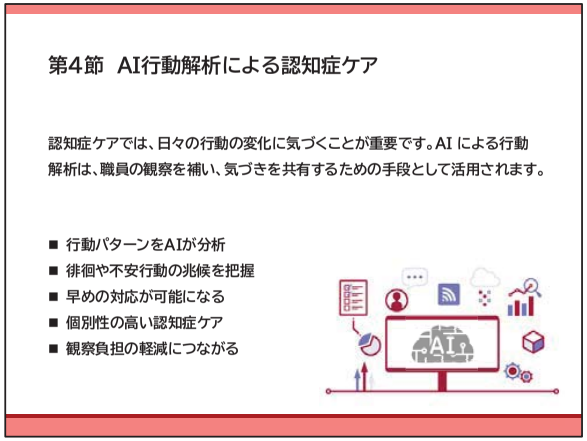
第3節　生成AI・対話AIの活用

記録や文章作成に多くの時間を取られる現場では、AIを作業の補助役として使う視点が求められます。
人の判断を前提としながら、業務負担を軽減するための使い方を考えていきます。

生成AIや対話AIは、文章作成や要約といった作業を支援する役割を担います。
介護記録や報告書作成の補助として活用することで、職員の業務時間削減につながります。

一方で、使い方を誤ると情報の誤りや不適切な表現が生じるリスクもあるため、人の判断と組み合わせて使うことが前提となります。
AIはすべてを任せる存在ではなく、職員の業務を支える補助的なツールとして位置づけることが重要です。

どの業務を軽くしたいのかを明確にして使い、個人情報や機密情報をどこまで扱ってよいのかといったルール整備をおこなえば、職員の負担軽減とケア時間の確保につなげていくことができます。



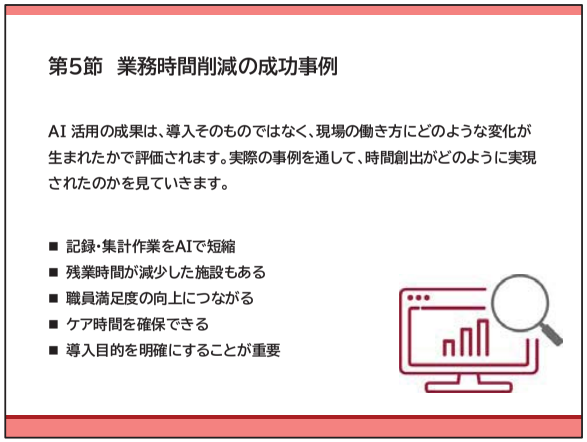
第4節　AI行動解析による認知症ケア

認知症ケアでは、日々の行動の変化に気づくことが重要です。
AIによる行動解析は、職員の観察を補い、気づきを共有するための手段として活用されます。

利用者の行動パターンをAIが分析することで、利用者の徘徊や不安行動などの兆候を把握しやすくなります。
これにより、問題行動が起きてから対応するのではなく、早めの対応が可能となります。
このような行動データを共有することで、職員間での認識の差が減り、個別性の高い認知症ケアにつなげることができます。
また、観察や記録の負担が軽減されるため、職員の業務負担の軽減にも寄与します。

AIの分析結果はあくまで傾向を示すものであり、すべてを正確に判断できるわけではありません。
行動の背景にある不安や生活環境の変化を理解するためには、人による関わりが不可欠です。

AIを判断の代替ではなく、気づきを深めるための補助という位置づけになります。

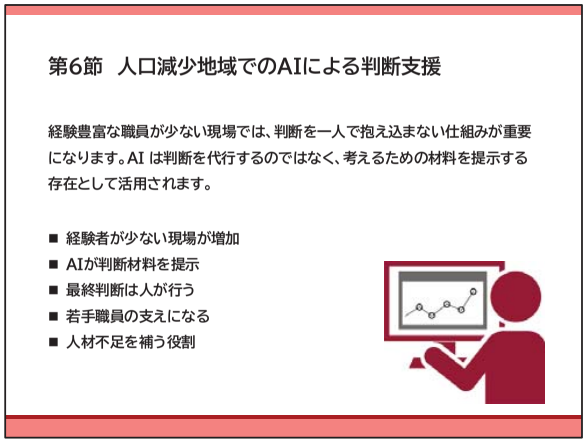


第5節　業務時間削減の成功事例

AI活用の成果は、導入そのものではなく、現場の働き方にどのような変化が生まれたかで評価されます。
実際の事例を通して、時間創出がどのように実現されたのかを見ていきます。

業務時間削減に成功している現場では、記録や集計作業をAIの活用で短縮しています。
この活用で、残業時間が減少した施設も多く、職員の負担軽減につながっています。
業務に追われる時間が減ることで、利用者と向き合うケアの時間を確保でき、職員満足度の向上にも結びついています。
成功事例の特徴として、AIを導入する目的が明確であり、業務のどこを改善したいのかが整理されている点が共通しています。

AIは、時間を生み出す手段として有効で、削減できた時間をどのようにケアの質向上につなげるかという新たな支援の在り方が見えてきます。

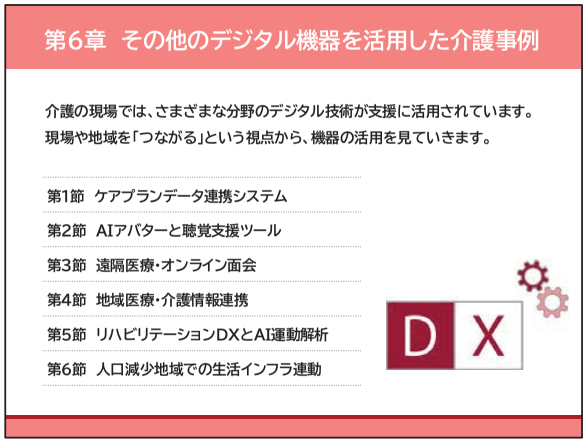


第6節　人口減少地域でのAIによる判断支援

経験豊富な職員が少ない現場では、判断を一人で抱え込まない仕組みが重要になります。
AIは判断を代行するのではなく、考えるための材料を提示する存在として活用されます。

人口減少地域では、介護支援の経験者が少ない現場が増加しており、一人で判断しなければならないという負担があります。
そのような状況において、AIが判断材料を提示することで、職員が一人で悩まずに検討できる環境を整えることができます。
最終的な判断は人が行うことを前提としながら、経験の浅い職員を支える仕組みとして AIは有効活用ができます。
このような使い方で、人材不足を補いながら、現場の安心感と判断の質を支えることが可能となります。

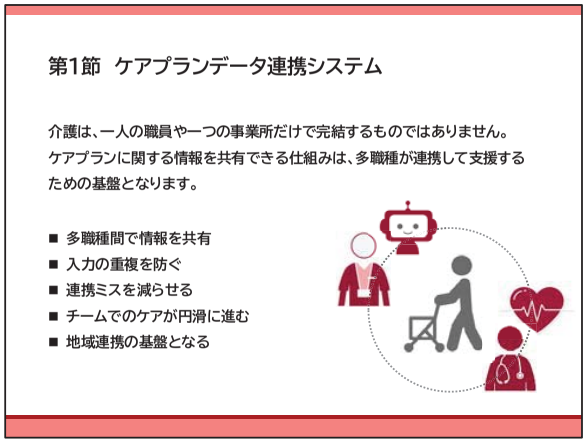
このように、AIによる判断支援は、判断の根拠を共有し、職員同士が考えをすり合わせるための共通の材料となります。



第6章　その他のデジタル機器を活用した介護事例

介護の現場では、さまざまな分野のデジタル技術が支援に活用されています。
現場や地域を「つながる」という視点から、機器の活用を見ていきます。

第1節　ケアプランデータ連携システム
第2節　AIアバターと聴覚支援ツール
第3節　遠隔医療・オンライン面会
第4節　地域医療・介護情報連携
第5節　リハビリテーションDXとAI運動解析
第6節　人口減少地域での生活インフラ連動

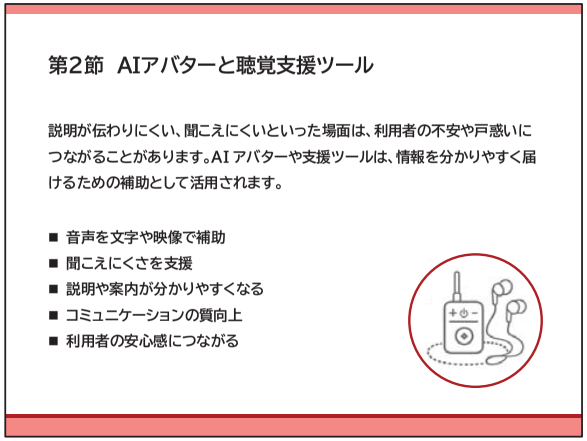


第1節　ケアプランデータ連携システム

介護は、一人の職員や一つの事業所だけで完結するものではありません。
ケアプランに関する情報を共有できる仕組みは、多職種が連携して支援するための基盤となります。

ケアプランデータ連携システムを活用することで、医師・看護師・介護士などの多職種間で情報を共有しやすくなります。
同じ内容を何度も入力する必要もなく、入力の重複を防ぐことができるため、情報の行き違いや伝達ミスも減少します。
このことにより、チームでのケアが円滑に進み、利用者にとっても一貫した支援につながるため、地域全体で支援を行うための基盤として重要となっていきます。

この時、システム活用に不慣れな職員も含めて無理なく使える仕組みづくりと、多職種間での共通理解を導入前、導入時に行うことが求められます。



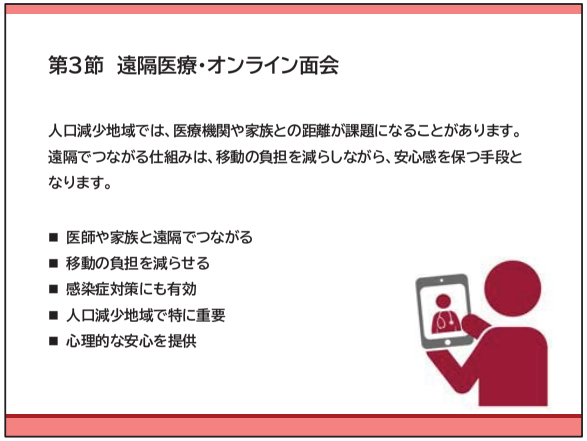
第2節　AIアバターと聴覚支援ツール

説明が伝わりにくい、聞こえにくいといった場面は、利用者の不安や戸惑いにつながることがあります。
AIアバターや支援ツールは、情報を分かりやすく届けるための補助として活用されます。

AIアバターや聴覚支援ツールは、音声を文字や映像で補助することで、聞こえにくさを支援します。
説明や案内が分かりやすくなることで、利用者の理解が深まり、コミュニケーションの質向上につながります。
情報が正確に伝われば、利用者の不安や戸惑いが軽減され、安心感のある支援を提供しやすくなります。

これらのツールは、職員と利用者のやり取りを円滑にし、現場の負担軽減にも寄与します。
しかし、すべての利用者がデジタル表示やアバターに慣れているわけではありません。
利用者の状態や好みに応じて、使う・使わないを柔軟に判断することが重要です。

また、ツールに頼りすぎず、人の声かけや表情と組み合わせて活用することも忘れてはいけません。

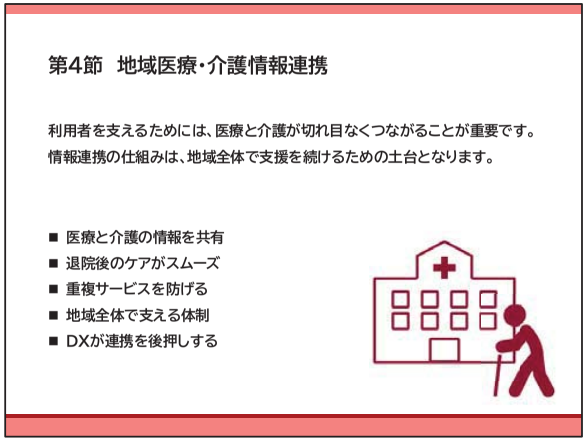


第3節　遠隔医療・オンライン面会

人口減少地域では、医療機関や家族との距離が課題になることがあります。
遠隔でつながる仕組みは、移動の負担を減らしながら、安心感を保つ手段となります。

遠隔医療やオンライン面会を活用することで、医師や家族と離れた場所にいてもつながることが可能になっています。
これは、移動にかかる時間や身体的な負担を減らすことができ、感染症対策としても有効です。
直接会うことが難しい状況でも支援や交流を継続できるため、人口減少地域では、このような仕組みの需要が高まっています。

オンラインは、通信環境や機器操作に不安があると、十分に活かされない場合があります。
事前準備やサポート体制を整え、利用者や家族が操作に不安なく、安心して使える環境、機器のサポートが必要です。

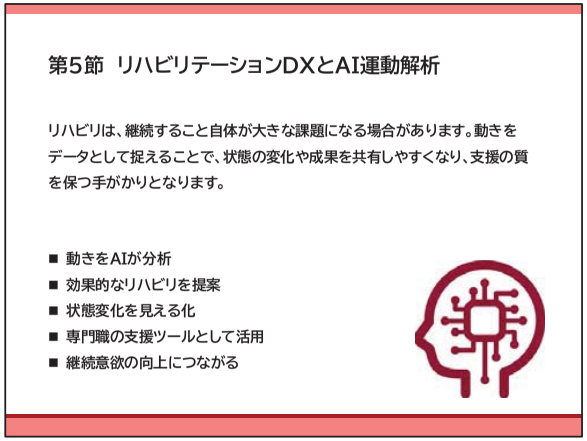


第4節　地域医療・介護情報連携

利用者を支えるためには、医療と介護が切れ目なくつながることが重要です。
情報連携の仕組みは、地域全体で支援を続けるための土台となります。

地域医療・介護情報連携において、医療と介護の情報を共有できれば、退院後のケアもスムーズになり、支援の切れ目を防ぐことができます。
多職種間での共有は、重複したサービスや対応の行き違いを防ぐこともできます。
DXの活用は、医療と介護をつなぎ、地域全体で利用者を支える体制づくりを後押しします。

これらの個人情報や医療情報の取り扱いには十分な配慮が求められるため、現場で本当に必要な情報を関係者で共有するという区別も必要です。

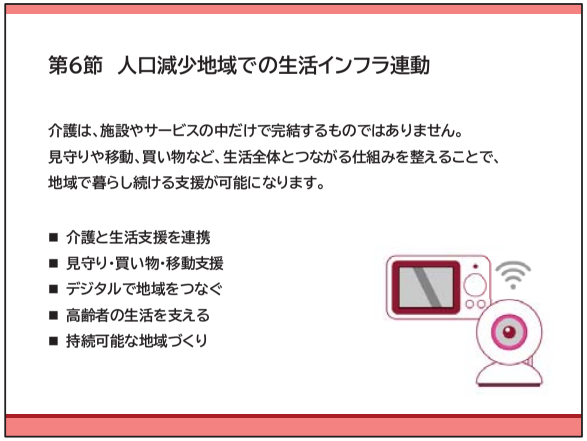


第5節　リハビリテーションDXとAI運動解析

リハビリは、継続すること自体が大きな課題になる場合があります。
動きをデータとして捉えることで、状態の変化や成果を共有しやすくなり、支援の質を保つ手がかりとなります。

リハビリテーションDXでは、利用者の動きをAIが分析し、運動の状態や変化を可視化します。
その結果、効果的なリハビリ内容を検討しやすくなり、専門職の判断を支えるツールとして活用されます。
データで、状態の変化が見えるようになると、利用者自身も成果を実感しやすくなり、リハビリへの継続意欲向上につながります。

AI運動解析は、支援の質を保ちながら、限られた人材でリハビリを継続するための手段として位置づけられます。
この時、データや解析結果だけでは、利用者の気持ちや体調の微妙な変化を捉えきれない場合があります。
リハビリの目的やペースは人それぞれ異なるため、数値をどう読み取り、どう声かけや支援に反映するかというのは、支援する職員の大切な役割です。

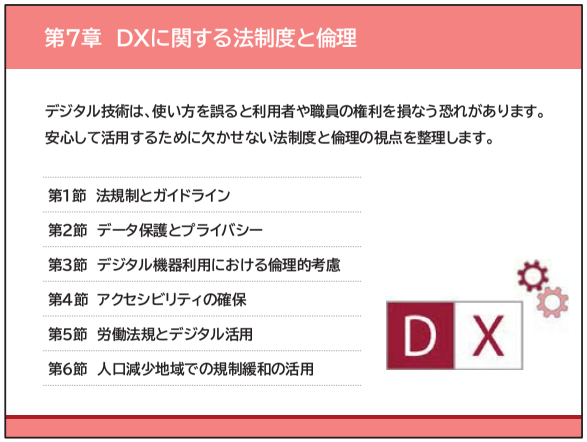


第6節　人口減少地域での生活インフラ連動

介護は、施設やサービスの中だけで完結するものではありません。
見守りや移動、買い物など、生活全体とつながる仕組みを整えることで、地域で暮らし続ける支援が可能になります。

人口減少地域では、介護と生活支援を切り離さずに考えることが重要になります。
見守りや買い物支援、移動支援などをデジタルで連携させることで、高齢者の生活全体を支える仕組みを構築できます。
介護サービスだけでなく、地域の生活インフラとつながることで、支援の抜け漏れを防ぎ、安心して暮らし続けられる環境づくりにつながります。
こうした連動は、限られた人材で地域を支えるための工夫として需要が高まっています。

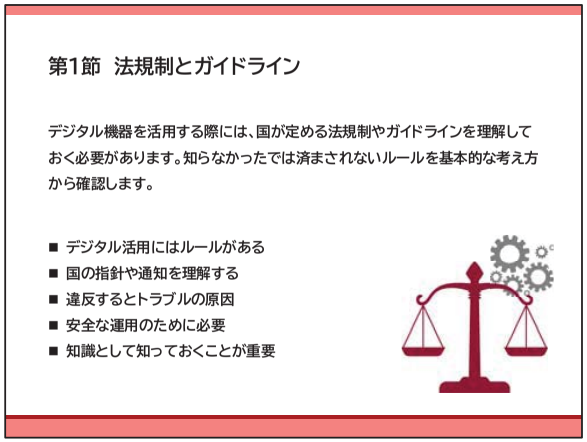
これらは、介護職だけで完結できる取り組みではなく、行政、地域事業者、住民との役割分担や情報共有が不可欠となります。



第7章　DXに関する法制度と倫理

デジタル技術は、使い方を誤ると利用者や職員の権利を損なう恐れがあります。
安心して活用するために欠かせない法制度と倫理の視点を整理します。

第1節　法規制とガイドライン
第2節　データ保護とプライバシー
第3節　デジタル機器利用における倫理的考慮
第4節　アクセシビリティの確保
第5節　労働法規とデジタル活用
第6節　人口減少地域での規制緩和の活用

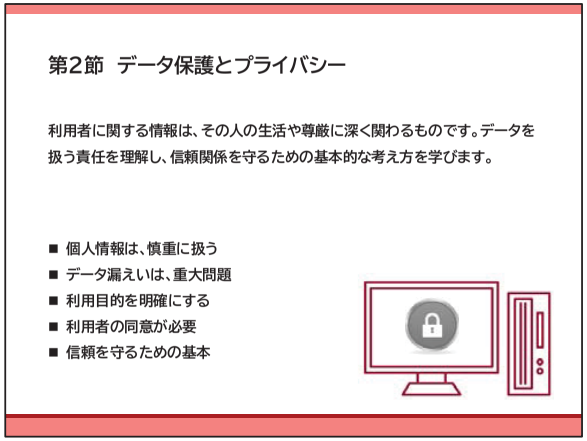


第1節　法規制とガイドライン

デジタル機器を活用する際には、国が定める法規制やガイドラインを理解しておく必要があります。
知らなかったでは済まされないルールを、基本的な考え方から確認します。

デジタル活用には、守るべきルールがあり、国の指針や通知を理解することが重要です。
これらのルールを把握せずに運用すると、トラブルや問題が発生する原因となります。
安全で適切な運用を行うためには、制度やガイドラインを知識として身につけておくことが欠かせません。

法規制やガイドラインは、現場を縛るためのものではなく、利用者と職員の双方を守るための基盤となります。
しかしながら、現場で十分に理解されないまま使われていることもあり、導入時には操作のみならず、これらの理解に関する研修が必要です。

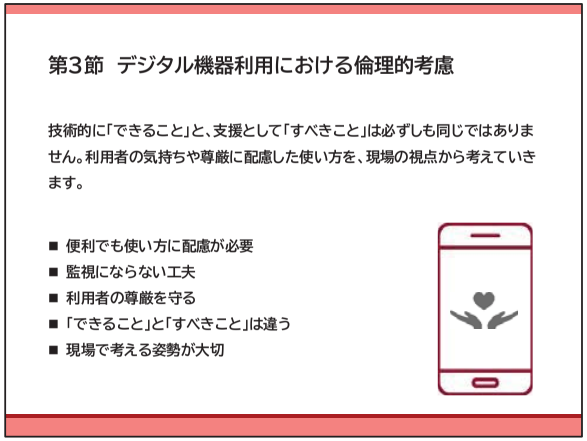


第2節　データ保護とプライバシー

利用者に関する情報は、その人の生活や尊厳に深く関わるものです。
データを扱う責任を理解し、信頼関係を守るための基本的な考え方を学びます。

介護現場で扱う個人情報は、慎重に取り扱わなければなりません。
データ漏えいは重大な問題につながるため、利用目的を明確にしたうえで管理することが求められます。
情報を利用する際には、利用者本人や家族の同意を得ることが基本となり、信頼関係を守るための重要な前提となります。

データは、管理・取り扱いには注意が必要ですが、守るべき情報と共有すべき情報を整理し、現場で迷わないルールづくりが必要です。

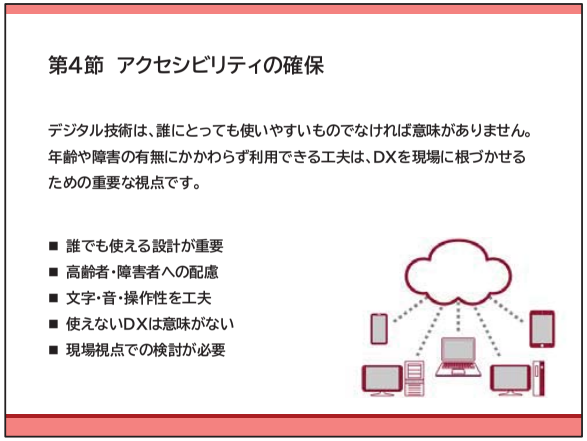


第3節　デジタル機器利用における倫理的考慮

技術的にできることと、支援としてすべきことは必ずしも同じではありません。
利用者の気持ちや尊厳に配慮した使い方を、現場の視点から考えていきます。

デジタル機器は便利である一方、使い方によっては利用者に不安や違和感を与えることがあります。
常に監視されていると感じさせない工夫や、利用者の尊厳を守る視点も求められています。
その使い方は、本当に利用者のためになっているのか？と考える姿勢も持ち合わせ、導入しなければなりません。
現場では、技術の導入と同時に、倫理的な配慮を意識することが必要です。

倫理的な配慮は、明確な正解が一つあるものではなく、状況や利用者によって判断が異なりますので、職員同士で考えを共有し、話し合いながら判断していくことが重要です。

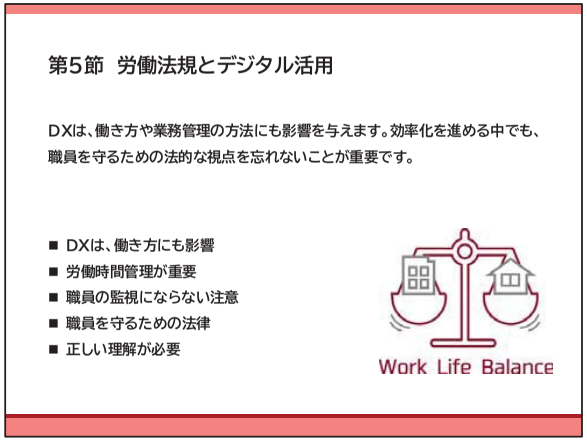


第4節　アクセシビリティの確保

デジタル技術は、誰にとっても使いやすいものでなければ意味がありません。
年齢や障害の有無にかかわらず利用できる工夫は、DXを現場に根づかせるための重要な視点です。

便利な機器であっても、誰でも使える設計でなければ、導入しただけで終わってしまいます。
例えば、高齢者や障害のある人への配慮として、文字の大きさや音、操作のしやすさを工夫する必要があります。
使えないデジタル機器となれば、その効果を発揮できませんので、現場の視点に立ち、実際に使えるかどうかを検討することが求められます。

アクセシビリティは、利用者だけでなく、職員にとっての使いやすさも含まれます。
初期費用をかけて導入したものの、一部の人しか使えない仕組みでは、現場全体での定着は難しくなります。。

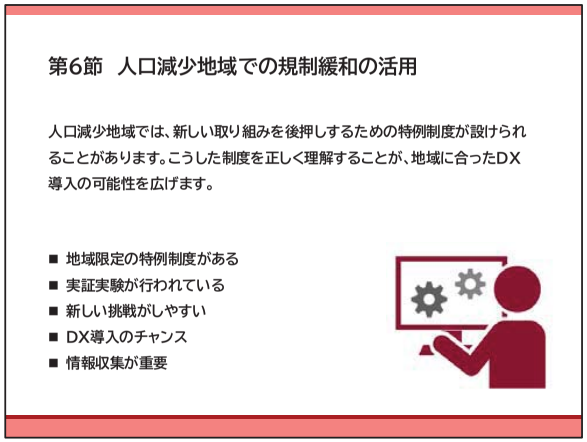


第5節　労働法規とデジタル活用

DXは、働き方や業務管理の方法にも影響を与えます。
効率化を進める中でも、職員を守るための法的な視点を忘れないことが重要です。

デジタル活用が進むことで、業務の進め方や労働時間の管理方法にも変化が生じます。
そのため、労働時間の把握や管理を適切に行うことが重要になります。
一方で、デジタル機器やシステムが、職員の過度な監視につながらないよう注意も必要です。
労働法規は、職員を守るためのルールであり、デジタル活用の中でも正しい理解が求められます。

効率化を目的とした DXが、結果として職員の負担増やプレッシャーにつながってしまうこともあります。
管理のためのデジタルではなく、働きやすさを支えるデジタルという視点を持つことが重要です。



第6節　人口減少地域での規制緩和の活用

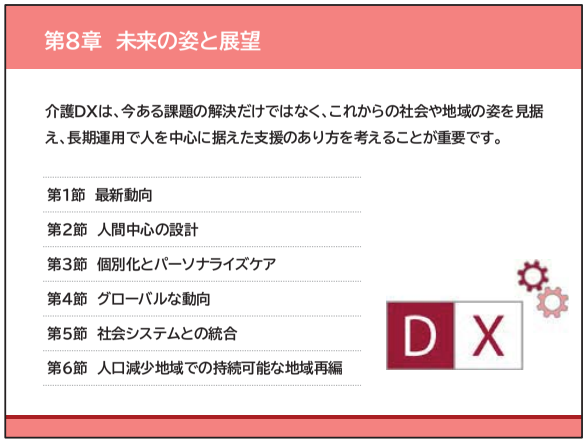
人口減少地域では、新しい取り組みを後押しするための特例制度が設けられることがあります。
こうした制度を正しく理解することが、地域に合ったDX導入の可能性を広げます。

人口減少地域では、地域限定の特例制度や規制緩和が設けられている場合があります。
これらの制度を活用した実証実験や新しい取り組みがおこなわれており、DX導入のチャンスが広がっています。

特に、人材や資源が限られる地域においては、従来と同じ仕組みにこだわらず、柔軟な発想で支援の形を検討することが重要です。
そのためにも、制度を利用しながら、地域の実情に合った活用を考える必要があります。

規制緩和は、何をしてもよいという意味ではなく、条件や目的が明確に定められています。
制度を誤って理解すると、トラブルや信頼低下につながるおそれがあり、制度の趣

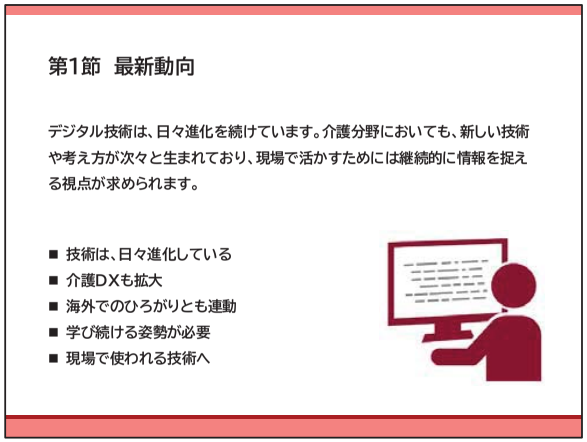
旨を踏まえたうえで、地域にとって本当に必要なDXを見極め、持続可能な形で活用していくことが課題となります。



第8章　未来の姿と展望

介護DXは、今ある課題の解決だけではなく、これからの社会や地域の姿を見据え、長期運用で人を中心に据えた支援のあり方を考えることが重要です。

第1節　最新動向
第2節　人間中心の設計
第3節　個別化とパーソナライズケア
第4節　グローバルな動向
第5節　社会システムとの統合
第6節　人口減少地域での持続可能な地域再編

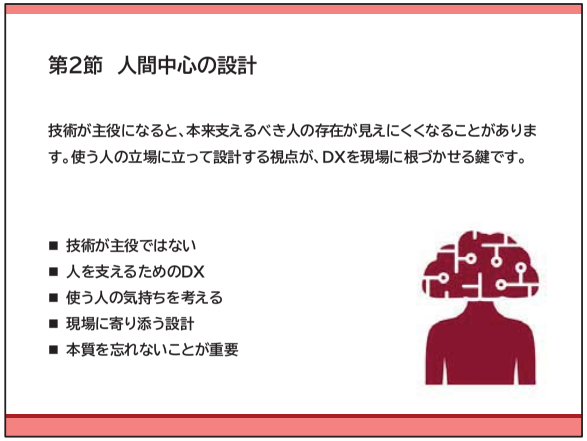


第1節　最新動向

デジタル技術は、日々進化を続けています。
介護分野においても、新しい技術や考え方が次々と生まれており、現場で活かすためには継続的に情報を捉える視点が求められます。

デジタル技術は日々進化しており、介護DXの分野でも活用の幅が広がっています。
国内だけでなく、技術先進国である海外の政策や取り組みとも連動しながら、新しい技術や仕組みが現場に導入されつつあります。
こうした変化の中で、技術そのものを知るだけでなく、実際に現場で使われる形へと落とし込む視点が重要になります。
そのためにも、日々進化し続けつ技術を学び続ける姿勢が求められます。

最新技術を知ること自体が目的になってしまうと、現場とのズレが生じるおそれがあります。
大切なのは、今の現場課題にどう役立つのかという視点。
流行や話題性に流されず、現場で本当に必要な技術を見極め、実践につなげていく力が必要です。

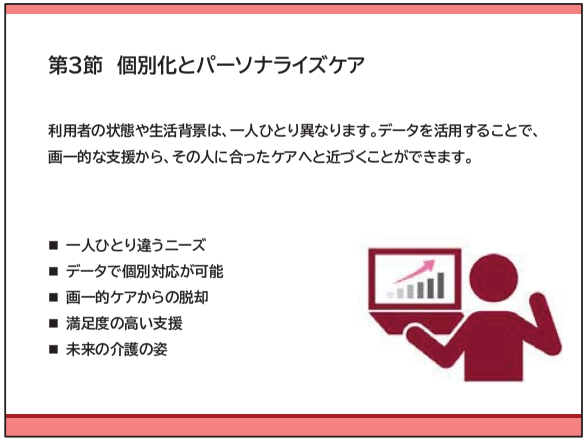


第2節　人間中心の設計

技術が主役になると、本来支えるべき人の存在が見えにくくなることがあります。
使う人の立場に立って設計する視点が、DXを現場に根づかせる鍵です。

人間中心の設計では、技術そのものではなく、人を支えることを目的にDXを考えます。
使う人の気持ちや立場を考えながら設計することで、現場に寄り添った仕組みになります。
便利さや効率だけを追い求めるのではなく、現場で無理なく使えるかどうかが重要です。
本質を見失わず、支援される人と支援する人の双方にとって意味のあるDXが求められます。

実際の現場では想定どおりに使われないことも多いため、導入時だけでなく、使い続ける中で改善を重ねることが欠かせません。
人に合わせて技術を変えるという視点も求められます。



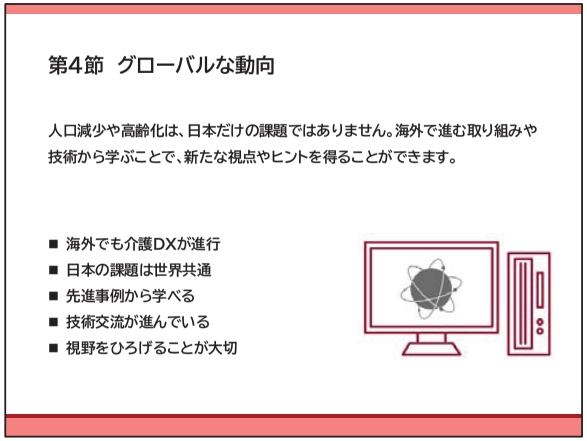
第3節　個別化とパーソナライズケア

利用者の状態や生活背景は、一人ひとり異なります。
データを活用することで、画一的な支援から、その人に合ったケアへと近づくことができます。

利用者一人ひとり、異なるニーズがあります。
それを前提に支援を考えるためデータを活用すれば、利用者の状態や変化を把握しやすくなり、個別対応が可能になります。

これは、これまでの画一的なケアから脱却、満足度の高い支援につなげることができます。
DXは、その人らしい生活を支える未来の介護の姿を実現するための手段としてますます期待されるものです。

個別化を意識するのは、特別対応と言うことではありませんので、効率化のためにも共通化できる部分と個別に配慮する部分を整理しておくことが大切です。



第4節　グローバルな動向

人口減少や高齢化は、日本だけの課題ではありません。
海外で進む取り組みや技術から学ぶことで、新たな視点やヒントを得ることができます。

海外でも介護DXは進んでおり、日本が抱える課題は世界共通のものとなっています。
各国の先進事例からは、技術の活用方法や制度の工夫など、多くの学びを得ることができます。
国境を越えた技術交流も進んでおり、新しい発想や支援の形が生まれています。
視野をひろげ、海外の動向を知ることは、これからの介護のあり方を考えるうえで重要です。

ただし、海外の事例をそのまま日本の現場に当てはめることは難しい場合もあります。
文化や制度、地域性の違いを踏まえたうえで、自分たちの現場に合う形を考えていかなければなりません。

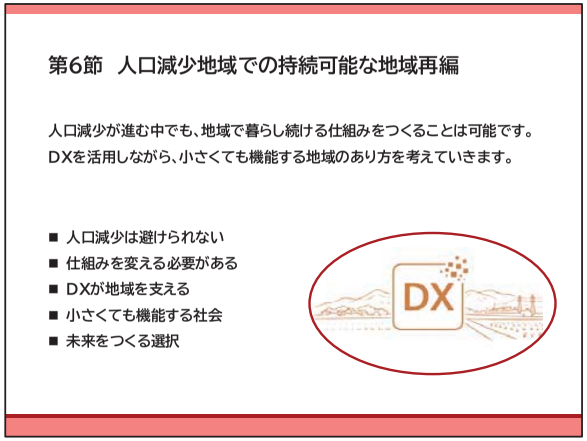


第5節　社会システムとの統合

介護は、医療や行政、地域社会と切り離して考えることはできません。
デジタル技術は、それらをつなぐ役割を担い、持続可能な支援体制の構築に寄与します。

介護は、介護サービスだけで完結するものではなく、医療や行政、地域との連携が欠かせません。
データによる情報をつなぐことで、支援に必要な情報を関係する多職種間で共有しやすくなります。
デジタル技術は、このような分野や組織の壁を越えて情報をつなぐ橋渡し役として機能します。

社会システムとの統合が進むと、支援が点ではなく、線としてつながるようになります。
その結果、支援の抜けや重なりが減り、利用者にとっても、関わる側にとっても無理のない支援が可能になります。

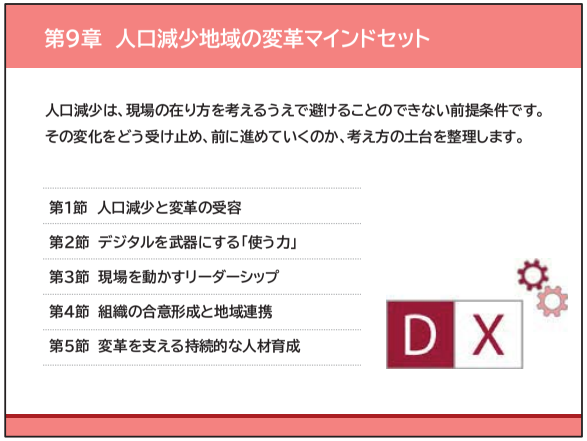


第6節　人口減少地域での持続可能な地域再編

人口減少が進む中でも、地域で暮らし続ける仕組みをつくることは可能です。
DXを活用しながら、小さくても機能する地域のあり方を考えていきます。

残念ながら、人口減少は避けられない現実であり、これまでと同じ仕組みを維持し続けることは難しくなっています。
そのため、地域の規模に合わせて仕組みを見直し、DXを活用して地域を支える工夫が求められます。
人や資源が限られ、小さくても機能する社会を構築することで、地域での暮らしを支え続けることが可能になります。
DXは、未来の在り方をつくる選択の一つとして、地域の再編を後押しする役割を担います。

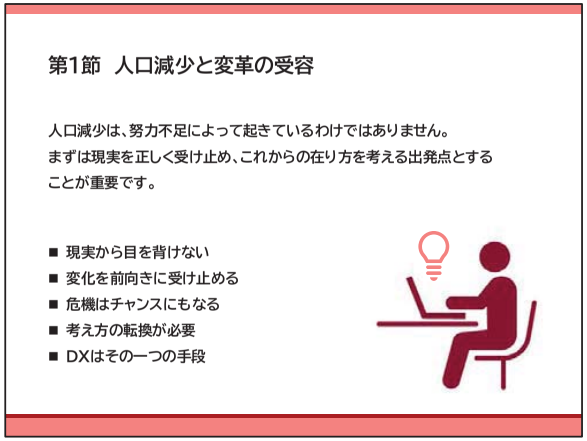
持続可能な地域再編とは、元に戻すことではなく、今の現実に合わせて形を変えることです。
DXを活用することで、距離や人数の制約を越え、これまで難しかった支援の形が実現できるようになります。



第9章　人口減少地域の変革マインドセット

人口減少は、現場の在り方を考えるうえで避けることのできない前提条件です。
その変化をどう受け止め、前に進めていくのか、考え方の土台を整理します。

第1節　人口減少と変革の受容
第2節　デジタルを武器にする「使う力」
第3節　現場を動かすリーダーシップ
第4節　組織の合意形成と地域連携
第5節　変革を支える持続的な人材育成

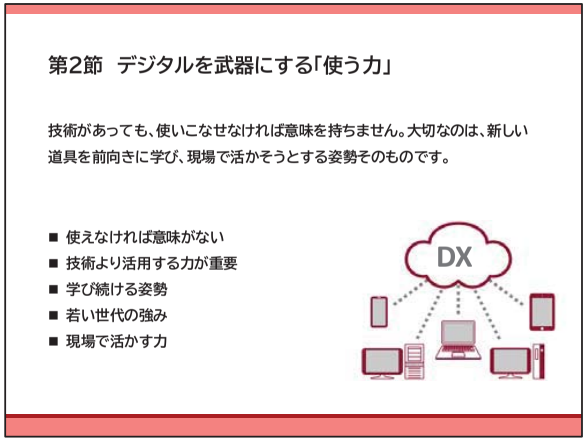


第1節　人口減少と変革の受容

人口減少は、努力不足によって起きているわけではありません。
まずは現実を正しく受け止め、これからの在り方を考える出発点とすることが重要です。

人口減少という現実から目を背けず、変化を前向きに受け止める姿勢が求められます。
この変化は、危機と見られがちですが、仕組みや働き方を見直す機会、前向きに受け止めることもできます。
これまで当たり前だった考え方や、やり方を見直し、発想を転換するチャンスです。
DXは、その変革を支えるための一つの手段として位置づけられます。

このように、人口減少という現実を直視することで、無理に維持するのではなく、続けられる形へと変えていく選択が可能になります。



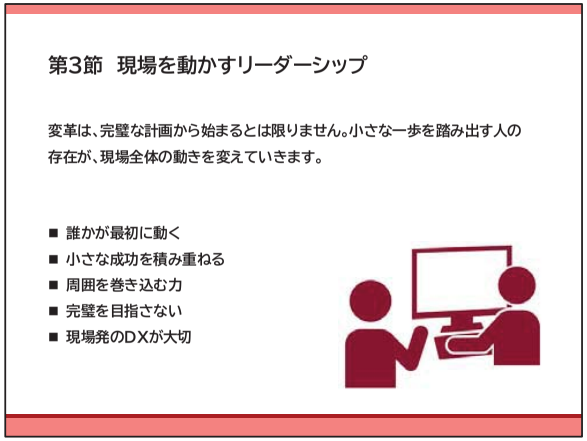
第2節　デジタルを武器にする使う力

技術があっても、使いこなせなければ意味を持ちません。
大切なのは、新しい道具を前向きに学び、現場で活かそうとする姿勢そのものです。

デジタル技術を有効とした社会にするためには、単に技術の導入だけでは不十分です。
技術よりも、それをどう活用するかという使う力が鍵となります。

そのため、新しい技術を学び続ける姿勢は、変化の早い時代において欠かせません。
若い世代の強みである柔軟さや慣れを活かしながら、現場でデジタルを活かす力につなげることが求められます。

デジタルは特別なものではなく、日常の業務を支える道具です。
学び続ける姿勢は、変化に振り回されず、自分たちで選び、活かす側に回ることができます。

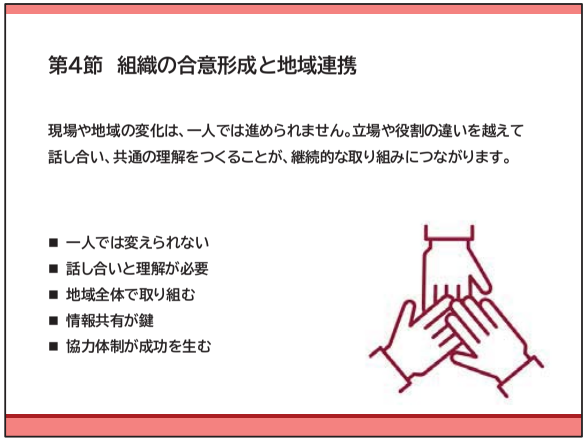


第3節　現場を動かすリーダーシップ

変革は、完璧な計画から始まるとは限りません。
小さな一歩を踏み出す人の存在が、現場全体の動きを変えていきます。

現場を動かすためには、誰かが最初に行動を起こさなければなりません。
大きな成果を一度に目指すのではなく、小さな成功を積み重ねることで、周囲を巻き込む力も生まれてきます。
完璧を目指しすぎず、できることから始める姿勢が、現場の変化につながります。
DXは上から与えられるものではなく、現場から生まれる取り組みとして進めることが大切です。

現場発のリーダーが育つことで、変革は一時的な取り組みではなく、日常の中に根づいていきます。
一人の行動がきっかけとなり、考え方ややり方が少しずつ共有されていくことで、組織全体が動き出します。

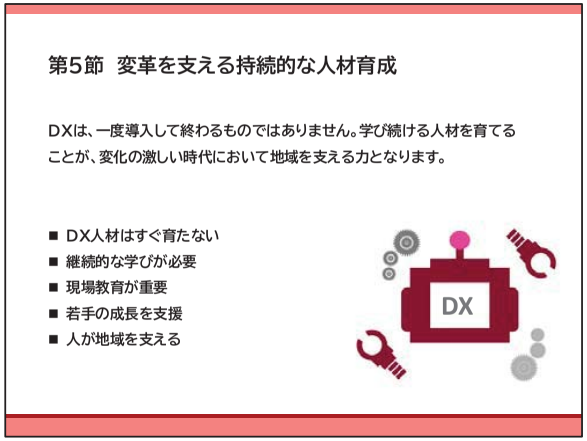


第4節　組織の合意形成と地域連携

現場や地域の変化は、一人では進められません。
立場や役割の違いを越えて話し合い、共通の理解をつくることが、継続的な取り組みにつながります。

DXや業務改善を進めるうえでは、一人の判断だけで変えることは難しく、組織としての合意が欠かせません。
そのためには、話し合いを重ね、お互いの立場や考えを理解することが重要になります。
また、介護現場だけでなく、地域全体で取り組む視点を持つことで、支援の幅が広がります。
情報を共有し、協力体制を築くことが、取り組みを成功へと導きます。

合意形成と地域連携が進むことで、変革は個人の挑戦からみんなの取り組みへと変わっていきます。
組織や地域が一体となって動けば、人口減少という課題に対しても、柔軟で強い対応力を持つことができます。

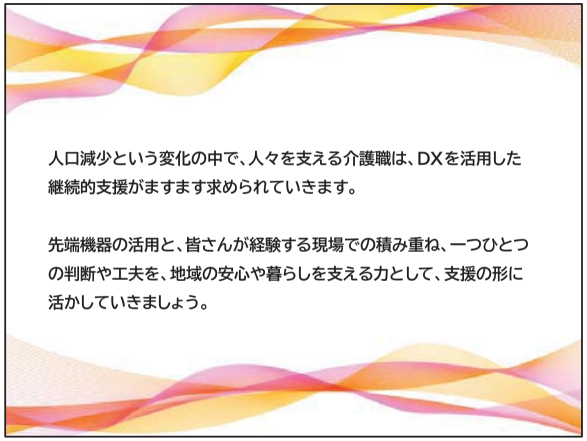


第5節　変革を支える持続的な人材育成

DXは、一度導入して終わるものではありません。
学び続ける人材を育てることが、変化の激しい時代において地域を支える力となります。

DXを進めるための人材は、すぐに育つものではありません。
そのため、継続的な学びの機会を確保し、現場での教育を積み重ねていくことが重要です。
若手職員の成長を支援し、経験を共有することで、組織全体の力が高まります。
DXの活用と、若手人材の育成は、これからの地域を支える大きな大きな柱となります。

学び続ける文化が定着すれば、環境の変化にも柔軟に対応できる組織や地域へと成長していきます。
技術そのものよりも、人を育て、支え合いながら変化を続けられる力こそが、人口減少地域の未来を支える基盤です。



人口減少という変化の中で、人々を支える介護職は、DXを活用した継続的支援がますます求められていきます。
これから、先端機器の活用と、皆さんが経験する現場での積み重ね、一つひとつの判断や工夫を、地域の安心や暮らしを支える力として、支援の形に活かしていきましょう。

教材名:　人口減少地域における介護DX先端機器活用

章番号	問題番号	問題文	選択肢	解答	解説
1	1	介護現場でデジタル化（DX）を進める一番の目的として、正しいものはどれですか？	a 職員の人数を今すぐ減らすため b 現場の負担を軽くし、働く「人を守る」ため c 記録業務をすべて禁止するため d ケアの質を落として楽をするため	b 現場の負担を軽くし、働く「人を守る」ため	DXは人を減らすためではなく、ICT等の活用で負担を減らし、大切な人材を守るために行います。
1	2	人手が少ない地域で使う機械を選ぶとき、特に大切にすべきことは何ですか？	a 都市部と同じ運用方法ができる機器を選ぶ b 最新機能が多く搭載された機器を選ぶ c 地域の移動距離や人員体制でも運用できる機器を選ぶ d 本体価格が最も安い機器を選ぶ	c 地域の移動距離や人員体制でも運用できる機器を選ぶ	人手が限られ移動距離も長い地域では、地域の人員体制や運用方法に合い、無理なく使い続けられる機器を選ぶことが重要です。
1	3	現場でデジタル機器を無理なく使い続けるために、最も大切なことは何ですか？	a 現場の意見を聞かずに機種を決める b 導入した後のサポート体制を確認する c 一番安いという理由だけで選ぶ d 誰も使わない難しい機能をつける	b 導入した後のサポート体制を確認する	機器は導入して終わりではなく、その後の運用や相談できる体制があるかどうかが成功の鍵となります。
1	4	介護の仕事の中で、機械（デジタル機器）が得意としている分野はどれですか？	a 利用者の気持ちに寄り添い共感すること b 介護記録の作成やバイタルの計測 c 複雑な人間関係の相談にのること d ケアの内容を最終的にすべて判断すること	b 介護記録の作成やバイタルの計測	機械は「記録・計測・補助」を担い、人は「判断・共感」を担うという役割分担がDXの本質です。
1	5	デジタル機器の導入を検討するとき、値段の「安さ」以外で重視すべき点はどれですか？	a 短期的な利益だけを追い求めること b 業務が楽になるなどの「長期的な効果」 c 補助金や助成金を一切使わないこと d 職員の残業時間を現状のままにすること	b 業務が楽になるなどの「長期的な効果」	初期費用はかかりますが、業務効率化によって長期的にどのようなプラスの効果が出るかで判断します。
2	6	介護記録に「音声入力」を導入する一番のメリットは何ですか？	a 手書きの練習になる b 記録時間を短くし、ケアに使える時間を増やす c 職員同士の会話を減らす d 漢字の読み書きを覚える必要がなくなる	記録時間を短くし、ケアに使える時間を増やす	音声入力で記録をデジタル化すると、時間の短縮につながり、利用者と向き合う時間が増えます。
2	7	介護現場でスマートフォン（スマホ）を活用する利点はどれですか？	a その場で写真や情報をすぐに共有できる b 個人的な電話を自由にかけるため c 職員の休憩時間を長くするため d 業務中にゲームをして過ごすため	a その場で写真や情報をすぐに共有できる	スマホは持ち運びができるため、移動が多い現場でも即座に連絡や情報の共有が可能になります。
2	8	業務を分析する「タイムスタディ調査」を行う目的は何ですか？	a 職員がサボっていないか監視するため b 忙しい理由を数字で把握し改善するため c 誰が一番仕事が早いか競わせるため d 記録にかかる時間を無理やりゼロにするため	b 忙しい理由を数字で把握し改善するため	業務を時間で数字にすることで、無駄な作業を見つけ、改善の優先順位を決めやすくなります。
2	9	事務作業をデジタル化する「バックオフィスDX」の効果はどれですか？	a 事務の担当者を全員解雇すること b ミスを減らし、職員全体の負担を軽くする c 現場の職員が全ての事務を代わりに行う d 施設で使う紙を明日からゼロにすること	b ミスを減らし、職員全体の負担を軽くする	勤怠や請求のデジタル化は、確認作業のミスを減らし、現場と事務の連携をスムーズにします。
2	10	機器を動かす「通信環境（Wi-Fiなど）」で大切なことはどれですか？	a 都会で流行っている最新の仕組みを入れる b 地域や建物の条件に合った安定した環境を選ぶ c 毎月の費用が一番高いプランを契約する d 建物の中だけで使えれば外は気にしない	b 地域や建物の条件に合った安定した環境を選ぶ	地域により電波状況は異なるため、移動中も含め安定して使える環境を選ぶことが不可欠です。
2	11	デジタル技術を使って「移動時間」を減らす主な目的は何ですか？	a 職員が移動中に休憩を多く取るため b ケアに使える時間を生み出し、質を保つ c 職員が利用者の自宅に全く行かないようにする d ガソリン代を節約することだけを目的とする	b ケアに使える時間を生み出し、質を保つ	移動の負担を減らすことは、少人数でもサービスを維持し、利用者と向き合う時間を創ることにつながります。

3	12	アシスト機器（移乗支援）を導入する一番の目的はどれですか？	a 職員の筋力を鍛えるため b 抱え上げによる腰痛などの身体負担を減らすため c 利用者の歩行訓練をすべて機械に任せるため d 職員の休憩時間を削って作業を増やすため	b 抱え上げによる腰痛などの身体負担を減らすため	抱え上げによる身体への負担を減らし、職員の健康を守るために活用します。
3	13	コミュニケーション用機器が現場で果たす役割として正しいものはどれですか？	a 職員同士の私語を増やすこと b 意思表示が難しい利用者の思いを伝える手助けをする c 利用者のプライバシーをすべて外部に公開する d 職員の代わりに利用者を厳しく指導する	b 意思表示が難しい利用者の思いを伝える手助けをする	言葉で伝えるのが難しい方の意思を支えることで、不安を減らしケアの質を高めます。
3	14	運搬・移動支援機器（ロボットなど）を使うメリットは何ですか？	a 施設内の掃除をすべてやめても良くなる b 重い物の運搬などの負担を減らし、安全性を高める c 職員が全く歩かなくて済むようにする d 利用者の外出をすべて禁止するため	b 重い物の運搬などの負担を減らし、安全性を高める	物品運搬などの日常的な負担をロボット等で減らすことで、ケアに集中できます。
3	15	支援機器の導入に成功した事例で見られた変化はどれですか？	a 職員の不満が以前より増えた b 業務の効率が良くなり、職員の満足度が上がった c 利用者が機械を怖がって食欲が落ちた d 機器が壊れてしまい、以前より現場が混乱した	b 業務の効率が良くなり、職員の満足度が上がった	適切な導入は業務を楽にするだけでなく、職員や利用者の安心感にもつながります。
3	16	導入した支援機器が現場で使われなくなるのを防ぐために大切なことは？	a 高価な機械なので、誰も触らせないようにする b 現場での操作研修を行い、使い方や目的を理解する c 職員に無理やり使わせ、失敗したら罰を与える d 説明書を読まずに、勘だけで動かすようにする	b 現場での操作研修を行い、使い方や目的を理解する	機械を入れるだけでなく、現場の理解と丁寧な研修を行うことが定着の鍵となります。
3	17	すぐに人が来られない地域で「遠隔保守」が必要な理由は何ですか？	a 故障時にオンラインですぐ相談や対応ができるから b 現地の職員が自分たちで修理する手間を省くため c 遠くから職員の働きぶりを監視するため d 通信費用をわざと高く設定するため	a 故障時にオンラインですぐ相談や対応ができるから	技術者がすぐ来られない地域では、遠隔サポート体制が継続運用の鍵となります。
4	18	室温や湿度を自動で測るセンサーを使う主なメリットはどれですか？	a 職員の体温を毎日測るため b 職員が見回らなくても部屋の状況がわかる c エアコンの修理を自動で行うため d 利用者の外出をすべて禁止するため	b 職員が見回らなくても部屋の状況がわかる	センサーが室温などを自動計測することで、見回りの回数を減らしつつ安全を守れます。
4	19	バイタル（心拍や呼吸）を測るセンサーを活用する利点はどれですか？	a 利用者の性格をデータで分析するため b 職員の代わりにリハビリをすべて行う c 体調の変化に早く気づき、記録の手間も減る d 利用者の食事のメニューを自動で決める	c 体調の変化に早く気づき、記録の手間も減る	データを自動で取ることで、経験に頼りすぎない素早い体調判断が可能になります。
4	20	睡眠やシルエット（影）センサーを夜間に使う目的は何ですか？	a 利用者の顔写真を24時間撮影し続けるため b プライバシーを守りながら、安全に見守るため c 部屋の照明を常に明るく保つため d 夜勤の職員を全員いなくするため	b プライバシーを守りながら、安全に見守るため	直接部屋に入らなくても状況がわかるため、利用者の眠りを妨げず、職員の負担も減ります。
4	21	排泄予知センサーを導入することで、期待できるケアの変化はどれですか？	a 排泄をすべて機械に任せて、職員は何もしない b 失敗を防ぎ、利用者の尊厳を守るケアができる c オムツを一切使わないように強制すること d 職員の休憩時間を長くすることだけを目指す	b 失敗を防ぎ、利用者の尊厳を守るケアができる	排泄のタイミングを予測することで、無理のない介助が可能になり、利用者の安心に繋がります。
4	22	センサー機器を現場に定着させるために、最も大切なことは何ですか？	a 最新で一番高い機器を導入すること b 現場での運用ルールや使い方の工夫 c 職員に一切説明をせず、自由に使わせること d 機械が壊れるまで、絶対に修理をしないこと	b 現場での運用ルールや使い方の工夫	機器は導入するだけでなく、現場の状況に合わせたルール作りがあってこそ効果を発揮します。

4	23	人が少ない地域で、センサーによる「自動見守り」が役立つ理由はどれですか？	a 職員が利用者の家に行くのをすべてやめるため b 誰かが常駐していなくても、異常を検知できるから c 通信費用をわざと高く設定して地域を支援するため d 近所の住民同士の会話をすべてなくすため	b 誰かが常駐していなくても、異常を検知できるから	人の目が届きにくい地域では、デジタル技術で異常に気づく仕組みが大きな支えとなります。
5	24	科学的介護情報システム（LIFE）を活用する一番の目的として、正しいものはどれですか？	a 介護の記録をすべて消去するため b 経験だけでなく、データに基づいた質の高い介護を行うため c 職員の給料を自動で計算するため d 利用者の外出を一切禁止するため	b 経験だけでなく、データに基づいた質の高い介護を行うため	LIFEは、日々のケアをデータとして蓄積し、客観的な情報に基づいて改善につなげるための仕組みです。
5	25	データに基づいてケアプラン（計画）を作成・見直しすることのメリットは何ですか？	a 誰に対しても全く同じサービスを強制できる b 利用者の状態変化を捉え、根拠のある支援ができる c 職員が頭を使って考える時間をゼロにできる d 一度作った計画を一生変えなくて済む	b 利用者の状態変化を捉え、根拠のある支援ができる	蓄積されたデータを活用することで、利用者の変化に合わせた「根拠のあるケア」が可能になります。
5	26	生成AI（文章を作るAI）を現場で使うとき、期待されている主な役割は何ですか？	a 職員の代わりに、すべての直接介助を行う b 記録や報告書作成の下書きなどの「作業の補助」 c 利用者とのトラブルをすべてAIが自動で解決する d 職員の会議をすべてなくし、AIが独断で決める	b 記録や報告書作成の下書きなどの「作業の補助」	記録や文章作成に時間がかかる現場では、AIを「作業の補助役」として使うことで負担を軽減できます。
5	27	AIによる行動解析を「認知症ケア」に活用する利点はどれですか？	a 徘徊や不安な動きの兆候に早く気づき、対応できる b 認知症の人を部屋に閉じ込めて監視するため c 職員が利用者の顔を覚えなくて済むようにする d AIが利用者の病気を完全に治してくれる	a 徘徊や不安な動きの兆候に早く気づき、対応できる	AIによる行動解析は、職員の観察を補い、小さな変化や兆候をチームで共有する助けになります。
5	28	AIを活用して「業務時間の削減」に成功した事例を評価する際、大切な点は何ですか？	a 最新のAIを導入したこと自体を評価する b AIで生まれた時間を、ケアの充実や職員満足に繋げられたか c 浮いた時間を使って、さらに事務作業を増やすこと d 職員の人数を半分に減らせたかどうかだけで判断する	b AIで生まれた時間を、ケアの充実や職員満足に繋げられたか	AI活用の成果は、導入そのものではなく、現場の働き方にどのような良い変化が生まれたかで評価します。
5	29	経験者が少ない現場で、AIによる「判断支援」をどのように活用すべきですか？	a すべての判断をAIに任せ、人間は考えない b AIが出した情報を材料にして、最終的に人間が判断する c 若手職員が先輩に相談するのを禁止するために使う d AIの言うことが100%正しいと信じて行動する	b AIが出した情報を材料にして、最終的に人間が判断する	AIは判断を代行するものではありません。考えるための材料を提示し、人を支える道具として活用します。
6	30	多職種間で情報を共有する「ケアプランデータ連携システム」の大きな利点は何ですか？	a 入力の重複や連絡ミスを減らし、チームの連携を円滑にする b 職員の給料を自動的に上げる c 利用者の外出をすべて禁止する d 紙の書類をすべて捨てて、保管を禁止する	a 入力の重複や連絡ミスを減らし、チームの連携を円滑にする	情報を共有することで、二度手間の入力を省き、多職種が協力して支援する土台を作ります。
6	31	AIアバターや聴覚支援ツールは、現場でどのような補助として使われますか？	a 職員が休憩中に遊ぶため b 耳が聞こえにくい方などへ、情報を分かりやすく伝えるため c テレビ番組を録画するため d 職員の代わりにすべての介助を行うため	b 耳が聞こえにくい方などへ、情報を分かりやすく伝えるため	説明が伝わりにくい場面で、文字や映像を使って情報を届けることで、利用者の安心に繋げます。
6	32	遠隔で家族や医師とつなぐ「オンライン面会」などのメリットは何ですか？	a インターネットで買い物をするため b 移動の負担を減らしながら、顔を見て話せる安心感を得る c 職員が家族と遊びに行くため d 利用者のプライバシーを制限するため	b 移動の負担を減らしながら、顔を見て話せる安心感を得る	移動が大変な地域でも、遠隔でつながることで、負担を減らしながら安心感を保つことができます。
6	33	地域全体で「医療と介護の情報」を共有する一番の目的は何ですか？	a 病院の利益を増やすため b 退院後も切れ目のないスムーズなケアを地域で続けるため c 職員の私生活を監視するため d 施設をすべて閉鎖するため	b 退院後も切れ目のないスムーズなケアを地域で続けるため	医療と介護が情報を共有することで、利用者の状態に合わせた一貫した支援が可能になります。

6	34	リハビリに「AI運動解析」を取り入れることで、期待される効果はどれですか？	a AIがリハビリの全工程を代行する b 体の動きの変化を見えるようにし、やる気や質を高める c 職員の体重を毎日計測する d リハビリの時間を無理やり半分に削る	b 体の動きの変化を見えるようにし、やる気や質を高める	データを活用して成果を共有しやすくすることで、リハビリの継続や質の向上を支えます。
6	35	人手が少ない地域で、介護と「生活インフラ（買い物など）」を連動させる理由は何ですか？	a 施設の電気代を安くするため b 見守りや買い物など、生活全体を支え地域で暮らし続けるため c ガソリンの価格を無理やり上げさせるため d 近所付き合いをすべて禁止するため	b 見守りや買い物など、生活全体を支え地域で暮らし続けるため	介護だけでなく生活全体とつながる仕組みを作ることで、住み慣れた地域での生活を守ります。
7	36	デジタル機器を活用する際に、安全な運用のために知っておくべきことは何ですか？	a 国が定める法律やガイドライン b 機械の値段を安くする方法 c 誰にも教えずに自分勝手に使う方法 d 壊れたときに自分で修理する技術	a 国が定める法律やガイドライン	安全な運用のために、国が定めるルールや通知を知識として知っておくことが重要です。
7	37	利用者の個人情報をデジタルで扱う際に、信頼を守るための基本として正しいものはどれですか？	a 利用目的を決めずにデータを集める b 誰でも自由に見られる場所に保管する c 本人の同意を得て、慎重に管理する d データを外部に勝手に公開すること	c 本人の同意を得て、慎重に管理する	個人情報は尊厳に関わるため、利用目的を明確にし、本人の同意を得て慎重に管理します。
7	38	見守り機器などを使う際、技術的に「できること」以外で考えるべき大切な視点はどれですか？	a 便利さだけでなく、利用者の尊厳を守ること b 24時間すべてを監視し続けること c 職員が楽をすることだけを考えること d 利用者の気持ちを一切無視すること	a 便利さだけでなく、利用者の尊厳を守ること	便利であっても「監視」にならないよう、利用者の気持ちや尊厳に配慮した使い方が大切です。
7	39	誰もが使いやすい「アクセシビリティ」を確保するために、現場で検討すべきことは何ですか？	a 操作をできるだけ複雑にすること b 文字や音、操作性を工夫し、誰でも使える設計にする c 若い人だけが使えるようにすること d 文字をわざと小さくして表示すること	b 文字や音、操作性を工夫し、誰でも使える設計にする	文字や操作性を工夫し、年齢や障害の有無にかかわらず利用できる設計にすることが重要です。
7	40	DX（デジタル化）を導入する際、職員の働き方に関して守るべき法的視点はどれですか？	a 職員を24時間休まず働かせるための工夫 b 適切な労働時間管理など、職員の権利を守る c 職員の私生活をすべて監視するための仕組み d 労働基準法を無視して働かせるためのもの	b 適切な労働時間管理など、職員の権利を守る	DXによる効率化を進める中でも、職員を守るための労働法規を正しく理解し守る必要があります。
7	41	人口減少地域で、新しい取り組みを後押しするための「特例制度」を活用する目的は何ですか？	a 法律を一切守らなくて良くするため b 地域に合ったDX導入の可能性を広げるため c 都市部の人を無理やり移住させるため d デジタル機器を無理やり売りつけるため	b 地域に合ったDX導入の可能性を広げるため	地域限定の制度や実証実験を活用することで、その地域に合ったDX導入の可能性を広げられます。
8	42	介護DXの「最新動向」について、現場で大切にすべき姿勢はどれですか？	a 一度覚えた技術だけを使い続ける b 新しい技術や情報を学び続ける c 都会で流行っているものだけを追う d 海外の技術は一切無視する	b 新しい技術や情報を学び続ける	介護DXは日々進化しているため、現場で活かすには継続的に情報を捉える姿勢が重要です。
8	43	「人間中心の設計」において、最も大切にすべき考え方はどれですか？	a 最新の技術を主役にすること b 使う人の立場や気持ちに寄り添うこと c 職員の意見を一切聞かないこと d 効率だけを求めて機械に合わせること	b 使う人の立場や気持ちに寄り添うこと	技術が主役ではなく、使う人の立場に立って設計することが、DXを現場に根づかせる鍵です。
8	44	データを使った「パーソナライズケア」によって、現場はどう変わりますか？	a 誰に対しても全く同じケアを行う b 一人ひとりの状態に合ったケアができる c 記録の手間が以前より大幅に増える d 職員が自分の勘だけで判断する	b 一人ひとりの状態に合ったケアができる	データを活用することで、画一的な支援から、利用者一人ひとりに合ったケアが可能になります。

8	45	介護DXの「グローバルな動向」を知るメリットは何ですか？	a 日本国内の課題をすべて忘れるため b 海外の先進事例から新たなヒントを得るため c 海外旅行に行くきっかけを作るため d 外国の機械を無理やり導入するため	b 海外の先進事例から新たなヒントを得るため	高齢化は世界共通の課題であり、海外の取り組みから学ぶことで新たな視点やヒントが得られます。
8	46	介護を「社会システムと統合」させる際、DXが担う役割は何ですか？	a 介護と医療、地域などをつなぐ橋渡し役 b 他の職種との連絡をすべて遮断する役 c 行政への報告を一切行わないようにする d 施設の中だけで情報を隠し持つ役割	a 介護と医療、地域などをつなぐ橋渡し役	デジタル技術は、医療や地域社会をつなぐ役割を担い、持続可能な支援体制を構築します。
8	47	人口減少地域で「持続可能な地域」をつくるために必要なことは何ですか？	a 昔と同じ仕組みを無理に維持する b DXを活用し小さくても機能する形を考える c 地域の高齢者をすべて都市部に移住させる d デジタル技術の活用を一切諦めること	b DXを活用し小さくても機能する形を考える	人口減少が進む中でも、DXを活用して小さくても機能する地域のあり方を考えることが重要です。
9	48	人口減少という現実に対して、現場でまず大切にすべき考え方はどれですか？	a 努力不足だと自分たちを責め続ける b 現実を正しく受け止め、出発点にする c 以前と全く同じやり方にしがみつく d 人口が減っていることを無視する	b 現実を正しく受け止め、出発点にする	人口減少は避けられない前提です。まずは現実を認め、これからの在り方を考えることが変革の第一歩です。
9	49	デジタル機器を「武器」として使いこなすために、最も必要な力は何ですか？	a 最新のプログラミングを覚える技術 b 道具を前向きに学び、現場で活かす姿勢 c 誰よりも高価なパソコンを持つこと d 難しいマニュアルをすべて暗記する力	b 道具を前向きに学び、現場で活かす姿勢	技術そのものよりも、新しい道具を「どう現場の役に立てるか」と考え、学び続ける姿勢が重要です。
9	50	現場を動かすリーダーシップについて、正しい考え方はどれですか？	a 完璧な計画ができるまで、何もしない b 誰か一人の力だけで、無理やり変える c 小さな一歩から始め、成功を積み重ねる d 失敗を恐れて、新しい挑戦を禁止する	c 小さな一歩から始め、成功を積み重ねる	変革は完璧な計画から始まるとは限りません。小さな成功を見せ、周囲を巻き込んでいくことが大切です。
9	51	組織でDXを進める際、合意形成（みんなの納得）のために必要なことは？	a 反対する人の意見を一切聞かないこと b 役割を越えて話し合い、共通の理解を作る c すべての決定をリーダー一人が独断で行う d 情報を一部の職員だけで隠し持つこと	b 役割を越えて話し合い、共通の理解を作る	現場の変化は一人では進められません。立場を越えて話し合い、協力体制を作ることが成功を生みます。
9	52	変革を支える「人材育成」について、適切なものはどれですか？	a 一度の研修ですべてを完璧に覚えさせる b 継続的に学び、若手の成長をみんなで支援する c ベテラン職員は新しいことを学ばなくて良い d 現場の教育は時間の無駄なので行わない	b 継続的に学び、若手の成長をみんなで支援する	DX人材はすぐには育ちません。変化の激しい時代に合わせ、組織全体で学び続ける仕組みが地域を支えます。

令和 7 年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

人口減少地域における保育士・介護福祉士の DX 対応支援プログラム開発事業

事業成果報告書

令和 8 年 3 月

学校法人秋葉学園 成田国際福祉専門学校